

FUJITSU Software

Systemwalker Service Quality Coordinator

V15.2.3

導入手引書

Windows/Solaris/Linux

J2X1-7658-09Z0(00)
2021年12月

まえがき

■本書の目的

本書では、Systemwalker Service Quality Coordinatorのインストールおよび性能情報の収集、格納からコンソールへの表示までの手順を説明しています。

■本書の読者

本書は、Systemwalker Service Quality Coordinatorを導入される方、およびSystemwalker Service Quality Coordinatorの運用設計をされる方を対象としています。

また、本書を読む場合、OSやGUIの一般的な操作、およびTCP/IPやSMTPなどの一般的な知識をご理解の上でお読みください。

■本製品のマニュアル体系

Systemwalker Service Quality Coordinatorのマニュアル構成は以下です。

- Systemwalker Service Quality Coordinator 解説書
機能の概要について説明しています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator 導入手引書
インストール、セットアップについて説明しています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator 使用手引書
機能の使用方法について説明しています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator 使用手引書(コンソール編)
機能の使用方法のうち、画面の使用に関する説明をしています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator リファレンスマニュアル
コマンド、データフォーマット、メッセージ等について説明しています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator トラブルシューティングガイド
トラブルの対処方法について説明しています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator Web利用状況管理編
本製品の提供する機能のうち、Web利用状況分析機能、Webコンテンツの改ざん監視機能について説明しています。
- Systemwalker Service Quality Coordinator 用語集
Systemwalker Service Quality Coordinatorの用語について説明しています。

■本書の位置づけ

本書は、Systemwalker Service Quality Coordinatorの共通マニュアルです。本書は、以下の製品のWindows版/Solaris版/Linux版に対応しています。

- Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition V15.2.3
- Systemwalker Service Quality Coordinator Standard Edition V15.2.3

■略語表記について

- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2022"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2019"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2016"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2012 R2"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2012"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2012 Standard"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2012 Datacenter"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
- Server Coreインストールした以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2012 Server Core"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2008 R2"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Foundation
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2008"と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Foundation

- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Foundation
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard without Hyper-V(TM)
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise without Hyper-V(TM)
- Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter without Hyper-V(TM)
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2008 Enterprise" と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise without Hyper-V(TM)
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2008 Datacenter" と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter without Hyper-V(TM)
- Server Coreインストールした以下の製品すべてを示す場合は、"Windows Server 2008 Server Core" と表記します。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard without Hyper-V(TM)
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise without Hyper-V(TM)
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter without Hyper-V(TM)
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows 10"と表記します。
 - Windows(R) 10 Home
 - Windows(R) 10 Pro
 - Windows(R) 10 Enterprise
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows 8.1"と表記します。
 - Windows(R) 8.1
 - Windows(R) 8.1 Pro
 - Windows(R) 8.1 Enterprise
- 以下の製品すべてを示す場合は、"Windows 8"と表記します。
 - Windows(R) 8
 - Windows(R) 8 Pro
 - Windows(R) 8 Enterprise
- Internet Explorer(R) 11を"Internet Explorer"と表記します。

- Microsoft Edgeの"Internet Explorer (IE)モード"を"IEモード"と表記します。
- Microsoft(R) SQL Server(R) を、"SQL Server"と表記します。
- Oracle SolarisはSolaris, Solarisオペレーティングシステム, Solaris Operating System, Solaris OSと記載することがあります。
- Oracle Solaris ゾーンはSolarisコンテナと記載することがあります。
- Oracle WebLogic Serverを"WebLogic Server"と表記します。
- Oracle Databaseを"Oracle"と表記します。
- Systemwalker Centric Managerを"Centric Manager"と表記します。
- Systemwalker Resource Coordinatorを"Resource Coordinator"と表記します。
- Interstage Application Serverを"Interstage"と表記します。
- Symfoware Serverを"Symfoware"と表記します。
- VMware ESX(R)を"VMware ESX"または"ESX"と表記します。
- VMware ESXi(TM)を"VMware ESXi"または"ESXi"と表記します。
- VMware vCenter(R)を"VMware vCenter"または"vCenter"と表記します。
また、Windows版VMware vCenterを"VMware vCenter"と表記します。
- VMware vCenter Server(R) Appliance(TM)を"VMware vCenter Server Appliance"または"vCenter Server Appliance"と表記します
- VMware vSphere(R)を"VMware vSphere"と表記します。
- Windows上で動作するSystemwalker Service Quality Coordinatorを"Windows版"と表記します。
- Solarisで動作するSystemwalker Service Quality Coordinatorを"Solaris版"と表記します。
- Linux上で動作するSystemwalker Service Quality Coordinatorを"Linux版"と表記します。
- Red Hat Enterprise Linux 8上で動作するSystemwalker Service Quality Coordinatorを"RHEL8版"と表記します。
- Red Hat Enterprise Linux 7上で動作するSystemwalker Service Quality Coordinatorを"RHEL7版"と表記します。
- Solaris版およびLinux版のSystemwalker Service Quality Coordinatorを包括して、"UNIX版"と表記します。
- Agent for Server/Agent for Businessの共通記事を"Agent"と表記します。

■本書の表記について

- エディションによる固有記事について

本書では、標準仕様である「Systemwalker Service Quality Coordinator Standard Edition」の記事と区別するため、エディションによる固有記事に対して以下の記号をタイトル、または本文につけています。

EE

Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition固有の記事です。

SE

Systemwalker Service Quality Coordinator Standard Edition固有の記事です。

また、Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Editionを“EE版”、Systemwalker Service Quality Coordinator Standard Editionを“SE版”と表記している箇所があります。

- Windows版とUNIX版の固有記事について

本書は、Windows版、UNIX版共通に記事を掲載しています。Windows版のみの記事、UNIX版のみの記事は、以下のように記号をつけて共通の記事と区別しています。

【Windows版】

Windows版固有の記事です。

【UNIX版】

UNIX版固有の記事です。

本文中でSolaris/Linux/Red Hat Enterprise Linux 8/ Red Hat Enterprise Linux 7/AIX/HP-UXの記載が分かれる場合は、「【Solaris版】」、「【Linux版】」、「【RHEL8版】」、「【RHEL7版】」、「【AIX版】」、「【HP-UX版】」のように場合分けして説明しています。

また、特に注意が必要な場合には、以下のように記号をつけて共通の記事と区別しています。

W

Windows版固有の記事です。

S

Solaris版固有の記事です。

L

Linux版固有の記事です。

■記号について

コマンドで使用している記号について以下に説明します。

【記述例】

```
[PARA={a | b | c | …}]
```

【記号の意味】

| 記号 | 意味 |
|----|--|
| [] | この記号で囲まれた項目を省略できることを示します。 |
| {} | この記号で囲まれた項目の中から、どれか1つを選択することを示します。 |
| — | 省略可能記号“[]”内の項目をすべて省略したときの省略値が、下線で示された項目であることを示します。 |
| | この記号を区切りとして並べられた項目の中から、どれか1つを選択することを示します。 |
| … | この記号の直前の項目を繰り返して指定できることを示します。 |

■輸出管理規制について

本ドキュメントを輸出または第三者へ提供する場合は、お客様が居住する国および米国輸出管理関連法規等の規制をご確認のうえ、必要な手続きをおとりください。

■商標について

- Adobe、Adobeロゴ、Acrobat、およびReaderは、Adobe Inc.の米国またはその他の国における商標または登録商標です。
- Apache、Tomcatは、The Apache Software Foundationの米国およびその他の国における商標または登録商標です。
- HP-UXは、米国Hewlett-Packard社の登録商標です。
- IBM、IBMロゴ、AIX、HACMP、ViaVoiceは米国におけるIBM Corporationの登録商標または商標です。
- Intel、Itaniumは、アメリカ合衆国および/またはその他の国におけるIntel Corporation またはその子会社の商標です。
- Linux®は米国及びその他の国におけるLinus Torvaldsの登録商標です。
- Microsoft、Windows、および Windows Serverは、マイクロソフトグループの企業の商標です。

- OpenStackのワードマークは、米国とその他の国におけるOpenStack Foundationの登録商標/サービスマークまたは商標/サービスマークのいずれかであり、OpenStack Foundationの許諾の下に使用されています。
- OracleとJavaは、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。
- PostgreSQLはPostgreSQLの米国およびその他の国における商標です。
- Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, Shadowmanロゴ、JBossは、米国およびその他の国において登録されたRed Hat, Inc.の商標です。
- R/3およびSAPは、SAP SEの登録商標です。
- SPARC Enterprise, SPARC64, SPARC64ロゴ、およびすべてのSPARC商標は、米国SPARC International, Inc.のライセンスを受けて使用している、同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
- UNIXは、米国およびその他の国におけるオープン・グループの登録商標です。
- VMware, VMwareロゴおよびVMotionは、米国およびその他の地域における VMware 商標および登録商標です。
- そのほか、本マニュアルに記載されている会社名および製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。
- 本書に記載されている会社名、システム名、製品名等には必ずしも商標表示(TM・(R))を付記しておりません。
- Microsoft Corporationのガイドラインに従って画面写真を使用しています。

■謝辞

This product includes software developed by the OpenSSL Project for use in the OpenSSL Toolkit. (<http://www.openssl.org/>)

■出版年月および版数

| 版数 | マニュアルコード |
|----------------|---------------------------------------|
| 2012年 7月 初版 | J2X1-7658-01Z0(00)/J2X1-7658-01Z2(00) |
| 2012年 9月 第1.1版 | J2X1-7658-01Z0(01)/J2X1-7658-01Z2(01) |
| 2013年 1月 第2版 | J2X1-7658-02Z0(00)/J2X1-7658-02Z2(00) |
| 2013年12月 第2.1版 | J2X1-7658-02Z0(01)/J2X1-7658-02Z2(01) |
| 2014年 3月 第3版 | J2X1-7658-03Z0(00)/J2X1-7658-03Z2(00) |
| 2014年10月 第4版 | J2X1-7658-04Z0(00)/J2X1-7658-04Z2(00) |
| 2015年10月 第5版 | J2X1-7658-05Z0(00)/J2X1-7658-05Z2(00) |
| 2016年12月 第5.1版 | J2X1-7658-05Z0(01)/J2X1-7658-05Z2(01) |
| 2018年 4月 第5.2版 | J2X1-7658-05Z0(02)/J2X1-7658-05Z2(02) |
| 2018年11月 第5.3版 | J2X1-7658-05Z0(03)/J2X1-7658-05Z2(03) |
| 2019年 4月 第6版 | J2X1-7658-06Z0(00)/J2X1-7658-06Z2(00) |
| 2019年10月 第7版 | J2X1-7658-07Z0(00)/J2X1-7658-07Z2(00) |
| 2020年10月 第8版 | J2X1-7658-08Z0(00)/J2X1-7658-08Z2(00) |
| 2021年12月 第9版 | J2X1-7658-09Z0(00)/J2X1-7658-09Z2(00) |

■著作権表示

Copyright 2003-2021 FUJITSU LIMITED

目次

| | |
|---|----|
| 第1章 導入設計 | 1 |
| 1.1 インストール種別の決定 | 1 |
| 1.2 導入作業に必要な情報の収集 | 2 |
| 1.2.1 Managerをインストールする場合 | 2 |
| 1.2.2 Agent/Proxy Managerをインストールする場合 | 3 |
| 1.2.3 運用管理クライアントをインストールする場合 | 5 |
| 1.2.4 Enterprise Managerをインストールする場合 | 5 |
| 1.3 ポート番号 | 7 |
| 1.4 OSごとの運用の注意事項 | 8 |
| 1.5 留意事項 | 10 |
| 第2章 インストール条件と資源見積り | 12 |
| 2.1 Manager | 12 |
| 2.1.1 ハードウェア | 12 |
| 2.1.1.1 動作ハードウェア | 12 |
| 2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について | 14 |
| 2.1.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について | 26 |
| 2.1.2 ソフトウェア | 27 |
| 2.1.2.1 動作OS | 27 |
| 2.1.2.2 排他製品 | 29 |
| 2.2 Agent/Proxy Manager | 29 |
| 2.2.1 ハードウェア | 29 |
| 2.2.1.1 動作ハードウェア | 29 |
| 2.2.1.2 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について | 31 |
| 2.2.2 ソフトウェア | 32 |
| 2.2.2.1 動作OS | 32 |
| 2.2.2.2 排他製品 | 34 |
| 2.3 運用管理クライアント | 34 |
| 2.3.1 ハードウェア | 34 |
| 2.3.1.1 動作ハードウェア | 34 |
| 2.3.1.2 レポート容量の見積り方法について | 35 |
| 2.3.2 ソフトウェア | 35 |
| 2.3.2.1 動作OSおよび関連ソフトウェア | 35 |
| 2.3.2.2 排他製品 | 37 |
| 2.4 Enterprise Manager | 37 |
| 2.4.1 ハードウェア | 37 |
| 2.4.1.1 動作ハードウェア | 37 |
| 2.4.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について | 39 |
| 2.4.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について | 43 |
| 2.4.2 ソフトウェア | 44 |
| 2.4.2.1 動作OS | 44 |
| 2.4.2.2 排他製品 | 46 |
| 2.5 インストールレス型Agent | 46 |
| 2.5.1 ソフトウェア | 46 |
| 2.5.1.1 動作OS | 46 |
| 第3章 インストールとセットアップ | 48 |
| 3.1 インストール | 49 |
| 3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール | 50 |
| 3.1.1.1 Windows版のインストール | 50 |
| 3.1.1.2 UNIX版のインストール | 61 |
| 3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール | 67 |
| 3.1.2.1 Windows版のインストール | 67 |
| 3.1.2.2 UNIX版のインストール | 77 |
| 3.1.3 運用管理クライアントのインストール | 82 |
| 3.2 サイレントインストール | 87 |

| | |
|--|-----|
| 3.2.1 インストール情報ファイルの作成..... | 87 |
| 3.2.2 サイレントインストールの実行..... | 92 |
| 3.2.2.1 Windows版のインストールとUNIX版運用管理クライアントのインストール..... | 92 |
| 3.2.2.2 UNIX版のインストール..... | 94 |
| 3.3 セットアップ..... | 95 |
| 3.3.1 Enterprise Manager/Manager/Proxy Managerの場合..... | 95 |
| 3.3.2 Agentの場合..... | 95 |
| 3.3.3 運用管理クライアントの場合..... | 95 |
| 3.4 起動と確認..... | 96 |
| 3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル..... | 97 |
| 3.5.1 Managerでの作業..... | 97 |
| 3.5.2 Agentでの作業..... | 98 |
| 3.5.3 運用管理クライアントでの作業..... | 98 |
| 3.6 Proxy Managerによる中継モデル..... | 98 |
| 3.6.1 Managerでの作業..... | 99 |
| 3.6.2 Proxy Managerでの作業..... | 99 |
| 3.6.3 Agentでの作業..... | 100 |
| 3.6.4 運用管理クライアントでの作業..... | 100 |
| 3.7 Managerの二階層運用モデル..... | 101 |
| 3.7.1 Enterprise Managerでの作業..... | 102 |
| 3.7.2 Managerでの作業..... | 102 |
| 3.7.3 Proxy Managerでの作業..... | 103 |
| 3.7.4 Agentでの作業..... | 104 |
| 3.7.5 運用管理クライアントでの作業..... | 104 |
| 3.8 Managerの二重化運用モデル..... | 104 |
| 3.8.1 1台目のManagerでの作業..... | 106 |
| 3.8.2 2台目のManagerでの作業..... | 106 |
| 3.8.3 Proxy Managerでの作業..... | 107 |
| 3.8.4 Agentでの作業..... | 107 |
| 3.8.5 1台目の運用管理クライアントでの作業..... | 108 |
| 3.8.6 2台目の運用管理クライアントでの作業..... | 108 |
| 3.9 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用モデル..... | 109 |
| 3.9.1 Enterprise Managerでの作業..... | 110 |
| 3.9.1.1 環境構築前の準備..... | 111 |
| 3.9.1.2 現用系サーバでの導入..... | 111 |
| 3.9.1.3 待機系サーバでの導入..... | 112 |
| 3.9.1.4 リソース登録..... | 113 |
| 3.9.1.5 サービスの起動..... | 113 |
| 3.9.2 Managerでの作業..... | 114 |
| 3.9.2.1 環境構築前の準備..... | 114 |
| 3.9.2.2 現用系サーバでの導入..... | 115 |
| 3.9.2.3 待機系サーバでの導入..... | 116 |
| 3.9.2.4 リソース登録..... | 117 |
| 3.9.2.5 サービスの起動..... | 118 |
| 3.10 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用モデル..... | 119 |
| 3.10.1 Enterprise Managerでの作業..... | 120 |
| 3.10.1.1 環境構築前の準備..... | 121 |
| 3.10.1.2 現用系サーバでの導入..... | 121 |
| 3.10.1.3 待機系サーバでの導入..... | 122 |
| 3.10.1.4 リソース登録..... | 123 |
| 3.10.1.5 デーモンの起動..... | 126 |
| 3.10.2 Managerでの作業..... | 126 |
| 3.10.2.1 環境構築前の準備..... | 127 |
| 3.10.2.2 現用系サーバでの導入..... | 127 |
| 3.10.2.3 待機系サーバでの導入..... | 128 |
| 3.10.2.4 リソース登録..... | 129 |
| 3.10.2.5 デーモンの起動..... | 132 |

| | |
|---|-----|
| 第4章 Pull型通信設定 | 133 |
| 4.1 Pull運用でのManagerとAgentで構成する基本モデル | 133 |
| 4.1.1 Managerでの作業 | 134 |
| 4.1.2 Agentでの作業 | 134 |
| 4.1.3 運用管理クライアントでの作業 | 135 |
| 4.2 Pull運用でのProxy Managerによる中継モデル | 135 |
| 4.2.1 Managerでの作業 | 136 |
| 4.2.2 Proxy Managerでの作業 | 137 |
| 4.2.3 Agentでの作業 | 137 |
| 4.2.4 運用管理クライアントでの作業 | 138 |
| 4.3 Pull運用でのManagerの二重化運用モデル | 138 |
| 4.3.1 1台目のManagerでの作業 | 139 |
| 4.3.2 2台目のManagerでの作業 | 140 |
| 4.3.3 Proxy Managerでの作業 | 141 |
| 4.3.4 Agentでの作業 | 142 |
| 4.3.5 1台目の運用管理クライアントでの作業 | 142 |
| 4.3.6 2台目の運用管理クライアントでの作業 | 143 |
| 4.4 Pull運用設定 | 143 |
| 4.4.1 Pull通信定義 | 143 |
| 4.4.2 Pull通信セットアップ | 145 |
| 4.4.3 PushからPullへの切り替え | 145 |
| 4.4.3.1 Manager上での作業 | 146 |
| 4.4.3.2 Agent/Proxy Manager上での作業 | 146 |
| 4.4.4 PullからPushへの切り替え | 148 |
| 4.4.4.1 Manager上での作業 | 148 |
| 4.4.4.2 Agent/Proxy Manager上での作業 | 148 |
| 第5章 通信環境のセットアップ | 150 |
| 5.1 仮想ディレクトリ | 150 |
| 5.2 仮想ディレクトリの設定方法 | 151 |
| 5.2.1 Microsoft(R) Internet Information Services | 151 |
| 5.2.1.1 仮想ディレクトリの作成 | 152 |
| 5.2.1.2 IISの設定 | 153 |
| 5.2.1.3 ハンドラマッピングの設定 | 154 |
| 5.2.1.4 CGIタイムアウト値の設定 | 154 |
| 5.2.1.5 ディレクトリ・セキュリティの設定 | 155 |
| 5.2.2 Apache HTTP Server 1.3 | 155 |
| 5.2.3 Netscape(R) Enterprise Server 3.0 | 157 |
| 5.2.4 Interstage HTTP Server(Interstage Application Server同梱) | 158 |
| 5.2.5 InfoProvider Pro(Interstage Application Server同梱) | 161 |
| 5.3 運用管理クライアント基本認証の設定方法 | 163 |
| 第6章 導入環境の変更 | 165 |
| 6.1 Proxy Managerによる中継モデルへの変更 | 165 |
| 6.1.1 Proxy Managerでの作業 | 165 |
| 6.1.2 Agentでの作業 | 166 |
| 6.2 Managerの二階層運用モデルへの変更 | 166 |
| 6.2.1 Enterprise Managerでの作業 | 166 |
| 6.2.2 Managerでの作業 | 167 |
| 6.2.3 Proxy Managerでの作業 | 167 |
| 6.2.4 運用管理クライアントでの作業 | 168 |
| 6.3 Managerの二重化運用モデルへの変更 | 168 |
| 6.3.1 2台目のManagerでの作業 | 169 |
| 6.3.2 Proxy Managerでの作業 | 169 |
| 6.3.3 Agentでの作業 | 170 |
| 6.3.4 2台目の運用管理クライアントでの作業 | 171 |
| 6.4 ManagerのIPアドレス/ホスト名の変更 | 171 |
| 6.4.1 Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更 | 171 |

| | |
|---|------------|
| 6.4.2 運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更 | 172 |
| 6.5 Managerの移行 | 173 |
| 6.5.1 移行元のManagerの構成情報のみ引き継ぐ場合 | 173 |
| 6.5.2 移行元のManagerのPDBをそのまま引き継ぐ場合 | 175 |
| 6.6 性能データベース(PDB)/アーカイブファイル | 176 |
| 6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更 | 176 |
| 6.6.1.1 PDB格納先の変更 | 176 |
| 6.6.1.1.1 管理データ | 177 |
| 6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ | 179 |
| 6.6.1.2 アーカイブファイル格納先の変更 | 181 |
| 6.6.2 PDB保持期間の変更 | 183 |
| 6.6.2.1 サマリデータの保持期間の変更 | 183 |
| 6.6.2.2 リソースデータの保持期間の変更 | 184 |
| 6.6.3 アーカイブファイル切り替え時刻の変更 | 185 |
| 6.7 ログデータ(Troubleshoot) | 186 |
| 6.7.1 ログデータ(Troubleshoot)出力先の変更 | 186 |
| 6.7.2 ログデータ(Troubleshoot)保持期間の変更 | 188 |
| 6.7.3 ログデータ(Troubleshoot)切り替え時刻の変更 | 190 |
| 6.8 リソースデータ収集条件の変更 | 191 |
| 6.9 レポート格納先の分割 | 192 |
| 6.10 AgentのIPアドレス/ホスト名の変更 | 194 |
| 6.11 Agent/Proxy Managerの未送信データの削除 | 196 |
| 6.12 ディスクスペースの空き領域の監視 | 197 |
| 6.13 セキュア通信 | 198 |
| 6.13.1 通信相手を制限する | 199 |
| 6.14 syslogの設定について | 200 |
| 6.15 IPv6環境での運用設定 | 200 |
| 6.15.1 ManagerでIPv6環境との通信の追加 | 200 |
| 第7章 アップグレードインストール | 202 |
| 7.1 Manager/Enterprise Manager【EE】での作業 | 202 |
| 7.1.1 Windows版のアップグレード手順 | 202 |
| 7.1.2 UNIX版のアップグレード手順 | 205 |
| 7.2 Agent/Proxy Managerでの作業 | 207 |
| 7.2.1 Windows版のアップグレード手順 | 207 |
| 7.2.2 UNIX版のアップグレード手順 | 209 |
| 7.3 運用管理クライアントでの作業 | 211 |
| 第8章 バージョン混在運用 | 213 |
| 第9章 アンインストール | 214 |
| 9.1 アンインストール(Windows版) | 214 |
| 9.2 アンインストール(UNIX版) | 218 |
| 9.3 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用でのアンインストール | 220 |
| 9.3.1 Enterprise Managerでの作業 | 220 |
| 9.3.1.1 アンインストールの準備 | 220 |
| 9.3.1.2 Enterprise Managerのアンインストール | 221 |
| 9.3.1.3 リソースの削除 | 222 |
| 9.3.2 Managerでの作業 | 222 |
| 9.3.2.1 アンインストールの準備 | 223 |
| 9.3.2.2 Managerのアンインストール | 223 |
| 9.3.2.3 リソースの削除 | 224 |
| 9.4 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用でのアンインストール | 224 |
| 9.4.1 Enterprise Managerでの作業 | 225 |
| 9.4.1.1 アンインストールの準備 | 225 |
| 9.4.1.2 Enterprise Managerのアンインストール | 225 |
| 9.4.1.3 リソースの削除 | 226 |
| 9.4.2 Managerでの作業 | 226 |

| | |
|---|------------|
| 9.4.2.1 アンインストールの準備..... | 227 |
| 9.4.2.2 Managerのアンインストール..... | 227 |
| 9.4.2.3 リソースの削除..... | 228 |
| 9.5 「アンインストールと管理(ミドルウェア)」のアンインストールについて..... | 228 |
| 第10章 互換に関する情報..... | 230 |
| 10.1 V12.0からの移行..... | 230 |
| 10.1.1 定義の変更..... | 230 |
| 10.1.2 コマンドに関する変更..... | 230 |
| 10.2 V13.0.0からの移行..... | 230 |
| 10.2.1 データの変更..... | 230 |
| 10.3 V13.2.0からの移行..... | 231 |
| 10.3.1 データの変更..... | 231 |
| 10.4 V13.3.0からの移行..... | 231 |
| 10.4.1 メッセージの変更..... | 231 |
| 10.4.2 画面名や操作方法などの変更..... | 232 |
| 10.5 V13.4.0からの移行..... | 232 |
| 10.5.1 定義の変更..... | 232 |
| 10.5.2 アップグレードインストール時のサマリデータの扱いの変更..... | 232 |
| 10.5.3 PDBファイル名の変更..... | 233 |
| 10.5.4 メッセージの変更..... | 233 |
| 10.5.5 画面名や操作方法などの変更..... | 233 |
| 10.6 V13.5.0からの移行..... | 234 |
| 10.6.1 インストール/アンインストールに関する変更..... | 234 |
| 10.6.2 データの変更..... | 234 |
| 10.6.3 定義の変更..... | 235 |
| 10.6.4 メッセージの変更..... | 235 |
| 10.6.5 画面名や操作方法などの変更..... | 235 |
| 10.7 V15.0.0からの移行..... | 237 |
| 10.7.1 インストール/アンインストールに関する変更..... | 237 |
| 10.7.2 データの変更..... | 237 |
| 10.7.3 画面名や操作方法などの変更..... | 237 |
| 10.8 V15.0.1からの移行..... | 238 |
| 10.8.1 インストール/アンインストールに関する変更..... | 238 |
| 10.8.2 データの変更..... | 238 |
| 10.8.3 Web利用状況管理機能に関する変更..... | 238 |
| 10.8.4 画面名や操作方法などの変更..... | 238 |
| 10.9 V15.1.0からの移行..... | 239 |
| 10.9.1 見積りに関する変更..... | 240 |
| 10.10 V15.1.1からの移行..... | 240 |
| 10.10.1 見積りに関する変更..... | 240 |
| 10.10.2 定義の変更..... | 240 |
| 10.10.3 PDBファイル名の変更..... | 241 |
| 10.10.4 画面名や操作方法などの変更..... | 241 |
| 10.10.5 ServerView Resource Orchestratorとの連携についての変更..... | 244 |
| 10.10.6 コマンドに関する変更..... | 244 |
| 10.11 V15.2.0からの移行..... | 244 |
| 10.11.1 画面名や操作方法などの変更..... | 244 |
| 10.11.2 ダッシュボードについての変更..... | 244 |
| 10.11.3 Systemwalker 共通ユーザー管理/Systemwalker シングル・サインオンについての変更..... | 245 |
| 10.11.4 メッセージの変更..... | 245 |
| 10.12 V15.2.1からの移行..... | 245 |
| 10.12.1 インストール/アンインストールに関する変更..... | 245 |
| 10.13 V15.2.1Aからの移行..... | 245 |
| 10.13.1 見積りに関する変更..... | 246 |
| 10.13.2 起動/停止方法に関する変更..... | 246 |
| 10.13.3 データの変更..... | 246 |

| | | |
|------------|---|------------|
| 10.13.4 | メッセージの変更 | 246 |
| 10.14 | V15.2.2からの移行 | 247 |
| 10.14.1 | 見積りに関する変更 | 247 |
| 10.14.2 | インストール/アンインストールに関する変更 | 247 |
| 10.14.3 | 提供を終了した機能 | 248 |
| 10.14.4 | データの変更 | 248 |
| 10.15 | その他の非互換 | 248 |
| 10.15.1 | Systemwalker Centric Manager 業務サーバにバンドルされていたSystemwalker Service Quality CoordinatorのAgent | 248 |
| 10.15.1.1 | Systemwalker Centric Managerバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている環境に、本製品をインストールする場合 | 249 |
| 付録A | セットアップコマンド一覧 | 251 |
| A.1 | サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド | 251 |
| A.2 | レスポンス情報収集ポリシー作成コマンド | 253 |
| A.3 | Managerの二階層運用セットアップコマンド | 254 |
| A.4 | Managerの二重化運用Managerセットアップコマンド | 257 |
| A.5 | Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド | 258 |
| A.6 | クラスタセットアップコマンド | 260 |
| A.7 | クラスタアンセットアップコマンド | 262 |
| A.8 | Systemwalker Service Quality Coordinatorのインストールコマンド (Server Core環境の場合) | 263 |
| A.9 | Systemwalker Service Quality Coordinatorのアンインストールコマンド (Server Core環境の場合) | 264 |
| 付録B | 常駐プロセス、起動と停止 | 265 |
| B.1 | httpdサービス/デーモンの自動起動設定 | 271 |
| 付録C | レポート名称および分類/カテゴリ対応一覧 (V13.5.0以前-V15.0.0) | 273 |
| 付録D | ディスクスペース情報のファイルシステム内の使用サイズ算出方法の変更 (互換用) | 279 |
| D.1 | 定義方法 | 279 |
| D.2 | セットアップ | 280 |
| 付録E | デスクトップ ヒープの拡張方法 | 281 |

第1章 導入設計

Systemwalker Service Quality Coordinatorを導入するために必要な、インストール種別およびシステム構成の説明をします。他の製品との連携を行う場合は、解説書「管理対象と対応インストール種別」、使用手引書「他製品との連携」も合わせて参照してください。

1.1 インストール種別の決定

Systemwalker Service Quality Coordinatorを導入することにより、小規模システムから大規模システムにいたるまで、あらゆる規模、あらゆる形態のシステムの運用管理を実現することができます。

Systemwalker Service Quality Coordinatorは、導入作業を効率的に実施するため、目的や役割に応じて次のようなインストール種別を用意しています。

| インストール種別 | 機能 |
|--------------------|---|
| Enterprise Manager | 部門単位に配置されたManagerを一元管理します。Managerを二階層で構築し、負荷分散することにより、大規模なシステムも管理することが可能になります。【EE】 |
| Manager | Agent、およびProxy Managerが収集した情報を一括管理します。また、Browser Agentが採取した情報の収集サーバの役割も果たします。 |
| Proxy Manager | ManagerとAgentの間で中継機能を提供します。ManagerとAgentが、ファイアウォールで区切られる形態で、Proxy ManagerをAgent側に配置して中継することにより、サイトのセキュリティを高めることができます。また、Managerが行う、Browser Agentが採取した情報の収集サーバの役割を代替することができます。 |
| 運用管理クライアント | Manager/Enterprise Managerに接続して、管理・操作するためのコンソール機能を提供します。運用管理者は、運用管理クライアントをインストールしたマシンの他、別マシン上からも、Webブラウザを運用管理クライアントに接続することにより、管理操作を行うこともできます。 動作プラットフォームは、Windowsのみです。Manager/Enterprise ManagerのプラットフォームがWindowsの場合は、Manager/Enterprise Managerと運用管理クライアントを同一サーバに導入することができます。 |
| Agent for Server | サーバ内のリソース情報を管理することができます。 |
| Agent for Business | Agent for Serverの機能に加え、以下に示す業務システムに関する資源を管理することができます。 ウェブサーバ アプリケーションサーバ データベースサーバ |
| Browser Agent | エンドユーザーがWebサーバにアクセスした情報から、エンドユーザーが実感するレスポンスを測定します。動作プラットフォームは、Windowsのみです。 |
| インストールレス型Agent | OS/カーネルや仮想資源の情報をリモートから管理することができます。 |

Systemwalker Service Quality Coordinatorの各製品の組み合わせについては、解説書「運用モデル」を参照してください。

Browser Agentを導入する場合は使用手引書「エンドユーザーレスポンス管理」を参照してください。

インストールレス型Agentで、リモートから情報を収集するための設定方法は、使用手引書「インストールレス型Agent管理」を参照してください。

1.2 導入作業に必要な情報の収集

Systemwalker Service Quality Coordinatorを導入するにあたっては、事前に管理対象とするシステムやネットワークに関する情報を収集しておく必要があります。導入時に最低限必要となる情報を以下に示します。

1.2.1 Managerをインストールする場合

Managerをインストールする場合は、インストールするサーバの情報が必要になります。

「[2.1 Manager](#)」を参照してインストール条件を確認してください。

これらの情報は、インストールを実行する前に収集します。

以下の項目は、インストーラを起動すると問合せがあります。インストール開始前に決定または確認をしてください。

注意事項については「[3.1 インストール](#)」を参照してください。

【Windows版】

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|---------------------------|---|--|
| インストールディレクトリ | 実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。 | C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC |
| 可変ファイル格納ディレクトリ | 動作中に変更、または参照するファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC |
| 性能データベース格納先(サマリ) | サマリデータを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| 性能データベース格納先(10分) | リソースデータ(10分)を格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| 性能データベース格納先(1時間) | リソースデータ(1時間)を格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| 性能データベース格納先(1日) | リソースデータ(1日)を格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| アーカイブファイルの格納先 | アーカイブファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data\spool BackupPDBinsert |
| しきい値超えの通知方法 | しきい値超えが発生した場合、その通知方法として、「イベントログ」または「Centric Managerメッセージ連携」のいずれかを選択します。 同じマシン上にSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合に、「Centric Managerメッセージ連携」を選択することで、しきい値超えがCentric Managerに通知されるようになります。 しきい値超えの通知方法は、イベントログとCentric Managerメッセージ連携の他に、メール、トラップ、ユーザー任意のコマンド実行があります。 | イベントログ |
| ログデータ (Troubleshoot)の保持期間 | ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を1～30日の間で指定します。 | 7日 |

【UNIX版】

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|---------------------------|---|-----------------------------------|
| インストールディレクトリ | 実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。 | /opt/FJSVssqc |
| 定義ファイル格納ディレクトリ | 動作中に参照する定義ファイルを格納するディレクトリです。 | /etc/opt/FJSVssqc |
| 可変ファイル格納ディレクトリ | 動作中に変更するファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc |
| 性能データベース格納先(サマリ) | サマリデータを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| 性能データベース格納先(10分) | リソースデータ(10分)を格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| 性能データベース格納先(1時間) | リソースデータ(1時間)を格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| 性能データベース格納先(1日) | リソースデータ(1日)を格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| アーカイブファイルの格納先 | アーカイブファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/BackupPDBinsert |
| しきい値超えの通知方法 | しきい値超えが発生した場合、その通知方法として、「イベントログ」または「Centric Managerメッセージ連携」のいずれかを選択します。 同じマシン上にSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合に、「Centric Managerメッセージ連携」を選択することで、しきい値超えがCentric Managerに通知されるようになります。 しきい値超えの通知方法は、イベントログとCentric Managerメッセージ連携の他に、メール、トラップ、ユーザー任意のコマンド実行があります。 | syslog |
| ログデータ (Troubleshoot)の保持期間 | ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を1～30日の間で指定します。 | 7日 |

1.2.2 Agent/Proxy Managerをインストールする場合

Agent/Proxy Managerをインストールする場合は、インストールするサーバの情報が必要になります。


「[2.2 Agent/Proxy Manager](#)」を参照してインストール条件を確認してください。

これらの情報は、インストールを実行する前に収集します。

以下の項目は、インストーラを起動すると問合せがあります。インストール開始前に決定または確認をしてください。

注意事項については「[3.1 インストール](#)」を参照してください。

【Windows版】

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|---------------------------|---|--|
| インストールディレクトリ | 実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。 | C:\Program Files\Fujitsu\Systemwalker\SQLC |
| 可変ファイル格納ディレクトリ | 動作中に変更、または参照するファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\Systemwalker\SQLC |
| しきい値超えの通知方法 | しきい値超えが発生した場合、その通知方法として、「イベントログ」または「Centric Managerメッセージ連携」のいずれかを選択します。 同じマシン上にSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合に、「Centric Managerメッセージ連携」を選択することで、しきい値超えがCentric Managerに通知されるようになります。 しきい値超えの通知方法は、イベントログとCentric Managerメッセージ連携の他に、メール、トラップ、ユーザー任意のコマンド実行があります。 | イベントログ |
| Managerのアドレス | 接続するManagerのホスト名かIPアドレスです。  注意 Managerがクラスタ運用の場合は、論理ホスト名または論理IPアドレスを指定してください。 Proxy Managerによる中継モデル運用の場合は、Proxy Managerのアドレスを指定してください。 | なし ※ デフォルト値はありませんが、設定は必須です。 |
| ログデータ (Troubleshoot)の保持期間 | ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を1～30日の間で指定します。 | 7日 |

【UNIX版】

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|----------------|---|-------------------|
| インストールディレクトリ | 実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。 | /opt/FJSVssqc |
| 定義ファイル格納ディレクトリ | 動作中に参照する定義ファイルを格納するディレクトリです。 | /etc/opt/FJSVssqc |
| 可変ファイル格納ディレクトリ | 動作中に変更するファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc |
| しきい値超えの通知方法 | しきい値超えが発生した場合、その通知方法として、「syslog」または「Centric Managerメッセージ連携」のいずれかを選択します。 同じマシン上にSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合に、「Centric Managerメッセージ連携」を選択することで、しきい値超えがCentric | syslog |

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|---------------------------|--|---|
| | <p>Managerに通知されるようになります。なお、本項目はAgentのインストール時のみ選択します。</p> <p>しきい超えの通知方法は、イベントログとCentric Managerメッセージ連携の他に、メール、トラップ、ユーザー任意のコマンド実行があります。</p> | |
| Managerのアドレス | <p>接続するManagerのホスト名かIPアドレスです。</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>Managerがクラスタ運用の場合は、論理ホスト名または論理IPアドレスを指定してください。</p> <p>Proxy Managerによる中継モデル運用の場合は、Proxy Managerのアドレスを指定してください。</p> <p>.....</p> | <p>なし</p> <p>※ デフォルト値はありませんが、設定は必須です。</p> |
| ログデータ (Troubleshoot)の保持期間 | <p>ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を1～30日の間で指定します。</p> | 7日 |

1.2.3 運用管理クライアントをインストールする場合

運用管理クライアントをインストールする場合は、インストールするサーバの情報が必要になります。

「[2.3 運用管理クライアント](#)」を参照してインストール条件を確認してください。

これらの情報は、インストールを実行する前に収集します。

以下の項目は、インストーラを起動すると問合せがあります。インストール開始前に決定または確認をしてください。

注意事項については「[3.1 インストール](#)」を参照してください。

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|--------------|---|--|
| インストールディレクトリ | <p>実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。</p> | <p>C:¥Program Files¥Fujitsu ¥SystemwalkerSQC-C</p> |
| Managerのアドレス | <p>接続するManagerのホスト名かIPアドレスです。</p> | <p>なし</p> <p>※ デフォルト値はありませんが、設定は必須です。</p> |



1.2.4 Enterprise Managerをインストールする場合

Enterprise Managerをインストールする場合は、インストールするサーバの情報が必要になります。

「[2.4 Enterprise Manager](#)」を参照してインストール条件を確認してください。

これらの情報は、インストールを実行する前に収集します。

以下の項目は、インストーラを起動すると問合せがあります。インストール開始前に決定または確認をしてください。

【Windows版】

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|--------------------------|---|--|
| インストールディレクトリ | 実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。 | C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC |
| 可変ファイル格納ディレクトリ | 動作中に変更するファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC |
| 性能データベース格納先(サマリ) | サマリデータを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| 性能データベース格納先(10分) | リソースデータ(10分)を格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| 性能データベース格納先(1時間) | リソースデータ(1時間)を格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| 性能データベース格納先(1日) | リソースデータ(1日)を格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\data |
| アーカイブファイルの格納先 | アーカイブファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | C:\SystemwalkerSQC\spool\BackupPDBinsert |
| しきい値超えの通知方法 | しきい値超えが発生した場合、その通知方法として、「イベントログ」または「Centric Managerメッセージ連携」のいずれかを選択します。 同じマシン上にSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合に、「Centric Managerメッセージ連携」を選択することで、しきい値超えがCentric Managerに通知されるようになります。 しきい値超えの通知方法は、イベントログとCentric Managerメッセージ連携の他に、メール、トラップ、ユーザー任意のコマンド実行があります。 | イベントログ |
| ログデータ(Troubleshoot)の保持期間 | ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を1～30日の間で指定します。 | 7日 |

【UNIX版】

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|------------------|--------------------------------------|-----------------------|
| インストールディレクトリ | 実行モジュールなど、固定の資源をインストールするディレクトリのパスです。 | /opt/FJSVssqc |
| 定義ファイル格納ディレクトリ | 動作中に参照する定義ファイルを格納するディレクトリです。 | /etc/opt/FJSVssqc |
| 可変ファイル格納ディレクトリ | 動作中に変更するファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc |
| 性能データベース格納先(サマリ) | サマリデータを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| 性能データベース | リソースデータ(10分)を格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |

| 問合せ項目 | 説明 | デフォルト値 |
|--------------------------|---|-----------------------------------|
| 格納先(10分) | | |
| 性能データベース 格納先(1時間) | リソースデータ(1時間)を格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| 性能データベース 格納先(1日) | リソースデータ(1日)を格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/PDB |
| アーカイブファイルの格納先 | アーカイブファイルを格納するためのディレクトリのパスです。 | /var/opt/FJSVssqc/BackupPDBinsert |
| しきい値超えの通知方法 | しきい値超えが発生した場合、その通知方法として、「syslog」または「Centric Managerメッセージ連携」のいずれかを選択します。 同じマシン上にSystemwalker Centric Managerがインストールされている場合に、「Centric Managerメッセージ連携」を選択することで、しきい値超えがCentric Managerに通知されるようになります。なお、本項目はAgentのインストール時のみ選択します。 しきい値超えの通知方法は、イベントログとCentric Managerメッセージ連携の他に、メール、トラップ、ユーザー任意のコマンド実行があります。 | syslog |
| ログデータ(Troubleshoot)の保持期間 | ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を1～30日の間で指定します。 | 7日 |

1.3 ポート番号

Systemwalker Service Quality Coordinatorでは、以下のポート番号を使用します。

ポート番号は、システム内で重複しないよう、本製品または他製品の設定を変更してください。

また、通信を行うコンポーネント間にファイアーウォールが存在する場合は、通信を許可するための設定が必要です。

| コンポーネント | ポート番号/ プロトコル | 機能 | 変更 | 備考 |
|--------------------|-----------------|------------------------|----|---|
| Enterprise Manager | 2344/tcp | Push型通信 | 不可 | |
| | | 運用管理クライアントとManager間の通信 | 不可 | |
| | 2345/tcp | 運用管理クライアントとManager間の通信 | 不可 | |
| | 23440/tcp | ポリシー配付 | 可 | ポリシー配付先サーバが使用するポート番号を変更する場合は、使用手引書「ポリシー配付先サーバが使用するポート番号の変更」を参照してください。 |
| Manager | 2344/tcp | Push型通信 | 不可 | |
| | | 運用管理クライアントとManager間の通信 | 不可 | |

| コンポーネント | ポート番号/ プロトコル | 機能 | 変更 | 備考 |
|---------------|-----------------|--|----|---|
| | 2345/tcp | 運用管理クライアントと Manager間の通信 | 不可 | |
| | 2365/tcp | Web利用状況管理(管理 サーバ運用の場合) | 可 | ポート番号を変更する場合は、 「利用状況DB参照エンジン」 - 「起動操作」を参照してください。 |
| | 23440/tcp | ポリシー配付 | 可 | ポリシー配付先サーバが使用する ポート番号を変更する場合は、 使用手引書「ポリシー配付先 サーバが使用するポート番号の 変更」を参照してください。 |
| Proxy Manager | 2344/tcp | Push型通信 | 不可 | |
| | 23440/tcp | Pull型通信(本製品が標準 提供するthttpdサービスを 利用する場合) | 可 | Pull通信で使用するポート番号 を変更する場合は、導入手引書 「Pull通信定義」を参照してくだ さい。 |
| | | ポリシー配付 | 可 | ポリシー配付先サーバが使用する ポート番号を変更する場合は、 使用手引書「ポリシー配付先 サーバが使用するポート番号の 変更」を参照してください。 |
| Agent | 2365/tcp | Web利用状況管理(被管理 サーバ運用の場合) | 可 | ポート番号を変更する場合は、 「利用状況DB参照エンジン」 - 「起動操作」を参照してください。 |
| | 23440/tcp | Pull型通信(本製品が標準 提供するthttpdサービスを 利用する場合) | 可 | Pull通信で使用するポート番号 を変更する場合は、導入手引書 「Pull通信定義」を参照してくだ さい。 |
| | | ポリシー配付 | 可 | ポリシー配付先サーバが使用する ポート番号を変更する場合は、 使用手引書「ポリシー配付先 サーバが使用するポート番号の 変更」を参照してください。 |

1.4 OSごとの運用の注意事項

Systemwalker Service Quality CoordinatorのOSごとの運用の注意事項について説明します。

■Windowsでの運用の注意事項

- JIS X 0213:2004 (7ビットおよび8ビットの2バイト情報交換用符号化拡張漢字集合) 環境を利用する場合、JIS X 0213:2004で新規に追加された文字を以下に指定しないでください。
 - コンピュータ名
 - GUI画面
 - コマンドのオプション
- Windows Server 2012およびWindows 8でサポートされた新しいUI(ユーザーインターフェース)には対応していません。

- Windows Server 2019以降の場合、Microsoftの不具合の影響で、本製品が正しく動作しません。

本製品のインストール時に、ディスクのクリーンアップタスク(SilentCleanup)を無効化してください。手順は以下のとおりです。

1. 管理者モードでコマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
schtasks /change /tn ¥Microsoft¥Windows¥DiskCleanup¥SilentCleanup /disable
```

2. Windows Serverへ再ログオンします。

Microsoftの不具合についての詳細は以下より確認可能です。

```
https://blogs.technet.microsoft.com/askcorejp/2018/11/09/temporary-folder-is-removed-by-silentcleanup-task/
```

- 本製品をWindowsマシンにインストールする場合、事前に以下のプログラムを停止してください。

- ー ウイルスチェックプログラム

■Internet Explorer 11で管理コンソールおよびコンソールを使用する場合の制限

以下の条件で管理コンソールまたはコンソールを使用する場合、Internet Explorer 11の不具合により、空白のウィンドウが表示されたり、ボタンが機能しなかったりするなど、正常に動作しません。

1. WindowsにビルトインAdministratorでログオンし、Internet Explorer 11を使用する、または
2. WindowsにビルトインAdministrator以外のアカウントでログオンし、Internet Explorer 11を[管理者として実行]により起動して使用する場合。

以下のいずれかの方法で回避してください。

- ビルトインAdministrator以外のアカウントでWindowsにログオンし、[管理者として実行]はせずに、Internet Explorer 11を使用する。
- ビルトインAdministratorについてのセキュリティポリシーを変更する。変更手順は以下のとおりです。

1. 管理者ユーザーでWindowsにログオンします。
2. [Windows] + [R]キーを押し、[ファイル名を指定して実行]メニューを実行します。
3. テキストボックスに「secpol.msc」と入力して[OK]ボタンをクリックし、[ローカル セキュリティ ポリシー]管理コンソールを起動します。
4. 左ペインのノード ツリーにおいて、[セキュリティの設定] - [ローカル ポリシー] - [セキュリティ オプション]ノードをクリックして選択します。
5. 右ペインに表示されているポリシー項目の中から、[ユーザー アカウント制御: ビルトインAdministratorアカウントのための管理者承認モード]項目をダブルクリックします。
6. 表示されるダイアログの[ローカル セキュリティの設定]タブにおいて、[有効(E)]オプションを選択して[OK]ボタンをクリックします。
7. システムを再起動します。

上記のセキュリティポリシーの変更を行うと、ビルトインAdministratorアカウントにおいても、通常の管理者ユーザーと同様に、特権の昇格が必要とされるすべての操作で、その操作の許可を求めるメッセージが表示されるようになります。

本問題の詳細については、Microsoft社からの情報KB2909974を参照してください。

■Solarisでの運用の注意事項

Global zoneおよび、以下の点を満たしたnon-global zoneに、インストール可能です。

- ・ 論理ネットワークインターフェースがglobal zoneから1つ以上割り当てられていること

1.5 留意事項

Systemwalker Service Quality Coordinatorを使用する場合の留意事項について説明します。

■システム時刻について

システム内の各コンピュータのシステム時刻は、同じ時刻になるように設定してください。

■ホスト名を設定する場合

システム構築の際に各コンピュータに設定する"ホスト名"は、全角文字、半角ひらがな文字、および半角カナ文字は使用しないでください。

■Linux仮想マシン機能(KVM)/Oracle VM Server for x86のCPU情報について

Linux仮想マシン機能(KVM)およびOracle VM Server for x86において、複数ドメインで物理CPUを共有する形態の場合、各ドメインで収集されるCPU情報は、実際よりも大きな値で収集されることがあります。

該当する項目は、以下のとおりです。

- ・ CPUの使用時間と使用率(SUM_PROC、UX_CPUBUSY)
- ・ プロセスのCPU時間(UX_PROCESS)

ポイント

ドメインが物理CPUを占有している場合は、正しい情報が収集されます。

該当情報の詳細は、リファレンスマニュアル「データフォーマット」を参照してください。

■IPv6環境での運用について

Agent/Proxy ManagerとManager間、およびインストールレス型AgentとManager/Proxy Manager間の通信が、以下の場合について管理対象のIPv6環境をサポートします。

- ・ Agent/Proxy Manager - Manager間 (Push通信)
- ・ インストールレス型Agent - Manager/Proxy Manager間 (TELNET/SSH/HTTPS/WMI/REST)

注意

- ・ IPv6環境のAgent/Proxy Manager/インストールレス型Agentを管理する場合、ManagerはIPv4/IPv6デュアルスタック環境にしてください。また、Manager - 運用管理クライアント間はIPv4で通信できるようにしてください。

ManagerをIPv4/IPv6デュアルスタック環境で動作させる場合は、「[6.15 IPv6環境での運用設定](#)」を参照し、手順を実施してください。

- ・ 以下の機能はIPv6に対応していません。
 - － Webトランザクション量管理
 - － エンドユーザーレスポンス管理

ポイント

IPv6のみの環境の場合、Windows版 Managerと運用管理クライアントを同居させる構成にすることにより動作可能です。この場合、運用管理クライアントとManagerとの通信はループバックによるIPv4通信になります。運用管理クライアントで設定する接続先Managerに「127.0.0.1」を指定してください。

■ ウイルススキャンについて

ウイルススキャンを実施する場合は、以下について検討してください。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorの可変ファイル格納ディレクトリ配下を、リアルタイムスキャンの対象から除外してください。
除外しない場合、ウイルス対策ソフトのCPU負荷が増加することがあります。
- Systemwalker Service Quality Coordinatorの可変ファイル格納ディレクトリ配下を、ウイルススキャンの対象から除外してください。
除外しない場合、Systemwalker Service Quality Coordinatorの動作に不具合が発生する場合があります。
- 運用管理クライアントの定期レポートの格納場所を、リアルタイムスキャンの対象から除外してください。
定期レポートの格納場所については、Systemwalker Service Quality Coordinator 使用手引書(コンソール編)「レポートの保全(管理者の作業)」を参照してください。

■ バックアップソフトの使用について

バックアップソフトを使用する場合は、以下について検討してください。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorの可変ファイル格納ディレクトリ配下を、バックアップの対象から除外してください。
- Systemwalker Service Quality Coordinatorの可変ファイル格納ディレクトリ配下をバックアップする場合には、Systemwalker Service Quality Coordinatorのサービスを停止してください。

Systemwalker Service Quality Coordinatorの可変ファイル格納ディレクトリ配下をバックアップ対象とした場合、バックアップソフトまたはSystemwalker Service Quality Coordinatorで不具合が発生する場合があります。

■ 仮想マシンの複製について

Managerがインストールされた仮想マシンの複製は、Managerのインストール直後のみ可能です。運用開始(Managerのセットアップおよびサービス/デーモンの起動)後は、仮想マシンを複製しないでください。

第2章 インストール条件と資源見積り

本章では、インストール条件と資源見積りについて説明します。


2.1 Manager

Managerのインストール条件を以下に説明します。

2.1.1 ハードウェア

2.1.1.1 動作ハードウェア

【Windows版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|----------|----------------|--|---|
| CPU | | インテル(R) Xeon(R) プロセッサ 相当以上 | |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 350MB | |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 350MB + データベース所要量 + アーカイブファイル所要量 (+ ログ所要量 (*)) *)ManagerでAgentの機能を利用する場合 | データベース所要量およびアーカイブファイル所要量の見積り式については、「 2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について 」を参照してください。 ログ所要量の見積り式については、「 2.1.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について 」を参照してください。  注意 ファイルシステムはNTFSのみをサポートします。 |
| メモリ空き容量 | | 800MB以上 (+ 2GB (*)) *)インストールレス型Agent管理機能を使用する場合 | |

【Solaris版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|----------|----------------|------------------|----|
| CPU | | SPARC64 600MHz以上 | |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 300MB | |
| | 定義ファイル格納ディレクトリ | 50MB | |

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|---------|----------------|--|--|
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 100MB + データベース所要量 + アーカイブファイル所要量 (+ ログ所要量 (*)) *)ManagerでAgentの機能を利用する場合 | データベース所要量およびアーカイブファイル所要量の見積り式については、「 2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について 」を参照してください。 ログ所要量の見積り式については、「 2.1.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について 」を参照してください。 |
| メモリ空き容量 | | 600MB以上 (+ 600MB (*)) *)インストールレス型Agent管理機能を使用する場合 | |

【Linux版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|----------|----------------|--|---|
| CPU | | 64ビット インテル(R) Xeon(R)プロセッサ (EM64T) 相当以上 | |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 300MB | |
| | 定義ファイル格納ディレクトリ | 50MB | |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 100MB + データベース所要量 + アーカイブファイル所要量 (+ ログ所要量 (*)) *)ManagerでAgentの機能を利用する場合 | データベース所要量およびアーカイブファイル所要容量の見積り式については、「 2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について 」を参照してください。 ログ所要量の見積り式については、「 2.1.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について 」を参照してください。 |
| メモリ空き容量 | | 200MB以上 (+ 600MB (*)) *)インストールレス型Agent管理機能を使用する場合 | |

ポイント

.....

Managerのディスク性能は、サマリ、詳細、レポートなどの各種表示機能の表示性能に影響を及ぼします。

同一マシンにSystemwalker Centric Managerと本製品のManagerが同居する場合などは、個別のディスクパーティションを用意するなど、ディスク性能に配慮した環境を用意することをお勧めします。

.....

2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について

Manager上では、性能データベース/アーカイブファイルのための容量が必要になります。

性能データベース/アーカイブファイルについては、管理対象となるリソースのインスタンス数や保持期間、Agent/Proxy Manager数に応じた容量が必要になります。

下記の見積り手順で見積ってください。

ポイント

Managerに物理ディスクを3台用意し、サマリデータ、リソースデータ、アーカイブファイルを別々のディスクに格納しディスクI/Oを分散させることによって、1 Managerで約300台のAgentが管理可能になります。

サマリデータ、リソースデータ、およびアーカイブファイルの格納先は、インストール時に指定するか、運用開始後の場合は「6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更」に示す手順によって変更することができます。



■ 格納場所

性能データベース

性能データベースは、デフォルトでは以下のディレクトリ配下に格納されます。インストール時の設定または「6.6.1.1 PDB格納先の変更」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

<可変ファイル格納ディレクトリ>%data%

【UNIX版】

/var/opt/FJSVssqc/PDB/

アーカイブファイル

アーカイブファイルは、デフォルトでは以下のディレクトリ配下に格納されます。インストール時の設定または「6.6.1.2 アーカイブファイル格納先の変更」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

<可変ファイル格納ディレクトリ>%spool%BackupPDBinsert

【UNIX版】

/var/opt/FJSVssqc/BackupPDBinsert

■性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り手順

1. 管理対象となる各Agent/Proxy Managerのために必要な容量を見積ります。

a. 1回あたりの収集で取得するレコード数の見積り

サマリデータ

下記のサマリデータ見積りの表から、管理対象となるリソースのインスタンス数とサマリデータ係数を乗じたものを合計し、1回あたりの収集に取得するサマリデータのレコード数「MR」を算出します。

リソースデータ

下記のリソースデータ見積りの表から、管理対象となるリソースのインスタンス数とリソースデータ係数を乗じたものを合計し、1回あたりの収集に取得するリソースデータのレコード数「RR」を算出します。

ポイント

たとえば、Windows上にSymfoware Serverが導入されているサーバについて見積る場合は、管理対象となるOS(Windows)とSymfoware Serverの欄に記載されているリソースのインスタンスについて計算したものを合計してください。

b. 1回あたりの収集レコード数から、下記の計算式を使用して使用容量を計算します。

【性能データベース(PDB)容量の場合】

サマリデータ [KB] = (MR × 50 [KB]) × (サマリデータ保持期間 [日] + 2 [日])

リソースデータ [KB] = RR × (144 × A + 24 × B + 1 × C) × 0.35 [KB]

A : リソースデータ(10分) の保持期間 [日] + 2 [日]

B : リソースデータ(1時間) の保持期間 [日] + 8 [日]

C : リソースデータ(1日) の保持期間 [日] + 32 [日]

性能データベース (PDB) 容量 [KB] = サマリデータ [KB] + リソースデータ [KB]

ポイント

デフォルトの保持期間は以下のとおりです。

- サマリデータ : 3 [日]
- リソースデータ(10分) : 7 [日]
- リソースデータ(1時間) : 42 [日] (6週間)

- リソースデータ(1日) : 397[日] (13か月)

注意

サマリデータおよびリソースデータをそれぞれ別ディスクに格納する場合、それぞれのディスクに必要な性能データベース(PDB)容量は以下のとおりです。

| |
|---|
| サマリデータ格納ディスクの性能データベース (PDB) 容量 [KB] = サマリデータ [KB] |
|---|

| |
|---|
| リソースデータ格納ディスクの性能データベース (PDB) 容量 [KB] = リソースデータ [KB] |
|---|

【アーカイブファイルの場合】

| |
|--------------------------------------|
| サマリデータ [KB] = (MR × 45 [KB]) × 4 [日] |
|--------------------------------------|

| |
|---------------------------------------|
| リソースデータ [KB] = (RR × 50 [KB]) × 4 [日] |
|---------------------------------------|

| |
|---|
| アーカイブファイル容量 [MB] = サマリデータ [MB] + リソースデータ [MB] |
|---|

- すべてのAgent/Proxy Managerについて算出した結果を合算します。その結果がManager上で必要な性能データベース/アーカイブファイル容量になります。

■ サマリデータ見積り

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ 係数 |
|--------------------------------------|----------------|--------------|
| OS <インストール型の場合> | 1 (固定値) | 30 |
| OS <インストールレス型の場合> | 1 (固定値) | 6 |
| VMware ESXi | 1 (固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| VMware vCenter | クラスター数 | 4 |
| | リソースプール数 | 8 |
| Hyper-V <インストール型の場合> | 1 (固定値) | 10 |
| | ゲスト数 | 10 |
| Hyper-V <インストールレス型の場合> | 1 (固定値) | 8 |
| | ゲスト数 | 2 |
| Linux仮想マシン機能 (KVM) <インストール型の場合> | ゲスト数 | 10 |
| Linux仮想マシン機能 (KVM) <インストールレス型の場合> | 1 (固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| Linux仮想マシン機能 (Xen) <インストール型の場合> | ゲスト数 | 10 |
| Linux仮想マシン機能 (Xen) <インストールレス型の場合> | 1 (固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| cgroup | cpuacctサブシステム数 | 2 |

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ 係数 |
|---|------------------------------------|--------------|
| | memoryサブシステム数 | 2 |
| | blkioサブシステム数×デバイス数 | 2 |
| Oracle VM Server for x86 | 1(固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| Solaris ゾーン <インストール型の場合> | ゾーン数 | 10 |
| Solaris ゾーン <インストールレス型の場合> | ゾーン数 | 2 |
| Solaris ゾーン(Solaris 10) <インストール型の場合> | ゾーン数 | 10 |
| Oracle VM Server for SPARC 制 御ドメイン <インストール型/インストールレス 型の場合> | 1(固定値) | 4 |
| | ドメイン数 | 4 |
| OpenStack Compute(OpenStack の場合) | 1(固定値) | 6 |
| OpenStack Telemetry(OpenStack の場合) | インスタンス数(VM数) | 1 |
| サービス稼働管理 | 稼働監視対象数 | 10 |
| エンドユーザーレスポンス管理 | Browser Agent数×監視URL数 | 1 |
| Webトランザクション量管理 | サービス数 | 2 |
| Enterprise Application Platform | GlassFish Serverインスタンス数 | 2 |
| Interstage Application Server (EJBアプリケーション) | アプリケーション数×メソッド数×プロセス数×スレッド数 | 2 |
| Interstage Application Server (CORBAアプリケーション) | アプリケーション数×オペレーション数×プロセス数×ス レッド数 | 2 |
| Interstage Application Server (トランザクションアプリケーション) | アプリケーション数×オペレーション数×プロセス数 | 2 |
| Interstage Application Server (IIServer) | ワークユニット数 | 2 |
| Interstage Application Server (IIServerクラスタ) | サーバーインスタンス数 | 2 |
| <ul style="list-style-type: none"> • Interstage Business Application Server • Application Framework Suite | 対象サーバ数 | 2 |
| Interstage Service Integrator | シーケンス数 | 10 |
| | キュー数 | 10 |
| Oracle WebLogic Server | 管理サーバ数+管理対象サーバ数 | 2 |
| Microsoft .NET Server | インスタンス数 | 10 |

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ 係数 |
|---|-----------------------|-----------------------|
| SAP | SAPインスタンス数 | 8 |
| <ul style="list-style-type: none"> • Symfoware Server(V12以降のNativeインターフェース) • Symfoware Server(V11以前) | RDBシステム数 | 2 |
| | RDBシステム数×接続プロセス数 | 2 |
| <ul style="list-style-type: none"> • Symfoware Server(Openインターフェース) • Symfoware Server(Postgres) | PostgreSQLインスタンス数×DB数 | 6 |
| | PostgreSQL | PostgreSQLインスタンス数×DB数 |
| Symfoware Analytics Server | DB数 | 2 |
| Oracle Database Server | インスタンス(SID)数 | 4 |
| Microsoft SQL Server | インスタンス数 | 10 |
| Primesoft | UAPサービス数 | 30 |
| Systemwalker Operation Manager | 1(固定値) | 4 |
| Systemwalker Resource Coordinator (Network) | ネットワークインタフェース数 | 4 |
| <ul style="list-style-type: none"> • Systemwalker Resource Coordinator (Storage) • ETERNUS SF Storage Cruiser | RAIDGroup数 | 4 |
| ServerView Resource Orchestrator | VMプール数 | 2 |
| | ストレージプール数 | 2 |
| | ネットワークプール数 | 2 |
| | サーバプール数 | 2 |
| | アドレスプール数 | 2 |
| ユーザーデータ | 10分間にPDBに格納したデータ数 | 1 |

■リソースデータ見積り

ポイント

Windowsのプロセス数、UNIXのプロセス数と物理ディスク(パーティション)数については、動きがないリソースについては、収集対象になりませんので、見積り上は除外して計算してください。除外する条件についての詳細は、リファレンスマニュアル「詳細/レポート情報」を参照してください。

ポイント


- Hyper-Vを監視対象にする場合、OS(Windows)も監視対象になります。Hyper-VとOS(Windows)を計算して追加してください。

- Linux仮想マシン機能(KVM)を監視対象にする場合、OS(Linux)も監視対象になります。Linux仮想マシン機能(KVM)とOS(Linux)を計算して追加してください。
- Linux仮想マシン機能(Xen)を監視対象にする場合、OS(Linux)も監視対象になります。Linux仮想マシン機能(Xen)とOS(Linux)を計算して追加してください。
- Oracle VM Server for x86を監視対象にする場合、OS(Linux)も監視対象になります。Oracle VM Server for x86とOS(Linux)を計算して追加してください。
- Solarisゾーンを監視対象にする場合、OS(Solaris)も監視対象になります。SolarisゾーンとOS(Solaris)を計算して追加してください。
- Oracle VM Server for SPARC 制御ドメインを監視対象にする場合、OS(Solaris)も監視対象になります。Oracle VM Server for SPARC 制御ドメインとOS(Solaris)を計算して追加してください。

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|-------------------------------|-----------------|---------------|
| OS(Windows) <インストール型の場合> | 1(固定値) | 9 |
| | CPU数 | 6 |
| | 論理ドライブ数 | 3 |
| | 物理ドライブ数 | 5 |
| | プロセス数 | 2 |
| | ネットワークインターフェース数 | 2 |
| | ページファイル数 | 2 |
| OS(Solaris) <インストール型の場合> | 1(固定値) | 21 |
| | CPU数 | 4 |
| | コア数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 2 |
| | 物理ディスク(パーティション) | 2 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 3 |
| | ゾーン数 | 1 |
| | メッセージキュー数 | 1 |
| | 共有メモリ数 | 1 |
| | セマフォ数 | 1 |
| OS(Linux) <インストール型の場合> | 1(固定値) | 21 |
| | CPU数 | 5 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 2 |
| | 物理ディスク(パーティション) | 3 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 3 |
| | メッセージキュー数 | 2 |
| | 共有メモリ数 | 1 |
| セマフォ数 | 1 | |
| OS(Windows) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 6 |




| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|-------------------------------|------------------------|---------------|
| | CPU数 | 4 |
| | 論理ドライブ数 | 3 |
| | 物理ドライブ数 | 4 |
| | ネットワークインターフェース数 | 2 |
| | ページファイル数 | 2 |
| OS(Solaris) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 18 |
| | CPU数 | 4 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 2 |
| | 物理ディスク(パーティション) | 2 |
| | ネットワークインターフェース数 | 3 |
| OS(Linux) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 18 |
| | CPU数 | 5 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 2 |
| | 物理ディスク(パーティション) | 3 |
| | ネットワークインターフェース数 | 3 |
| OS(AIX) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 11 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク(パーティション) | 2 |
| OS(HP-UX) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 11 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク(パーティション) | 1 |
| VMware ESXi | 1(固定値) | 2 |
| | ゲスト数 | 3 |
| | ゲスト数×物理デバイス数 | 1 |
| | ゲスト数×データストア数 | 1 |
| | ゲスト数×仮想プロセッサ数 | 2 |
| | ゲスト数×仮想デバイス数 | 2 |
| | ゲスト数×仮想ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | 物理デバイス数 | 2 |
| | データストア数 | 1 |
| | 仮想プロセッサ数 | 2 |
| | VMware vCenter | クラスタ数 |
| リソースプール数 | | 4 |
| データストア数 | | 1 |
| ゲスト数 | | 2 |
| データストア数×ゲスト数 | | 1 |

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|---|-------------------------|---------------|
| | vSANデータストア数 | 2 |
| | vSANデータストアに接続している仮想ホスト数 | 1 |
| | vSANデータストアに格納されたゲスト数 | 1 |
| Hyper-V <インストール型/インストールレス 型の場合> | 1(固定値) | 1 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ドライブ数 | 2 |
| | 物理ドライブ数 | 1 |
| | ページファイル数 | 2 |
| | ゲスト数×仮想プロセッサ数 | 3 |
| | ゲスト数×仮想デバイス数 | 2 |
| | ゲスト数×仮想ネットワークインターフェース数 | 4 |
| Linux仮想マシン機能(KVM) <インストール型/インストールレス 型の場合> | 1(固定値) | 11 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション) | 2 |
| | ドメイン数 | 4 |
| | ドメイン数×仮想ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ドメイン数×仮想CPU数 | 1 |
| Linux仮想マシン機能(Xen) <インストール型/インストールレス 型の場合> | 1(固定値) | 11 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション) | 2 |
| | ドメイン数 | 3 |
| | ドメイン数×仮想ネットワークインターフェース数 | 1 |
| cgroup | cpuサブシステム数 | 1 |
| | cpuacctサブシステム数 | 1 |
| | memoryサブシステム数 | 1 |
| | blkioサブシステム数×デバイス数 | 1 |
| Oracle VM Server for x86 | 1(固定値) | 11 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション) | 2 |
| | ドメイン数 | 3 |
| | ドメイン数×仮想ネットワークインターフェース数 | 1 |
| Solaris ゾーン <インストール型/インストールレス 型の場合> | ゾーン数 | 3 |
| Solaris ゾーン(Solaris 10) <インストールレス型の場合> | ゾーン数 | 1 |

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|---|---|------------------------|
| Oracle VM Server for SPARC 制御ドメイン <インストール型/インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 2 |
| | ドメイン数 | 2 |
| OpenStack Compute(OpenStackの場合) | 1(固定値) | 3 |
| OpenStack Telemetry(OpenStackの場合) | 1(固定値) | 1 |
| | インスタンス数(VM数) | 1 |
| | VMネットワークインターフェース数 | 1 |
| | イメージ数 | 1 |
| | ボリューム数 | 1 |
| | オブジェクトストア数 | 1 |
| サービス稼働管理 | 稼働監視対象数 | 1 |
| エンドユーザーレスポンス管理 | Browser Agent数×監視URL数 | 4 |
| Webトランザクション量管理 | 分析対象URL数 | 1 |
| |  注意 トランザクションログ定義ファイルで指定される(各Service文で指定された)Inclusion文総数 | |
| Enterprise Application Platform | GlassFish Serverインスタンス数 | デフォルト時:2 監視項目の拡張時:3 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×JDBCデータソース数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×MessageDrivenBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×スレッドプール数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×接続キュー数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×JMS/コネクタ接続プール数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×仮想サーバ数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×StatefulSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | GlassFish Serverインスタンス数×StatelessSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| Interstage Application Server(EJBアプリケーション) | アプリケーション数×メソッド数×プロセス数×スレッド数 | 1 |
| Interstage Application Server(CORBAアプリケーション) | アプリケーション数×オペレーション数×プロセス数×スレッド数 | 1 |
| Interstage Application Server(トランザクションアプリケーション) | アプリケーション数×オペレーション数×プロセス数 | 1 |

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|--|---|------------------------|
| Interstage Application Server(IJServer) | ワークユニット数×JVM数 | 1 |
| | ワークユニット数×JTARESOURCE数×プロセス数 | 1 |
| | ワークユニット数×DATASOURCE数 | 1 |
| Interstage Application Server(IJServerクラスタ) (Jakarta EE/Java EE 7の場合) | サーバーインスタンス数 | デフォルト時:2 監視項目の拡張時:3 |
| | サーバーインスタンス数×JDBCデータソース数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×MessageDrivenBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×スレッドプール数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×接続キュー数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×JMS/コネクタ接続プール数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×仮想サーバ数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×StatefulSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×StatelessSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| Interstage Application Server(IJServerクラスタ) (Java EE 6の場合) | サーバーインスタンス数 | デフォルト時:2 監視項目の拡張時:4 |
| | サーバーインスタンス数×JDBCデータソース数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×MessageDrivenBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×スレッドプール数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×JMS/コネクタ接続プール数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×EntityBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×StatefulSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×StatelessSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×接続キュー数 | 1 |
| Interstage Application Server(IJServerクラスタ) (Java EE 5の場合) | サーバーインスタンス数 | デフォルト時:2 監視項目の拡張時:5 |
| | サーバーインスタンス数×JDBCデータソース数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×MessageDrivenBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×スレッドプール数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×JMS/コネクタ接続プール数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×EntityBean数×アプリケーション数 | 1 |

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|---|--|---------------|
| | サーバーインスタンス数×StatefulSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| | サーバーインスタンス数×StatelessSessionBean数×アプリケーション数 | 1 |
| Interstage Application Server(トランザクション内訳分析) (J2EE環境の場合) | ワークユニット数×Servletコンテナ数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| | ワークユニット数×Webアプリケーション数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| | ワークユニット数×EJBコンテナ実行回数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| | ワークユニット数×EJBアプリケーション実行回数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| Interstage Application Server(トランザクション内訳分析) (Java EE環境の場合) | サーバーインスタンス数×Servletコンテナ数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| | サーバーインスタンス数×Webアプリケーション数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| | サーバーインスタンス数×EJBコンテナ実行回数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| | サーバーインスタンス数×EJBアプリケーション実行回数×(トランザクション実行回数/100) | 1 |
| <ul style="list-style-type: none"> Interstage Business Application Server Application Framework Suite | 対象サーバ数×(トランザクション数/サンプリングレート) | 1 |
| Interstage Service Integrator | シーケンス数 | 1 |
| | キュー数 | 1 |
| Oracle WebLogic Server | 管理サーバ数 | 3 |
| | 管理対象サーバ数 | 3 |
| | 管理対象サーバ数×JDBCデータソース数 | 1 |
| Microsoft .NET Server | インスタンス数 | 17 |
| SAP | SAPインスタンス数 | 13 |
| <ul style="list-style-type: none"> Symfoware Server(V12以降のNativeインターフェース) Symfoware Server(V11以前) | RDBシステム数 | 1 |
| | RDBシステム数×パップアップール数 | 1 |
| | RDBシステム数×DBスペース数 | 1 |
| | RDBシステム数×接続プロセス数 | 2 |
| <ul style="list-style-type: none"> Symfoware Server(Openインターフェース) Symfoware Server(Postgres) | PostgreSQLインスタンス数×DB数 | 4 |
| | PostgreSQLインスタンス数×DB数×テーブル数 | 2 |
| | PostgreSQLインスタンス数 | 1 |
| PostgreSQL | PostgreSQLインスタンス数×DB数 | 4 |
| | PostgreSQLインスタンス数×DB数×テーブル数 | 2 |
| | PostgreSQLインスタンス数 | 1 |

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|--|---|---------------|
| Symfoware Analytics Server | DB数 | 2 |
| Oracle Database Server | インスタンス(SID)数 | 7 |
| | インスタンス(SID数)×テーブルスペース数 | 1 |
| | インスタンス(SID数)×ロールバックセグメント数 | 1 |
| | インスタンス(SID数)×ディクショナリキャッシュ数 | 1 |
| Microsoft SQL Server | 1(固定値) | 7 |
| | インスタンス数 | 15 |
| | インスタンス数×オブジェクト数 | 3 |
| Primesoft | UAPサービス | 2 |
| | UAPサービス×テーブル数 | 1 |
| | UAPサービス×キュー数 | 1 |
| Systemwalker Operation Manager | サブシステム数+全サブシステムのプロジェクト数+全サブシステムのキュー数  注意 定義ファイル jla.ini より解析対象のサブシステム、プロジェクト、キューを制限した場合は、制限された分となります。 | 7 |
| Systemwalker Centric Manager(Traffic) | ネットワークインターフェース数  注意 1時間単位のデータを毎時間継続的にPDBに格納した場合の値です。 | 7 |
| Systemwalker Network Manager | ノード数 + インターフェースホスト数  注意 1時間単位のデータを毎時間継続的にPDBに格納した場合の値です。 | 10 |
| Systemwalker Resource Coordinator(Network) | ネットワークインタフェース数 | 1 |
| Systemwalker Resource Coordinator(Storage) | RAIDGroup数 | 2 |
| | CM数 | 1 |
| | CM(ROE)数 | 1 |
| | LUN数 | 1 |
| | Disk数 | 1 |
| | SwitchのPORT数 | 1 |
| | NR1000の装置数 | 1 |
| ServerView Resource Orchestrator | VMプール数 | 1 |
| | ストレージプール数 | 1 |

| 管理対象 | インスタンス | リソースデータ 係数 |
|-------------|------------|---------------|
| | ネットワークプール数 | 1 |
| | サーバプール数 | 1 |
| | アドレスプール数 | 1 |
| エコ情報 | 監視対象機器数 | 2 |
| Web Service | 1(固定値) | 2 |
| | インスタンス数 | 1 |
| MSMQ | 1(固定値) | 1 |

2.1.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について

Manager上でAgent機能を利用する場合は、収集データを一時保管しておくログのための容量が必要になります。

ログデータについては、管理対象となるリソースのインスタンス数と保持期間に応じた容量が必要になります。

下記の見積り手順で見積ってください。

ポイント

ログデータ(Troubleshoot)は、Managerのデータベースに格納されている10分間隔の情報より、さらに詳細な1分間隔のOS情報が記録されています。詳細な情報を確認したい場合は、この情報を使用してください。

そのため、保持期間については、使用可能なディスクサイズと用途を考慮のうえ、決定してください。

■ 格納場所

ログデータは、以下のディレクトリ配下に格納されます。「6.7.1 ログデータ(Troubleshoot)出力先の変更」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%spool%\Troubleshoot1
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/Troubleshoot1
```

■ ログデータ容量の見積り手順

1. 1回あたりの収集で取得するレコード数を見積ります。

ログデータ

下記のログデータ見積りの表から、管理対象となるリソースのインスタンス数とログデータ係数を乗じたものを合計し、1回あたりの収集に取得するログデータのレコード数「TR」を算出します。

2. 1回あたりの収集レコード数から、下記の計算式を使用して使用容量を計算します。

```
ログデータ [MB] = (TR × 0.5 [MB]) × (保持期間 + 1) [日]
```

■ログデータ見積り

ポイント

ログデータ(Troubleshoot)は、当日格納中のデータ分の容量が必要となるため、保持期間+1[日]分の容量が必要となります。
 なお、ログデータの保持期間の初期値は7日です。

| 管理対象 | インスタンス | ログデータ 係数 |
|---------|-------------------|-------------|
| Windows | 1(固定値) | 4 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ドライブ数 | 3 |
| | 物理ドライブ数 | 2 |
| | プロセス数 | 2 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ページファイル数 | 2 |
| Solaris | 1(固定値) | 16 |
| | CPU数 | 2 |
| | コア数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション数) | 1 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ゾーン数 | 1 |
| Linux | 1(固定値) | 13 |
| | CPU数 | 4 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション数) | 2 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |

2.1.2 ソフトウェア

2.1.2.1 動作OS

【Windows版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|------|--|------------------------|
| 動作OS | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard | Service Pack なし |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|---|------------------------|
| | | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter | (注) |

注) Server Coreには対応していません。

【Solaris版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|-------------------------------------|---|
| 動作 OS | Solaris 11 | <ul style="list-style-type: none"> Global zone、および、以下の点を満たしたnon-global zoneに、インストール可能です。 <ul style="list-style-type: none"> 論理ネットワークインターフェースがglobal zoneから1つ以上割り当てられていること Solaris 11.4の場合、SRU11.4.8.5.0(SRU19041)以降を適用してください。 以下の機能を使用する場合、Solaris 11.3(SRU11.3.9.4.0(SRU16061)以降)以降を利用してください。 <ul style="list-style-type: none"> エンドユーザーレスポンス管理 |
| パッケージ | compatibility/ucb | |
| | system/accounting/legacy-accounting | ManagerでAgentの機能を利用する場合に必要です。Agent機能では、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |
| | package/svr4 | Solaris 11ゾーンへインストールする場合に必要です(solaris-large-serverがインストールされている場合を除く)。 |

【Linux版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--|---|
| 動作 OS | Red Hat Enterprise Linux 7 (for Intel64) | SELinux機能が有効な場合、以下は使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> 製品提供機能(thttpd)を使用しないPull方式の通信 |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> エンドユーザーレスポンス管理機能 利用状況分析機能(Web利用状況管理) 改ざん監視機能(Web利用状況管理) |
| | Red Hat Enterprise Linux 8 (for Intel64) | SELinux機能が有効な場合、以下は使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> 製品提供機能(thttpd)を使用しないPull方式の通信 エンドユーザーレスポンス管理機能 |
| パッケージ | sysstat | ManagerでAgentの機能を利用する場合に必要です。 Agent機能では、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |

2.1.2.2 排他製品

| 製品名 | 備考 |
|--|-------------|
| SystemWalker TrendView | 本製品の前身となる製品 |
| Systemwalker WebMGR | |
| Systemwalker PerfMGR | |
| ETERNUS SF Disk Space Monitor | |
| Systemwalker Service Catalog Manager | |
| ServerView Resource Orchestrator Cloud Edition | |

2.2 Agent/Proxy Manager


Agent/Proxy Managerのインストール条件を以下に説明します。

2.2.1 ハードウェア

2.2.1.1 動作ハードウェア

【Windows版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----------|----------------------------|---------------|
| CPU | インテル(R) Xeon(R) プロセッサ 相当以上 | |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 350MB |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 350MB + ログ所要量 |

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|---------|--|---|---|
| | | |  注意 ファイルシステムはNTFSのみをサポートします。 |
| メモリ空き容量 | | 400MB以上 (+ 2GB (*)) *)インストールレス型Agent管理機能を使用する場合 (Proxy Manager) | |

【Solaris版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|----------|----------------|---|--|
| CPU | | SPARC64 600MHz以上 | |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 300MB | |
| | 定義ファイル格納ディレクトリ | 50MB | |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 100MB + ログ所要量 | ログ所要量の見積り式については、「 2.2.1.2 ログデータ(Troubleshoot) 容量の見積り方法について 」を参照してください。 |
| メモリ空き容量 | | 400MB以上 (+ 600MB (*)) *)インストールレス型Agent管理機能を使用する場合 (Proxy Manager) | |

【Linux版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|----------|----------------|---|--|
| CPU | | 64ビット インテル(R) Xeon(R)プロセッサ (EM64T) 相当以上 | |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 300MB | |
| | 定義ファイル格納ディレクトリ | 50MB | |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 100MB + ログ所要量 | ログ所要量の見積り式については、「 2.2.1.2 ログデータ(Troubleshoot) 容量の見積り方法について 」を参照してください。 |
| メモリ空き容量 | | 200MB以上 (+ 600MB (*)) *)インストールレス型Agent管理機能を使用する場合 (Proxy Manager) | |

2.2.1.2 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について

Agentの場合、およびProxy Manager上でAgent機能を利用する場合は、収集データを一時保管しておくログのための容量が必要になります。

ログデータについては、管理対象となるリソースのインスタンス数と保持期間に応じた容量が必要になります。

下記の見積り手順で見積ってください。

ポイント

ログデータ(Troubleshoot)は、Managerのデータベースに格納されている10分間隔の情報より、さらに詳細な1分間隔のOS情報が記録されています。詳細な情報を確認したい場合は、この情報を使用してください。

そのため、保持期間については、使用可能なディスクサイズと用途を考慮のうえ、決定してください。

■格納場所

ログデータは、以下のディレクトリ配下に格納されます。「6.7.1 ログデータ(Troubleshoot)出力先の変更」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%spool%\Troubleshoot\
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/Troubleshoot\
```

■ログデータ容量の見積り手順

1. 1回あたりの収集で取得するレコード数を見積ります。

ログデータ

下記のログデータ見積りの表から、管理対象となるリソースのインスタンス数とログデータ係数を乗じたものを合計し、1回あたりの収集に取得するログデータのレコード数「TR」を算出します。

2. 1回あたりの収集レコード数から、下記の計算式を使用して使用容量を計算します。

$$\text{ログデータ [MB]} = (\text{TR} \times 0.5 \text{ [MB]}) \times (\text{保持期間} + 1) \text{ [日]}$$

■ログデータ見積り

ポイント

ログデータ(Troubleshoot)は、当日格納中のデータ分の容量が必要となるため、保持期間+1[日]分の容量が必要となります。なお、ログデータの保持期間の初期値は7日です。

| 管理対象 | インスタンス | ログデータ 係数 |
|---------|--------|-------------|
| Windows | 1(固定値) | 4 |
| | CPU数 | 2 |

| 管理対象 | インスタンス | ログデータ 係数 |
|---------|-------------------|-------------|
| | 論理ドライブ数 | 3 |
| | 物理ドライブ数 | 2 |
| | プロセス数 | 2 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ページファイル数 | 2 |
| Solaris | 1(固定値) | 16 |
| | CPU数 | 2 |
| | コア数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション数) | 1 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ゾーン数 | 1 |
| Linux | 1(固定値) | 13 |
| | CPU数 | 4 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション数) | 2 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |

2.2.2 ソフトウェア

2.2.2.1 動作OS

【Windows版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|------|---|------------------------|
| 動作OS | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter | Service Pack なし |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|--|-----|
| | | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter | (注) |

注) Server Core環境の場合、Enterprise EditionのAgentのみ動作可能です。

【Solaris版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|-------------------------------------|---|
| 動作 OS | Solaris 11 | <ul style="list-style-type: none"> Global zone、および、以下の点を満たしたnon-global zoneに、インストール可能です。 <ul style="list-style-type: none"> 論理ネットワークインターフェースがglobal zoneから1つ以上割り当てられていること Solaris 11.4の場合、SRU11.4.8.5.0(SRU19041)以降を適用してください。 以下の機能を使用する場合、Solaris 11.3(SRU11.3.9.4.0(SRU16061)以降)以降を利用してください。 <ul style="list-style-type: none"> エンドユーザーレスポンス管理 |
| パッケージ | compatibility/ucb | |
| | system/accounting/legacy-accounting | Agent、およびProxy ManagerでAgentの機能を利用する場合に必要です。 Agent機能では、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |
| | package/svr4 | Solaris 11ブーンへインストールする場合に必要です (solaris-large-serverがインストールされている場合を除く)。 |

【Linux版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--|--|
| 動作 OS | Red Hat Enterprise Linux 7 (for Intel64) | SELinux機能が有効な場合、以下は使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> 製品提供機能(thttpd)を使用しないPull方式の通信 エンドユーザーレスポンス管理機能 利用状況分析機能(Web利用状況管理) 改ざん監視機能(Web利用状況管理) |
| | Red Hat Enterprise Linux 8 (for Intel64) | SELinux機能が有効な場合、以下は使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> 製品提供機能(thttpd)を使用しないPull方式の通信 エンドユーザーレスポンス管理機能 |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|---------------|---------|---|
| パッ ケー ジ | sysstat | Agent、およびProxy ManagerでAgentの機能を利用する場合に必要です。 Agent機能では、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |

2.2.2.2 排他製品

| 製品名 | 備考 |
|--|-------------|
| SystemWalker TrendView | 本製品の前身となる製品 |
| Systemwalker WebMGR | |
| Systemwalker PerfMGR | |
| ETERNUS SF Disk Space Monitor | |
| Systemwalker Service Catalog Manager | |
| ServerView Resource Orchestrator Cloud Edition | |

2.3 運用管理クライアント

運用管理クライアントのインストール条件を以下に説明します。動作プラットフォームは、Windowsのみです。ManagerのプラットフォームがWindowsの場合は、Managerと運用管理クライアントを同一サーバに導入することができます。

注意

Managerをクラスタシステム上で運用している場合は、Managerと運用管理クライアントを同一サーバに導入することはできません。

2.3.1 ハードウェア

2.3.1.1 動作ハードウェア

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----------|---------------------------|---|
| CPU | インテル(R) PentiumIII 1GHz以上 |  注意 サーバ組合せシミュレーションを実行している間は、1実行あたり1CPUの使用率が100%になる場合があります。 |
| ディスク空き容量 | インストールディレクトリ | 850MB + レポート所要量 |
| メモリ空き容量 | | 100MB以上 |

レポート所要量の見積り式については、「[2.3.1.2 レポート容量の見積り方法について](#)」を参照してください。

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|--|----|
| | (+ 50MB(*)) *)サーバ組合せシミュレーション機能を使用する場合 | |

2.3.1.2 レポート容量の見積り方法について

運用管理クライアント上では、レポートのための容量が必要になります。

コンソール定義ごとにレポート保存先を変更する場合は、保存先ごとに使用量見積りが必要になります。

以下に、見積り方法を説明します。

レポートの管理フォルダで使用するディスク使用量＝
 サマリ・詳細のディスク使用量
 ＋分析/プランニングレポートのディスク使用量
 ＋定期レポートのディスク使用量

| レポート機能分類 | 見積り方法 |
|---------------|--|
| サマリ・詳細 | 500Kbyte×N個 ※N個:1時間以内に作成されたレポートの個数 |
| 分析/プランニングレポート | 最大50個まで保存されますので、25Mbyteの容量が必要になります。 500Kbyte×50(個)=25Mbyte |
| 定期レポート | 日報/週報/月報をそれぞれ1つ登録し、1年間保存すると仮定すると、合計215Mbyteの容量が必要になります。 日報:500Kbyte×1(個)×365(日)=182.5Mbyte 週報:500Kbyte×1(個)×53(週)=26.5Mbyte 月報:500Kbyte×1(個)×12(月)=6.0Mbyte  注意 定期レポートは、標準では自動削除されません。必要に応じて、定期レポート削除コマンドをスケジュール運用し、削除を行ってください。 |

レポートの容量は、標準で1レポート500Kbyte程度になります。

2.3.2 ソフトウェア

2.3.2.1 動作OSおよび関連ソフトウェア

■動作OS

| 項目 | 内容 | 備考 |
|------|--|------------------------|
| 動作OS | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard | Service Pack なし (注) |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|---|------------------------|
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter | (注) |
| | Windows(R) 8.1 Pro (x86) | Service Pack なし |
| | Windows(R) 8.1 Enterprise (x86) | Service Pack なし |
| | Windows(R) 8.1 Pro (x64) | Service Pack なし |
| | Windows(R) 8.1 Enterprise (x64) | Service Pack なし |
| | Windows(R) 10 Pro (x86) | |
| | Windows(R) 10 Enterprise (x86) | |
| | Windows(R) 10 Pro (x64) | |
| | Windows(R) 10 Enterprise (x64) | |

注) Server Coreには対応していません。

■関連ソフトウェア

| 項目 | 内容 | 備考 |
|---------------------|---|---|
| HTT P サー バ | Microsoft(R) Internet Information Services 8.0以降 | |
| | Interstage HTTP Server(Interstage Application Server同梱) 7.0以降 | |
| Web ブラ ウザ | Internet Explorer(R) 11 (注1) (注2) | 注1) 他のマシンから運用管理クライアントが提供するWeb画面を参照する場合もこれに準じます。 注2) デスクトップ版 Internet Explorer 11の利用が可能です。 注3) 運用管理クライアントのURLがIEモードで開くよう設定してください。 詳細は「 ■Microsoft Edge (IEモード)を利用 」 |
| | Microsoft Edge 79以降 (IEモード) (注1) (注3) | |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|----|---------------------------------------|
| | | 「 するための設定 」を参照してください。 |

注意

以下のOSに搭載されているInternet Information Servicesは、接続数が制限されています。複数のコンソールを同時に使用することが考えられる場合は、他のバージョンの使用を検討してください。

- Windows(R) 8.1 Pro (x86)
- Windows(R) 8.1 Enterprise (x86)
- Windows(R) 8.1 Pro (x64)
- Windows(R) 8.1 Enterprise (x64)
- Windows(R) 10 Pro (x86)
- Windows(R) 10 Enterprise (x86)
- Windows(R) 10 Pro (x64)
- Windows(R) 10 Enterprise (x64)

注意

V13.5.0以前は、レポートコンテンツの内容をExcel(R)形式のファイルとして出力する場合、運用管理コンソール上にMicrosoft(R) Excelをインストールする必要がありましたが、V15.0.0以降はインストールの必要はなくなりました。

2.3.2.2 排他製品

| 製品名 | 備考 |
|--|----|
| ETERNUS SF Disk Space Monitor | |
| Systemwalker Service Catalog Manager | |
| ServerView Resource Orchestrator Cloud Edition | |

EE


2.4 Enterprise Manager

Enterprise Managerのインストール条件を以下に示します。

2.4.1 ハードウェア

2.4.1.1 動作ハードウェア

【Windows版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|--------------|----------------|---|---|
| CPU | | インテル(R) Xeon(R) プロセッサ 相当以上 | |
| ディスク 空き容量 | インストールディレクトリ | 350MB | |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 350MB + データベース所要量 + アーカイブファイル所要量 (+ ログ所要量 (*)) *)Enterprise ManagerでAgentの機能を利用する場合 | データベース所要量およびアーカイブファイル所要量の見積り式については、「 2.4.1.2 性能データベースアーカイブファイル容量の見積り方法について 」を参照してください。 ログ所要量の見積り式については、「 2.4.1.3 ログデータ(Troubleshoot) 容量の見積り方法について 」を参照してください。  注意 ファイルシステムはNTFSのみをサポートします。 |
| メモリ空き容量 | | 800MB以上 | |

【Solaris版】

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|--------------|----------------|---|--|
| CPU | | SPARC64 600MHz以上 | |
| ディスク 空き容量 | インストールディレクトリ | 300MB | |
| | 定義ファイル格納ディレクトリ | 50MB | |
| | 可変ファイル格納ディレクトリ | 100MB + データベース所要量 + アーカイブファイル所要量 (+ ログ所要量 (*)) *)Enterprise ManagerでAgentの機能を利用する場合 | データベース所要量およびアーカイブファイル所要量の見積り式については、「 2.4.1.2 性能データベースアーカイブファイル容量の見積り方法について 」を参照してください。 ログ所要量の見積り式については、「 2.4.1.3 ログデータ(Troubleshoot) 容量の見積り方法について 」を参照してください。 |
| メモリ空き容量 | | 600MB以上 | |

【Linux版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-----|---|----|
| CPU | 64ビット インテル(R) Xeon(R)プロセッサ (EM64T) 相当以上 | |

| 項目 | | 内容 | 備考 |
|------------------|--------------------|---|--|
| ディスク 空き容 量 | インストールディレ クトリ | 300MB | |
| | 定義ファイル格納 ディレクトリ | 50MB | |
| | 可変ファイル格納 ディレクトリ | 100MB + データベース所要量 + アーカイブファイル所要量 (+ ログ所要量 (*)) *)Enterprise ManagerでAgentの機能を利用する場合 | データベース所要量およびアーカイブファイル所要量の見積り式については、「 2.4.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について 」を参照してください。 ログ所要量の見積り式については、「 2.4.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について 」を参照してください。 |
| メモリ空き容量 | | 200MB以上 | |

2.4.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について

Enterprise Manager上にサマリデータを集約する場合、性能データベース/アーカイブファイルのための容量が必要になります。性能データベース/アーカイブファイルの容量は、管理対象となるリソースのインスタンス数や保持期間、Agent/Proxy Manager数に応じた容量が必要になります。

サマリ画面で表示される情報のみが蓄積されるため、1つのAgent/Proxy Managerのために必要な容量は、Managerと比較すると少ない容量になります。しかしながら、すべてのManager配下の、すべてのAgent/Proxy Managerが対象になります。下記の見積り手順で見積ってください。

ポイント

.....
ディスクI/Oやディスク容量の分散のため、性能データベースやアーカイブファイルの格納先を変更することができます。性能データベースおよびアーカイブファイルの格納先は、インストール時に指定するか、運用開始後の場合は「[6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更](#)」に示す手順によって変更することができます。
.....

■ 格納場所

性能データベース

性能データベースは、デフォルトでは以下のディレクトリ配下に格納されます。インストール時の設定または「[6.6.1.1 PDB格納先の変更](#)」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%data%
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/PDB/
```

アーカイブファイル

アーカイブファイルは、デフォルトでは以下のディレクトリ配下に格納されます。インストール時の設定または「[6.6.1.2 アーカイブファイル格納先の変更](#)」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

<可変ファイル格納ディレクトリ>%spool%BackupPDBinsert

【UNIX版】

/var/opt/FJSSVssqc/BackupPDBinsert

■性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り手順

1. 管理対象となる各Agent/Proxy Managerのために必要な容量を見積ります。

a. 1回あたりの収集で取得するレコード数の見積り

サマリデータ

下記のサマリデータ見積りの表から、管理対象となるリソースのインスタンス数とサマリデータ係数を乗じたものを合計し、1回あたりの収集に取得するサマリデータのレコード数「MR」を算出します。

ポイント

たとえば、Windows上にSymfoware Serverが導入されているサーバについて見積る場合は、管理対象となるOS(Windows)とSymfoware Serverの欄に記載されているリソースのインスタンスについて計算したものを合計してください。

b. 1回あたりの収集レコード数から、下記の計算式を使用して使用容量を計算します。

【性能データベース(PDB)容量の場合】

サマリデータ [KB] = (MR × 50 [KB]) × (サマリデータ保持期間 [日] + 2 [日])

ポイント

デフォルトの保持期間は以下のとおりです。

- サマリデータ : 3 [日]

【アーカイブファイルの場合】

アーカイブファイル容量 [MB] = (MR × 45 [KB]) × 4 [日]

2. すべてのAgent/Proxy Managerについて算出した結果を合算します。その結果がManager上で必要な性能データベース/アーカイブファイル容量になります。

■サマリデータ見積り

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ係数 |
|-------------------|---------|----------|
| OS <インストール型の場合> | 1 (固定値) | 30 |
| OS <インストールレス型の場合> | 1 (固定値) | 6 |
| VMware ESXi | 1 (固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| VMware vCenter | クラスタ数 | 4 |

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ 係数 |
|---|------------------------------------|--------------|
| | リソースプール数 | 8 |
| Hyper-V <インストール型の場合> | 1(固定値) | 10 |
| | ゲスト数 | 10 |
| Hyper-V <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 8 |
| | ゲスト数 | 2 |
| Linux仮想マシン機能(KVM) <インストール型の場合> | ゲスト数 | 10 |
| Linux仮想マシン機能(KVM) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| Linux仮想マシン機能(Xen) <インストール型の場合> | ゲスト数 | 10 |
| Linux仮想マシン機能(Xen) <インストールレス型の場合> | 1(固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| cgroup | cpuacctサブシステム数 | 2 |
| | memoryサブシステム数 | 2 |
| | blkioサブシステム数×デバイス数 | 2 |
| Oracle VM Server for x86 | 1(固定値) | 6 |
| | ゲスト数 | 6 |
| Solaris ゾーン <インストール型の場合> | ゾーン数 | 10 |
| Solaris ゾーン <インストールレス型の場合> | ゾーン数 | 2 |
| Solaris ゾーン(Solaris 10) <インストール型の場合> | ゾーン数 | 10 |
| Oracle VM Server for SPARC 制 御ドメイン <インストール型/インストールレス 型の場合> | 1(固定値) | 4 |
| | ドメイン数 | 4 |
| OpenStack Compute(OpenStack の場合) | 1(固定値) | 6 |
| OpenStack Telemetry(OpenStackの場合) | インスタンス数(VM数) | 1 |
| サービス稼働管理 | 稼働監視対象数 | 10 |
| エンドユーザーレスポンス管理 | Browser Agent数×監視URL数 | 1 |
| Webトランザクション量管理 | サービス数 | 2 |
| Enterprise Application Platform | GlassFish Serverインスタンス数 | 2 |
| Interstage Application Server (EJBアプリケーション) | アプリケーション数×メソッド数×プロセス数×スレッド数 | 2 |
| Interstage Application Server | アプリケーション数×オペレーション数×プロセス数×スレッド 数 | 2 |

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ 係数 |
|---|--------------------------|--------------|
| (CORBAアプリケーション) | | |
| Interstage Application Server (トランザクションアプリケーション) | アプリケーション数×オペレーション数×プロセス数 | 2 |
| Interstage Application Server (IIServer) | ワークユニット数 | 2 |
| Interstage Application Server (IIServerクラスタ) | サーバーインスタンス数 | 2 |
| <ul style="list-style-type: none"> Interstage Business Application Server Application Framework Suite | 対象サーバ数 | 2 |
| Interstage Service Integrator | シーケンス数 | 10 |
| | キュー数 | 10 |
| Oracle WebLogic Server | 管理サーバ数+管理対象サーバ数 | 2 |
| Microsoft .NET Server | インスタンス数 | 10 |
| SAP | SAPインスタンス数 | 8 |
| <ul style="list-style-type: none"> Symfoware Server(V12以降のNativeインターフェース) Symfoware Server(V11以前) | RDBシステム数 | 2 |
| | RDBシステム数×接続プロセス数 | 2 |
| <ul style="list-style-type: none"> Symfoware Server(Openインターフェース) Symfoware Server(Postgres) | PostgreSQLインスタンス数×DB数 | 6 |
| PostgreSQL | PostgreSQLインスタンス数×DB数 | 6 |
| Symfoware Analytics Server | DB数 | 2 |
| Oracle Database Server | インスタンス(SID)数 | 4 |
| Microsoft SQL Server | インスタンス数 | 10 |
| Primesoft | UAPサービス数 | 30 |
| Systemwalker Operation Manager | 1(固定値) | 4 |
| Systemwalker Resource Coordinator (Network) | ネットワークインタフェース数 | 4 |
| <ul style="list-style-type: none"> Systemwalker Resource Coordinator (Storage) ETERNUS SF Storage Cruiser | RAIDGroup数 | 4 |
| ServerView Resource Orchestrator | VMプール数 | 2 |

| 管理対象 | インスタンス | サマリデータ 係数 |
|---------|-------------------|--------------|
| | ストレージプール数 | 2 |
| | ネットワークプール数 | 2 |
| | サーバプール数 | 2 |
| | アドレスプール数 | 2 |
| ユーザーデータ | 10分間にPDBに格納したデータ数 | 1 |

2.4.1.3 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について

Enterprise Manager上でAgent機能を利用する場合は、収集データを一時保管しておくログのための容量が必要になります。ログデータについては、管理対象となるリソースのインスタンス数と保持期間に応じた容量が必要になります。下記の見積り手順で見積ってください。

ポイント

.....
 ログデータ(Troubleshoot)は、Managerのデータベースに格納されている10分間隔の情報より、さらに詳細な1分間隔のOS情報が記録されています。詳細な情報を確認したい場合は、この情報を使用してください。

そのため、保持期間については、使用可能なディスクサイズと用途を考慮のうえ、決定してください。

■格納場所

ログデータは、以下のディレクトリ配下に格納されます。「6.7.1 ログデータ(Troubleshoot)出力先の変更」に示す手順によって、格納先を変更することも可能です。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%spool%\Troubleshoot1
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/Troubleshoot1
```

■ログデータ容量の見積り手順

1. 1回あたりの収集で取得するレコード数を見積ります。

ログデータ

下記のログデータ見積りの表から、管理対象となるリソースのインスタンス数とログデータ係数を乗じたものを合計し、1回あたりの収集に取得するログデータのレコード数「TR」を算出します。

2. 1回あたりの収集レコード数から、下記の計算式を使用して使用容量を計算します。

```
ログデータ [MB] = (TR × 0.5 [MB]) × (保持期間 + 1) [日]
```

■ログデータ見積り

ポイント

ログデータ(Troubleshoot)は、当日格納中のデータ分の容量が必要となるため、保持期間+1[日]分の容量が必要となります。なお、ログデータの保持期間の初期値は7日です。

| 管理対象 | インスタンス | ログデータ 係数 |
|---------|-------------------|-------------|
| Windows | 1(固定値) | 4 |
| | CPU数 | 2 |
| | 論理ドライブ数 | 3 |
| | 物理ドライブ数 | 2 |
| | プロセス数 | 2 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ページファイル数 | 2 |
| Solaris | 1(固定値) | 16 |
| | CPU数 | 2 |
| | コア数 | 2 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション数) | 1 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |
| | ゾーン数 | 1 |
| Linux | 1(固定値) | 13 |
| | CPU数 | 4 |
| | 論理ディスク数(マウント数) | 1 |
| | 物理ディスク数(パーティション数) | 2 |
| | プロセス数 | 1 |
| | ネットワークインターフェース数 | 1 |

2.4.2 ソフトウェア

2.4.2.1 動作OS

【Windows版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|------|--|------------------------|
| 動作OS | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter | Service Pack なし |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|---|------------------------|
| | | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter | Service Pack なし (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard | (注) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter | (注) |

注) Server Coreには対応していません。

【Solaris版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|-------------------------------------|---|
| 動作 OS | Solaris 11 | <ul style="list-style-type: none"> Global zone、および、以下の点を満たしたnon-global zoneに、インストール可能です。 <ul style="list-style-type: none"> 論理ネットワークインターフェースがglobal zoneから1つ以上割り当てられていること Solaris 11.4の場合、SRU11.4.8.5.0(SRU19041)以降を適用してください。 |
| パッケージ | compatibility/ucb | |
| | system/accounting/legacy-accounting | Enterprise ManagerでAgentの機能を利用する場合に必要です。 Agent機能では、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |
| | package/svr4 | Solaris 11ゾーンへインストールする場合に必要です(solaris-large-serverがインストールされている場合を除く)。 |

【Linux版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--|---|
| 動作 OS | Red Hat Enterprise Linux 7 (for Intel64) | SELinux機能が有効、無効のどちらのLinux環境でも、本製品は動作します。 |
| | Red Hat Enterprise Linux 8 (for Intel64) | |
| パッケージ | sysstat | Enterprise ManagerでAgentの機能を利用する場合Agent機能では、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |

2.4.2.2 排他製品

| 製品名 | 備考 |
|--|-------------|
| SystemWalker TrendView | 本製品の前身となる製品 |
| Systemwalker WebMGR | |
| Systemwalker PerfMGR | |
| ETERNUS SF Disk Space Monitor | |
| Systemwalker Service Catalog Manager | |
| ServerView Resource Orchestrator Cloud Edition | |

2.5 インストールレス型Agent

インストールレス型Agent機能によって監視される被監視サーバのソフトウェア条件を以下に示します。

ポイント

監視サーバと被監視サーバ間の通信のために必要となるソフトウェア、および、仮想資源管理の対象となる仮想化ソフトウェアについては、使用手引書「インストールレス型Agent管理」を参照してください。

2.5.1 ソフトウェア

2.5.1.1 動作OS

【Windows版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|------|---|------------------------------|
| 動作OS | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Foundation | Service Pack なし (注1) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard | Service Pack なし (注1) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter | Service Pack なし (注1) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Foundation | Service Pack なし (注1) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard | Service Pack なし (注1) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter | Service Pack なし (注1) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard | (注1) (注2) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter | (注1) (注2) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard | (注1) (注2) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter | (注1) (注2) (注3) |
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard | (注1) (注2) (注3) |

| 項目 | 内容 | 備考 |
|----|--|----------------|
| | Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter | (注1) (注2) (注3) |

注1) Server Coreには対応していません。

注2) 管理対象のサーバのOSがWindows Server 2016以降の場合、インストールレス型Agent管理(サーバ性能管理)機能において、通信方式としてTELNETを利用することができません。

注3) RHEL8版ではインストールレス型Agentによる性能情報収集はできません。

【Solaris版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|-------------------------------------|---|
| 動作 OS | Solaris 11 | Solaris 11.4の場合、SRU11.4.8.5.0(SRU19041)以降を適用してください。 |
| パッケージ | system/accounting/legacy-accounting | 被監視サーバでは、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |
| | package/svr4 | Solaris 11ブーンの場合に必要です(solaris-large-serverがインストールされている場合を除く)。 |

【Linux版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--|--|
| 動作 OS | Red Hat Enterprise Linux 7 (for Intel64) | SELinux機能が有効、無効のどちらのLinux環境でも、本製品は動作します。 |
| | Red Hat Enterprise Linux 8 (for Intel64) | |
| パッケージ | sysstat | 被監視サーバでは、sarコマンドが使用可能である必要があります。 |
| | ovs-support-toolsメタパッケージ | Oracle VM Server for x86を監視対象とし、接続アカウントとしてシステム管理者(スーパーユーザー)以外を使用する場合、sudoコマンドが使用可能である必要があります。sudoパッケージがインストールされていない環境では、左記をインストールしてください。 |

【AIX版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--------------------|----|
| 動作 OS | AIX 7.1 AIX 7.2 | |

【HP-UX版】

| 項目 | 内容 | 備考 |
|-------|--------------|----|
| 動作 OS | HP-UX 11i V3 | |

注) RHEL8版ではインストールレス型Agentによる性能情報収集はできません。

第3章 インストールとセットアップ

注意

- Windows Server 2019以降の場合、Microsoftの不具合の影響で、本製品が正しく動作しません。

本製品のインストール時に、ディスクのクリーンアップタスク(SilentCleanup)を無効化してください。手順は以下のとおりです。

1. 管理者モードでコマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
schtasks /change /tn ¥Microsoft¥Windows¥DiskCleanup¥SilentCleanup /disable
```

2. Windows Serverへ再ログオンします。

Microsoftの不具合についての詳細は以下より確認可能です。

```
https://blogs.technet.microsoft.com/askcorejp/2018/11/09/temporary-folder-is-removed-by-silentcleanup-task/
```

- 本製品をWindowsマシンにインストールする場合、事前に以下のプログラムを停止してください。

- ウイルスチェックプログラム

本章では、インストーラおよびセットアップの説明と、解説書「運用モデル」に基づいて導入する手順を説明します。管理する情報は「サーバ内リソース情報」、通信形態は「Push型」を前提として説明しています。

参考

本製品のインストールを行うと、富士通ミドルウェア製品共通のツールであるFJSVcirがインストールされます。

FJSVcirは、インストールおよびアンインストールの制御、インストールされている製品情報の管理、およびアンインストーラ起動(「アンインストールと管理(ミドルウェア)」)を行います。

「ManagerとAgentで構成する基本モデル」の場合の導入の流れは以下のとおりです。

- **Managerでの作業**
 1. Managerのインストール
 2. Managerのセットアップ (ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合)
 3. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- **Agentでの作業**
 1. Agentのインストール
 2. Agentのセットアップ
 3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
- **運用管理クライアントでの作業**
 1. 運用管理クライアントのインストール
 2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. コンソールの起動と確認

他の運用モデルの場合は、以下を参照してください。

- [3.6 Proxy Managerによる中継モデル](#)
- [3.7 Managerの二階層運用モデル](#)
- [3.8 Managerの二重化運用モデル](#)
- [3.9 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用モデル](#)
- [3.10 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用モデル](#)

3.1 インストール

インストール種別ごとのインストール手順を説明します。

注意

- Systemwalker Centric Managerの業務サーバにバンドルされているSystemwalker Service Quality Coordinator Agentがすでにインストールされている旨のメッセージが出力された場合

「[10.15.1.1 Systemwalker Centric Managerバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている環境に、本製品をインストールする場合](#)」を参照し、バンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentをアンインストールしてから本製品のインストールを行ってください。

- インストールディレクトリに関する注意事項

【Windows版】

- インストールディレクトリにはNTFS形式のディスクを指定してください。
- 「¥」で開始するパス、および相対パス表記での指定はできません。
- ディレクトリ名に指定可能な文字は、半角英数字、半角空白、「-」(ハイフン)、「_」(アンダースコア)、「(」(左括弧)、「)」(右括弧)です。
- Managerと運用管理クライアントを同じマシンにインストールする場合、同じインストールディレクトリを指定しないでください。
- 運用管理クライアントの場合、Windows x64環境ではデフォルトのインストールディレクトリが、<システムドライブ>¥Program Files (x86)¥Fujitsu¥SystemwalkerSQC-Cとなります。
なお、Windows x64環境にインストールする場合、インストールディレクトリに、「<システムドライブ>¥Program Files」やそのディレクトリ配下を指定しないでください。
- Windows Defender Exploit GuardのControlled folder accessを設定した環境の場合、インストール先ディレクトリには、Controlled folder accessで保護されていないフォルダーを指定してください。

【Solaris版】

- 以下のパスに空白を含めることはできません。
 - 本製品のDVD-ROMのマウントポイントのパス
 - インストールディレクトリ
 - 定義ファイル格納ディレクトリ
 - 可変ファイル格納ディレクトリ
 - 性能データベース格納ディレクトリ
 - アーカイブファイル格納ディレクトリ
- 以下のディレクトリは指定できません。
 - インストールディレクトリ
/opt/FJSVssqc

- 定義ファイル格納ディレクトリ
/etc/opt/FJSVssqc
- 可変ファイル格納ディレクトリ
/var/opt/FJSVssqc

【Linux版】

- 以下のパスに空白を含めることはできません。
 - 本製品のDVD-ROMのマウントポイントのパス
 - インストールディレクトリ
 - 定義ファイル格納ディレクトリ
 - 可変ファイル格納ディレクトリ
 - 性能データベース格納ディレクトリ
 - アーカイブファイル格納ディレクトリ
- 以下のディレクトリは指定できません。
 - インストールディレクトリ
/opt/FJSVssqc、/etc配下
 - 定義ファイル格納ディレクトリ
/etc/opt/FJSVssqc
 - 可変ファイル格納ディレクトリ
/var/opt/FJSVssqc、/opt配下、/etc配下

3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール

3.1.1.1 Windows版のインストール

Windowsサーバに、Systemwalker Service Quality Coordinatorをインストールする手順について説明します。

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■インストーラの起動

1. WindowsマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。
2. インストーラが起動します。

ポイント

インストールするマシンの設定によっては、自動的にインストーラが起動しないことがあります。その場合は、以下の操作を行い、手動でインストーラを起動してください。

1. [スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
2. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウの[参照]で、以下のファイルを選択し、[OK]をクリックします。

DVD-ROMドライブ:¥SwSetup.exe

3. コンポーネントの選択

[セットアップ(サーバ)]をクリックし、表示された一覧からインストールするコンポーネントを選択します。



4. インストール画面(ようこそ画面)

[次へ]を選択します。



5. インストールタイプの選択

[標準インストール]または[カスタムインストール]を選択し、[次へ]を選択します。



■標準インストールの場合

1. インストールディレクトリの選択

インストールディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



2. 可変ファイル格納ディレクトリの選択

可変ファイル格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



3. インストールの確認

設定内容を確認し、[確認]を選択します。



4. 完了

インストールが完了すると以下の画面が表示されます。[完了]を選択し、インストールを終了します。



注意

インストール完了画面の[完了]を選択すると、以下の画面が表示されることがあります。その場合は、[OK]を選択した後、本製品を使用する前にコンピュータの再起動をしてください。



ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Manager/Enterprise Managerのセットアップ

Manager/Enterprise ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください (Manager/Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

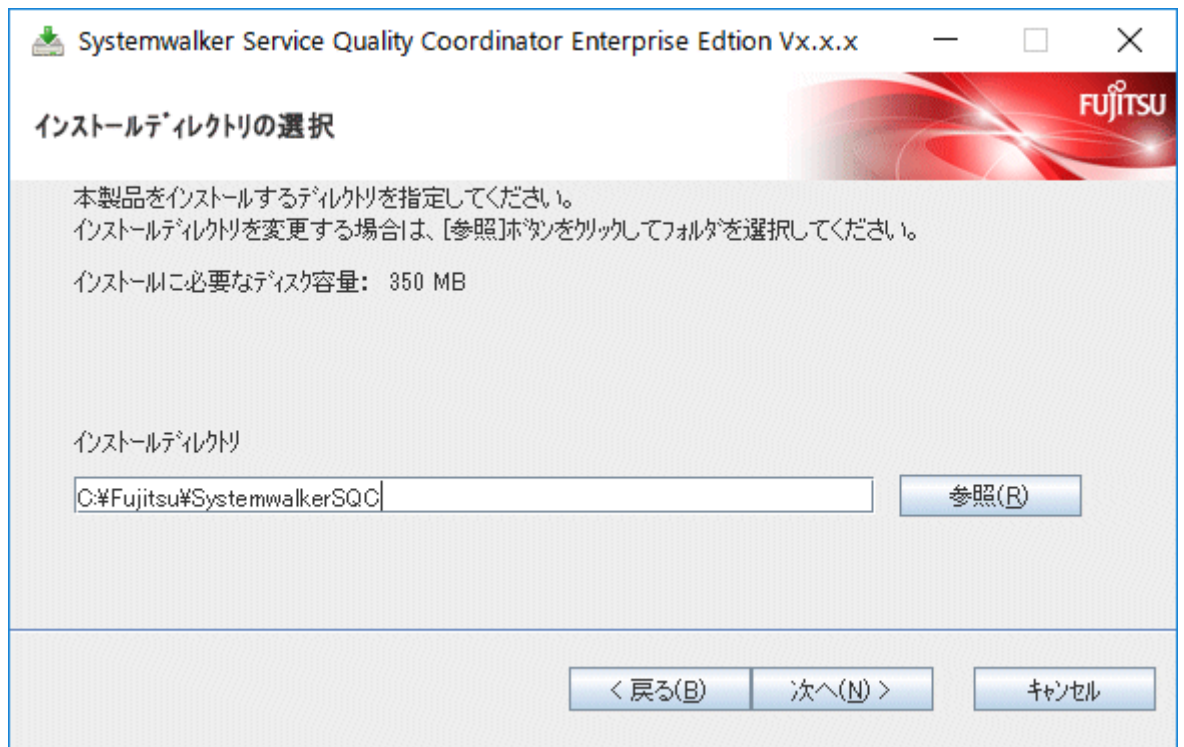
2. Manager/Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

■カスタムインストールの場合

1. インストールディレクトリの選択

インストールディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



2. 可変ファイル格納ディレクトリの選択

可変ファイル格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



3. 性能データベース(サマリデータ)の格納ディレクトリ選択

性能データベースの格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。

Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition Vx.x.x

サマリデータの格納ディレクトリの選択

サマリデータが格納されるディレクトリを選択してください。

サマリデータの格納ディレクトリ

参照(R)

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

4. 性能データベース(リソースデータ)の格納ディレクトリ選択

性能データベースの格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。

Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition Vx.x.x

リソースデータの格納ディレクトリの選択

リソースデータが格納されるディレクトリを選択してください。

リソースデータ(10分)の格納ディレクトリ

参照(R)

リソースデータ(1時間)の格納ディレクトリ

参照(R)

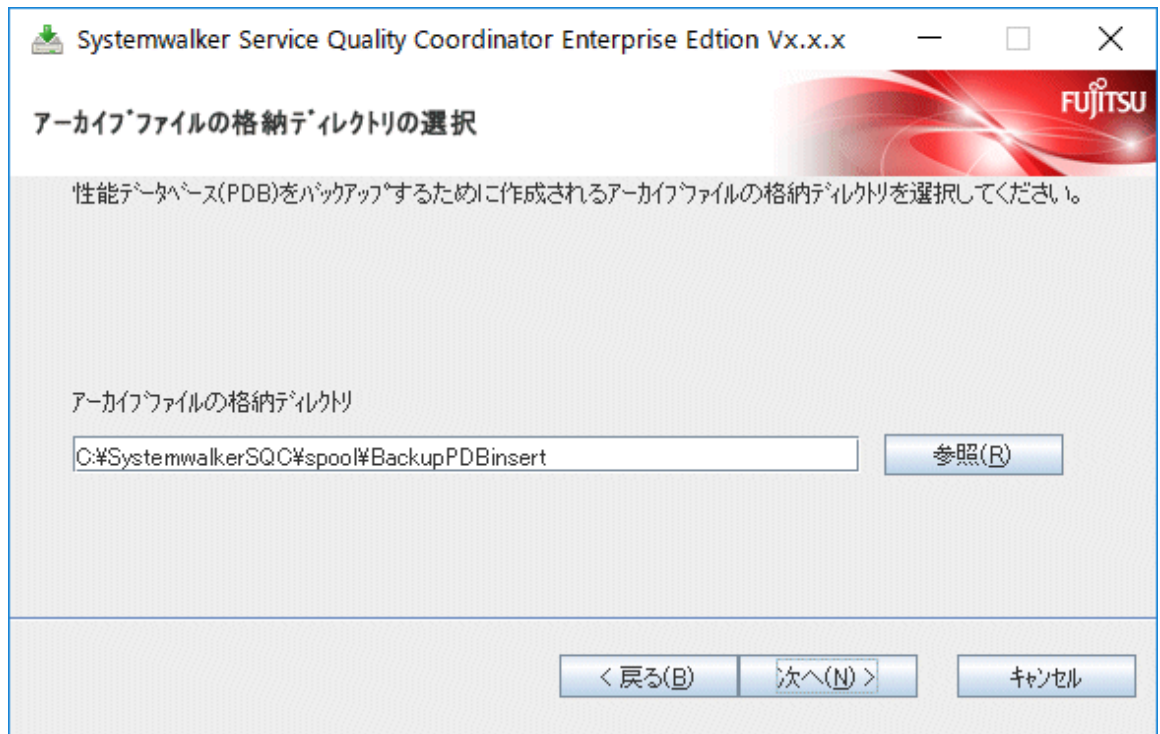
リソースデータ(1日)の格納ディレクトリ

参照(R)

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

5. アーカイブファイルの格納ディレクトリ選択

アーカイブファイルの格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



ポイント

.....
Managerの物理ディスクを、サマリデータ、リソースデータ、およびアーカイブファイルで3つに分けることによって、1つのManagerで管理できるAgentの数を300台程度まで増やすことができます。
.....

6. しきい値超え通知方法の選択

しきい値超えの通知方法を選択し、[次へ]を選択します。

Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition Vx.x.x

しきい値超え通知方法の選択

しきい値超えの通知方法を選択してください。

イベントログ(通常)
本サーバのイベントログのメッセージを通知します。

Centric Managerメッセージ連携
Centric Managerにメッセージを通知します。
この場合、本サーバにSystemwalker Centric Managerがインストールされている必要があります。

イベントログ

Centric Managerメッセージ連携

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

7. ログデータ(Troubleshoot)の保持期間の入力

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を入力し、[次へ]を選択します。

Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Edition Vx.x.x

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間の入力

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間(日)を1から30までの値で入力してください。(デフォルト:7)

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

8. インストールの確認

設定内容を確認し、[確認]を選択します。



9. 完了

インストールが完了すると、以下の画面が表示されます。[完了]を選択し、インストールを終了します。



注意

インストール完了画面の[完了]を選択すると、以下の画面が表示されることがあります。その場合は、[OK]を選択した後、本製品を使用する前にコンピュータの再起動をしてください。



ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Manager/Enterprise Managerのセットアップ

Manager/Enterprise ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください (Manager/Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

2. Manager/Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.1.1.2 UNIX版のインストール

Linux/Solarisサーバに、Systemwalker Service Quality Coordinatorをインストールする手順について説明します。

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■インストーラの起動

1. UNIXマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。
2. DVD-ROMをマウントします。

ポイント

ボリュームマネジメントデーモンにより自動的にマウントされる場合がありますので、DVD-ROMのマウント状態を確認します。マウントされていない場合は、以下の作業を行います。

【Solaris版】

```
# mkdir -p /cdrom/cdrom0 (*1)
```

```
# /usr/sbin/mount -F hsfs -o ro /dev/dsk/cntndn$n /cdrom/cdrom0 (*2)
#
```

(*1) /cdrom/cdrom0がない場合のみ必要です。

(*2) nは各インストールマシンのDVD-ROMドライブに合わせてください。

【Linux版】

```
# mount -r -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom(*)
```

(*) DVD-ROM装置のmountポイント/mnt/cdromについては、各システム環境に合わせてください

3. インストール用シェルスクリプトの起動

インストール用のシェルスクリプトを起動します。

実行例は、以下のとおりです。この例では、ドライブのmountポイントを/mnt/cdromとしています。

```
/mnt/cdrom/swsetup
```



注意

自動的にmountされた場合に、実行許可がないために、以下のメッセージが出力される場合があります。

```
-bash: <mountポイント>/swsetup: /bin/sh: bad interpreter: 許可がありません
```

このような場合は、アンmountしてから、2.の手順で再度mountしてください。

4. 起動画面

[Enter]を押します。

```
=====
                        Systemwalker Service Quality Coordinator Setup
                          Vx. x. x
All Rights Reserved, Copyright(C) FUJITSU LIMITED && FUJITSU AUSTRALIA LIMITED
                        2003-20xx
=====

Welcome to Systemwalker Setup!!
This program installs Systemwalker Service Quality Coordinator on your system.

Press Enter.
```

5. コンポーネントの選択

インストールするコンポーネントに対応する数字を入力し、[Enter]を押します。

```
=====
                        Systemwalker Service Quality Coordinator Setup
                          Vx. x. x
All Rights Reserved, Copyright(C) FUJITSU LIMITED && FUJITSU AUSTRALIA LIMITED
                        2003-20xx
=====

<< Select Installation type >>
```

- 1. Enterprise Manager
- 2. Manager
- 3. Proxy Manager
- 4. Agent for Server
- 5. Agent for Business

Please specify installation type. [?, q] ==> 2

6. インストールタイプの選択

インストールタイプを選択します。

```

=====
                Systemwalker Service Quality Coordinator Setup
                    Vx. x. x
All Rights Reserved, Copyright (C) FUJITSU LIMITED & FUJITSU AUSTRALIA LIMITED
                2003-20xx
=====

Select installation type
  1. Standard installation
  2. Custom installation
Select installation type (default: 1) [1, 2, ?, q]
> 1

```

標準インストールの場合は[1]を、カスタムインストールの場合は[2]を選択します。

■標準インストールの場合

1. インストールディレクトリの確認

インストールディレクトリを確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```

*****
Default installation information is following:
  Program install directory      : /opt
  Fixed configuration directory  : /etc/opt
  Variable configuration directory : /var/opt
Do you want to change the above information? (default: n) [y, n, ?, q]

```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。インストールディレクトリを変更します。

```

Please specify program install directory. (default: /opt) [?, q]
> /opt2
Please specify fixed configuration directory. (default: /etc/opt) [?, q]
> /etc/opt2
Please specify variable configuration directory. (default: /var/opt) [?, q]
> /var/opt2

```

2. インストールの確認

```

*****
Current installation information is following:
  Program install directory      : /opt2
  Fixed configuration directory  : /etc/opt2
  Variable configuration directory : /var/opt2

```

```

Summary data location      : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
Resource data(10minutes) location : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
Resource data(1hour) location  : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
Resource data(1day) location   : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
Archive file location        : /var/opt2/FJSVssqc/BackupPDBinsert
Alert action                 : syslog
Troubleshoot Cycle          : 7
Do you want to continue with the installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Manager [y, n]
> y

```

[y]を入力し、[Enter]を押すと、インストールが開始されます。

3. 完了

インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

```
The installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Manager is now complete.
```

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Manager/Enterprise Managerのセットアップ

Manager/Enterprise ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください（Manager/Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません）。

2. Manager/Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

■カスタムインストールの場合

1. インストールディレクトリの確認

インストールディレクトリを確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```

*****
Default installation information is following:
  Program install directory      : /opt
  Fixed configuration directory  : /etc/opt
  Variable configuration directory : /var/opt
Do you want to change the above information? (default: n) [y, n, ?, q]
> y

```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。インストールディレクトリを変更します。

```

Please specify program install directory. (default: /opt) [?, q]
> /opt2
Please specify fixed configuration directory. (default: /etc/opt) [?, q]
> /etc/opt2
Please specify variable configuration directory. (default: /var/opt) [?, q]
> /var/opt2

```

2. 性能データベース格納ディレクトリの確認

性能データベースの格納先を確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```
*****
Default PDB storage location is following:
  Summary data location      : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
  Resource data(10minutes) location : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
  Resource data(1hour) location  : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
  Resource data(1day) location   : /var/opt2/FJSVssqc/PDB
Do you want to change the above information? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。性能データベースの格納先を変更します。

```
Please specify summary data location. (default: /var/opt2/FJSVssqc/PDB) [?, q]
> /data1
Please specify resource data(10minutes) location. (default: /var/opt2/FJSVssqc/PDB) [?, q]
> /data2
Please specify resource data(1hour) location. (default: /var/opt2/FJSVssqc/PDB) [?, q]
> /data2
Please specify resource data(1day) location. (default: /var/opt2/FJSVssqc/PDB) [?, q]
> /data2
```

3. アーカイブファイル格納ディレクトリの確認

アーカイブファイルの格納先を確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```
*****
Default archive file location is following:
  Archive file location      : /var/opt2/FJSVssqc/BackupPDBinsert
Do you want to change the above information? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。アーカイブファイルの格納先を変更します。

```
Please specify program install directory. (default: /var/opt2/FJSVssqc/BackupPDBinsert) [?, q]
> /data3
```

4. しきい値超え通知方法の確認

しきい値超え通知方法を確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```
*****
Default alert action is following:
  Alert action: syslog
Do you want to change the above environment? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。しきい値超え通知方法を変更します。

```
Please specify alert action.
  centric:Message link operation with Centric Manager (default: syslog) [syslog, centric, ?, q]
> centric
```

5. ログデータ(Troubleshoot)の保持期間の確認

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し[Enter]を押します。

```
*****
Default troubleshoot cycle is following:
  Troubleshoot Cycle: 7
Do you want to change the above environment? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を変更します。

```
Please specify Troubleshoot cycle.
(default: 7) [1-30, ?, q]
> 10
```

6. インストールの確認

```
*****
Current installation information is following:
  Program install directory      : /opt2
  Fixed configuration directory  : /etc/opt2
  Variable configuration directory : /var/opt2
  Summary data location         : /data1
  Resource data(10minutes) location : /data2
  Resource data(1hour) location  : /data2
  Resource data(1day) location   : /data2
  Archive file location         : /data3
  Alert action                   : centric
  Troubleshoot Cycle            : 10
Do you want to continue with the installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Manager [y,n]
> y
```

[y]を入力し、[Enter]を押すと、インストールが開始されます。

7. 完了

インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

```
The installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Manager is now complete.
```

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Manager/Enterprise Managerのセットアップ

Manager/Enterprise ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください (Manager/Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

2. Manager/Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール



参考

Managerとの通信方式について

インストール時には、Managerとの通信方式はPush方式で設定されます。

Pull方式を利用したい場合は、インストール後に切り替えを行ってください。切り替え手順については、「[第4章 Pull型通信設定](#)」を参照してください。

3.1.2.1 Windows版のインストール

Windowsサーバに、Systemwalker Service Quality Coordinatorをインストールする手順について説明します。

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■インストーラの起動

1. WindowsマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。
2. インストーラが起動します。



ポイント

インストールするマシンの設定によっては、自動的にインストーラが起動しないことがあります。その場合は、以下の操作を行い、手動でインストーラを起動してください。

1. [スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
2. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウの[参照]で、以下のファイルを選択し、[OK]をクリックします。

DVD-ROMドライブ:¥SwSetup.exe

3. コンポーネントの選択

[セットアップ(サーバ)]をクリックし、表示された一覧からインストールするコンポーネントを選択します。



4. インストール画面(ようこそ画面)

[次へ]を選択します。



5. インストールタイプの選択

[標準インストール]または[カスタムインストール]を選択し、[次へ]を選択します。



■標準インストールの場合

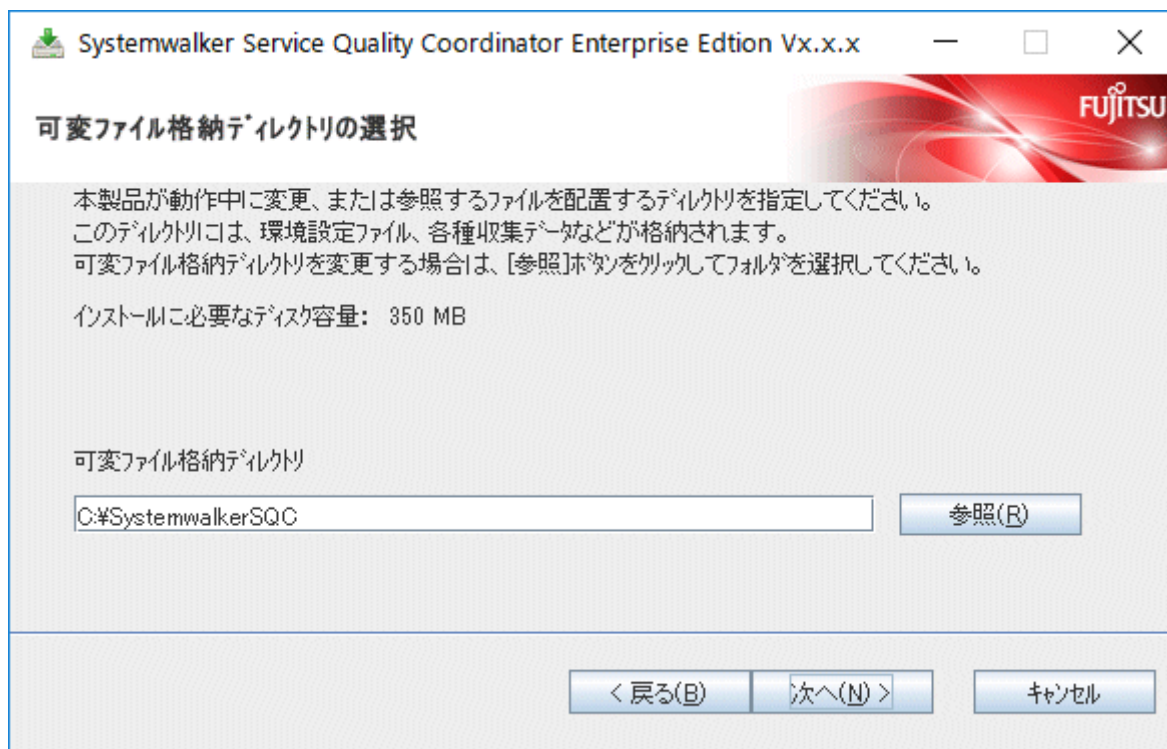
1. インストールディレクトリの選択

インストールディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



2. 可変ファイル格納ディレクトリの選択

可変ファイル格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



3. 接続先の入力

接続するManagerのホスト名またはIPアドレスの入力し、[次へ]を選択します。



4. インストールの確認

設定内容を確認し、[確認]を選択します。



5. 完了

インストールが完了すると以下の画面が表示されます。[完了]を選択し、インストールを終了します。



注意

インストール完了画面の[完了]を選択すると、以下の画面が表示されることがあります。その場合は、[OK]を選択した後、本製品を使用する前にコンピュータの再起動をしてください。



ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Agent/Proxy Managerのセットアップ

— Agentの場合

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

— Proxy Managerの場合

Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください (Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

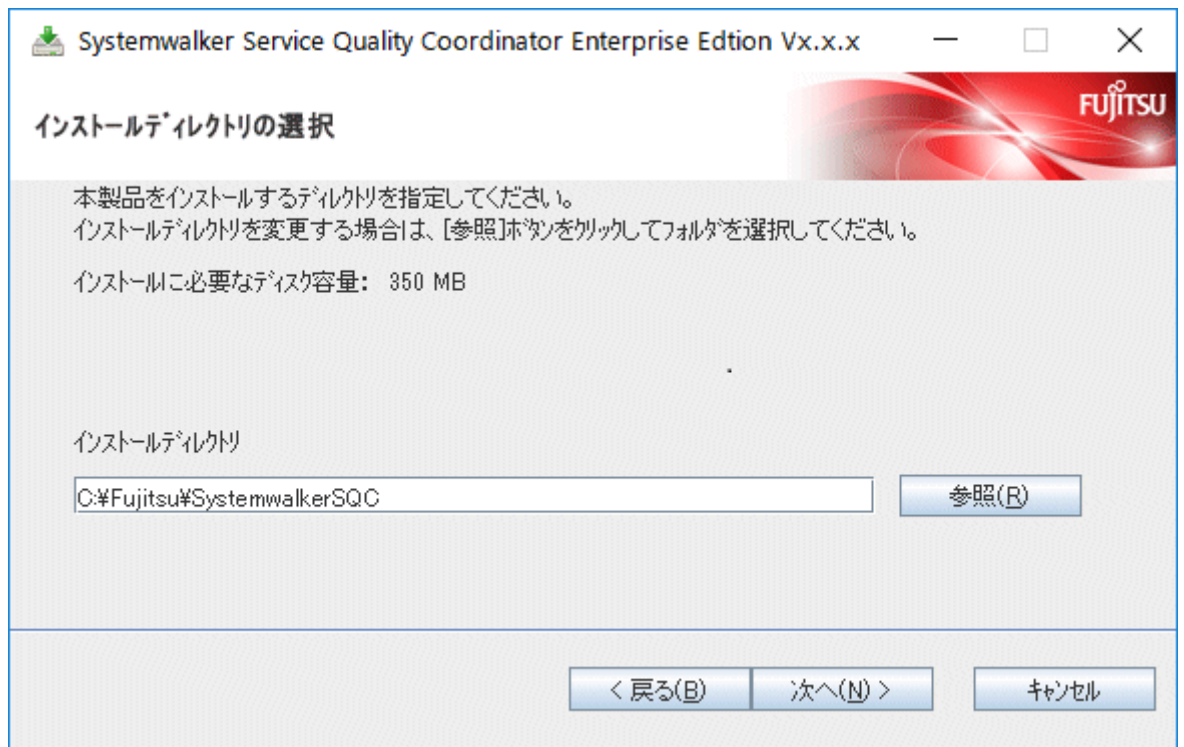
2. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

■カスタムインストールの場合

1. インストールディレクトリの選択

インストールディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



2. 可変ファイル格納ディレクトリの選択

可変ファイル格納ディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



3. 接続先の入力

接続するManagerのホスト名またはIPアドレスの入力し、[次へ]を選択します。



4. しきい値超え通知方法の選択

しきい値超えの通知方法を選択し、[次へ]を選択します。



5. ログデータ(Troubleshoot)の保持期間の入力

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を入力し、[次へ]を選択します。



6. インストールの確認

設定内容を確認し、[確認]を選択します。



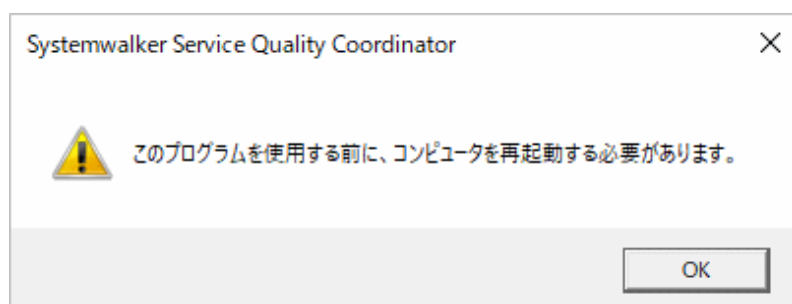
7. 完了

インストールが完了すると以下の画面が表示されます。[完了]を選択し、インストールを終了します。



注意

インストール完了画面の[完了]を選択すると、以下の画面が表示されることがあります。その場合は、[OK]を選択した後、本製品を使用する前にコンピュータの再起動をしてください。



ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Agent/Proxy Managerのセットアップ

— Agentの場合

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

一 Proxy Managerの場合

Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください(Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

2. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

.....

3.1.2.2 UNIX版のインストール

Linux/Solarisサーバに、Systemwalker Service Quality Coordinatorをインストールする手順について説明します。

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■インストーラの起動

1. UNIXマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。
2. DVD-ROMをマウントします。

ポイント

.....

ボリュームマネジメントデーモンにより自動的にマウントされる場合がありますので、DVD-ROMのマウント状態を確認します。マウントされていない場合は、以下の作業を行います。

【Solaris版】

```
# mkdir -p /cdrom/cdrom0 (*1)
# /usr/sbin/mount -F hfsfs -o ro /dev/dsk/cntndnsn /cdrom/cdrom0 (*2)
#
```

(*1) /cdrom/cdrom0がない場合のみ必要です。

(*2) nは各インストールマシンのDVD-ROMドライブに合わせてください。

【Linux版】

```
# mount -r -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom (*)
```

(*) DVD-ROM装置のマウントポイント/mnt/cdromについては、各システム環境に合わせてください

.....

3. インストール用シェルスクリプトの起動

インストール用のシェルスクリプトを起動します。

実行例は、以下のとおりです。この例では、ドライブのマウントポイントを/mnt/cdromとしています。

```
/mnt/cdrom/swsetup
```

注意

自動的にマウントされた場合に、実行許可がないために、以下のメッセージが出力される場合があります。

```
-bash: <マウントポイント>/swsetup: /bin/sh: bad interpreter: 許可がありません
```

このような場合は、アンマウントしてから、2.の手順で再度マウントしてください。

4. 起動画面

[Enter]を押します。

```
=====
Systemwalker Service Quality Coordinator Setup
Vx. x. x
All Rights Reserved, Copyright (C) FUJITSU LIMITED && FUJITSU AUSTRALIA LIMITED
2003-20xx
=====

Welcome to Systemwalker Setup!!
This program installs Systemwalker Service Quality Coordinator on your system.

Press Enter.
```

5. コンポーネントの選択

インストールするコンポーネントに対応する数字を入力し、[Enter]を押します。

```
=====
Systemwalker Service Quality Coordinator Setup
Vx. x. x
All Rights Reserved, Copyright (C) FUJITSU LIMITED && FUJITSU AUSTRALIA LIMITED
2003-20xx
=====

<< Select Installation type >>

1. Enterprise Manager
2. Manager
3. Proxy Manager
4. Agent for Server
5. Agent for Business

Please specify installation type. [?,q] ==> 4
```

6. インストールタイプの選択

インストールタイプを選択します。

```
=====
Systemwalker Service Quality Coordinator Setup
Vx. x. x
All Rights Reserved, Copyright (C) FUJITSU LIMITED && FUJITSU AUSTRALIA LIMITED
2003-20xx
=====
```

```
Select installation type
  1. Standard installation
  2. Custom installation
Select installation type (default: 1) [1, 2, ?, q]
> 1
```

標準インストールの場合は[1]を、カスタムインストールの場合は[2]を選択します。

■標準インストールの場合

1. インストールディレクトリの確認

インストールディレクトリを確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```
*****
Default installation information is following:
  Program install directory      : /opt
  Fixed configuration directory  : /etc/opt
  Variable configuration directory : /var/opt
Do you want to change the above information? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。インストールディレクトリを変更します。

```
Please specify program install directory. (default: /opt) [?, q]
> /opt2
Please specify fixed configuration directory. (default: /etc/opt) [?, q]
> /etc/opt2
Please specify variable configuration directory. (default: /var/opt) [?, q]
> /var/opt2
```

2. 接続先の入力

接続するManagerのホスト名またはIPアドレスを入力し、[Enter]を押します。

```
Please specify manager host name or IP address. [?, q]
> 192.0.2.10
```

3. インストールの確認

```
*****
Current installation information is following:
  Program install directory      : /opt2
  Fixed configuration directory  : /etc/opt2
  Variable configuration directory : /var/opt2
  Manager host name or IP address : 192.0.2.10
  Alert action                   : syslog
  Troubleshoot Cycle             : 7
Do you want to continue with the installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for
Server [y, n]
> y
```

[y]を入力し、[Enter]を押すと、インストールが開始されます。

4. 完了

インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

The installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for Server is now complete.

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Agent/Proxy Managerのセットアップ

— Agentの場合

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

— Proxy Managerの場合

Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください(Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

2. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

■カスタムインストールの場合

1. インストールディレクトリの確認

インストールディレクトリを確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```
*****
Default installation information is following:
  Program install directory      : /opt
  Fixed configuration directory  : /etc/opt
  Variable configuration directory : /var/opt
Do you want to change the above information? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。インストールディレクトリを変更します。

```
Please specify program install directory. (default: /opt) [?, q]
> /opt2
Please specify fixed configuration directory. (default: /etc/opt) [?, q]
> /etc/opt2/
Please specify variable configuration directory. (default: /var/opt) [?, q]
> /var/opt2
```

2. 接続先の入力

接続するManagerのホスト名またはIPアドレスを入力し、[Enter]を押します。

```
Please specify manager host name or IP address. [?, q]
> 192.0.2.10
```

3. しきい値超え通知方法の確認

しきい値超え通知方法を確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し、[Enter]を押します。

```
*****
Default alert action is following:
  Alert action: syslog
Do you want to change the above environment? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。しきい値超え通知方法を変更します。

```
Please specify alert action.
  centric:Message link operation with Centric Manager (default: syslog) [syslog, centric, ?, q]
> centric
```

4. ログデータ(Troubleshoot)の保持期間の確認

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を確認します。

変更が必要な場合は[y]を、必要ない場合は[n]を入力し[Enter]を押します。

```
*****
Default troubleshoot cycle is following:
  Troubleshoot Cycle: 7
Do you want to change the above environment? (default: n) [y, n, ?, q]
> y
```

[y]を入力した場合、以下の画面が表示されます。ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を変更します。

```
Please specify Troubleshoot cycle.
  (default: 7) [1-30, ?, q]
> 10
```

5. インストールの確認

```
*****
Current installation information is following:
  Program install directory      : /opt2
  Fixed configuration directory  : /etc/opt2
  Variable configuration directory : /var/opt2
  Manager host name or IP address : 192.0.2.10
  Alert action                   : centric
  Troubleshoot Cycle             : 10
Do you want to continue with the installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for
Server [y,n]
> y
```

[y]を入力し、[Enter]を押すと、インストールが開始されます。

6. 完了

インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

```
The installation of Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for Server is now complete.
```

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Agent/Proxy Managerのセットアップ

— Agentの場合

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

— Proxy Managerの場合

Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください(Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

2. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

.....

3.1.3 運用管理クライアントのインストール

Systemwalker Service Quality Coordinator運用管理クライアントをインストールする手順について説明します。

なお、運用管理クライアントはWindowsマシンにインストールします。

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■インストーラの起動

1. WindowsマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。
2. インストーラが起動します。

ポイント

.....

インストールするマシンの設定によっては、自動的にインストーラが起動しないことがあります。その場合は、以下の操作を行い、手動でインストーラを起動してください。

1. [スタート]メニューの[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
2. [ファイル名を指定して実行]ウィンドウの[参照]で、以下のファイルを選択し、[OK]をクリックします。

【Windows版】

DVD-ROMドライブ:¥SwSetup.exe

【UNIX版】

DVD-ROMドライブ:¥client¥SwSetup.exe

.....

3. コンポーネントの選択

[セットアップ(クライアント)]をクリックし、表示された一覧から[運用管理クライアントのインストール]を選択します。



4. インストール画面(ようこそ画面)

[次へ]を選択します。



5. インストールディレクトリの選択

インストールディレクトリを入力し、[次へ]を選択します。



6. 接続先の入力

接続するManagerのホスト名またはIPアドレスの入力し、[次へ]を選択します。



.....
Managerと運用管理クライアントが同一マシンの場合でも、「localhost」を指定しないでください。必ず、接続するManagerのホスト名またはIPアドレスを指定してください。
.....



7. インストールの確認

設定内容を確認し、[確認]を選択します。



8. 完了

インストールが完了すると以下の画面が表示されます。[完了]を選択し、インストールを終了します。



注意

- インストール完了画面の[完了]を選択すると、以下の画面が表示されることがあります。その場合は、[OK]を選択した後、本製品を使用する前にコンピュータの再起動をしてください。



- 運用管理クライアントをインストールするマシンに旧版の運用管理クライアントを導入していた場合、管理コンソールまたはコンソールを表示したWebブラウザ環境に、旧版の表示におけるインターネット一時ファイルが残っていることがあります。

Webブラウザ環境において、Internet Explorerのインターネット一時ファイルを削除してください。

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

2. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。

3.2 サイレントインストール

サイレントインストールとは、インストール時に必要な情報を、あらかじめ作成した"インストール情報ファイル"から読み込んで自動的にインストールする方法です。

サイレントインストールは、以下の手順に沿って行います。

1. 3.2.1 インストール情報ファイルの作成
2. 3.2.2 サイレントインストールの実行

3.2.1 インストール情報ファイルの作成

インストール種別やインストール先ディレクトリなど、インストール時に必要な情報を格納した"インストール情報ファイル"を作成します。

"インストール情報ファイル"は、以下のサンプルファイルを基にして作成します。

| ファイル名 | 説明 |
|-------------------|--|
| sqc_mg_em_win.csv | Windows版 Manager/Enterprise Manager用サンプルファイル |
| sqc_ag_pm_win.csv | Windows版 Agent/Proxy Manager用サンプルファイル |
| sqc_mg_em_ux.csv | UNIX版 Manager/Enterprise Manager用サンプルファイル |
| sqc_ag_pm_ux.csv | UNIX版 Agent/Proxy Manager用サンプルファイル |
| sqc_cl_win.csv | 運用管理クライアント用サンプルファイル |

■ サンプルファイル格納先

【Windows】

DVD-ROMドライブ:¥tools¥Sample¥SilentInstall¥

【UNIX】

/mnt/cdrom/tools/Sample/SilentInstall/(*)

(*) DVD-ROM装置のマウントポイント/mnt/cdromについては、各システム環境に合わせてください

■ サンプルファイルの定義

【Windows】

— Manager/Enterprise Manager

```
installInfo,Name,Systemwalker Service Quality Coordinator Install
parameters,sql.installation.directory,C:¥Program Files¥Fujitsu¥SystemwalkerSQC
parameters,sql.variablefile.directory,C:¥SystemwalkerSQC
parameters,sql.summarydata.location,C:¥SystemwalkerSQC¥data
```

```
parameters,sql.resourcedata10min.location,C:¥SystemwalkerSQL¥data
parameters,sql.resourcedata1hr.location,C:¥SystemwalkerSQL¥data
parameters,sql.resourcedata1day.location,C:¥SystemwalkerSQL¥data
parameters,sql.archivefile.location,C:¥SystemwalkerSQL¥pool¥BackupPDBinsert
parameters,sql.alertaction,eventlog
parameters,sql.troubleshoot.cycle,7
```

— Agent/Proxy Manager

```
installInfo,Name,Systemwalker Service Quality Coordinator Install
parameters,sql.installation.directory,C:¥Program Files¥Fujitsu¥SystemwalkerSQL
parameters,sql.variablefile.directory,C:¥SystemwalkerSQL
parameters,sql.destination.server,127.0.0.1
parameters,sql.alertaction,eventlog
parameters,sql.troubleshoot.cycle,7
```

— 運用管理クライアント

```
installInfo,Name,Systemwalker Service Quality Coordinator Install
parameters,sql.installation.directory,C:¥Program Files¥Fujitsu¥SystemwalkerSQL-C
parameters,sql.destination.server,127.0.0.1
```

【UNIX】

— Manager/Enterprise Manager

```
installInfo,Name,Systemwalker Service Quality Coordinator Install
parameters,sql.installation.directory,/opt
parameters,sql.definitionfile.directory,/etc/opt
parameters,sql.variablefile.directory,/var/opt
parameters,sql.summarydata.location,/var/opt/FJSVssqc/PDB
parameters,sql.resourcedata10min.location,/var/opt/FJSVssqc/PDB
parameters,sql.resourcedata1hr.location,/var/opt/FJSVssqc/PDB
parameters,sql.resourcedata1day.location,/var/opt/FJSVssqc/PDB
parameters,sql.archivefile.location,/var/opt/FJSVssqc/BackupPDBinsert
parameters,sql.alertaction,syslog
parameters,sql.troubleshoot.cycle,7
```

— Agent/Proxy Manager

```
installInfo,Name,Systemwalker Service Quality Coordinator Install
parameters,sql.installation.directory,/opt
```

```

parameters,sql.definitionfile.directory,/etc/opt
parameters,sql.variablefile.directory,/var/opt
parameters,sql.destination.server,127.0.0.1
parameters,sql.alertaction,syslog
parameters,sql.troubleshoot.cycle,7

```

■項目の説明



インストール情報ファイルに定義する内容の注意事項については「[3.1 インストール](#)」を参照してください。

【Windows】

— installInfo

installInfoパラメーターに設定できる項目について説明します。

| 項目 | 説明 | デフォルト | 指定:○/不要:× | | |
|------|-------------|---|-------------|-------------|-----------|
| | | | M/EM (注) | PM/A (注) | CL (注) |
| Name | インストールする製品名 | Systemwalker Service Quality Coordinator Install (変更不可) | ○ | ○ | ○ |

注)

M/EM: Manager/Enterprise Manager

PM/A: Agent/Proxy Manager

CL: 運用管理クライアント

— parameters


parametersパラメーターに設定できる項目について説明します。



parametersパラメーターは必ず1個以上指定する必要があります。

また、指定不要の項目を指定した場合、値は無効となります。

| 項目 | 説明 | デフォルト | 指定:○/不要:× | | |
|----------------------------|--------------|--|-------------|-------------|-----------|
| | | | M/EM (注) | PM/A (注) | CL (注) |
| sql.installation.directory | インストールディレクトリ | 【運用管理クライアント以外】 C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC 【運用管理クライアント】 C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC-C | ○ | ○ | ○ |

| 項目 | 説明 | デフォルト | 指定:○/不要:× | | |
|--------------------------------|--|--|-------------|-------------|-----------|
| | | | M/EM (注) | PM/A (注) | CL (注) |
| sql.variablefile.directory | 可変ファイル格納ディレクトリ | C:\SystemwalkerSQL | ○ | ○ | × |
| sql.destination.server | 接続するManagerのホスト名またはIPアドレス  注意 運用管理クライアントのインストール情報ファイルを作成する場合、Managerと運用管理クライアントが同一マシンの場合でも、「localhost」を指定しないでください。必ず、接続するManagerのホスト名またはIPアドレスを指定してください。 | 127.0.0.1 | × | ○ | ○ |
| sql.summarydata.location | サマリデータの格納ディレクトリ | C:\SystemwalkerSQL\data | ○ | × | × |
| sql.resourcedata10min.location | リソースデータ(10分)の格納ディレクトリ | C:\SystemwalkerSQL\data | ○ | × | × |
| sql.resourcedata1hr.location | リソースデータ(1時間)の格納ディレクトリ | C:\SystemwalkerSQL\data | ○ | × | × |
| sql.resourcedata1day.location | リソースデータ(1日)の格納ディレクトリ | C:\SystemwalkerSQL\data | ○ | × | × |
| sql.archivefile.location | アーカイブファイルの格納ディレクトリ | C:\SystemwalkerSQL\pool BackupPDBinsert | ○ | × | × |
| sql.alertaction | しきい値超過通知方法。以下の2つから選択します。 ・eventlog イベントログ ・centric CentricManagerメッセージ連携 | eventlog | ○ | ○ | × |
| sql.troubleshoot.cycle | ログデータ(Troubleshoot)の保持期間(日)(1-30) | 7 | ○ | ○ | × |

注)

M/EM: Manager/Enterprise Manager

PM/A: Agent/Proxy Manager

CL: 運用管理クライアント

【UNIX】

— installInfo

installInfoパラメーターに設定できる項目について説明します。

| 項目 | 説明 | デフォルト | 指定:○/不要:× | |
|------|-------------|---|-------------|-------------|
| | | | M/EM (注) | PM/A (注) |
| Name | インストールする製品名 | Systemwalker Service Quality Coordinator Install (変更不可) | ○ | ○ |

注)

M/EM: Manager/Enterprise Manager

PM/A: Agent/Proxy Manager

— parameters

parametersパラメーターに設定できる項目について説明します。



注意

parametersパラメーターは必ず1個以上指定する必要があります。

また、指定不要の項目を指定した場合、値は無効となります。

| 項目 | 説明 | デフォルト | 必要:○/不要:× | |
|--------------------------------|-------------------------------|---------------------------------------|-------------|-------------|
| | | | M/EM (注) | PM/A (注) |
| sqc.installation.directory | インストールディレクトリ | /opt | ○ | ○ |
| sqc.definitionfile.directory | 定義ファイル格納ディレクトリ | /etc/opt | ○ | ○ |
| sqc.variablefile.directory | 可変ファイル格納ディレクトリ | /var/opt | ○ | ○ |
| sqc.destination.server | 接続するManagerのホスト名 またはIPアドレス | 127.0.0.1 | × | ○ |
| sqc.summarydata.location | サマリデータ格納先ディレクトリ | /var/opt/FJSVssqc/PDB | ○ | × |
| sqc.resourcadata10min.location | リソースデータ(10分)格納先 ディレクトリ | /var/opt/FJSVssqc/PDB | ○ | × |
| sqc.resourcadata1hr.location | リソースデータ(1時間)格納 先ディレクトリ | /var/opt/FJSVssqc/PDB | ○ | × |
| sqc.resourcadata1day.location | リソースデータ(1日)格納先 ディレクトリ | /var/opt/FJSVssqc/PDB | ○ | × |
| sqc.archivefile.location | アーカイブファイル格納先 ディレクトリ | /var/opt/FJSVssqc/ BackupPDBinsert | ○ | × |
| sqc.alertaction | しきい値超え通知方法。以下 の2つから選択します。 | syslog | ○ | ○ |

| 項目 | 説明 | デフォルト | 必要:○/不要:× | |
|------------------------|--|-------|-------------|-------------|
| | | | M/EM (注) | PM/A (注) |
| | ・syslog syslog ・centric CentricManagerメッセージ 連携 | | | |
| sqc.troubleshoot.cycle | ログデータ(Troubleshoot)の 保持期間(日)(1-30) | 7 | ○ | ○ |

注)

M/EM: Manager/Enterprise Manager

PM/A: Agent/Proxy Manager

3.2.2 サイレントインストールの実行



参考

Managerとの通信方式について

インストール時には、Managerとの通信方式はPush方式で設定されます。

Pull方式を利用したい場合は、インストール後に切り替えを行ってください。切り替え手順については、「[第4章 Pull型通信設定](#)」を参照してください。

3.2.2.1 Windows版のインストールとUNIX版運用管理クライアントのインストール

Windowsサーバクライアントに、サイレントインストールする手順を説明します。

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■サイレントインストールの実行

1. WindowsマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。



注意

DVD-ROMを使用せず、ネットワーク経由でインストールを実行する場合、インストーラの場所がローカルネットワーク外に存在すると、「プログラムの作成者が確認できない」という内容のメッセージが表示され、サイレントインストールが停止する場合があります。インストーラの場所をローカルネットワークとして設定後、サイレントインストールを実施してください。

2. 以下のコマンドを実行します。

コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「swSilentSetup(サイレントインストール用コマンド)」を参照してください。

- Windows版の場合

```
DVD-ROMドライブ:¥swSilentSetup.bat -t <sqc-em | sqc-m | sqc-pm | sqc-a-sv | sqc-a-biz | sqc-cl> -f <インストール情報ファイル> [-p <インストール結果の出力先ディレクトリ>]
```

- UNIX版運用管理クライアントの場合

```
DVD-ROMドライブ:¥client¥swSilentSetup.bat -t sqc-cl -f <インストール情報ファイル> [-p <インストール結果の出力先ディレクトリ>]
```

注意

- サilentインストール用コマンドの復帰値が3の場合、本製品を使用する前にコンピュータを再起動する必要があります。
- 運用管理クライアントをインストールするマシンに旧版の運用管理クライアントを導入していた場合、管理コンソールまたはコンソールを表示したWebブラウザ環境に、旧版の表示におけるインターネット一時ファイルが残っていることがあります。

Webブラウザ環境において、Internet Explorerのインターネット一時ファイルを削除してください。

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

- **Enterprise Manager/Manager/Proxy Managerの場合**

1. Enterprise Manager/Manager/Proxy Managerのセットアップ

Enterprise Manager/Manager/Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください（Enterprise Manager/Manager/Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません）。

2. Enterprise Manager/Manager/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

- **Agentの場合**

1. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

2. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

- **運用管理クライアントの場合**

1. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

2. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。

3.2.2.2 UNIX版のインストール

Linux/Solarisサーバに、サイレントインストールする手順を説明します。

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■サイレントインストールの実行

1. UNIXマシンのDVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。

注意

DVD-ROMを使用せず、ネットワーク経由でインストールを実行する場合、インストーラの場所がローカルネットワーク外に存在すると、「プログラムの作成者が確認できない」という内容のメッセージが表示され、サイレントインストールが停止する場合があります。インストーラの場所をローカルネットワークとして設定後、サイレントインストールを実施してください。

2. DVD-ROMをマウントします。

3. 以下のコマンドを実行します。

```
/mnt/cdrom/swSilentSetup.sh -t <sqc-em|sqc-m|sqc-pm|sqc-a-sv|sqc-a-biz> -f <インストール情報ファイル> [-p <インストール結果の出力先ディレクトリ>] (*)
```

コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「swSilentSetup(サイレントインストール用コマンド)」を参照してください。

(*) DVD-ROM装置のマウントポイント/mnt/cdromについては、各システム環境に合わせてください

ポイント

インストール完了後、以下の作業が必要です。

1. Enterprise Manager/Manager/Proxy Manager/Agentのセットアップ

— Enterprise Manager/Manager/Proxy Managerの場合

Enterprise Manager/Manager/Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください(Enterprise Manager/Manager/Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

— Agentの場合

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

2. Enterprise Manager/Manager/Proxy Manager/Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.3 セットアップ

インストール種別ごとのセットアップ手順を説明します。

3.3.1 Enterprise Manager/Manager/Proxy Managerの場合

Enterprise Manager/Manager/Proxy ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください(Enterprise Manager/Manager/Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません)。

注意

.....

本手順を実行する前に、各管理対象の導入確認や定義が必要です。詳細は、使用手引書の各管理対象についての説明を参照してください。

.....

3.3.2 Agentの場合

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

注意

.....

本手順を実行する前に、各管理対象の導入確認や定義が必要です。詳細は、使用手引書の各管理対象についての説明を参照してください。

.....

3.3.3 運用管理クライアントの場合

■通信環境のセットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

■Microsoft Edge (IEモード)を利用するための設定

Microsoft Edgeを利用する場合は、運用管理クライアントのURLがIEモードで開くよう設定してください。

詳細は、Microsoftのサイトを参照してください。

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/edge/edge-ie-mode-policies>

以下は、運用管理クライアントのURLを設定する場合の例です。

1. Microsoft EdgeでIEモードを利用できるようにします。
 - a. Microsoftのサイトより、最新の「Microsoft Edge ポリシー テンプレート」を入手し、適用します。



参考

適用方法などはMicrosoftのサイトを参照してください。

```
https://docs.microsoft.com/ja-jp/deployedge/configure-microsoft-edge
```

- b. [グループ ポリシー エディター]で、以下の設定を行います。

[コンピューターの構成] - [管理用テンプレート] - [Microsoft Edge]の[Internet Explorer 統合を構成する]を有効にし、オプションで[Internet Explorer モード]を選択します。

2. 運用管理クライアントのURLがIEモードで開くよう設定します。

- a. サイトリストXMLを作成します。

<任意のディレクトリ>/sitelist.xml



例

運用管理クライアントのURLが"http://sqccl/SSQC/Adminconsole.html"の場合

```
<site-list version="8">
  <created-by>
    <tool>EMIESiteListManager</tool>
    <version>12.0.0.0</version>
    <date-created>06/04/20xx 01:56:36</date-created>
  </created-by>
  <site url="sqccl">
    <compat-mode>Default</compat-mode>
    <open-in>IE11</open-in>
  </site>
</site-list>
```

- b. [グループ ポリシー エディター]で、以下の設定を行います。

[コンピューターの構成] - [管理用テンプレート] - [Windows コンポーネント] - [Internet Explorer]の[エンタープライズ モードの IE Web サイト一覧を使う]を有効にし、オプションで手順2.のa.で作成したサイトリストXMLの場所を指定します。

例) file:///<任意のディレクトリ>/sitelist.xml

3.4 起動と確認

- Enterprise Manager/Manager/Proxy Manager/Agentの場合

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

- 運用管理クライアントの場合

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。

3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル

ManagerとAgentで構成する基本モデルの、環境を構築する手順を以下に示します。

管理する情報は「サーバ内リソース情報」、通信形態は「Push型」を前提として説明しています。

以下の手順に沿って導入・設定してください。

■手順

- [3.5.1 Managerでの作業](#)
 1. Managerのインストール
 2. Managerのセットアップ
 3. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [3.5.2 Agentでの作業](#)
 1. Agentのインストール
 2. Agentのセットアップ
 3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
- [3.5.3 運用管理クライアントでの作業](#)
 1. 運用管理クライアントのインストール
 2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. コンソールの起動と確認

3.5.1 Managerでの作業

1. Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Managerのインストールを実施してください。

2. Managerのセットアップ



.....

ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、Managerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.5.2 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してAgentのインストールを実施してください。

2. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.5.3 運用管理クライアントでの作業

1. 運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して運用管理クライアントのインストールを実施してください。

2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「[使用手引書\(コンソール編\)](#)」を参照してください。



.....
コンソールを起動する前に、「[付録E デスクトップ ヒープの拡張方法](#)」を参照し、Windowsのデスクトップ ヒープを拡張してください。
.....

3.6 Proxy Managerによる中継モデル

エクストラネット内に配置したProxy Managerに中継機能を持たせ、配下のAgent情報を中継することによって、イントラネット内のManagerと通信できる環境を構築する手段を以下に示します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- **3.6.1 Managerでの作業**
 1. Managerのインストール
 2. Managerのセットアップ
 3. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- **3.6.2 Proxy Managerでの作業**
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Proxy Managerのセットアップ
 3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- **3.6.3 Agentでの作業**
 1. Agentのインストール
 2. Agentのセットアップ
 3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
- **3.6.4 運用管理クライアントでの作業**
 1. 運用管理クライアントのインストール
 2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. コンソールの起動と確認

3.6.1 Managerでの作業

1. Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Managerのインストールを実施してください。

2. Managerのセットアップ

ポイント

.....

ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、Managerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.6.2 Proxy Managerでの作業

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Proxy Managerのインストールを実施してください。

2. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.6.3 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Agentのインストールを実施してください。

2. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.6.4 運用管理クライアントでの作業

1. 運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して運用管理クライアントのインストールを実施してください。

2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「[使用手引書\(コンソール編\)](#)」を参照してください。

注意

コンソールを起動する前に、「付録E デスクトップ ヒープの拡張方法」を参照し、Windowsのデスクトップ ヒープを拡張してください。

EE

3.7 Managerの二階層運用モデル

本製品の構成モデルは、通常はManagerとAgent/Proxy Managerの二階層構成です。ただし、大規模なシステムにおいて、部門単位に設置されたManagerの上位サーバとしてEnterprise Managerを設置して、システム全体を一元管理することができます。

■実行環境

本機能は、Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Editionで提供される機能です。Enterprise Managerを用意すると共に、ManagerがEnterprise Editionである必要があります。Agentは、Standard EditionまたはEnterprise Editionのどちらでも構いません。

Enterprise Managerを導入する手順を、新規にSystemwalker Service Quality Coordinatorの環境を構築する場合を例に説明します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- [3.7.1 Enterprise Managerでの作業](#)
 1. Enterprise Managerのインストール
 2. 通信環境の設定
 3. Enterprise Managerのセットアップ
 4. Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [3.7.2 Managerでの作業](#)
 1. Managerのインストール
 2. Managerの二階層運用セットアップ
 3. Managerのセットアップ
 4. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [3.7.3 Proxy Managerでの作業](#)
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Proxy Managerのセットアップ
 3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [3.7.4 Agentでの作業](#)
 1. Agentのインストール
 2. Agentのセットアップ
 3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

• 3.7.5 運用管理クライアントでの作業

1. 運用管理クライアントのインストール
2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ
3. コンソールの起動と確認

3.7.1 Enterprise Managerでの作業

1. Enterprise Managerのインストール

「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照してEnterprise Managerのインストールを実施してください。

2. Enterprise Managerの通信環境の設定

ホスト名を使ってManagerと通信できない場合、管理対象となるManagerのホスト名とIPアドレスをhostsファイルに設定してください。

3. Enterprise Managerのセットアップ

ポイント

.....

Enterprise ManagerでAgentの機能を使用してEnterprise Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Enterprise Managerのセットアップを実施してください。Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

4. Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.7.2 Managerでの作業

1. Managerのインストール

「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照して、Managerのインストールを実施してください。

2. Managerの二階層運用セットアップ

「A.3 Managerの二階層運用セットアップコマンド」を参照して、sqcEmSetupを実行してください。

ポイント

.....

監視対象のAgent数が50台以上の場合は、Managerの二階層運用セットアップコマンドを実行するときに、オプション(-s on -m off)を指定し、Managerに性能データを格納するように設定してください。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcEmSetup.exe -h <host name> -s on -m off
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcEmSetup.sh -h <host name> -s on -m off
```

<host name>は、Enterprise Managerのホスト名またはIPアドレスを指定します。

3. Managerのセットアップ

ポイント

ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、Managerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

4. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.7.3 Proxy Managerでの作業

ポイント

Proxy Manager上で、エンドユーザーレスポンス管理を行う場合は、Proxy Managerでの作業を実施してください。

エンドユーザーレスポンス管理については、使用手引書「[エンドユーザーレスポンス管理](#)」を参照してください。

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してProxy Managerのインストールを実施してください。

2. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.7.4 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してAgentのインストールを実施してください。

2. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.7.5 運用管理クライアントでの作業

1. 運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して運用管理クライアントのインストールを実施してください。

2. 運用管理クライアントの通信環境のセットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「[使用手引書\(コンソール編\)](#)」を参照してください。



.....
コンソールを起動する前に、「[付録E デスクトップヒープの拡張方法](#)」を参照し、Windowsのデスクトップヒープを拡張してください。
.....

EE

3.8 Managerの二重化運用モデル

- Managerの二重化運用とは、2台のManagerで、同一のシステムを監視することで、システム全体の高可用性を提供する機能です。
- 同じ機能を持つManagerを設置するので、それぞれで管理情報を保有し、一方のサーバでトラブルが発生した場合でも、切り替え作業を行うことなく、もう一方のサーバで監視業務を続けることができます。このため、業務の停止時間を最小にし、高可用性なシステムを実現できます。

注意

二重化したそれぞれのManagerでインストールレス型Agent機能を使用して性能情報を管理した場合、収集するタイミングの違いにより性能データの値が一致しない場合があります。

■実行環境

本機能は、Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Editionで提供される機能です。ManagerがEnterprise Editionである必要があります。Agentは、Standard EditionまたはEnterprise Editionのどちらでも構いません。

Managerの二重化運用を導入する手順を、新規にSystemwalker Service Quality Coordinatorの環境を構築する場合を例に説明します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

ポイント

Managerの二重化運用を行う場合、それぞれのManagerに運用管理クライアントを接続する必要があります。

- 3.8.1 1台目のManagerでの作業
 1. 1台目のManagerのインストール
 2. 1台目のManagerのセットアップ
 3. 1台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認
- 3.8.2 2台目のManagerでの作業
 1. 2台目のManagerのインストール
 2. 2台目のManagerのセットアップ
 3. 2台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認
- 3.8.3 Proxy Managerでの作業
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ
 3. Proxy Managerのセットアップ
 4. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- 3.8.4 Agentでの作業
 1. Agentのインストール
 2. Managerの二重化運用Agentセットアップ
 3. Agentのセットアップ
 4. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
- 3.8.5 1台目の運用管理クライアントでの作業
 1. 1台目の運用管理クライアントのインストール
 2. 1台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ

3. 1台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認
- 3.8.6 2台目の運用管理クライアントでの作業
 1. 2台目の運用管理クライアントのインストール
 2. 2台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. 2台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

3.8.1 1台目のManagerでの作業

1. 1台目のManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してManagerのインストールを実施してください。

2. 1台目のManagerのセットアップ

ポイント

.....

ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、1台目のManagerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. 1台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.8.2 2台目のManagerでの作業

1. 2台目のManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してManagerのインストールを実施してください。

2. 2台目のManagerのセットアップ

ポイント

.....

ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、2台目のManagerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

3. 2台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.8.3 Proxy Managerでの作業

ポイント

Proxy Manager上で、エンドユーザーレスポンス管理を行う場合は、Proxy Managerでの作業を実施してください。
エンドユーザーレスポンス管理については、使用手引書「エンドユーザーレスポンス管理」を参照してください。

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してProxy Managerのインストールを実施してください。

2. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ

「[A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド](#)」を参照して、sqcHaSetupを実行してください。

3. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

4. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.8.4 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してAgentのインストールを実施してください。

2. Managerの二重化運用Agentセットアップ

「[A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド](#)」を参照して、sqcHaSetupを実行してください。

3. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

4. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

3.8.5 1台目の運用管理クライアントでの作業

1. 1台目の運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。

2. 1台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. 1台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。



.....
コンソールを起動する前に、「[付録E デスクトップヒープの拡張方法](#)」を参照し、Windowsのデスクトップヒープを拡張してください。
.....

3.8.6 2台目の運用管理クライアントでの作業

1. 2台目の運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。



.....
2台目の運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレスは、2台目のManagerのアドレスを指定してください。
.....

2. 2台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. 2台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。

注意

.....
コンソールを起動する前に、「付録E デスクトップ ヒープの拡張方法」を参照し、Windowsのデスクトップ ヒープを拡張してください。
.....

EE 3.9 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用モデル

本節では、フェールオーバークラスタリングのクラスタシステムにSystemwalker Service Quality Coordinatorを導入する手順について説明します。

Manager/Enterprise Managerをクラスタシステム運用することにより、片方のノードに障害が発生した場合でも、正常な別ノードに管理業務を引き継ぎますので、管理業務の高可用性を実現することができます。

■実行環境

本機能は、Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Editionで提供される機能です。

また、本機能を導入できるのはEnterprise ManagerとManagerです。

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■本手順を行う前に

本節で説明する手順を行う前に、フェールオーバークラスタリングのインストールおよび環境設定を行っておく必要があります。

フェールオーバークラスタリングをインストールし、新しくクラスタ環境を構築する場合の手順については、必要に応じてフェールオーバークラスタリングのマニュアルを参照してください。

注意

.....
本節では、フェールオーバークラスタリングのクラスタ環境にManager/Enterprise Managerの環境を構築する手順について説明しており、フェールオーバークラスタリングの設定を含んでいます。本節を読むにあたり、フェールオーバークラスタリングの基本的な理解と、実務知識が必要です。

また以下の場合には、クラスタシステムにManagerを導入することはできません。

- Managerと運用管理クライアントを同じマシンにインストールする必要がある場合
 - 二重化運用されたManager
-

サポートするクラスタシステムと形態は以下のとおりです。

[クラスタシステム]

以下に含まれるフェールオーバークラスタリング

- Windows Server 2022
- Windows Server 2019
- Windows Server 2016

- Windows Server 2012 R2
- Windows Server 2012

[クラスタ形態]

- 1:1運用待機形態(1つのノードを別の1つのノードで待機する形態)

本節では、管理業務を運用するノードを「現用系」、業務を引き継ぐために待機するノードを「待機系」と呼び、異常が発生したときに現用系から待機系へ業務を引き継ぐことを「フェイルオーバー」と呼びます。また、現用系と待機系とで共用して使用するディスクを「共用ディスク」と呼びます。

ポイント

- クラスタ運用を行っているManagerのホスト名やIPアドレスを設定する場合(Agent/Proxy Manager/運用管理クライアントのインストール時に指定する接続先Managerの設定など)には、論理ホスト名や論理IPアドレスを指定します。これによって、現用系か待機系かを意識することなく運用することができます。
- クラスタ運用を行う場合、Agentとの通信方式は、Push通信を使用してください。
- クラスタ運用を行う環境にAgentを導入する場合は、各ノードに導入してください
- クラスタ運用環境にAgentを導入し、Agentのセットアップを行う場合は、連携するミドルウェアが動作可能であることを確認してください。

二階層運用を行うシステムでEnterprise Managerのクラスタ化を行う場合と、Managerのクラスタ化を行う場合の手順を説明します。

3.9.1 Enterprise Managerでの作業

本手順は、二階層運用を行うシステムでEnterprise Managerのクラスタ化を行いたい場合に実施します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- [3.9.1.1 環境構築前の準備](#)
 1. 役割の用意
 2. 共用ディスク、ネットワークおよびIPアドレスの設定
- [3.9.1.2 現用系サーバでの導入](#)
 1. 現用系サーバでのEnterprise Managerのインストール
 2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.9.1.3 待機系サーバでの導入](#)
 1. 待機系サーバでのEnterprise Managerのインストール
 2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.9.1.4 リソース登録](#)
- [3.9.1.5 サービスの起動](#)

3.9.1.1 環境構築前の準備

本項ではクラスタ環境を構築するため、以下のグループ、および基本リソースを用意します。

- Systemwalker Service Quality Coordinator登録用役割
Systemwalker Service Quality Coordinatorをクラスタ運用するための役割です。
- 共用ディスク
現用系サーバと待機系サーバのEnterprise Managerが共有するファイルを格納するディスクです。
性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、その格納先の物理ディスクを共用ディスクとします。
- 論理IPアドレス
クラスタシステムで運用する時に、使用するネットワーク上でユニークなIPアドレスを新規に割り当てます。
- 論理ホスト名
論理IPアドレスに対するネットワークのホスト名です。

1. 役割の用意

Enterprise Managerが使用するグループを用意します。クラスタシステムの運用形態によって以下の2つの方法のどちらかを実施します。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用する場合
フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して、本製品用の役割を以下の名前で登録します。
「Systemwalker SQC Group」
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加する場合
Systemwalker Centric Managerの役割に追加する場合は、Systemwalker Centric Managerのクラスタ環境を作成し、「CentricMGR Group」グループを用意しておきます。

2. 共用ディスク、ネットワークおよびIPアドレスの設定

基本となるリソースをグループに登録します。

本製品の共有ファイルを格納する物理ディスク、ネットワーク、およびIPアドレスを、「1. 役割の用意」で用意した役割に登録します。

3.9.1.2 現用系サーバでの導入

1. 現用系サーバでEnterprise Managerをインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。



共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ

1. 現用系サーバでディスクの所有権を獲得する

フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して以下のディスクの所有権を獲得します。

- Quorumディスク
- 本製品で使用する共用ディスク

2. 共用ディスクをオンラインにする

フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して共用ディスクをオンラインにします。

3. フェールオーバー クラスタ マネージャーとレジストリエディタを終了する

フェールオーバー クラスタ マネージャーとレジストリエディタが起動されている場合は、終了させてください。

4. 現用系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行する

「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、現用系サーバでクラスタセットアップコマンド`sqcsetupclp`を実行してください。

コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcsetupclp -m <共用ディスク> -h <論理ホスト名>
```

5. 性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、「[6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更](#)」を参照してください。

性能データベース(PDB)の格納先を変更しない場合、フェールオーバー後、現用系に蓄積された性能データは待機系で参照できません。

6. Enterprise Managerのセットアップ

Enterprise Managerに含まれるAgentの機能を使用してEnterprise Manager自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

3.9.1.3 待機系サーバでの導入

1. 待機系サーバでのEnterprise Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。

ポイント

Enterprise Manager環境は、現用系サーバ、待機系サーバとも同一環境(同じデバイス名、共用ディスク、かつ同じインストールパス)で作成してください。

なお、共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ

1. フェールオーバー クラスタ マネージャとレジストリエディタを終了する。
フェールオーバー クラスタ マネージャとレジストリエディタが起動されている場合は、終了させてください。
2. 待機系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行する。
「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、待機系サーバでクラスタセットアップコマンド`sqcsetupcls`を実行してください。
コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcsetupcls -m <共用ディスク>
```

3.9.1.4 リソース登録

現用系サーバにてEnterprise Managerのサービスをフェールオーバークラスタリングのリソースとして登録します。

- サービスの登録
「[3.9.1.1 環境構築前の準備](#)」の手順1.で作成した役割に、以下のサービスを汎用サービスとして追加してください
— 「Systemwalker SQC DCM」サービス

注意

[新しいリソースウィザード]でリソースを追加した際は、その後に下記の表に記載の「リソースの依存関係」を設定してください。

「Systemwalker SQC DCM」サービス

| 項目 | 設定内容 |
|-----------|---|
| 名前 | Systemwalker SQC DCM |
| リソースの種類 | 汎用サービス |
| グループ | Systemwalker SQC GroupまたはCentricMGR Group |
| 実行可能な所有者 | 現用系サーバと待機系サーバ |
| リソースの依存関係 | 共用ディスクとして設定したディスク、IPアドレス |
| サービス名 | SQC_DCM |

3.9.1.5 サービスの起動

フェールオーバー クラスタ マネージャから、以下のSystemwalker Service Quality Coordinatorのサービスをオンラインにします。

- 「Systemwalker SQC DCM」サービス

フェールオーバークラスタリングのクラスタシステムにおけるEnterprise Managerの環境設定は以上です。

以降は、導入する運用モデルを参照して導入・設定を行ってください。

- [3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル](#)
- [3.6 Proxy Managerによる中継モデル](#)
- [3.7 Managerの二階層運用モデル](#)

注意

Managerの二階層運用モデルの環境を構築する場合、Enterprise Managerは本手順で導入済みなので、「Enterprise Managerの作業」は省略してください。

3.9.2 Managerでの作業

本手順は、Managerのクラスタ化を行いたい場合に実施します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- [3.9.2.1 環境構築前の準備](#)
 1. 役割の用意
 2. 共用ディスク、ネットワークおよびIPアドレスの設定
- [3.9.2.2 現用系サーバでの導入](#)
 1. 現用系サーバでのManagerのインストール
 2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.9.2.3 待機系サーバでの導入](#)
 1. 待機系サーバでのManagerのインストール
 2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.9.2.4 リソース登録](#)
- [3.9.2.5 サービスの起動](#)

3.9.2.1 環境構築前の準備

本項ではクラスタ環境を構築するため、以下のグループ、および基本リソースを用意します。

- Systemwalker Service Quality Coordinator登録用役割
Systemwalker Service Quality Coordinatorをクラスタ運用するための役割です。
- 本製品で使用する共用ディスク
現用系サーバと待機系サーバのManagerが共有するファイルを格納するディスクです。
性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、その格納先の物理ディスクを共用ディスクとします。

- 本製品で使用する論理IPアドレス
クラスタシステムで運用する時に、使用するネットワーク上でユニークなIPアドレスを新規に割り当てます。
- 本製品で使用するネットワーク
クラスタシステムで運用する時に、使用するネットワークです。

1. 役割の用意

Managerが使用するグループを用意します。クラスタシステムの運用形態によって以下の2つの方法のどちらかを実施します。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用する場合
フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して、本製品用の役割を以下の名前で登録します。
「Systemwalker SQC Group」
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加する場合
Systemwalker Centric Managerの役割に追加する場合は、Systemwalker Centric Managerのクラスタ環境を作成し、「CentricMGR Group」グループを用意しておきます。

2. 共用ディスク、ネットワークおよびIPアドレスの設定

基本となるリソースをグループに登録します。

本製品の共有ファイルを格納する物理ディスク、ネットワーク、およびIPアドレスを、「1. 役割の用意」で用意した役割に登録します。

3.9.2.2 現用系サーバでの導入

1. 現用系サーバでManagerをインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。



共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ

1. 現用系サーバでディスクの所有権獲得する

フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して以下のディスクの所有権を獲得します。

- Quorumディスク
- 本製品で使用する共用ディスク

2. 共用ディスクをオンラインにする

フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して共用ディスクをオンラインにします。

- フェールオーバー クラスター マネージャーとレジストリエディタを終了する
フェールオーバー クラスター マネージャーとレジストリエディタが起動されている場合は、終了させてください。

- 現用系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行する

「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、現用系サーバでクラスタセットアップコマンド`sqcsetupclp`を実行してください。

コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcsetupclp -m <共用ディスク> -h <論理ホスト名>
```

- 性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、「[6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更](#)」を参照してください。

性能データベース(PDB)の格納先を変更しない場合、フェールオーバー後、現用系に蓄積された性能データは待機系で参照できません。

- Managerのセットアップ

Managerに含まれるAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

3.9.2.3 待機系サーバでの導入

- 待機系サーバでのManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。

ポイント

Manager環境は、現用系サーバ、待機系サーバとも同一環境(同じデバイス名、共用ディスク、かつ同じインストールパス)で作成してください。

なお、共用ディスクにはインストールしないでください。

- 待機系サーバでのクラスタセットアップ

- フェールオーバー クラスター マネージャーとレジストリエディタを終了する。

フェールオーバー クラスター マネージャーとレジストリエディタが起動されている場合は、終了させてください。

- 待機系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行する。

「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、待機系サーバでクラスタセットアップコマンド`sqcsetupcls`を実行してください。

コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcsetupcls -m <共用ディスク>
```

3.9.2.4 リソース登録

現用系サーバにてManagerのサービスをフェールオーバークラスタリングのリソースとして登録します。

- サービスの登録
 - 「3.9.2.1 環境構築前の準備」の手順1.で作成した役割に、以下のサービスを汎用サービスとして追加してください
 - 「Systemwalker SQC DCM」サービス
- 利用する機能に応じて、以下のサービスも登録してください。
 - Pull方式で通信する場合
 - 「Systemwalker SQC sqcschdle」サービス
 - Web利用状況管理機能を使用する場合
 - 「Systemwalker SQC dbrefsv」サービス
 - 「Systemwalker SQC dbregsv」サービス



[新しいリソースウィザード]でリソースを追加した際は、その後に下記の表に記載の「リソースの依存関係」を設定してください。

「Systemwalker SQC DCM」サービス

| 項目 | 設定内容 |
|-----------|---|
| 名前 | Systemwalker SQC DCM |
| リソースの種類 | 汎用サービス |
| グループ | Systemwalker SQC GroupまたはCentricMGR Group |
| 実行可能な所有者 | 現用系サーバと待機系サーバ |
| リソースの依存関係 | 共用ディスクとして設定したディスク、IPアドレス |
| サービス名 | SQC_DCM |

「Systemwalker SQC sqcschdle」サービス

| 項目 | 設定内容 |
|-----------|---|
| 名前 | Systemwalker SQC sqcschdle |
| リソースの種類 | 汎用サービス |
| グループ | Systemwalker SQC GroupまたはCentricMGR Group |
| 実行可能な所有者 | 現用系サーバと待機系サーバ |
| リソースの依存関係 | 共用ディスクとして設定したディスク、IPアドレス |
| サービス名 | sqcschdle |

「Systemwalker SQC dbrefsv」サービス

| 項目 | 設定内容 |
|-----------|---|
| 名前 | Systemwalker SQC dbrefsv |
| リソースの種類 | 汎用サービス |
| グループ | Systemwalker SQC GroupまたはCentricMGR Group |
| 実行可能な所有者 | 現用系サーバと待機系サーバ |
| リソースの依存関係 | 共用ディスクとして設定したディスク、IPアドレス |
| サービス名 | Systemwalker SQC-A dbrefsv |

「Systemwalker SQC dbregsv」サービス

| 項目 | 設定内容 |
|-----------|---|
| 名前 | Systemwalker SQC dbregsv |
| リソースの種類 | 汎用サービス |
| グループ | Systemwalker SQC GroupまたはCentricMGR Group |
| 実行可能な所有者 | 現用系サーバと待機系サーバ |
| リソースの依存関係 | 共用ディスクとして設定したディスク、IPアドレス |
| サービス名 | Systemwalker SQC-A dbregsv |

3.9.2.5 サービスの起動

フェールオーバー クラスター マネージャーから、以下のSystemwalker Service Quality Coordinatorのサービスをオンラインにします。

- ・ 「Systemwalker SQC DCM」サービス
- ・ 利用する機能に応じて、以下のサービスもオンラインにしてください。
 - － Pull方式で通信する場合
「Systemwalker SQC sqcschdle」サービス
 - － Web利用状況管理機能を使用する場合
「Systemwalker SQC dbrefsv」サービス
「Systemwalker SQC dbregsv」サービス

フェールオーバークラスタリングのクラスタシステムにおけるManagerの環境設定は以上です。

以降は、導入する運用モデルを参照して導入・設定を行ってください。

- ・ [3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル](#)
- ・ [3.6 Proxy Managerによる中継モデル](#)
- ・ [3.7 Managerの二階層運用モデル](#)



注意

Managerは本手順で導入済みなので、「Managerの作業」は省略してください。

EE

3.10 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用モデル

本節では、PRIMECLUSTERのクラスタシステムにManager/Enterprise Managerを導入する手順について説明します。

Manager/Enterprise Managerをクラスタシステム運用することにより、片方のノードに障害が発生した場合でも、正常な別ノードに管理業務を引き継ぎますので、管理業務の高可用性を実現することができます。

■実行環境

本機能は、Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Editionで提供される機能です。

また、本機能を導入できるのはEnterprise ManagerとManagerです。

■実行に必要な権限

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■本手順を行う前に

本節で説明する作業を行う前に、PRIMECLUSTERのインストールおよび環境設定を行っておく必要があります。

PRIMECLUSTERをインストールし、新しくクラスタ環境を構築する場合の手順については、必要に応じて「PRIMECLUSTER導入運用手引書」を参照してください。



注意

本節では、PRIMECLUSTERのクラスタ環境にManager/Enterprise Managerの環境を構築する手順について説明しており、PRIMECLUSTERの設定を含んでいます。本節を読むにあたり、PRIMECLUSTERの基本的な理解と、実務知識が必要です。

また以下の場合には、クラスタシステムにManagerを導入することはできません。

- ・ 二重化運用されたManager

サポートするクラスタシステムと形態は以下のとおりです。

[クラスタシステム]

【Solaris版】

- Fujitsu PRIMECLUSTER Enterprise Edition
4.3A40/4.5A00/4.5A10
- Fujitsu PRIMECLUSTER HA Server
4.3A40/4.5A00/4.5A10
- Fujitsu PRIMECLUSTER Clustering Base
4.3A40/4.5A00/4.5A10

【Linux版】

- Fujitsu PRIMECLUSTER Enterprise Edition
4.3A40/4.4A00/4.5A00/4.5A10/4.6A00/4.6A10
- Fujitsu PRIMECLUSTER HA Server
4.3A40/4.4A00/4.5A00/4.5A10/4.6A00/4.6A10
- Fujitsu PRIMECLUSTER Clustering Base
4.3A40/4.4A00/4.5A00/4.5A10/4.6A00/4.6A10

【クラスタ形態】

- 1:1運用待機形態(1つのノードを別の1つのノードで待機する形態)

本節では、管理業務を運用するノードを「現用系」、業務を引き継ぐために待機するノードを「待機系」と呼び、異常が発生したときに現用系から待機系へ業務を引き継ぐことを「フェイルオーバー」と呼びます。また、現用系と待機系とで共用して使用するディスクを「共用ディスク」と呼びます。

ポイント

- クラスタ運用を行っているManagerのホスト名やIPアドレスを設定する場合(Agent/Proxy Manager/運用管理クライアントのインストールなど)には、論理ホスト名や論理IPアドレスを指定します。これによって、現用系か待機系かを意識することなく運用することができます。
- クラスタ運用を行う場合、Agentとの通信方式は、Push通信を使用してください。
- クラスタ運用を行う環境にAgentを導入する場合は、各ノードに導入してください。
- クラスタ運用環境にAgentを導入し、Agentのセットアップを行う場合は、連携するミドルウェアが動作可能であることを確認してください。

二階層運用を行うシステムでEnterprise Managerのクラスタ化を行う場合と、Managerのクラスタ化を行う場合の手順を説明します。

3.10.1 Enterprise Managerでの作業

本手順は、二階層運用を行うシステムでEnterprise Managerのクラスタ化を行いたい場合に実施します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- [3.10.1.1 環境構築前の準備](#)
 1. 共用ディスクの設定
 2. IPアドレスとホスト名の割り当て
- [3.10.1.2 現用系サーバでの導入](#)
 1. 現用系サーバでのEnterprise Managerのインストール
 2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.10.1.3 待機系サーバでの導入](#)
 1. 待機系サーバでのEnterprise Managerのインストール

2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ

• 3.10.1.4 リソース登録

- userApplication Configuration Wizardでの登録(Solaris版の場合)
- RMS Wizardでの登録(Linux版の場合)

• 3.10.1.5 デーモンの起動

3.10.1.1 環境構築前の準備

本項ではクラスタ環境を構築するため、以下のリソースを用意します。

- 本製品で使用する共用ディスク
現用系サーバと待機系サーバのEnterprise Managerが共有するファイルを格納するディスクです。
- 本製品で使用する論理IPアドレス
クラスタシステムで運用する時に、使用するネットワーク上でユニークなIPアドレスを新規に割り当てます。
- 本製品で使用する論理ホスト名
論理IPアドレスが解決できる名前です。
DNSなどのネームサービスに登録することで、有効になります。

1. 共用ディスクの設定

現用系サーバと待機系サーバのEnterprise Managerが共有するファイルを格納する共用ディスクを設定します。

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、その格納先の物理ディスクを共用ディスクとします。

共用ディスクの設定の詳細については、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

2. IPアドレスとホスト名の割り当て

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用する場合
PRIMECLUSTERのマニュアルを参照して、IPアドレスとホスト名を登録します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加する場合
論理IPアドレスおよび論理ホスト名はSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムで設定済みのリソースを使用します。
新しく作成する必要はありません。

3.10.1.2 現用系サーバでの導入

1. 現用系サーバでのEnterprise Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。

注意

共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ

1. 現用系サーバでクラスタアプリケーションを停止する
PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用して、クラスタアプリケーションを停止します。

ポイント

Systemwalker Centric Managerとの連携を行っている場合は、Systemwalker Centric Managerのサービスも停止してください。

2. 現用系サーバから共用ディスクにアクセスできるようにする
現用系サーバ側で共用ディスクをマウントしてください。
3. 現用系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行する
「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、現用系サーバでクラスタセットアップコマンドsqcsetupclpを実行してください。
コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcsetupclp -m <マウントポイント> -h <論理ホスト名>
```

4. 性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する
性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、「[6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更](#)」を参照してください。
5. Enterprise Managerのセットアップ
Enterprise Managerに含まれるAgentの機能を使用してEnterprise Manager自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

3.10.1.3 待機系サーバでの導入

1. 待機系サーバでのEnterprise Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。

注意

Enterprise Manager環境は、現用系サーバ、待機系サーバとも同一環境(同じデバイス名、共用ディスク、かつ同じインストールパス)で作成してください。

なお、共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ

1. 待機系サーバでクラスタアプリケーションを停止する
PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用して、クラスタアプリケーションを停止します。
2. 待機系サーバから共用ディスクにアクセスできるようにする
待機系サーバ側で共用ディスクをマウントしてください。
3. 待機系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行
「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、待機系サーバでクラスタセットアップコマンドsqcsetupclsを実行してください。
コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcsetupcls -m <マウントポイント>
```

3.10.1.4 リソース登録

Enterprise ManagerのデーモンをPRIMECLUSTERのリソースとして登録します。

ここでは、現用系サーバでのリソースの登録方法について、以下に説明します。

Enterprise Managerのクラスタセットアップコマンドで作成されたリソースを、Enterprise Managerのデーモンとして登録します。

ポイント

Systemwalker Centric Managerとの同期を行っている場合、Enterprise Managerのデーモンをアプリケーションリソースとして「CentricMGR Group」に登録してください。

リソースの登録方法は、プラットフォームにより異なります。

ご使用のプラットフォームに合った登録方法を参照してください。

- [userApplication Configuration Wizardでの登録\(Solaris版\)](#)

1. リソース作成
2. クラスタアプリケーションの作成

- [RMS Wizardでの登録\(Linux版\)](#)

1. リソース作成
2. クラスタアプリケーションの作成

■ [userApplication Configuration Wizardでの登録\(Solaris版\)](#)

1. リソース作成

PRIMECLUSTERのuserApplication Configuration Wizardから、[Resourceの作成]を選択し、以下のResourceタイプを設定します。詳細は、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

Fsystem

共有資源用パーティションを選択します。

Ipaddress

ネットワーク種別にIP Address Takeoverを選択し、IPアドレス/ホスト名には、クラスタセットアップコマンドのオプションで指定したものを設定します。

Procedure

プロシジャクラスにApplicationを選択し、プロシジャリソースをSystemwalkerSQLとしてリソースを作成します。

2. クラスタアプリケーションの作成

PRIMECLUSTERのuserApplication Configuration Wizardのトップメニューから、[userApplicationの作成]を選択し、アプリケーションを作成します。詳細は、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

- [userApplication名と運用形態の設定]画面では、運用形態にStandbyを選択してください。
- [属性の設定]画面では、userApplicationの属性を設定してください。設定するオプションの例(推奨値)を以下に示します。

| 属性(Attribute) | 値(Value) | 概要 |
|--------------------|--------------------------------|--|
| AutoStartUp | Yes | RMSが開始されるときに、userApplicationも自動的に開始されます。 |
| AutoSwitchOver | HostFailure ResourceFailure | ホストおよびリソースで障害が発生した場合に自動的に切り替えられるようにします。 |
| PersistentFault | 1 | userApplicationのFaultedの状態は、RMSの再起動後も維持されます。 |
| ShutdownPriority | NONE(省略値) | userApplicationに重み係数(優先度)を割り当てません。 |
| StandbyTransitions | StartUp SwitchRequest | RMSが起動するときおよび別のノードへ状態遷移したときにStandby状態遷移が実行されます。 |
| OnlinePriority | 0(省略値) | RMSの再起動後は、優先度の最も高いノードでuserApplicationがOnlineになります。優先度は、userApplicationの作成時の「SysNodeの設定」で設定したノードの設定順序により決定されます。 |
| HaltFlag | No(省略値) | Fault処理中にさらに故障が発生(二重故障)したような場合に、ノードの強制的な停止が行われません。そのため、userApplicationは、フェイルオーバーしません。 |

- Resourceの選択には、「1.リソース作成」で作成した各リソースをすべて選択し、アプリケーションの作成を行ってください。



上記の手順を実施しても、Systemwalker Service Quality Coordinatorのサービス停止によるクラスタの切り替えは行われません。

■RMS Wizardでの登録(Linux版)

PRIMECLUSTERのRMS Wizardを使用して、アプリケーションを作成する場合の説明をします。

1. リソース作成

1. 論理IPアドレスをリソースとして設定します。

RMS Wizardで“Gls:Global-Link-Services”を選択し、PRIMECLUSTER GLSの論理IPアドレスをリソースとして設定してください。

2. 共有論理IPアドレスをリソースとして設定します。

2. クラスタアプリケーションの作成

RMS Wizardを使用してアプリケーションを作成します。

詳細は、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

- プライマリ/セカンダリノードの登録

“Machines+Basics”からプライマリ・およびセカンダリノードを登録してください。

- 引き継ぎIPアドレスの登録

“Gls:Global-Link-Services”を選択し、PRIMECLUSTER GLSで設定した引き継ぎIPアドレスとして使用するアドレスを登録してください。

- 共有ディスクの登録

“LocalFileSystem”から共有資源用パーティションのマウントポイントを登録してください。

- Procedureリソースを設定

Procedureリソース(SystemwalkerSQC)を設定してください。

- 各種オプションの設定

“Machines+Basics”からクラスタアプリケーションの各種オプションを設定してください。設定するオプションの例(推奨値)を以下に示します。

| 属性(Attribute) | 値(Value) | 概要 |
|--------------------|--------------------------------|--|
| AutoStartUp | Yes | RMSが開始されるときに、userApplicationも自動的に開始されます。 |
| AutoSwitchOver | HostFailure ResourceFailure | ホストおよびリソースで障害が発生した場合に自動的に切り替えられるようにします。 |
| PersistentFault | 1 | userApplicationのFaultedの状態は、RMSの再起動後も維持されます。 |
| ShutdownPriority | NONE(省略値) | userApplicationに重み係数(優先度)を割り当てません。 |
| StandbyTransitions | StartUp SwitchRequest | RMSが起動するときおよび別のノードへ状態遷移したときにStandby状態遷移が実行されます。 |
| OnlinePriority | 0(省略値) | RMSの再起動後は、優先度の最も高いノードでuserApplicationがOnlineになります。優先度は、userApplicationの作成時の「SysNodeの設定」で設定したノードの設定順序により決定されます。 |
| HaltFlag | No(省略値) | Fault処理中にさらに故障が発生(二重故障)したような場合に、ノードの強制的な停止が行われません。そのため、userApplicationは、フェイルオーバーしません。 |

注意

上記の手順を実施しても、Systemwalker Service Quality Coordinatorのサービス停止によるクラスタの切り替えは行われません。

3.10.1.5 デーモンの起動

PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用し、Systemwalker Service Quality Coordinatorデーモンを起動します。

PRIMECLUSTERクラスタシステムの環境設定は以上です。

以降は、導入する運用モデルを参照して導入・設定を行ってください。

- [3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル](#)
- [3.6 Proxy Managerによる中継モデル](#)
- [3.7 Managerの二階層運用モデル](#)

注意

Managerの二階層運用モデルの環境を構築する場合、Enterprise Managerは本手順で導入済みなので、「Enterprise Managerの作業」は省略してください。

3.10.2 Managerでの作業

本手順は、Managerのクラスタ化を行いたい場合に実施します。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- [3.10.2.1 環境構築前の準備](#)
 1. 共用ディスクの設定
 2. IPアドレスとホスト名の割り当て
- [3.10.2.2 現用系サーバでの導入](#)
 1. 現用系サーバでのManagerのインストール
 2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.10.2.3 待機系サーバでの導入](#)
 1. 待機系サーバでのManagerのインストール
 2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ
- [3.10.2.4 リソース登録](#)
 - userApplication Configuration Wizardでの登録(Solaris版の場合)
 - RMS Wizardでの登録(Linux版の場合)

- [3.10.2.5 デーモンの起動](#)

3.10.2.1 環境構築前の準備

本項ではクラスタ環境を構築するため、以下のリソースを用意します。

- 本製品で使用する共用ディスク
現用系サーバと待機系サーバのManagerが共有するファイルを格納するディスクです。
- 本製品で使用する論理IPアドレス
クラスタシステムで運用する時に、使用するネットワーク上でユニークなIPアドレスを新規に割り当てます。
- 本製品で使用する論理ホスト名
論理IPアドレスが解決できる名前です。
DNSなどのネームサービスに登録することで、有効になります。

1. 共用ディスクの設定

現用系サーバと待機系サーバのManagerが共有するファイルを格納する共用ディスクを設定します。

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、その格納先の物理ディスクを共用ディスクとします。

共用ディスクの設定の詳細については、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

2. IPアドレスとホスト名の割り当て

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用する場合
RIMECLUSTERのマニュアルを参照して、IPアドレスとホスト名を登録します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加する場合
論理IPアドレスおよび論理ホスト名はSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムで設定済みのリソースを使用します。
新しく作成する必要はありません。

3.10.2.2 現用系サーバでの導入

1. 現用系サーバでのManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。



注意

共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 現用系サーバでのクラスタセットアップ

1. 現用系サーバでクラスタアプリケーションを停止する

PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用し、クラスタアプリケーションを停止します。

ポイント

Systemwalker Centric Managerとの連携を行っている場合は、Systemwalker Centric Managerのサービスも停止してください。

2. 現用系サーバから共用ディスクにアクセスできるようにする

現用系サーバ側で共用ディスクをマウントしてください。

3. 現用系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行する

「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、現用系サーバでクラスタセットアップコマンドsqcsetupclpを実行してください。

コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcsetupclp -m <マウントポイント> -h <論理ホスト名>
```

4. 性能データベース(PDB) およびアーカイブファイルの格納先を変更する

性能データベース(PDB) およびアーカイブファイルの格納先を変更する場合は、「[6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更](#)」を参照してください。

5. Managerのセットアップ

Managerに含まれるAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

3.10.2.3 待機系サーバでの導入

1. 待機系サーバでのManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してインストールを実施してください。

注意

Manager環境は、現用系サーバ、待機系サーバとも同一環境(同じデバイス名、共用ディスク、かつ同じインストールパス)で作成してください。

なお、共用ディスクにはインストールしないでください。

2. 待機系サーバでのクラスタセットアップ

1. 待機系サーバでクラスタアプリケーションを停止する
PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用し、クラスタアプリケーションを停止します。
2. 待機系サーバから共用ディスクにアクセスできるようにする
待機系サーバ側で共用ディスクをマウントしてください。
3. 待機系サーバでクラスタセットアップコマンドを実行
「[A.6 クラスタセットアップコマンド](#)」を参照して、待機系サーバでクラスタセットアップコマンドsqcsetupclsを実行してください。
コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcsetupcls -m <マウントポイント>
```

3.10.2.4 リソース登録

ManagerのデーモンをPRIMECLUSTERのリソースとして登録します。

ここでは、現用系サーバでのリソースの登録方法について、以下に説明します。

Managerのクラスタセットアップコマンドで作成されたリソースを、Managerのデーモンとして登録します。

ポイント

Systemwalker Centric Managerとの同期を行っている場合、Managerのデーモンをアプリケーションリソースとして「CentricMGR Group」に登録してください。

リソースの登録方法は、プラットフォームにより異なります。

ご使用のプラットフォームに合った登録方法を参照してください。

- ■ [userApplication Configuration Wizardでの登録\(Solaris版\)](#)

1. リソース作成
2. クラスタアプリケーションの作成

- ■ [RMS Wizardでの登録\(Linux版\)](#)

1. リソース作成
2. クラスタアプリケーションの作成

■ [userApplication Configuration Wizardでの登録\(Solaris版\)](#)

1. リソース作成

PRIMECLUSTERのuserApplication Configuration Wizardから、[Resourceの作成]を選択し、以下のResourceタイプを設定します。詳細は、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

Fsystem

共有資源用パーティションを選択します。

Ipaddress

ネットワーク種別にIP Address Takeoverを選択し、IPアドレス/ホスト名には、クラスタセットアップコマンドのオプションで指定したものを設定します。

Procedure

プロシジャクラスにApplicationを選択し、プロシジャリソースをSystemwalkerSQCとしてリソースを作成します。

2. クラスタアプリケーションの作成

PRIMECLUSTERのuserApplication Configuration Wizardのトップメニューから、[userApplicationの作成]を選択し、アプリケーションを作成します。詳細は、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

- [userApplication名と運用形態の設定]画面では、運用形態にStandbyを選択してください。
- [属性の設定]画面では、userApplicationの属性を設定してください。設定するオプションの例(推奨値)を以下に示します。

| 属性(Attribute) | 値(Value) | 概要 |
|--------------------|--------------------------------|--|
| AutoStartUp | Yes | RMSが開始されるときに、userApplicationも自動的に開始されます。 |
| AutoSwitchOver | HostFailure ResourceFailure | ホストおよびリソースで障害が発生した場合に自動的に切り替えられるようにします。 |
| PersistentFault | 1 | userApplicationのFaultedの状態は、RMSの再起動後も維持されます。 |
| ShutdownPriority | NONE(省略値) | userApplicationに重み係数(優先度)を割り当てません。 |
| StandbyTransitions | StartUp SwitchRequest | RMSが起動するときおよび別のノードへ状態遷移したときにStandby状態遷移が実行されます。 |
| OnlinePriority | 0(省略値) | RMSの再起動後は、優先度の最も高いノードでuserApplicationがOnlineになります。優先度は、userApplicationの作成時の「SysNodeの設定」で設定したノードの設定順序により決定されます。 |
| HaltFlag | No(省略値) | Fault処理中にさらに故障が発生(二重故障)したような場合に、ノードの強制的な停止が行われません。そのため、userApplicationは、フェイルオーバーしません。 |

- Resourceの選択には、「1.リソース作成」で作成した各リソースをすべて選択し、アプリケーションの作成を行ってください。

注意

上記の手順を実施しても、Systemwalker Service Quality Coordinatorのサービス停止によるクラスタの切り替えは行われません。

■RMS Wizardでの登録(Linux版)

PRIMECLUSTERのRMS Wizardを使用して、アプリケーションを作成する場合の説明をします。

1. リソース作成

1. 論理IPアドレスをリソースとして設定します。

RMS Wizardで“Gls:Global-Link-Services”を選択し、PRIMECLUSTER GLSの論理IPアドレスをリソースとして設定してください。

2. 共有論理IPアドレスをリソースとして設定します。

2. クラスタアプリケーションの作成

RMS Wizardを使用してアプリケーションを作成します。

詳細は、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。

- プライマリ/セカンダリノードの登録

“Machines+Basics”からプライマリ・およびセカンダリノードを登録してください。

- 引き継ぎIPアドレスの登録

“Gls:Global-Link-Services”を選択し、PRIMECLUSTER GLSで設定した引き継ぎIPアドレスとして使用するアドレスを登録してください。

- 共有ディスクの登録

“LocalFileSystem”から共有資源用パーティションのマウントポイントを登録してください。

- Procedureリソースを設定

Procedureリソース(SystemwalkerSQC)を設定してください。

- 各種オプションの設定

“Machines+Basics”からクラスタアプリケーションの各種オプションを設定してください。設定するオプションの例(推奨値)を以下に示します。

| 属性(Attribute) | 値(Value) | 概要 |
|--------------------|--------------------------------|--|
| AutoStartUp | Yes | RMSが開始されるときに、userApplicationも自動的に開始されます。 |
| AutoSwitchOver | HostFailure ResourceFailure | ホストおよびリソースで障害が発生した場合に自動的に切り替えられるようにします。 |
| PersistentFault | 1 | userApplicationのFaultedの状態は、RMSの再起動後も維持されます。 |
| ShutdownPriority | NONE(省略値) | userApplicationに重み係数(優先度)を割り当てません。 |
| StandbyTransitions | StartUp SwitchRequest | RMSが起動するときおよび別のノードへ状態遷移したときにStandby状態遷移が実行されます。 |
| OnlinePriority | 0(省略値) | RMSの再起動後は、優先度の最も高いノードでuserApplicationがOnlineになります。優先度は、userApplicationの作成時の「SysNodeの設定」で設定したノードの設定順序により決定されます。 |
| HaltFlag | No(省略値) | Fault処理中にさらに障害が発生(二重故障)したような場合に、ノードの強制的な停止が行 |

| 属性(Attribute) | 値(Value) | 概要 |
|---------------|----------|--|
| | | われません。そのため、userApplication は、フェイルオーバーしません。 |

注意

上記の手順を実施しても、Systemwalker Service Quality Coordinatorのサービス停止によるクラスタの切り替えは行われません。

3.10.2.5 デーモンの起動

PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用し、Systemwalker Service Quality Coordinatorデーモンを起動します。

PRIMECLUSTERクラスタシステムの環境設定は以上です。

以降は、導入する運用モデルを参照して導入・設定を行ってください。

- [3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル](#)
- [3.6 Proxy Managerによる中継モデル](#)
- [3.7 Managerの二階層運用モデル](#)

注意

Managerは、PRIMECLUSTERクラスタシステムの環境設定で導入済みなので、「Managerの作業」は省略してください。

第4章 Pull型通信設定

本製品の通信形態は、通常は、AgentまたはProxy ManagerからManagerに対してPushする形の通信です。ただし、インターネット環境で、DMZ内のサーバを管理対象にしたいなど、通信方法が制限される場合には、Push型の通信では都合が悪い場合があります。そのような場合に、Pull型の通信形態で構成します。

Pull型の通信では、ManagerがAgentまたはProxy Managerに対して問い合わせを行い、その結果を引っ張りあげる形になります。この時、通信プロトコルには、HTTPが用いられます。したがって、この場合、AgentまたはProxy ManagerにはHTTP通信環境が必要になります。

注意

SELinux機能が有効な場合、製品提供機能(thttpd)を使用しないPull型通信方式は使用できません。

ポイント

- AgentおよびProxy Managerのインストール後は、Push通信です。Pull通信に変更したい場合は、PushからPullへの切り替え手順を実施します。
- Push通信の場合は、AgentまたはProxy Manager側が自律的にデータを送信しますので、特に定義作業は不要です。Pull通信の場合は、Manager上で、Pull通信の対象となる、Agent、Proxy Managerを定義する必要があります。
- なお、同一のAgentまたはProxy Managerにおいて、通常のPush通信と、本章で説明するPull通信の併用はできません。

Pull型通信での構成モデルに基づいて導入する方法については、以下を参照してください。

4.1 Pull運用でのManagerとAgentで構成する基本モデル

Pull運用での、ManagerとAgentで構成する基本モデルの環境を構築する手順を説明します。

■手順

以下の順に沿って実施してください。

- **4.1.1 Managerでの作業**
 1. Managerのインストール
 2. ManagerのPull通信定義
 3. Managerのセットアップ
 4. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- **4.1.2 Agentでの作業**
 1. Agentのインストール
 2. AgentのPushからPullへの切り替え
 3. AgentのPull通信セットアップ
 4. Agentのセットアップ
 5. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

- 4.1.3 運用管理クライアントでの作業
 1. 運用管理クライアントのインストール
 2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. コンソールの起動と確認

4.1.1 Managerでの作業

1. Managerのインストール

「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照して、Managerのインストールを実施してください。

2. ManagerのPull通信定義

「4.4.1 Pull通信定義」を参照して、Pull通信定義を実施してください。

3. Managerのセットアップ

ポイント

.....

ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、Managerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

4. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

.....

Pull通信を行うには、ManagerでSystemwalker SQC sqcschdleサービス/sqcschdleプロセスを起動する必要があります。

.....

4.1.2 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照して、Agentのインストールを実施してください。

2. AgentのPushからPullへの切り替え

「4.4.3.2 Agent/Proxy Manager上での作業」を参照して、PushからPullへの切り替え手順を実施してください。

3. AgentのPull通信セットアップ

UNIX版の場合、「4.4.2 Pull通信セットアップ」を参照して、Pull通信セットアップコマンドを実行してください。

4. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

5. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

4.1.3 運用管理クライアントでの作業

1. 運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。

2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「[使用手引書\(コンソール編\)](#)」を参照してください。



.....
コンソールを起動する前に、「[付録E デスクトップヒープの拡張方法](#)」を参照し、Windowsのデスクトップヒープを拡張してください。
.....

4.2 Pull運用でのProxy Managerによる中継モデル

エクストラネット内に配置したProxy Managerに中継機能を持たせ、配下のAgent情報を中継することによって、イントラネット内のManagerと通信できる環境を構築する手段を以下に示します。

■手順

以下の順に沿って実施してください。

- [4.2.1 Managerでの作業](#)

1. Managerのインストール
2. ManagerのPull通信定義

3. Managerのセットアップ
 4. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- 4.2.2 Proxy Managerでの作業
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Proxy ManagerのPushからPullへの切り替え
 3. Proxy ManagerのPull通信セットアップ
 4. Proxy Managerのセットアップ
 5. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
 - 4.2.3 Agentでの作業
 1. Agentのインストール
 2. Agentのセットアップ
 3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
 - 4.2.4 運用管理クライアントでの作業
 1. 運用管理クライアントのインストール
 2. 運用管理クライアント通信環境セットアップ
 3. コンソールの起動と確認

4.2.1 Managerでの作業

1. Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Managerのインストールを実施してください。

2. ManagerのPull通信定義

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」を参照して、Pull通信定義を実行してください。

3. Managerのセットアップ

ポイント

.....
ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、Managerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。
.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、`sqcRPolicy`、および`sqcSetPolicy`を実行してください。

4. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

Pull通信を行うには、ManagerでSystemwalker SQC sqcschdleサービス/sqcschdleプロセスを起動する必要があります。

4.2.2 Proxy Managerでの作業

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Proxy Managerのインストールを実施してください。

2. Proxy ManagerのPushからPullへの切り替え

「[4.4.3.2 Agent/Proxy Manager上での作業](#)」を参照して、PushからPullへの切り替え手順を実施してください。

3. Proxy ManagerのPull通信セットアップ

UNIX版の場合、「[4.4.2 Pull通信セットアップ](#)」を参照して、Pull通信セットアップコマンドを実行してください。

4. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

5. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

4.2.3 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Agentのインストールを実施してください。

2. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

4.2.4 運用管理クライアントでの作業

1. 運用管理クライアントのインストール

「3.1.3 運用管理クライアントのインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。

2. 運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「第5章 通信環境のセットアップ」を参照して、セットアップしてください。

3. コンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。



コンソールを起動する前に、「付録E デスクトップヒープの拡張方法」を参照し、Windowsのデスクトップヒープを拡張してください。

EE

4.3 Pull運用でのManagerの二重化運用モデル

ここではPull運用でのManagerの二重化運用モデルの導入方法について説明します。

■実行環境

本機能は、Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Editionで提供される機能です。ManagerがEnterprise Editionである必要があります。Agentは、Standard EditionまたはEnterprise Editionのどちらでもかまいません。

■手順

以下の順に沿って実施してください。



Managerの二重化運用を行う場合、それぞれのManagerに運用管理クライアントを接続する必要があります。

・ 4.3.1 1台目のManagerでの作業

1. 1台目のManagerのインストール
2. 1台目のManagerのPull通信定義

3. 1台目のManagerのセットアップ
 4. 1台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認
- 4.3.2 2台目のManagerでの作業
 1. 2台目のManagerのインストール
 2. 2台目のManagerのPull通信定義
 3. Managerの二重化運用Managerセットアップ
 4. 2台目のManagerのセットアップ
 5. 2台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認
 - 4.3.3 Proxy Managerでの作業
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Proxy ManagerのPushからPullへの切り替え
 3. Proxy ManagerのPull通信定義
 4. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ
 5. Proxy Managerのセットアップ
 6. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
 - 4.3.4 Agentでの作業
 1. Agentのインストール
 2. AgentのPushからPullへの切り替え
 3. AgentのPull通信定義
 4. Managerの二重化運用Agentセットアップ
 5. Agentのセットアップ
 6. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
 - 4.3.5 1台目の運用管理クライアントでの作業
 1. 1台目の運用管理クライアントのインストール
 2. 1台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. 1台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認
 - 4.3.6 2台目の運用管理クライアントでの作業
 1. 2台目の運用管理クライアントのインストール
 2. 2台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. 2台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

4.3.1 1台目のManagerでの作業

1. 1台目のManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してManagerのインストールを実施してください。

2. 1台目のManagerのPull通信定義

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」を参照してPull通信定義を実行してください。

3. 1台目のManagerのセットアップ

ポイント

.....
ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、1台目のManagerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。
.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、`sqcRPolicy`、および`sqcSetPolicy`を実行してください。

4. 1台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

.....
Pull通信を行うには、ManagerでSystemwalker SQC `sqcschdle`サービス/`sqcschdle`プロセスを起動する必要があります。
.....

4.3.2 2台目のManagerでの作業

1. 2台目のManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してManagerのインストールを実施してください。

2. 2台目のManagerのPull通信定義

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」を参照してPull通信定義を実行してください。

3. Managerの二重化運用Managerセットアップ

「[A.4 Managerの二重化運用Managerセットアップコマンド](#)」を参照して、`sqcHmSetup`を実行してください。

4. 2台目のManagerのセットアップ

ポイント

.....
ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、2台目のManagerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。
.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、`sqcRPolicy`、および`sqcSetPolicy`を実行してください。

5. 2台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

Pull通信を行うには、ManagerでSystemwalker SQC sqcschdleサービス/sqcschdleプロセスを起動する必要があります。

4.3.3 Proxy Managerでの作業

ポイント

Proxy Manager上で、エンドユーザーレスポンス管理を行う場合は、Proxy Managerでの作業を実施してください。

エンドユーザーレスポンス管理については、使用手引書「エンドユーザーレスポンス管理」を参照してください。

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してProxy Managerのインストールを実施してください。

2. Proxy ManagerのPushからPullへの切り替え

「[4.4.3.2 Agent/Proxy Manager上での作業](#)」を参照して、PushからPullへの切り替え手順を実施してください。

3. Proxy ManagerのPull通信セットアップ

UNIX版の場合、「[4.4.2 Pull通信セットアップ](#)」を参照して、Pull通信セットアップコマンドを実行してください。

4. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ

「[A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド](#)」を参照してProxy Managerの二重化運用セットアップを実施してください。

5. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

6. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

4.3.4 Agentでの作業

1. Agentのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Agentのインストールを実施してください。

2. AgentのPushからPullへの切り替え

「[4.4.3.2 Agent/Proxy Manager上での作業](#)」を参照して、PushからPullへの切り替え手順を実施してください。

3. AgentのPull通信セットアップ

UNIX版の場合、「[4.4.2 Pull通信セットアップ](#)」を参照して、Pull通信セットアップコマンドを実行してください。

4. Managerの二重化運用Agentセットアップ

「[A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド](#)」を参照して、sqcHaSetupを実行してください。

5. Agentのセットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

6. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

4.3.5 1台目の運用管理クライアントでの作業

1. 1台目の運用管理クライアントのインストール

「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。

ポイント

.....
1台目の運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレスは、1台目のManagerのアドレスを指定してください。
.....

2. 1台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照して、セットアップしてください。

3. 1台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「[使用手引書\(コンソール編\)](#)」を参照してください。

注意

.....
コンソールを起動する前に、「付録E デスクトップ ヒープの拡張方法」を参照し、Windowsのデスクトップ ヒープを拡張してください。
.....

4.3.6 2台目の運用管理クライアントでの作業

1. 2台目の運用管理クライアントのインストール

「3.1.3 運用管理クライアントのインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。

ポイント

.....
2台目の運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレスは、2台目のManagerのアドレスを指定してください。
.....

2. 2台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「第5章 通信環境のセットアップ」を参照して、セットアップしてください。

3. 2台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。

注意

.....
コンソールを起動する前に、「付録E デスクトップ ヒープの拡張方法」を参照し、Windowsのデスクトップ ヒープを拡張してください。
.....

4.4 Pull運用設定

ここでは、Pull運用を行うための定義方法と、運用途中にPull、Pushの通信方式を切り替える場合の方法について説明します。

4.4.1 Pull通信定義

以下の方法に従って、定義してください。

■ Managerでの作業

本ファイルの格納場所は以下のとおりです。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%agentlist.cfg
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/agentlist.cfg
```

上記ファイルを以下の定義方法に従って編集してください。

■ 定義方法

Pull通信の単位で、以下のエントリーを追加してください。

```
ホスト名[/SQC],ポート番号
```

proxyサーバを使用したい場合は、次のように指定してください。

```
ホスト名[/SQC],ポート番号,proxyホスト名,proxyポート番号
```

■ 定義例

以下にagentlist.cfgの定義例を示します。

```
[AgentList]
host.company.co.jp,23440
100.100.100.100,23440
host2.company.co.jp/SQC,80
host3.company.co.jp/SQC,80,proxy.company.co.jp,8080
#100.100.100.100,23440
```

ポイント

- ・ ホスト名は、通信可能な名前を記述してください。IPアドレスでの設定も可能です。
- ・ 複数のAgentが存在する場合は、次の行に続けて記述してください。
- ・ ホスト名の後の/SQCは、AgentまたはProxy Manager側のHTTP通信環境が、Apacheなどの一般的なHTTPサービスを利用している場合に必要なエイリアス名です。本製品の提供機能を利用する場合は不要です。

■ Agentでの作業

AgentまたはProxy Manager側のHTTP通信環境として、本製品の提供機能を利用する場合、ポート番号はデフォルトで23440に設定されています。ポート番号を変更したい場合は、以下の定義ファイルを編集し(port=23440の箇所を変更)、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、Systemwalker SQC thttpdサービス/thttpdプロセスを再起動してください。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%thttpd.conf
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/thttpd.conf
```

■定義方法

```
cgipat=/cgi-bin/*  
chroot  
dir=C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\www  
port=23440
```

注意

対象のAgentがクラスタ運用の場合は、論理ホスト名または論理IPアドレスではなく、物理ホスト名または物理IPアドレスをそれぞれ定義してください。

4.4.2 Pull通信セットアップ

■実行環境

UNIX版のAgent/Proxy Managerで実行可能です(Windows版の場合、実行は不要です)。

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■本手順を行う前に

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービスデーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■記述形式

以下のPull通信セットアップコマンドを実行します。

以下のコマンドを実行します。

```
/opt/FJSVssqc/bin/pullsetup.sh
```

dcmdプロセスの再起動および、thttpdプロセスを使用する場合はthttpdプロセスを起動します。

dcmdプロセスおよびthttpdプロセスの起動方法については、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照してください。

4.4.3 PushからPullへの切り替え

ここでは、運用途中にPushからPullへ通信方式を切り替える手順について説明します。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。



Manager二重化運用を行っている場合は、いったん二重化運用の解除を行ってからPull/Pushの切り替えを実施して、再度二重化の設定を行ってください。

二重化の解除を行う場合は、リファレンスマニュアル「[sqcHaSetup\(Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド\)](#)」を参照してください。

4.4.3.1 Manager上での作業

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」を参照して、agentlist.cfgファイルを定義します。



Pull通信を行うには、ManagerでSystemwalker SQC sqcschdleサービス/sqcschdleプロセスを起動する必要があります。

4.4.3.2 Agent/Proxy Manager上での作業

■本手順を行う前に

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■手順

1. 定義ファイルの変更

定義ファイルの格納場所は以下のとおりです。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%Dsaconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/Dsaconfiguration.txt
```

変更方法を説明します。

変更前に、Dsaconfiguration.txtファイルのバックアップを取ってください。

- a. [DsaForwarder]、[DsaForwarder_sum]セクションのセクション名の最初に"*"(アスタリスク)を追加します。

- 変更前

```
[DsaForwarder]
[DsaForwarder_sum]
```

- 変更後

```
[*DsaForwarder]
[*DsaForwarder_sum]
```

- b. [DelayXfer]セクションのセクション名の最初の"*"(アスタリスク)を削除します。

- 変更前

```
[*DelayXfer]
```

- 変更後

```
[DelayXfer]
```

2. 使用ポート番号の定義

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」で示した、Pull通信で使用するポート番号を、以下のファイルに定義します。

【Windows版】

```
%SystemRoot%\system32\drivers\etc\services
```

【UNIX版】

```
/etc/services
```

■定義例

```
thttpd 23440/tcp
```

3. コマンドの実行

【Windows版】

コマンドの実行は不要です。

【UNIX版】

以下のPull通信セットアップコマンドを実行します。

以下のコマンドを実行します。

```
/opt/FJSVssqc/bin/pullsetup.sh
```

注意

- Pull運用を行う場合には、Webサーバの設定が必要です。「[第5章 通信環境のセットアップ](#)」を参照してセットアップを実施してください。

- 二重化運用を行っている場合は、いったん二重化運用の解除を行ってからPull/Pushの切り替えを実施して、再度二重化の設定を行ってください。

4. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

4.4.4 PullからPushへの切り替え

ここでは、運用中にPullからPushへ通信方式を切り替える手順について説明します。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。



Manager二重化運用を行っている場合は、いったん二重化運用の解除を行ってからPull/Pushの切り替えを実施して、再度二重化の設定を行ってください。

二重化の解除を行う場合は、リファレンスマニュアル「[sqcHaSetup\(Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド\)](#)」を参照してください。

4.4.4.1 Manager上での作業

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」を参照して、agentlist.cfgファイルを解除します。



Push通信を行う場合は、ManagerでSystemwalker SQC sqcschdleサービス/sqcschdleプロセスを起動しておく必要はありません。

4.4.4.2 Agent/Proxy Manager上での作業

■本手順を行う前に

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■手順

1. 定義ファイルの変更

定義ファイルの格納場所は以下のとおりです。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%\DSAconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/DSAconfiguration.txt
```

変更方法を説明します。

変更前に、DSAconfiguration.txtファイルのバックアップを取ってください。

- a. [DsaForwarder]、[DsaForwarder_sum]セクションのセクション名の最初の"*"(アスタリスク)を削除します。

- 変更前

```
[*DsaForwarder]  
[*DsaForwarder_sum]
```

- 変更後

```
[DsaForwarder]  
[DsaForwarder_sum]
```

- b. [DelayXfer]セクションのセクション名の最初に"*"(アスタリスク)を追加します。

- 変更前

```
[DelayXfer]
```

- 変更後

```
[*DelayXfer]
```

2. コマンドの実行

【Windows版】

コマンドの実行は不要です。

【UNIX版】

以下の方法でPull通信環境からPush通信環境に切り替えます。

以下のコマンドを実行します。




```
/opt/FJSVssqc/bin/pullsetup.sh -u
```

3. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

第5章 通信環境のセットアップ

本製品では、管理用の通信にHTTPを用いています。本章では、HTTP通信環境のセットアップ方法について説明します。HTTP通信環境のセットアップが必要になるのは、以下の場合です。

| インストール種別 | 説明 |
|---------------|---|
| 運用管理クライアント | <p>コンソールを表示するために必要です。</p> <p> ポイント</p> <p>.....</p> <p>仮想ディレクトリを設定するWebサーバがMicrosoft(R) Internet Information Servicesの場合、管理用の通信にHTTPSも利用可能です。</p> <p>.....</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>仮想ディレクトリを設定するWebサーバがMicrosoft(R) Internet Information Servicesの場合、設定手順は、「5.2.1 Microsoft(R) Internet Information Services」を参照してください。</p> <p>特に以下の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「5.2.1.5 ディレクトリ・セキュリティの設定」の匿名アクセスの設定、または「5.3 運用管理クライアント基本認証の設定方法」の基本認証の設定を行う必要があります。・ 指定するユーザーはAdministratorsグループに所属している必要があります。・ 以下の環境の場合、ポリシー配付機能は使用できません。<ul style="list-style-type: none">— 基本認証の設定を行った環境— 管理用の通信にHTTPSを利用する環境 <p>.....</p> |
| Manager | <p>Browser Agentが収集した情報を受信するサーバに指定する場合に必要です。</p> <p> 注意</p> <p>.....</p> <p>Managerがクラスタシステム運用の場合は、現用系サーバ・待機系サーバ両方で本設定を行ってください。(クラスタシステム運用はEnterprise Editionで提供される機能です。)</p> <p>.....</p> |
| Proxy Manager | <p>Browser Agentが収集した情報を受信するサーバに指定する場合に必要です。</p> <p>Pull方式でManagerと通信する場合で、かつ、本製品提供機能(thttpd)を使用せず、一般的なHTTPサービスを利用する場合に必要です。</p> |
| Agent | <p>Pull方式でManagerと通信する場合で、かつ、本製品提供機能(thttpd)を使用せず、一般的なHTTPサービスを利用する場合に必要です。</p> |

各インストール種別がサポートするHTTPサーバについては、「[第2章 インストール条件と資源見積り](#)」を参照してください。

5.1 仮想ディレクトリ

各サーバの仮想ディレクトリ(エイリアス)とパス名は以下のとおりです。

| サーバ種別 | エイリアス | 物理パス |
|---------------|-------|---|
| 運用管理クライアント | SSQC | <インストールディレクトリ>\¥www |
| Manager | SQC | 【Windows版】 <インストールディレクトリ>\¥www 【UNIX版】 /opt/FJSVssqc/www |
| Proxy Manager | SQC | 【Windows版】 <インストールディレクトリ>\¥www 【UNIX版】 /opt/FJSVssqc/www |
| Agent | SQC | 【Windows版】 <インストールディレクトリ>\¥www 【UNIX版】 /opt/FJSVssqc/www |

5.2 仮想ディレクトリの設定方法

管理サーバと通信するために、Webサーバに対して、仮想ディレクトリを登録する必要があります。
 ここでは、以下のWebサーバを例に、登録手順を説明します。

5.2.1 Microsoft(R) Internet Information Services

ここでは、Systemwalker Service Quality Coordinatorの利用にあたり必要となる、Microsoft(R) Internet Information Services(IIS)の設定方法について説明します。

設定手順は、以下のとおりです。

1. [5.2.1.1 仮想ディレクトリの作成](#)(インストール時に作成されなかった場合のみ)
2. [5.2.1.2 IISの設定](#)
3. [5.2.1.3 ハンドラマッピングの設定](#)
4. [5.2.1.4 CGIタイムアウト値の設定](#)
5. [5.2.1.5 ディレクトリ・セキュリティの設定](#)
6. [5.3 運用管理クライアント基本認証の設定方法](#)(コンソールの基本認証を行う場合のみ)

ポイント

以下の機能を有効にしてください。

- ・ HTTP 共通機能またはHTTP 基本機能
- ・ アプリケーション開発機能 - CGI

5.2.1.1 仮想ディレクトリの作成

運用管理クライアントのコンソールやPull方式でManagerと通信する場合などに使用する仮想ディレクトリの作成方法について説明します。

運用管理クライアントについては、以下の条件の場合、インストール時に仮想ディレクトリは自動的に作成されるので、作成不要です。

- ・ IISがインストールされている
- ・ WWWサービス(World Wide Web Publishing ServiceまたはWorld Wide Web 発行サービス)が起動している
- ・ 「Default Web Site」として設定されているサイトが存在している

注意

IISの設定が必要です。

「[5.2.1.2 IISの設定](#)」を参照し、コマンド/設定を実施してください。

仮想ディレクトリが作成されていない場合は、`sqlSetIISreg`コマンドを実行して、仮想ディレクトリを作成してください。

■本手順を行う前に

仮想ディレクトリを作成するコマンドを実行する場合、以下のことを確認してください。

- ・ IISがインストールされていること
- ・ WWWサービス(World Wide Web Publishing ServiceまたはWorld Wide Web 発行サービス)が起動していること
- ・ 「Default Web Site」として設定されているサイトが存在していること

■実行コマンド

コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行して、仮想ディレクトリの作成を行ってください。

注意

カレントディレクトリを、<インストールディレクトリ>%bin へ移動後、コマンドを実行してください。

```
cd <インストールディレクトリ>%bin
```

- ・ 運用管理クライアントの場合

```
sqlSetIISreg.exe -c
```

- ・ Managerの場合

```
sqlSetIISreg.exe -m
```

- ・ Proxy Managerの場合

```
sqlSetIISreg.exe -pm
```

- ・ Agentの場合

```
sqlSetIISreg.exe -a
```

注意

以下の条件の場合、コマンドがエラーとなることがあります。

- IISがインストールされていない場合。
- コマンドライン管理ツール(appCmd.exe)がインストールされていない場合
- すでに設定済みである場合。

5.2.1.2 IISの設定

IISの設定が必要です。

コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行してください。

注意

カレントディレクトリを、インストールディレクトリ¥bin へ移動後、コマンドを実行してください。

```
C:¥> cd <インストールディレクトリ>¥bin
```

- 運用管理クライアントの場合

```
sqccsetc_iis7.bat
```

- Managerの場合

```
sqcmsetc_iis7.bat
```

- Proxy Managerの場合

```
sqcpsetc_iis7.bat
```

- Agent for Serverの場合

```
sqcasetc_iis7.bat
```

- Agent for Businessの場合

```
sqcwsetc_iis7.bat
```

注意

コマンドを実行すると、CGIがMicrosoft(R) Internet Information ServicesにCGI拡張として登録されます。一度コマンドが実行されている場合、以下のようなエラーメッセージが複数出力される場合がありますが、CGIはすでに登録済みのため、問題ありません。

```
"* appcmd.exe C:¥Program Files¥Fujitsu¥SystemwalkerSQ-C¥www¥cgi-bin¥Rep_mk_history.cgi Failed."
```

```
ERROR ( message:新しい add オブジェクトに必要な属性が不足しています。一意のキー属性 'path' が 'C:¥Program Files ¥Fujitsu¥SystemwalkerSQ-C¥www¥cgi-bin¥rmmperform.cgi'に設定されている種類 'add' の重複コレクション エントリを追加できません。)
```

5.2.1.3 ハンドラマッピングの設定

■本手順を行う前に

ハンドラマッピングの設定を行う場合、IISの「Webサーバ」-「アプリケーション開発」、または「World Wide Webサービス」-「アプリケーション開発機能」で、「CGI」の機能が有効になっている必要があります。

注意

デフォルトのインストールでは、「CGI」の機能は無効になっています。手順を実行する前に、「CGI」の機能が有効になっているか確認し、無効の場合は有効化してください。

■手順

【Server Core環境の場合】

コマンドプロンプトから以下のコマンドを実行して、モジュールにマッピングを追加します。

- 要求パス : *.cgi
- モジュール : CgiModule
- 名前 : CGI-.cgi

```
%windir%\system32\inetsrv\appcmd set config /section:handlers /+  
[name='CGI-.cgi', path='*.cgi', verb='*', modules='CgiModule']
```

【Server Core環境以外の場合】

1. IISの設定画面から、以下の仮想ディレクトリ名を選択します。
 - 運用管理クライアントの場合
仮想ディレクトリ名 : SSQC
 - Manager/Proxy Manager/Agentの場合
仮想ディレクトリ名 : SQC
2. 右側の機能ビューで、「ハンドラーマッピング」をダブルクリックします。
3. 右側の操作メニューから「モジュール マップの追加…」を選択します。
4. 「モジュール マップの追加」ダイアログに以下の情報を設定し、OKボタンを押してください。
 - 要求パス : *.cgi
 - モジュール : CgiModule
 - 名前 : CGI-.cgi

5.2.1.4 CGIタイムアウト値の設定

IISのタイムアウト値を3600秒に延長します。

■手順

以下の手順でIISのタイムアウト値を変更します。

1. [<コンピュータ名>]→[サイト]→[Default Web Site]→[SSQC]→[cgi-bin]をクリックし、[CGI]をダブルクリックします。
2. [動作]の[タイムアウト (hh:mm:ss)]プロパティのタイムアウト値を1時間に変更します(01:00:00)。
3. [操作]ウィンドウで、[適用]をクリックします。

5.2.1.5 ディレクトリ・セキュリティの設定

■手順

以下のとおり設定してください。

1. IISの設定画面から、以下の仮想ディレクトリ名を選択します。
 - 運用管理クライアントの場合
仮想ディレクトリ名:SSQC
 - Manager/Proxy Manager/Agentの場合
仮想ディレクトリ名:SQC
2. 機能ビューで「認証」をダブルクリックします。
3. 「匿名認証」の状態が「有効」となっていることを確認し、「匿名認証」を選択して、右側の操作メニューから「編集...」を選択します。
4. 「匿名認証資格情報の編集」ダイアログボックスで、「特定のユーザー」を選択し、「設定...」ボタンをクリックします。
5. 「資格情報の設定」ダイアログボックスの、ユーザー名およびパスワードにAdministrator権限を持つユーザー(運用管理クライアントインストール時のアカウント)を設定します。

ポイント

.....
管理コンソールにアクセス制限を行う必要がある場合には、「5.3 運用管理クライアント基本認証の設定方法」を参照してください。
.....

5.2.2 Apache HTTP Server 1.3

■手順

【Windows版】

1. コンフィギュレーションファイルの編集

[スタート]メニューから以下のように選択し、コンフィギュレーションファイルを開きます。

[スタート]

→ [プログラム]

→ [Apache HTTP Server]

→ [Configure Apache Server]

→ [Edit the Apache httpd.conf Configuration File]

環境が上記と異なる場合は、コンフィギュレーションファイルhttpd.confを直接エディタで開いてください。

2. 仮想ディレクトリの設定

ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
ScriptAlias /<エイリアス>/cgi-bin/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin">
Options ExecCGI
AddHandler cgi-script .cgi
AllowOverride None
```



```
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
Alias /<エイリアス>/ "<インストールディレクトリ>/www/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www">
Options None
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
```

注意

- アクセス権などの設定は、必要に応じて適宜変更してください。
- 仮想ディレクトリの設定は、Apacheのバージョンによって異なります。詳細については、Apacheのマニュアルを参照してください。

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。Apache HTTP Serverが起動中の場合、再起動します。

【UNIX版】

1. コンフィギュレーションファイルの編集

エディタでコンフィギュレーションファイルを開きます。

2. 仮想ディレクトリの設定

仮想ディレクトリを設定します。
ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
ScriptAlias /<エイリアス>/cgi-bin/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin">
Options ExecCGI
AddHandler cgi-script .cgi
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
Alias /<エイリアス>/ "<インストールディレクトリ>/www/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www">
Options None
AllowOverride None
```

```
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
```

注意

- アクセス権などの設定は、必要に応じて適宜変更してください。
- 仮想ディレクトリの設定は、Apacheのバージョンによって異なります。詳細については、Apacheのマニュアルを参照してください。
- Apache2.0の初期状態では文字化けを起こす可能性がありますので、必要に応じて、下記の状態に設定してください。

AddDefaultCharset Off

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。Apache HTTP Serverが起動中の場合、再起動します。

5.2.3 Netscape(R) Enterprise Server 3.0

■手順

【Windows版】

1. サーバ・アドミニストレーション・ページの表示

[スタート]メニューから以下のように選択し、サーバ・アドミニストレーション・ページを表示します。

[スタート]

→ [プログラム]

→ [Netscape SuiteSpot]

→ [Administration]

環境が上記と異なる場合は、環境にあわせて操作してください。

2. 仮想ディレクトリの追加

仮想ディレクトリを追加するサーバを選択し、サーバ・マネージャー・ページを表示します。

仮想ディレクトリを作成します。

ページ上段の[Content Management]ボタンを選択し、次にページ左欄のリストで[Additional Document Directories]へのリンクを選択し、[Additional Document Directories]のページを表示します。

以下のとおり設定して[OK]ボタンを選択し、[Save and Apply Changes]のページが表示されたら[Save and Apply]ボタンを選択します。

URL Prefix: <エイリアス>

Map To Directory:<インストールディレクトリ>/www

3. CGIプログラムの実行の設定

作成した仮想ディレクトリ配下のディレクトリ/cgi-binにCGIプログラムの実行権を設定します。

ページ上段の[Programs]ボタンをクリックし、次にページ左欄のリストで[CGI Directory]を選択して[CGI Directory]のページを表示します。

以下のとおり設定して[OK]ボタンを選択し、[Save and Apply Changes]のページが表示されたら[Save and Apply]ボタンをします。

URL Prefix : <エイリアス>/cgi-bin

CGI Directory: <インストールディレクトリ>%www%cgi-bin

5.2.4 Interstage HTTP Server(Interstage Application Server同梱)

■手順

【Windows版】

1. Interstage HTTP Serverの環境定義ファイルの編集

エディタでInterstage HTTP Serverの環境定義ファイルを開きます。

以下に格納されている環境定義ファイルを編集します。

- Interstage Application Server V8.x 以前

```
C:%Interstage%F3FMihs%conf%httpd.conf
```

注) インストールパスがデフォルトの場合です。

- Interstage Application Server V9.x 以降

```
C:%Interstage%F3FMihs%servers%FJapache%conf%httpd.conf
```

注) インストールパスがデフォルトの場合です。

2. 仮想ディレクトリの設定

【運用管理クライアント以外の場合】

- a. 以下の行の先頭の「#」を削除して、CGIを有効にします。

```
LoadModule cgi_module "C:/Interstage/F3FMihs/modules/mod_cgi.so"
```

- b. ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
ScriptAlias /SQC/cgi-bin/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin">
Options ExecCGI
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
Alias /SQC/ "<インストールディレクトリ>/www/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www">
Options None
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
```

```
</Directory>
```

【運用管理クライアントの場合】

- a. 以下の行の先頭の「#」を削除して、CGIを有効にします。

```
LoadModule cgi_module "C:/Interstage/F3FMihs/modules/mod_cgi.so"
```

- b. MIMEの設定として以下を追加します。

```
AddType application/vnd.openxmlformats-officedocument.spreadsheetml.sheet .xlsx  
AddType application/vnd.ms-excel.sheet.macroEnabled.12 .xlsm
```

- c. ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
Alias /SSQC/cgi-bin/js/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/js/"  
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/js">  
Options None  
AllowOverride None  
Order allow,deny  
Allow from all  
</Directory>  
Alias /SSQC/cgi-bin/image/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/image/"  
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/image">  
Options None  
AllowOverride None  
Order allow,deny  
Allow from all  
</Directory>  
Alias /SSQC/cgi-bin/style/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/style/"  
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/style">  
Options None  
AllowOverride None  
Order allow,deny  
Allow from all  
</Directory>  
ScriptAlias /SSQC/cgi-bin/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/"  
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin">  
Options ExecCGI  
AllowOverride None  
Order allow,deny  
Allow from all  
</Directory>  
Alias /SSQC/ "<インストールディレクトリ>/www/"
```

```
<Directory "<インストールディレクトリ>/www">
Options None
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
```



アクセス権などの設定は、必要に応じて適宜変更してください。

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。Interstage HTTP Serverが起動中の場合、再起動します。

【UNIX版】

1. Interstage HTTP Serverの環境定義ファイルの編集

エディタでInterstage HTTP Serverの環境定義ファイルを開きます。

以下に格納されている環境定義ファイルを編集します。

- Interstage Application Server V8.x 以前

```
/etc/opt/FJSVihs/conf/httpd.conf
```

注) インストールパスがデフォルトの場合です。

- Interstage Application Server V9.x 以降

```
/var/opt/FJSVihs/servers/FJapache/conf/httpd.conf
```

注) インストールパスがデフォルトの場合です。

2. 仮想ディレクトリ設定

- 以下の行の先頭の「#」を削除して、CGIを有効にします。

```
LoadModule cgi_module "/opt/FJSVihs/modules/mod_cgi.so"
```

- ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
ScriptAlias /<エイリアス>/cgi-bin/ "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin/"
<Directory "<インストールディレクトリ>/www/cgi-bin">
Options ExecCGI
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
Alias /<エイリアス>/ "<インストールディレクトリ>/www/"
```

```
<Directory "<インストールディレクトリ>/www">
Options None
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
```

注意

アクセス権などの設定は、必要に応じて適宜変更してください。

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。Interstage HTTP Serverが起動中の場合、再起動します。

5.2.5 InfoProvider Pro(Interstage Application Server同梱)

■手順

【Windows版】

1. InfoProvider Proの環境定義ファイルの編集

エディタでInfoProvider Proの環境定義ファイルを開きます。

2. 仮想ディレクトリの設定

ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
cgi-path-ident: <インストールディレクトリ>%www%cgi-bin <エイリアス>/cgi-bin
link: <エイリアス> <インストールディレクトリ>%www
```

3. 設定保存

上書き保存してエディタを終了します。InfoProvider Proが起動中の場合、再起動します。

Interstage Standard Edition V2.0L20同梱より前のInfoProvider Proの場合

Interstage Standard Edition V2.0L20同梱よりも前のInfoProvider Proの場合、機能上の制約から上記のように設定できないので、以下のとおり設定してください。

1. 仮想ディレクトリ相当を作成

Webサーバが公開する最上位ディレクトリ下に新しいディレクトリ「<エイリアス>」を作成し、そこへ本製品のインストールディレクトリ下のディレクトリwww配下からcgi-binを除くすべてをコピーします。

エディタでコピー先のviewer.htmlを開き、<APPLET>タグの間に以下のように<PARAM>タグを追加します。

```
<APPLET codebase="./classes/" archive="viewer.jar" code="Viewer.class" width=950
height=512>
<PARAM name="CGI" value=http://xxx.yyy.com/<エイリアス>-cgi-bin/dbref.cgi>
</APPLET>
```

注意

上記の xxx.yyy.com は、Webサーバのホストアドレスです。環境にあわせて変更してください。

2. 設定の追加

エディタでInfoProvider Proの環境定義ファイルを開き、ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
cgi-path-ident: <インストールディレクトリ>¥www¥cgi-bin <エイリアス>-cgi-bin
```

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。InfoProvider Proが起動中の場合、再起動します。

【UNIX版】

1. InfoProvider Proの環境定義ファイルの編集

エディタでInfoProvider Proの環境定義ファイルを開きます。

2. 仮想ディレクトリの設定

ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
cgi-path-ident: <インストールディレクトリ>/www/cgi-bin <エイリアス>/cgi-bin
link: <エイリアス> <インストールディレクトリ>/www/cgi-bin
```

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。InfoProvider Proが起動中の場合、再起動します。

Interstage Standard Edition 3.0同梱よりも前のInfoProvider Proの場合

Interstage Standard Edition 3.0同梱よりも前のInfoProvider Proの場合、機能上の制約から上記のように設定できないので、以下のとおり設定してください。

1. 仮想ディレクトリ相当を作成

Webサーバが公開する最上位ディレクトリ下に新しいディレクトリ「<エイリアス>」を作成し、そこへ本製品のインストールディレクトリ下のディレクトリwww配下からcgi-binを除くすべてをコピーします。

エディタでコピー先のviewer.htmlを開き、<APPLET>タグの間に以下のように<PARAM>タグを追加します。

```
<APPLET codebase="./classes/" archive="viewer.jar" code="Viewer.class" width=950
height=512>
```

```
<PARAM name="CGI" value=http://xxx.yyy.com/<エイリアス>-cgi-bin/dbref.cgi>
</APPLET>
```

注意

上記の xxx.yyy.com は、Webサーバのホストアドレスです。環境にあわせて変更してください。

2. 設定の追加

エディタでInfoProvider Proの環境定義ファイルを開き、ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
cgi-path-ident: <インストールディレクトリ>/www/cgi-bin <エイリアス>-cgi-bin
```

3. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。InfoProvider Proが起動中の場合、再起動します。

5.3 運用管理クライアント基本認証の設定方法

運用管理クライアント上の以下のファイルに対し、基本認証を設定する場合の設定方法を説明します。

- 管理コンソールの起動HTML
- ユーザーの起動HTML (管理コンソールのユーザー定義で作成)

ポイント

ここでの基本認証の設定の前に、「5.2.1 Microsoft(R) Internet Information Services」の「5.2.1.5 ディレクトリ・セキュリティの設定」で示す、匿名アクセスの設定を行っておいてください。

注意

基本認証を設定した場合、ポリシー配付機能を使用できません。

基本認証の設定は、Windowsへのユーザーアカウントの登録、ファイルへのアクセス制御設定、および、Microsoft(R) Internet Information Services(IIS)でのファイル・セキュリティ設定の3段階で行います。

■手順

1. Windowsへのユーザーアカウントの登録

管理コンソール起動HTML、またはユーザーの起動HTMLにアクセスするためのユーザーアカウントを登録します。

- 管理コンソールにアクセスするためのユーザーは、通常使用しているAdministrator権限のアカウントを使用することも、新しくアカウントを作成して使用することもできます。

- 管理コンソールにアクセスするアカウントを新規に作成する場合、およびユーザーの起動HTMLにアクセスするアカウントを作成する場合のアカウントの種類(アクセス権)は、以降のステップの「2. ファイルへのアクセス制御設定」で設定するファイルの読み取り権を許可できるアカウントであれば、特に指定はありません。

[コントロールパネル] - [ユーザー アカウント]を開いて、ユーザーを登録してください。

登録方法はWindowsのヘルプなどを参照してください。

2. ファイルへのアクセス制御設定

1. エクスプローラで以下のフォルダを開きます。

<運用管理クライアントインストールディレクトリ>¥www

2. 「AdminConsole.html」または、「ユーザー名.html」をポイントして右クリックメニューから[プロパティ]を選択し、プロパティウィンドウを開きます。
3. [セキュリティ]タブを選択し、[グループ名またはユーザー名]に、アクセスを許可するユーザーを登録してください。その際、アクセスを許可したくないユーザーがすでに含まれている場合には、削除してください。
4. アクセスを許可するグループまたはユーザーへの[アクセス許可](アクセス権)は、最低限[読み取り]権限を許可してください。
5. [OK]ボタンにより定義を適用します。

3. IISでのファイル・セキュリティ設定

以下にIISでのファイル・セキュリティ設定の方法を示します。

1. IISの設定画面から、仮想ディレクトリ名SSQCを選択します。
2. 仮想ディレクトリ名SSQCをポイントして右クリックメニューから「コンテンツビューに切り替え」を選択すると、右側のウィンドウ領域に「AdminConsole.html」や「ユーザー名.html」を含むファイルが表示されます。
3. 右側のウィンドウ領域から「AdminConsole.html」または「ユーザー名.html」をポイントして右クリックメニューから「機能ビューに切り替え」を選択すると、左ペインのツリーに「AdminConsole.html」または「ユーザー名.html」が表示されます。
4. 左ペインの「AdminConsole.html」または「ユーザー名.html」を選択し、右側のウィンドウ領域で「認証」をクリックします。
5. 「認証」をダブルクリックし、「基本認証」の状態が「無効」となっている場合、「基本認証」をポイントして右クリックメニューから「有効にする」を選択します。

※ここで、「基本認証」が存在しない場合は、「基本認証」がインストールされていません。

「サーバーマネージャー」の「Web サーバ」-「役割サービスの追加」、または「サーバーマネージャー」の「管理」-「役割と機能の追加」-「サーバーの役割」-「Web サーバ(IIS)」-「Webサーバー」より[セキュリティ]-[基本認証]をチェックし、あらかじめインストールを実施しておいてください。

6. その他の認証方式が「有効」となっている場合は「無効」にします。

以上で基本認証の設定は完了です。

第6章 導入環境の変更

本章では、運用モデルの変更手順や、ManagerのIPアドレスの変更などについて説明します。

6.1 Proxy Managerによる中継モデルへの変更

本手順は、すでに「[3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル](#)」を導入している環境からProxy Managerによる中継モデルに移行する場合に行う手順です。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- ・ [6.1.1 Proxy Managerでの作業](#)
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Proxy Managerのセットアップ
 3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- ・ [6.1.2 Agentでの作業](#)

6.1.1 Proxy Managerでの作業

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照して、Proxy Managerのインストールを実施してください。

2. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.1.2 Agentでの作業

「[6.4.1 Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更](#)」を参照して、Agentが認識するManagerのIPアドレスをProxy ManagerのIPアドレスに変更してください。

EE

6.2 Managerの二階層運用モデルへの変更

本手順は、すでに「[3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル](#)」を導入している環境からManagerの二階層運用モデルの導入に移行する場合に行う手順です。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

- [6.2.1 Enterprise Managerでの作業](#)
 1. Enterprise Managerのインストール
 2. 通信環境の設定
 3. Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [6.2.2 Managerでの作業](#)
 1. Managerの二階層運用セットアップ
 2. Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [6.2.3 Proxy Managerでの作業](#)
 1. Proxy Managerのインストール
 2. Proxy Managerのセットアップ
 3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- [6.2.4 運用管理クライアントでの作業](#)

6.2.1 Enterprise Managerでの作業

1. Enterprise Managerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してEnterprise Managerのインストールを実施してください。

2. Enterprise Managerの通信環境の設定

ホスト名を使ってManagerと通信できない場合、管理対象となるManagerのホスト名とIPアドレスをhostsファイルに設定してください。

3. Enterprise Managerのセットアップ

ポイント

Enterprise ManagerでAgentの機能を使用してEnterprise Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Enterprise Managerのセットアップを実施してください。Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、`sqcRPolicy`、および`sqcSetPolicy`を実行してください。

4. Enterprise Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.2.2 Managerでの作業

1. Managerの二階層運用セットアップ

「[A.3 Managerの二階層運用セットアップコマンド](#)」を参照して、`sqcEmSetup`を実行してください。

2. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.2.3 Proxy Managerでの作業

ポイント

Proxy Manager上で、エンドユーザーレスポンス管理を行う場合は、Proxy Managerでの作業を実施してください。

エンドユーザーレスポンス管理については、使用手引書「[エンドユーザーレスポンス管理](#)」を参照してください。

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してProxy Managerのインストールを実施してください。

2. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

3. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.2.4 運用管理クライアントでの作業

「6.4.2 運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更」を参照して、運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレスの変更をしてください。

ポイント

.....
環境設定のManagerの登録の際、Enterprise ManagerをManagerとして登録します。
.....



6.3 Managerの二重化運用モデルへの変更

本手順は、すでに「3.5 ManagerとAgentで構成する基本モデル」を導入している環境からManagerの二重化運用モデルの導入に移行する場合に行う手順です。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

ポイント

.....
Managerの二重化運用を行う場合、それぞれのManagerに運用管理クライアントを接続する必要があります。
.....

- 6.3.1 2台目のManagerでの作業
 1. 2台目のManagerのインストール
 2. Managerの二重化運用Managerセットアップ
 3. 2台目のManagerのセットアップ
 4. 2台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認
- 6.3.2 Proxy Managerでの作業
 1. Proxy Managerのインストール

2. Proxy Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ
 3. Proxy Managerのセットアップ
 4. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認
- 6.3.3 Agentでの作業
 1. Managerの二重化運用Agentのセットアップ
 2. Agentのサービス/デーモンの起動と確認
 - 6.3.4 2台目の運用管理クライアントでの作業
 1. 2台目の運用管理クライアントのインストール
 2. 2台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ
 3. 2台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

6.3.1 2台目のManagerでの作業

1. 2台目のManagerのインストール

「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照してManagerのインストールを実施してください。

2. Managerの二重化運用Managerセットアップ



.....
Pull運用時にのみ、Managerの二重化運用Managerセットアップを実施してください。
.....

「A.4 Managerの二重化運用Managerセットアップコマンド」を参照して、sqcHmSetupを実行してください。

3. 2台目のManagerのセットアップ



.....
ManagerでAgentの機能を使用してManager自身の性能情報を収集したい場合は、2台目のManagerのセットアップを実施してください。ManagerにAgentをインストールする必要はありません。
.....

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

4. 2台目のManagerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.3.2 Proxy Managerでの作業

ポイント

Proxy Manager上で、エンドユーザーレスポンス管理を行う場合は、Proxy Managerでの作業を実施してください。
エンドユーザーレスポンス管理については、使用手引書「エンドユーザーレスポンス管理」を参照してください。

1. Proxy Managerのインストール

「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」または「[3.2 サイレントインストール](#)」を参照してProxy Managerのインストールを実施してください。

2. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ

「[A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド](#)」を参照して、`sqcHaSetup`を実行してください。

3. Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy ManagerでAgentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、`sqcRPolicy`、および`sqcSetPolicy`を実行してください。

4. Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.3.3 Agentでの作業

1. Agentのサービス/デーモンの停止と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. Managerの二重化運用Agentセットアップ

1. 「[A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド](#)」を参照して、`sqcHaSetup`を実行してください。
2. `sqcSetPolicy`コマンドを適用します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJVSsqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

`sqcSetPolicy`の詳細については、リファレンスマニュアル「`sqcSetPolicy`(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

3. Agentのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.3.4 2台目の運用管理クライアントでの作業

1. 2台目の運用管理クライアントのインストール

「3.1.3 運用管理クライアントのインストール」または「3.2 サイレントインストール」を参照して、運用管理クライアントのインストールを実施してください。

ポイント

2台目の運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレスは、2台目のManagerのアドレスを指定してください。

2. 2台目の運用管理クライアントの通信環境セットアップ

運用管理クライアントでは、HTTPの仮想ディレクトリの設定、および仮想ディレクトリのプロパティ設定を行う必要があります。「第5章 通信環境のセットアップ」を参照して、セットアップしてください。

3. 2台目の運用管理クライアントのコンソールの起動と確認

Webブラウザに以下のURLを指定して、コンソールが起動するか確認してください。

```
http://運用管理クライアントのホスト名/SSQC/AdminConsole.html
```

環境設定については、「使用手引書(コンソール編)」を参照してください。

6.4 ManagerのIPアドレス/ホスト名の変更

ManagerのIPアドレス/ホスト名を変更する場合は、本節の作業を行う必要があります。

Managerで自身の性能情報を収集している場合は、本節の作業に加えて、「6.10 AgentのIPアドレス/ホスト名の変更」の作業が必要です。

6.4.1 Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更

AgentおよびProxy Managerでコマンドを実行し、ManagerのIPアドレス/ホスト名を変更します。

ポイント

- Pull運用の場合、ManagerのIPアドレス/ホスト名の変更時に作業は必要はありません。Pull運用については、「第4章 Pull型通信設定」を参照してください。
- Managerをリブレース等で別のマシンに移行する場合は、「6.5 Managerの移行」を参照してください。

- 現在Agent/Proxy Managerが認識しているManagerのIPアドレス/ホスト名は、`sqcSetMgrInfo`(Agent/Proxy Manager用)コマンドの`-v`オプションで確認することができます。コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「`sqcSetMgrInfo`(Agent/Proxy Manager用)」を参照してください。

■本手順を行う前に

AgentまたはProxy ManagerのSystemwalker SQC DCMサービスまたは`dcmd`プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、Systemwalker SQC DCMサービスまたは`dcmd`プロセスが停止しているか確認してください。

■手順

1. `sqcSetMgrInfo`(Agent/Proxy Manager用)コマンドの実行

以下のコマンドを実行します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetMgrInfo.bat -h <ホスト名またはIPアドレス>
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetMgrInfo.sh -h <ホスト名またはIPアドレス>
```

コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「`sqcSetMgrInfo`(Agent/Proxy Manager用)」を参照してください。

2. サーバ内リソース情報収集ポリシー作成

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、`sqcSetPolicy`を実行してください。

3. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.4.2 運用管理クライアントが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更

ポイント

運用管理クライアントが認識しているManagerのIPアドレス/ホスト名は、`sqcSetMgrInfo`(運用管理クライアント用)コマンドの`-v`オプションで確認することができます。コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「`sqcSetMgrInfo`(運用管理クライアント用)」を参照してください。

運用管理クライアントで以下のコマンドを実行することにより、ManagerのIPアドレス/ホスト名を変更します。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetMgrInfo.exe -p IPアドレス|ホスト名
```

コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「`sqcSetMgrInfo`(運用管理クライアント用)」を参照してください。

注意

本コマンドを実行する場合は、管理者権限で実行してください。

注意

Managerと運用管理クライアントが同一マシンの場合でも、「localhost」を指定しないでください。必ず、接続するManagerのホスト名またはIPアドレスを指定してください。

6.5 Managerの移行

既存の運用環境のManagerを別のManagerに移行する場合、以下の2つの形態があります。

- ・ 移行元のManagerの構成情報のみ引き継ぐ
PDBは新規作成するが、旧環境のAgentの構成情報を引き継ぐ場合
- ・ 移行元のManagerのPDBをそのまま引き継ぐ
PDBを移行元のManagerから移行先のManagerに移入し、現在までにAgentから取得した性能情報および、Agentの構成情報を引き継ぐ場合

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■本手順を行う前に

移行元のManagerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

以下に、それぞれの形態でのManagerの移行方法を説明します。

6.5.1 移行元のManagerの構成情報のみ引き継ぐ場合

以下の手順を実施してください。

■手順

1. 移行元のManagerのPDBから、構成情報を取得

以下のコマンドを実行して、移行元のManagerから構成情報をファイル出力します。その際、-n オプションで、移行先のManagerのホスト名を指定します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcPDBexport.bat -o folder_path [-n host_name]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcPDBexport.sh -o folder_path [-n host_name]
```

■ オプション

-o folder_path

構成情報のデータファイル(agententry.tmp)を出力するフォルダのパスを指定します。

-n host_name

構成情報の移行先のManagerのホスト名を指定します。省略した場合は、そのままのホスト名の構成情報になります。

sqcPDBexportの詳細についてはリファレンスマニュアル「sqcPDBexport(構成情報移行コマンド)」を参照してください。

2. 移行先のManagerのインストール

「[3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール](#)」を参照し、移行先のManagerを新規にインストールします。

注意

移行先のManagerと移行元のManagerにおいて、以下のディレクトリ構成が同じになるようにインストールしてください。

- 性能データベースのサマリデータの格納先ディレクトリ
- 性能データベースのリソースデータの格納先ディレクトリ

3. 構成情報を移行先のManagerに移入

「1. 移行元のManagerのPDBから、構成情報を取得」で出力した構成情報ファイルを、移行先のManagerの、以下のフォルダに置きます。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%transfer%DsaPDBWriter
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/temp/DsaPDBWriter
```

60秒ほどで、PDBに格納されます。その際、「agententry.tmp」ファイルは削除されます。

4. ManagerのIPアドレス変更

「[6.4 ManagerのIPアドレス/ホスト名の変更](#)」を参照し、ManagerのIPアドレス変更を行ってください。

5. サービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.5.2 移行元のManagerのPDBをそのまま引き継ぐ場合

以下の手順を実施してください。

■手順

1. 移行元のManagerから、PDBをバックアップ

使用手引書「PDBファイル」を参照し、移行元のManagerからPDBファイルをバックアップします。

2. 移行元のManagerのPDBから、構成情報を取得

以下のコマンドを実行して、移行元のManagerから構成情報をファイル出力します。その際、-n オプションで、移行先のManagerのホスト名を指定します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcPDBexport.bat -o folder_path -n host_name
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcPDBexport.sh -o folder_path -n host_name
```

■オプション

-o folder_path

構成情報のデータファイル(agententry.tmp)を出力するフォルダのパスを指定します。

-n host_name

構成情報の移行先のManagerのホスト名を指定します。

sqcPDBexportの詳細についてはリファレンスマニュアル「sqcPDBexport(構成情報移行コマンド)」を参照してください。

3. 移行先のManagerをインストール

「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」を参照し、移行先のManagerを新規にインストールします。

注意

移行先のManagerと移行元のManagerにおいて、以下のディレクトリ構成が同じになるようにインストールしてください。

- 性能データベースのサマリデータの格納先ディレクトリ
- 性能データベースのリソースデータの格納先ディレクトリ

4. 移行元のManagerのPDBを、移行先のManagerにコピー

「1. 移行元のManagerから、PDBをバックアップ」でバックアップしておいた移行元のPDBを、移行先のManagerの、同様のパスにコピーします。

5. 移行元のManagerの構成情報を移行先のManagerにコピー

「2. 移行元のManagerのPDBから、構成情報を取得」で出力した移行元の構成情報ファイルを、移行先のManagerの、以下のフォルダに置きます。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%transfer%DsaPDBWriter
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/temp/DsaPDBWriter
```

6. 移行先のManagerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

7. ManagerのIPアドレス変更

ManagerのIPアドレスが変わる場合は、ManagerのIPアドレス変更を実施する必要があります。「6.4 ManagerのIPアドレス/ホスト名の変更」を参照し、実施してください。

6.6 性能データベース(PDB)/アーカイブファイル

6.6.1 PDB/アーカイブファイル格納先の変更

Managerの物理ディスクを、サマリデータ、リソースデータ、およびアーカイブファイルで3つに分けることによって、1つのManagerで管理できるAgentの数を300台程度まで増やすことができます。

サマリデータ、リソースデータを別ディスクに格納する場合は、「6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ」を、アーカイブファイルを別ディスクに格納する場合は「6.6.1.2 アーカイブファイル格納先の変更」を参照してください。



UNIX版の場合、変更先のディレクトリのパスに空白を含めることはできません。

6.6.1.1 PDB格納先の変更

性能データベースは以下の種類のファイルで構成されています。

性能データベースの格納先は、ファイルの種類ごとに変更することができます。変更方法はファイルの種類によって異なります。

| ファイル名 | 説明 | 変更方法 |
|-------------------------------|--|---|
| pdb.dat | 管理用のデータが格納される単一ファイルです。 通常、別の場所に移動する必要はありません。 | 6.6.1.1.1 管理データ |
| pdb_SUMMARY_yyyymmdd_Dccc.dat | サマリデータが格納されるファイルです。1日ごとに生成されます。PDBファイルはUTC標準時で切り替わります。 ・ファイル名のyyymmddは、ファイルが作成された日の日付になります。 | 6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ (旧版からの運用で管理データを移動している場合は) |

| ファイル名 | 説明 | 変更方法 |
|-----------------------------|--|------------------------------|
| | <ul style="list-style-type: none"> ファイル名のDcccは、D(固定文字)+ccc(3桁の数字)になります。例) D001 | 「6.6.1.1.1 管理データ」も参照してください。） |
| pdb_10MIN_yyyymmdd_Dccc.dat | <p>リソースデータ(10分)が格納されるファイルです。1日ごとに生成されます。PDBファイルはUTC標準時で切り替わります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ファイル名のyyymmddは、ファイルが作成された日の日付になります。 ファイル名のDcccは、D(固定文字)+ccc(3桁の数字)になります。例) D001 | |
| pdb_1HR_yyyymmdd_Wccc.dat | <p>リソースデータ(1時間)が格納されるファイルです。1週間ごとに生成されます。PDBファイルはUTC標準時で切り替わります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ファイル名のyyymmddは、ファイルが作成された週の曜日の日付になります。 ファイル名のWcccは、W(固定文字)+ccc(3桁の数字)になります。例) W001 | |
| pdb_1DAY_yyyymmdd_Mccc.dat | <p>リソースデータ(1日)が格納されるファイルです。1月ごとに生成されます。PDBファイルはUTC標準時で切り替わります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ファイル名のyyymmddは、ファイルが作成された月の月初めの日付になります。 ファイル名のMcccは、M(固定文字)+ccc(3桁の数字)になります。例) M001 | |

ポイント

PDBの格納先を変更した場合は、ディスクスペースの空き領域を監視する対象の追加を検討してください。

追加する方法については、「6.12 ディスクスペースの空き領域の監視」を参照してください。

6.6.1.1.1 管理データ

性能データベースの格納先の初期値を変更する場合の手順です。管理データ(pdb.dat)の格納先が性能データベースの格納先の初期値となります。

格納先の初期値を別の場所に移動する場合は、以下の手順を行ってください。

注意

クラスタ運用のためのセットアップを行っている場合 (sqcsetupclp/sqcsetupcls(クラスタセットアップコマンド)を実行済みの場合)は、可変ファイル格納ディレクトリは、共用ディスクに移動しています。

参考

性能データベースの格納先は、通常、別の場所に移動する必要はありません。

1. サービス/デーモンの停止と確認

性能データベースを移動する際は、Enterprise Manager/Managerのサービス/デーモンが起動している場合は、「付録 B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. PDBファイルの移動

以下のディレクトリ配下に格納されているPDBファイル(pdb.dat、サマリデータ、リソースデータ)を、任意のディレクトリに移動します。

インストール直後はPDBファイルは存在しません。ディレクトリの作成のみ行ってください。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%data%
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/PDB/
```



移動先のデータベースパスに、マルチバイト文字は使用しないでください。

3. DSAconfiguration.txtファイルの変更

以下の定義ファイル内の、データベースパスを変更します。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%Dsaconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/Dsaconfiguration.txt
```

上記定義ファイル内の、以下に赤字で示すデータベースパスを、新しいパスに変更してください。

■ 定義例

【Windows版】

```
[DsaPDBWriter]
database=D:%SQ%data%pdb.dat
[DsaPDBWriter_sum]
database=D:%SQ%data%pdb.dat
[DsaPDBReader]
database=D:%SQ%data%pdb.dat
[PDBMANAGE]
command=pdb_manage.exe -d "D:%SQ%data%pdb.dat"
```

4. pdbmgr.txtファイルの変更

以下の定義ファイル内の、データベースパスを変更します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%setup%pdbmgr.txt
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/setup/pdbmgr.txt
```

上記定義ファイル内の、以下に赤字で示すデータベースパスを、新しいパスに変更してください。

■定義例

【Windows版】

```
[PDBMANAGE]  
command=pdb_manage.exe -d "D:¥SQCYdata¥pdb.dat"
```

引き続き、「6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ」を実施し、サマリデータおよびリソースデータの格納先を変更してください。

6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ

性能データベースのサマリデータおよびリソースデータを、初期値の格納先から別の場所に移動する場合は、以下の手順を行ってください。

注意

クラスタ運用のためのセットアップを行っている場合 (sqcsetupclp/sqcsetupcls(クラスタセットアップコマンド)を実行済みの場合)は、可変ファイル格納ディレクトリは、共用ディスクに移動しています。

1. サービス/デーモンの停止と確認

性能データベースを移動する際は、Enterprise Manager/Managerのサービス/デーモンが起動している場合は、「[付録 B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. PDBファイルの移動

以下のディレクトリ(「6.6.1.1.1 管理データ」に示す手順によって、性能データベース(管理データ)の格納先が変更されている場合は、管理データの移動先)配下に格納されているPDBファイル(サマリデータおよびリソースデータ)を、任意のディレクトリに移動します。
インストール直後はPDBファイルは存在しません。ディレクトリの作成のみ行ってください。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>¥data¥
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/PDB/
```

移動するPDBファイルは、以下のファイル名のものです。ファイルの種類ごとに移動先を変えることができます。

- サマリデータ用PDBファイルを移動する場合
pdb_SUMMARY_yyyymmdd_Dccc.dat
- リソースデータ(10分)用PDBファイルを移動する場合
pdb_10MIN_yyyymmdd_Dccc.dat

- リソースデータ(1時間)用PDBファイルを移動する場合
pdb_1HR_yyyymmdd_Wccc.dat
- リソースデータ(1日)用PDBファイルを移動する場合
pdb_1DAY_yyyymmdd_Mccc.dat

注意

PDBファイルの格納先ディレクトリパスに、マルチバイト文字は使用しないでください。

3. PDBファイルの格納先変更コマンドの実行

移動先のディレクトリ名を指定して、以下のコマンドを実行します。コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「[sqlSetPDBStore\(PDBファイルの格納先変更コマンド\)](#)」を参照してください。

ポイント

Managerで管理できるAgentの数を300台程度まで増やすために、Managerの物理ディスクを、サマリデータ、リソースデータ、およびアーカイブファイルで3つに分ける運用の場合、[sqlSetPDBStore\(PDBファイルの格納先変更\)](#)コマンドで、サマリデータとリソースデータ(10分/1時間/1日)を別の物理ディスクのディレクトリに指定してください。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqlSetPDBStore.bat -M|-m|-h|-d -S directory-name
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSSV/sql/bin/sqlSetPDBStore.sh -M|-m|-h|-d -S directory-name
```

■オプション

-M

サマリデータ用のPDBファイルの操作を行うことを意味します。

-m

リソースデータ(10分)用のPDBファイルの操作を行うことを意味します。

-h

リソースデータ(1時間)用のPDBファイルの操作を行うことを意味します。

-d

リソースデータ(1日)用のPDBファイルの操作を行うことを意味します。

-S <格納先ディレクトリパス名>

PDBファイルの格納先を、指定したディレクトリパスに変更します。

-M,-m,-h,-dオプションとともに指定して、それぞれのオプションの意味するPDBファイルの格納先を変更します。

指定するディレクトリパス名は絶対パスで指定してください。

4. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

- PDBファイルを初期値(「6.6.1.1.1 管理データ」に示す手順によって、性能データベース(管理データ)の格納先が変更されている場合は、管理データの移動先)の格納先に戻す場合も、上記と同様に以下の手順で行ってください。
 1. サービス/デーモンの停止と確認
 2. PDBファイルの初期値の格納先への移動
 3. PDBファイルの格納先変更コマンドの実行
-Sオプションの代わりに-Rオプションを指定してください。
 4. サービス/デーモンの起動と確認
- PDBファイルの格納先は、-M,-m,-h,-dオプションとともに-Vオプションを指定することで確認することができます。

6.6.1.2 アーカイブファイル格納先の変更

アーカイブファイルを別の場所に移動する場合は、以下の手順を行ってください。

注意

クラスタ運用のためのセットアップを行っている場合(sqcsetupclp/sqcsetupcls(クラスタセットアップコマンド)を実行済みの場合)は、可変ファイル格納ディレクトリは、共用ディスクに移動しています。

1. サービス/デーモンの停止と確認

性能データベースを移動する際は、Enterprise Manager/Managerのサービス/デーモンが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. アーカイブファイルの移動

【Windows版】

以下のディレクトリ配下に格納されている、BackupPDBinsert_state.dat以外のすべてのファイルを、任意のディレクトリに移動します。

インストール直後はアーカイブファイルは存在しません。ディレクトリの作成のみ行ってください。

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%spool%\BackupPDBinsert\
```

注意

BackupPDBinsert_state.datは移動しないでください。

【UNIX版】

以下のディレクトリ配下のファイルすべてを、任意のディレクトリに移動します。

インストール直後はアーカイブファイルは存在しません。ディレクトリの作成のみ行ってください。

```
/var/opt/FJSVssqc/BackupPDBinsert/
```



注意

移動先のアーカイブファイル格納パスに、マルチバイト文字は使用しないでください。

3. DSAconfiguration.txtファイルの変更

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%Dsaconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/Dsaconfiguration.txt
```

上記定義ファイル内の、[BackupPDBinsert]セクションのout_dirパラメーターの内容を、新しいパスに変更してください。変更箇所を以下に赤字で示します。

■変更箇所

```
[BackupPDBinsert]
execute_style=on
path=dsa_file.exe
～中略～
# dsa_file specific parameters
out_dir=%WORKING_DIRECTORY%BackupPDBinsert
out_file=pdbinsert_%c_%n.txt
check_interval=60
operation=CYCLE
cycle_num=3
new_file_interval=86400
new_file_start=0
```

■定義例

【Windows版】

```
[BackupPDBinsert]
execute_style=on
path=dsa_file.exe
～中略～
# dsa_file specific parameters
out_dir=D:BackupPDBinsert
out_file=pdbinsert_%c_%n.txt
check_interval=60
operation=CYCLE
```

```
cycle_num=3
new_file_interval=86400
new_file_start=0
```

4. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.6.2 PDB保持期間の変更

PDBに格納する、サマリ/リソースデータの保持期間を変更する手順を説明します。

6.6.2.1 サマリデータの保持期間の変更

サマリデータの保持期間を変更するための手順を説明します。Enterprise Manager/Managerで作業を実施してください。

ポイント

サマリデータの保持期間を延ばすと、保持期間に比例してサマリ画面の表示に時間が掛かりますので、注意してください。「2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について」を参考にして、設定する保持期間を検討してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■実施環境

本手順は、Enterprise Manager/Manager上で実施します。

■手順

sqlSetPDBManageの実行

sqlSetPDBManage(PDBの保持期間変更コマンド)を実行します。

詳細については、リファレンスマニュアル「sqlSetPDBManage(PDBの保持期間変更コマンド)」を参照してください。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqlSetPDBManage.bat -M <保持期間> | -s
```

【UNIX版】

```
/opt/FJVSsql/bin/sqlSetPDBManage.sh -M <保持期間> |-s
```

■オプション

-M <保持期間>

サマリデータの保持期間を、1～65536の整数で設定します。(単位:日)

保持期間に比例してサマリ画面の表示に時間が掛かりますので、31日を推奨します。

-s

現在の保持期間設定値を表示します。

6.6.2.2 リソースデータの保持期間の変更

リソースデータ(10分/1時間/1日)の保持期間を変更するための手順を説明します。Enterprise Manager/Managerで作業を実施してください。

PDBに格納する、各性能データの保持期間のデフォルト設定は以下になります。

- ・ リソースデータ(10分) :7日
- ・ リソースデータ(1時間) :6週間
- ・ リソースデータ(1日) :13か月

各保持期間を変更する必要がある場合は、本手順を実施してください。

注意

保持期間を延ばすと、保持期間に比例してディスクの使用領域が増加しますので、注意してください。保持期間変更時のデータ容量の見積りは、「[2.1.1.2 性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り方法について](#)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■実施環境

本手順は、Enterprise Manager/Manager上で実施します。

■手順

sqlSetPDBManageの実行

sqlSetPDBManage(PDBの保持期間変更コマンド)を実行します。

詳細については、リファレンスマニュアル「sqlSetPDBManage(PDBの保持期間変更コマンド)」を参照してください。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqlSetPDBManage.bat -m <保持期間> | -h <保持期間> | -d <保持期間> | -s
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqlSetPDBManage.sh -m <保持期間> | -h <保持期間> | -d <保持期間> | -s
```

■オプション

-m <保持期間>

リソースデータ(10分)の保持期間を、1～65536の整数で設定します。(単位:日)

-h <保持期間>

リソースデータ(1時間)の保持期間を、1～65536の整数で設定します。(単位:週)

-d <保持期間>

リソースデータ(1日)の保持期間を、1～65536の値で設定します。(単位:月)

-s

現在の保持期間設定値を表示します。

6.6.3 アーカイブファイル切り替え時刻の変更

アーカイブファイルの切り替え時刻を変更する場合は、以下の定義ファイル内の切り替え時刻の変更が必要です。

■手順

1. サービス/デーモンの停止と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. template.datの編集

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%template.dat
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/template.dat
```

上記定義ファイル内の、切り替え時刻[SWITCHTIME]の値を“hh:mm”の形式で、ローカルタイムで指定します。初期値は、“00:00”です。

■定義例

【Windows版】

```
[BCKPDBINS]  
SWITCHTIME=00:00
```

【UNIX版】

```
[BCKPDBINS]  
SWITCHTIME=00:00
```

3. ポリシーの適用

変更を適用するため、sqcSetPolicyを実行します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

sqcSetPolicyの詳細については、リファレンスマニュアル「sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

4. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

アーカイブファイルの格納先を変更した場合は、ディスクスペースの空き領域を監視する対象の追加を検討してください。追加する方法については、「6.12 ディスクスペースの空き領域の監視」を参照してください。

6.7 ログデータ(Troubleshoot)

ログデータ(Troubleshoot)に関する変更手順について説明します。

6.7.1 ログデータ(Troubleshoot)出力先の変更

ログデータ(Troubleshoot)の出力先を別の場所に変更する場合は、以下の定義ファイル(template.dat)内のログデータ出力パスの変更が必要です。

■手順

1. サービス/デーモンの停止と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. template.datの編集

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%template.dat
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/template.dat
```

上記定義ファイル内の、ログデータ出力パス[OUTDIR1]の値を、任意のディレクトリのフルパスに変更してください。

注意

UNIX版の場合、変更先のディレクトリのパスに空白を含めることはできません。

■ 定義例

【Windows版】

```
[TRS]
DCAID="TRS"
EXECUTESTYLE1=ON
INTERVAL1=5
CYCLENUM1=7
OUTDIR1=%WORKING_DIRECTORY%Troubleshoot1
SWITCHTIME=00:00
```

"%WORKING_DIRECTORY" は、インストール時に指定した"可変ファイル格納ディレクトリ%spool"を示すマクロです。

【UNIX版】

```
[TRS]
DCAID="TRS"
EXECUTESTYLE1=ON
INTERVAL1=5
CYCLENUM1=7
OUTDIR1=%VARIABLE_DIRECTORY/Troubleshoot1
SWITCHTIME=00:00
```

"%VARIABLE_DIRECTORY" は、インストール時に指定した"可変ファイル格納ディレクトリ"を示すマクロです。

ポイント

- 本手順では、以前のディレクトリのログファイルはそのままに、新しいディレクトリに新規のログファイルが作成されます。以前のログファイルが必要ない場合は削除してください。
- 以前のディレクトリと新しいディレクトリのどちらのログファイルも、保持期間が過ぎたものから順に削除されます。

3. ポリシーの適用

変更を適用するため、`sqcSetPolicy`を実行します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSSvsq/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

`sqcSetPolicy`の詳細については、リファレンスマニュアル「`sqcSetPolicy`(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

4. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

ポイント

ログデータの格納先を変更した場合は、ディスクスペースの空き領域を監視する対象の追加を検討してください。

追加する方法については、「6.12 ディスクスペースの空き領域の監視」を参照してください。

6.7.2 ログデータ(Troubleshoot)保持期間の変更

インストール時に設定したログデータ(Troubleshoot)の保持期間を変更する場合は、以下の定義ファイル内の保持期間の変更が必要です。

注意

ログデータ(Troubleshoot)の保持期間を変更する前に、「2.2.1.2 ログデータ(Troubleshoot)容量の見積り方法について」を参照し、ディスクの容量不足が発生しないことを確認してください。

■手順

1. サービス/デーモンの停止と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. Troubleshootディレクトリ内のファイルの退避

Troubleshootディレクトリ内のファイルを別のディレクトリに退避、または、必要ない場合は削除してください。

3. template.datの編集

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%template.dat
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/template.dat
```

上記定義ファイル内の、保持期間[CYCLENUM1]の値に、保持期間の日数(1~30の整数)を指定します。初期値は、“7”日です。

■定義例

【Windows版】

```
[TRS]
DCAID="TRS"
EXECUTESTYLE1=ON
INTERVAL1=5
CYCLENUM1=7
OUTDIR1=%WORKING_DIRECTORY¥Troubleshoot1
SWITCHTIME=00:00
```

【UNIX版】

```
[TRS]
DCAID="TRS"
EXECUTESTYLE1=ON
INTERVAL1=5
CYCLENUM1=7
OUTDIR1=%VARIABLE_DIRECTORY/Troubleshoot1
SWITCHTIME=00:00
```

4. ポリシーの適用

変更を適用するため、sqcSetPolicyを実行します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>¥bin¥sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

sqcSetPolicyの詳細については、リファレンスマニュアル「sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

5. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.7.3 ログデータ(Troubleshoot)切り替え時刻の変更

ログデータ(Troubleshoot)の切り替え時刻を変更する場合は、以下の定義ファイル内の切り替え時刻の変更が必要です。

■手順

1. サービス/デーモンの停止と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. template.datの編集

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%\template.dat
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/template.dat
```

上記定義ファイル内の、切り替え時刻[SWITCHTIME]の値を“hh:mm”の形式で、ローカルタイムで指定します。初期値は、“00:00”です。

■定義例

【Windows版】

```
[TRS]
DCAID="TRS"
EXECUTESTYLE1=ON
INTERVAL1=5
CYCLENUM1=7
OUTDIR1=%WORKING_DIRECTORY%\Troubleshoot1
SWITCHTIME=00:00
```

【UNIX版】

```
[TRS]
DCAID="TRS"
EXECUTESTYLE1=ON
INTERVAL1=5
CYCLENUM1=7
OUTDIR1= %VARIABLE_DIRECTORY/Troubleshoot1
SWITCHTIME=00:00
```

3. ポリシーの適用

変更を適用するため、sqcSetPolicyを実行します。

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

sqcSetPolicyの詳細については、リファレンスマニュアル「sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

4. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.8 リソースデータ収集条件の変更

■リソースデータの収集条件

本製品では、インストール型Agentまたはインストールレス型Agentにて性能情報を一定の間隔で収集し、収集したデータをもとに、レポートを表示するために必要なリソースデータ(10分データ、1時間データ、1日データ)を作成します。これらの情報は、以下の条件を満たす場合に作成されます。

- ・ 1分間隔で収集する情報(インストール型Agentで収集するOSの性能情報など)の場合

| 作成するリソースデータ | 必要な収集データ量の条件 |
|-------------|------------------------|
| 10分データ | 10分のうち、70%(1分データ7個)以上 |
| 1時間データ | 1時間のうち、70%(1分データ42個)以上 |
| 1日データ | 1日のうち、1%(1分データ15個)以上 |

- ・ 5分間隔で収集する情報(Oracle VM Server for SPARCの性能情報など)の場合

| 作成するリソースデータ | 必要な収集データ量の条件 |
|-------------|-----------------------|
| 10分データ | 10分のうち、70%(5分データ2個)以上 |
| 1時間データ | 1時間のうち、70%(5分データ9個)以上 |
| 1日データ | 1日のうち、1%(5分データ3個)以上 |

■リソースデータ収集条件解除手順(10分データ、1時間データ)

10分データ、1時間データのリソースデータの収集条件の設定を解除する場合は、以下の手順を実施してください。インストール型Agentの場合はAgentで、また、インストールレス型Agentの場合は監視サーバで行います。

本手順により、インストール型Agentまたはインストールレス型Agentで収集されるすべてのリソースデータ(10分データ、1時間データ)は、データの個数に依存せずに作成されます。

1. サービス/デーモンの停止と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. DSAconfiguration.txtファイルの変更

■格納場所

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%DSAconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/DSAconfiguration.txt
```

本ファイルについて、以下のとおり変更を行います。

【変更前】

```
[TIS_CONSOLIDATE]
:
#Specify coverage where <coverage> = percentage e.g. 70 for 70%
tis_arg=COVERAGE,MINIMUM,70
:
```

【変更後】

```
[TIS_CONSOLIDATE]
:
#Specify coverage where <coverage> = percentage e.g. 70 for 70%
tis_arg=COVERAGE,MINIMUM,1
:
```

3. セットアップ

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

4. サービス/デーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.9 レポート格納先の分割

レポートの管理フォルダをコンソール定義単位に分割する手順について説明します。

レポート格納先を分割させることで、以下のような運用に効果があります。

- ・ データセンターなどの大規模システムで、データセンターの顧客単位、または部署単位でレポートを管理したい。

■手順

以下の手順で実施してください。

なお、レポート格納先はコンソール定義単位となるため、事前にコンソール定義を作成しておく必要があります。作成方法については、使用手引書(コンソール編)「コンソール定義」を参照してください。

1. レポート管理フォルダの準備

エクスプローラより、レポート管理フォルダに設定するディレクトリの作成を行ってください。

※レポート管理フォルダのフルパスには、全角文字は使用できません。

2. レポート管理フォルダ変更定義ファイルの作成

以下の定義形式、記述例を参考にして、サンプルファイル(sqcSetcondir.sample)のエイリアスおよびレポート管理フォルダのパスを修正し、sqcSetcondir.iniファイルを作成してください。

■ 作成ファイル名および格納先

```
<運用管理クライアントインストールディレクトリ>%www%control%sqcSetcondir.ini
```

■ サンプルファイル

```
<運用管理クライアントインストールディレクトリ>%www%control%sqcSetcondir.sample
```

■ 定義形式

```
[コンソール定義名]  
Alias = alias_name  
LocalPath = local_path
```

- [コンソール定義名]

セクション名には、レポート管理フォルダを変更するコンソール定義名を指定してください。

- alias_name

コンソール定義名を指定してください

- local_path

レポート管理フォルダのフルパスを指定してください

※レポート管理フォルダのフルパスには、全角文字は使用できません。

■ 記述例 (DefaultConsoleのレポート管理フォルダを、"D:%SQC_REPORT"に変更する場合。)

```
[DefaultConsole]  
Alias = DefaultConsole  
LocalPath = "D:%SQC_REPORT"
```

3. 仮想ディレクトリの設定

仮想ディレクトリの設定を行います。以下の2つのWebサーバの設定方法を説明します。

<IISの場合>

下記の設定コマンドを実行する場合、事前にWWWサービス(World Wide Web Publishing ServiceまたはWorld Wide Web 発行サービス)が起動している必要があります。以下のコマンドを実行して設定を行ってください。

```
<運用管理クライアントインストールディレクトリ>%bin%sqcSetIISreg.exe -e "alias_name" -d "local_path"
```

※alias_nameおよび、local_pathは、上記手順2.で指定した文字列を設定します。

■ 実行例

```
"C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQL-C\bin%sqcSetIISreg.exe" -e DefaultConsole -d D:  
%SQC_REPORT
```

<Interstage HTTP Server(Interstage Application Server同梱)の場合>

a. Interstage HTTP Serverの環境定義ファイルの編集

エディタでInterstage HTTP Serverの環境定義ファイルを開きます。

以下に格納されている環境定義ファイルを編集します。

- Interstage Application Server V8.x 以前

```
C:\Interstage\F3FMihs\conf\httpd.conf
```

注) インストールパスがデフォルトの場合です。

- Interstage Application Server V9.x 以降

```
C:\Interstage\F3FMihs\servers\FJapache\conf\httpd.conf
```

注) インストールパスがデフォルトの場合です。

b. 仮想ディレクトリの設定

ファイルの最後に以下の行を追加します。

```
Alias /<エイリアス>"/<レポート格納先フォルダのフルパス>"
<Directory "<レポート格納先フォルダのフルパス>">
Options None
AllowOverride None
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
```

c. 設定の保存

上書き保存してエディタを終了します。Interstage HTTP Serverが起動中の場合、再起動します。



注意

アクセス権などの設定は、必要に応じて適宜変更してください。

4. 履歴と定義ファイルのコピー

以下のディレクトリをレポート管理フォルダ配下にコピーまたは、移動してください。

```
<運用管理クライアントインストールディレクトリ>\www\html\ConsoleEnvironments\コンソール定義名
```

6.10 AgentのIPアドレス/ホスト名の変更

AgentのIPアドレス/ホスト名を変更する場合は、本節の作業を行う必要があります。

Managerで自身の性能情報を収集している環境で、ManagerのIPアドレス/ホスト名を変更する場合は、「[6.4 ManagerのIPアドレス/ホスト名の変更](#)」の作業に加えて、本節の作業を行う必要があります。



ポイント

現在設定されているIPアドレス/ホスト名は、`sqcSetPolicy`(ポリシー適用コマンド)の`-v`オプションで確認することができます。コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「`sqcSetPolicy`(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

■AgentのIPアドレスを変更する場合

- Pull運用を行っていて、Pull通信定義でIPアドレスを設定している場合

「[4.4.1 Pull通信定義](#)」および「[4.4.2 Pull通信セットアップ](#)」を参照して定義およびセットアップを行ってください。

- インストールレス型Agentの場合

監視サーバにて、リモート監視定義ファイル(remoteAgent.txt)の"HOSTNAME"にIPアドレスが設定されている場合、IPアドレスを変更後、必要に応じて"[HOSTNAME]"および"DISPLAYNAME"を変更します。詳細は使用手引書「リモート監視定義ファイル」を参照してください。その後、sqcSetPolicyを実行します。詳細は「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照してください。

- ポリシー配付機能を使用している場合

接続先定義ファイル(agentlist.cfg)にて、接続先としてAgentのIPアドレスを指定している場合は、IPアドレスを変更してください。詳細は、使用手引書「接続先定義ファイルの作成」を参照してください。

IPアドレス変更後のAgentで、-pオプションに変更後のIPアドレスを指定してsqcSetPolicyを実行します。詳細は「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照してください。

■Agentのホスト名を変更する場合



コンソールでは、ホスト名変更前のAgentと変更後のAgentは別のAgentとして扱われます。変更前のAgentで収集した性能情報を、変更後のAgentに引き継ぐことはできません。

1. 定義ファイルを修正します。

- インストールレス型Agentの場合

監視サーバにて、リモート監視定義ファイル(remoteAgent.txt)の"HOSTNAME"にホスト名が設定されている場合、ホスト名を変更後、必要に応じて"[HOSTNAME]"および"DISPLAYNAME"を変更してください。詳細は使用手引書「リモート監視定義ファイル」を参照してください。その後、sqcSetPolicyを実行します。詳細は「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照してください。

- ポリシー配付機能を使用している場合

接続先定義ファイル(agentlist.cfg)にて、接続先としてAgentのホスト名を指定している場合は、ホスト名を変更してください。詳細は使用手引書「接続先定義ファイルの作成」を参照してください。

2. ホスト名変更後のAgentで、-hオプションに変更後のホスト名を指定してsqcSetPolicyを実行します。詳細は「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照してください。

3. 管理コンソールの定義画面にて、変更後のAgentを登録します。詳細は、使用手引書(コンソール編)「Agents」または「未登録Agent情報の登録」を参照してください。

4. Pull運用を行っていて、Pull通信定義でホスト名を設定している場合は、「[4.4.1 Pull通信定義](#)」および「[4.4.2 Pull通信セットアップ](#)」を参照して定義およびセットアップを行ってください。

5. 変更前のAgentをコンソールから削除したい場合は、管理コンソールのAgent設定画面にて削除します。Agent設定画面の詳細は、使用手引書(コンソール編)「Agents」を参照してください。

さらに、変更前のAgentで収集した性能情報が不要な場合は、リファレンスマニュアル「sqcPDBerase(データ削除コマンド)」を参照して削除してください。

6.11 Agent/Proxy Managerの未送信データの削除

Agent/Proxy ManagerからManagerへ送信するデータは、一時的に可変ファイル格納ディレクトリ配下のDsaForwarder/DsaForwarder_sumに保持されます。

DsaForwarderディレクトリにはリソースデータが、DsaForwarder_sumディレクトリにはサマリデータがそれぞれ保持されます。なお、Managerが二重化運用されている場合には、DsaForwarder2、DsaForwarder2_sumのディレクトリも使用されます。

Managerとの通信が途絶えた場合、通信が再開されるまでは、このディレクトリ配下にデータが蓄積されることになります。

注意

データ送信の不通の状態が長く続くと、未送信データでディスクが圧迫されます。可変ファイル格納ディレクトリのディスクの空き容量が50MB (デフォルトの場合)を下回ると警告メッセージ、10MB (デフォルトの場合)を下回るとエラーメッセージを出力してAgent/Proxy Managerは動作を停止します。

ただし、ディスクの空き容量が十分あっても未送信データのファイル数が一定量(約30000ファイル)を超えた場合には、ディスクの使用量を抑えるために、60分間隔で日付の古いファイルから自動的に削除します。ファイルが削除された場合、削除した期間の性能データに抜けが発生します。

なお、一時ファイルには、sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)実行時に内部で作成される構成情報も含まれます。そのため、Agent側においてセットアップしてからManagerと通信できない状況が続く場合、構成情報も含めて削除される可能性があります。

Agent側の構成情報が削除された場合は、管理コンソールにおいて、未登録Agent(UnregisteredAgents)配下に、該当のAgentのホスト名が表示されません。この場合、Agent側において、sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)を再度実施してください。

警告メッセージや、エラーメッセージが頻発して業務に影響する場合は、「[6.12 ディスクスペースの空き領域の監視](#)」を参照して、監視値の変更を実施してください。

蓄積されたファイルが不要となり、手動で削除したい場合は、以下の手順で削除してください。

■本手順を行う前に

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービスデーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■格納場所

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%transfer%DsaForwarder  
<可変ファイル格納ディレクトリ>%transfer%DsaForwarder_sum
```

【UNIX版】

```
/var/opt/FJSVssqc/temp/DsaForwarder  
/var/opt/FJSVssqc/temp/DsaForwarder_sum
```

■手順

1. Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレスの確認

確認方法については、「[6.4.1 Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更](#)」を参照してください。

2. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの確認

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが停止しているかを確認します。

停止の確認については、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照してください。

3. DsaFowarder/DsaForwarder_sumディレクトリ内のファイルの削除

DsaFowarder/DsaForwarder_sumディレクトリ内のファイルを削除してください。



注意

DsaFowarder/DsaForwarder_sumディレクトリは削除しないでください。

4. Agent/Proxy Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.12 ディスクスペースの空き領域の監視

Systemwalker Service Quality Coordinatorは通常、可変ファイル格納ディレクトリとして設定したディスクスペースの空き領域を以下の条件で監視しています。

- 空き領域が50MBを割り込んだとき、警告メッセージを出力する。
- 空き領域が10MBを割り込んだとき、異常メッセージを出力し、動作を停止する。

警告メッセージやエラーイベントが頻発して業務に影響する場合、システムの状況によってしきい値を変更したい場合、または監視するディスクスペースを追加する場合は、本手順を実施してください。

■本手順を行う前に

Systemwalker SQC DCMサービスまたはdcmdプロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、Systemwalker SQC DCMサービスまたはdcmdプロセスが停止しているか確認してください。

■手順

1. DSAconfiguration.txtを修正します。

■格納場所

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%\DSAconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/DSAconfiguration.txt
```

spacemonセクションのmonitor_freeを修正します。

■修正前

```
#####  
[spacemon]  
execute_style=on  
path=%BASE_DIRECTORY/bin/dsa_spacemon  
# dsa_spacemon specific parameters  
check_interval=10  
warn_interval=5  
record_type=SQC3CONTROL  
monitor_free=50,10,%VARIABLE_DIRECTORY ★デフォルト監視設定  
#####
```

※"%VARIABLE_DIRECTORY"は、インストール時に指定した「可変ファイルディレクトリ」を示すマクロです。

デフォルトでは、警告値が50MB、異常値が10MB に設定されています。
状況に応じて、任意の値(単位MB)に変更してください。

ポイント

空き領域を監視するディスクスペースを追加する場合は、上記定義ファイル内のmonitor_freeの行を複製して、"%VARIABLE_DIRECTORY"の部分をも、監視するディレクトリのフルパス名に変更してください。

定義例

```
#####  
[spacemon]  
:  
monitor_free=50,10,%VARIABLE_DIRECTORY  
monitor_free=50,10,E:¥work¥PDB ★複製して変更  
:  
#####
```

2. サービス/デーモンの起動と確認を行います。

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.13 セキュア通信

Push型通信では、通信相手を制限して通信セキュリティを確保することができます。

以降、手順を説明します。

注意

本節で説明する内容は、Push型通信時のみ有効です。Pull型通信とは併用できませんので注意してください。

6.13.1 通信相手を制限する

Manager/Proxy Manager/Enterprise Managerでは、以下の手順により、通信相手となるManager/Proxy Manager/Agentを制限することができます。

■手順

1. Managerのサービス/デーモンの停止と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

2. DSAconfiguration.txtファイルの編集

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>\control\DSAconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/DSAconfiguration.txt
```

本ファイルの、[DsaListener] セクション内のgrant_accessキーに、通信を許す通信相手のIPアドレスを設定します。以下に、設定例を示します。

```
[DsaListener]
:
grant_access=100.100.100.100
grant_access=100.100.100.101,100.100.100.102
:
```

ポイント

- grant_accessキーは、複数指定することができます。
- IPアドレスにはワイルドカードが使えます。例: grant_access=100.100.100.*, *.100.100.100
- IPアドレスのレンジを指定することができます。例: grant_access=100.100.100.100-100.100.100.200
- ワイルドカードとレンジを併用することができます。例: grant_access=100.100.100.*-100.100.200.*
- すべてを許可する場合、grant_access=*と定義します。grant_accessキーそのものを省略した場合も、すべての相手が許可されます。
- すべてを制限する場合、grant_access=と定義します。

注意

本定義による通信制限は、運用管理クライアントからの定義操作のための通信も対象になります。したがって、本サーバに運用管理クライアントを接続する場合、`grant_access`キーに、運用管理クライアントのIPアドレスを忘れないように設定してください。

3. サービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

6.14 syslogの設定について

【UNIX版】

Systemwalker Service Quality Coordinatorのエラーメッセージはsyslogの2つのfacilityでログ出力を行います。

メッセージのロギングを行うためには `daemon.log` および `user.log` を `/etc/syslog.conf` にてロギングする設定にする必要があります。

`syslog.conf`の記述方法および`syslogd`については `syslog.conf(4)` および `syslogd(1M)`のマニュアルを参照してください。

| facility.level | プロセス |
|----------------|-------|
| daemon.err | dcmd |
| user.err | dsa_* |

以下に`syslog.conf`の設定例を示します。

```
daemon.err /var/adm/messages
user.err /var/adm/messages
```

6.15 IPv6環境での運用設定

IPv6環境での運用に関する設定手順について説明します。

6.15.1 ManagerでIPv6環境との通信の追加

IPv6環境のAgent/Proxy Managerを管理する場合、Managerは通常のIPv4環境との通信に加えて、IPv6環境との通信も可能にする必要があります。以下にIPv6環境との通信を追加する手順を示します。

■本手順を行う前に

Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■手順

1. 定義ファイルの変更

定義ファイルの格納場所は以下のとおりです。

【Windows版】

```
<可変ファイル格納ディレクトリ>%control%\DSAconfiguration.txt
```

【UNIX版】

```
/etc/opt/FJSVssqc/DSAconfiguration.txt
```

変更方法を説明します。

変更前に、DSAconfiguration.txtファイルのバックアップを取ってください。

- a. [DsaListenerIPv6]、[DsaPDBReaderIPv6]セクションのセクション名の最初の"*"(アスタリスク)を削除します。

- 変更前

```
[*DsaListenerIPv6]  
[*DsaPDBReaderIPv6]
```

- 変更後

```
[DsaListenerIPv6]  
[DsaPDBReaderIPv6]
```

- b. 管理データ(pdb.dat)の格納先を変更している場合

[DsaPDBReaderIPv6]セクションのdatabaseパラメーターの内容を、変更後の管理データ(pdb.dat)の格納先のパスに変更してください。

■ 定義例

【Windows版】

```
[DsaPDBReaderIPv6]  
database=D:%SQC\data\pdb.dat
```

2. Managerのサービス/デーモンの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

第7章 アップグレードインストール

本ソフトウェアを、旧バージョンから新バージョンに、アップグレードを行う場合のインストール手順を説明します。

注意

- Enterprise Manager、Manager、および運用管理クライアントは、バージョンレベルを合わせてください。
バージョン混在運用を行う場合は、「第8章 バージョン混在運用」を参照してください。
- 32bit版から64bit版へのアップグレードインストールはできません。
- 異なるインストール種別間のアップグレードインストールはできません。
- アップグレードの際、以下のディレクトリは変更できません。
 - 【Windows版】
 - インストールディレクトリ
 - 可変ファイル格納ディレクトリ
 - 【UNIX版】
 - インストールディレクトリ
 - 定義ファイル格納ディレクトリ
 - 可変ファイル格納ディレクトリ
- RHEL7版からRHEL8版へ、およびRHEL8版からRHEL7版へのアップグレードインストールはできません。
- アップグレードインストールを行うと、Managerの二階層運用、Managerの二重化運用、および、インストール後の運用途中に行ったPull/Pushの通信方式の切り替え設定は解除されます。アップグレードインストール後、再度設定を実施してください。
- クラスタシステム運用されているManagerをアップグレードする場合は、一度クラスタ運用を解除し、アップグレード後、再度クラスタ運用設定を実施してください。
- V13.0.0以降V13.4.0以前からアップグレードする場合は、アップグレード前のサマリデータ/モニタデータは参照することができませんが、アーカイブファイルとして出力されているデータについてはリストアすることにより参照することができます。
- SAP NetWeaverの性能情報を収集している環境で、V13.4.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqcGetSAPalertmon.ini)のPASSWORDに定義しているパスワードを暗号化してください。
定義の方法は、使用手引書「接続パラメーター定義ファイル」を参照してください。
- Oracle Database Serverの性能情報を収集している環境で、V13.5.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat) - [ORA]セクションのPASSに定義しているパスワードを暗号化してください。
定義の方法は、使用手引書「Oracle Database Serverの管理設定」を参照してください。
- 旧版からの非互換項目については、「第10章 互換に関する情報」で確認してください。

7.1 Manager/Enterprise Manager【EE】での作業

Manager/Enterprise Managerのアップグレードインストールの手順を、以下に示します。

7.1.1 Windows版のアップグレード手順

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■本手順を行う前に

Manager/Enterprise Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービスを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

ポイント

クラスタシステム運用されているManagerをアップグレードする場合は、一度クラスタ運用を解除してください。

クラスタ運用の解除の手順は、「9.3 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用でのアンインストール」を参照し、クラスタアンセットアップコマンドの実行まで実施してください。

■手順

1. アーカイブファイルのバックアップ

V13.4.0以前からアップグレードする場合は、PDBファイルの変換が行われるため、アップグレードインストール前のサマリデータ/モニタデータは参照することができません。ただし、アーカイブファイルとして出力されているデータについては参照することができます。

必要に応じて使用手引書「アーカイブファイル」を参照し、アーカイブファイルをバックアップしてください。

注意

Manager/Enterprise Managerのサービスが停止した状態でバックアップを実施してください。

2. Manager/Enterprise Managerのアップグレードインストール

初回インストールと同様に「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」に従ってManager/Enterprise Managerのインストールを開始します。

なお、アップグレードインストールでは自動で以下のことが行われます。

- サービスの停止
- 前回のインストール時の問い合わせ項目での入力情報を引き継いだ上書きインストール
- 上書き対象外の定義ファイルのバックアップ

注意

V13.2.0以前からEnterprise Managerをアップグレードインストールする場合、ログ(Troubleshoot)の保持期間はデフォルト(7日)で設定されます。

変更が必要な場合は、「6.7.2 ログデータ(Troubleshoot)保持期間の変更」を参照して、変更してください。

3. 上書き対象外の定義ファイルに行われていたユーザー定義の反映

上書きできないファイルが、<可変ファイル格納ディレクトリ>%SystemwalkerSQC¥control配下、および<インストールディレクトリ>%SystemwalkerSQC¥bin配下に、以下のファイル名でバックアップされています。

- "ファイル名VnnLnn.拡張子" または "ファイル名Vnnn.拡張子"
(VnnLnn,Vnnn部分は、アップグレード前のバージョンレベルです)

上記、バックアップ対象のファイルは以下になります。以下のファイルに修正を加えた場合は、バックアップファイルを基に、再度、編集作業を行ってください。

- DSAconfiguration.txt
- template.dat
- threshold.bat
- udataconf.ini

ポイント

バックアップファイルは、編集の有無に係わらず作成されます。

4. アップグレードインストール後の設定

アップグレードインストールする環境が以下の条件に該当する場合は、再度設定を実施してください。

- Managerの二階層運用の場合

Managerで二階層運用セットアップを再度実施してください。

手順の詳細は「[6.2.2 Managerでの作業](#)」の「1. Managerの二階層運用セットアップ」を参照してください。

- クラスタシステム運用の場合

Manager/Enterprise Managerでクラスタシステム運用のクラスタセットアップおよびリソース登録を再度実施してください。

手順の詳細は「[3.9 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用モデル](#)」を参照してください。

- V13.4以前からアップグレードして、SAP NetWeaverの性能情報を収集する場合

SAP NetWeaverの性能情報を収集している環境で、V13.4.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqcGetSAPalertmon.ini)のPASSWORDに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「[接続パラメーター定義ファイル](#)」を参照してください。

- V13.5以前からアップグレードして、Oracle Database Serverの性能情報を収集する場合

Oracle Database Serverの性能情報を収集している環境で、V13.5.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat) - [ORA]セクションのPASSに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「[Oracle Database Serverの管理設定](#)」を参照してください。

- 性能データベースの格納先を変更している場合

- 管理データ(pdb.dat)の格納先を変更している場合

管理データ(pdb.dat)格納先の変更手順を再度実施してください。

手順の詳細は、「[6.6.1.1.1 管理データ](#)」を参照してください。

- サマリデータおよびリソースデータの格納先を変更している場合

サマリデータおよびリソースデータ格納先の変更手順を再度実施してください。

手順の詳細は、「[6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ](#)」を参照してください。

5. Manager/Enterprise Managerのセットアップ

ポイント

Manager/Enterprise Managerで、Agentの機能を使用してManager/Enterprise Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Manager/Enterprise Managerのセットアップを実施してください。アップグレード前にManager/Enterprise Manager自身の性能情報を収集していた場合も、改めてセットアップが必要です。Manager/Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

6. Manager/Enterprise Managerのサービスの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービスを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

7. アーカイブファイルのリストア

V13.4以前からアップグレードする場合で、PDBファイルの変換前にアーカイブファイルとして出力されていたデータを参照する場合は、使用手引書「アーカイブファイル」を参照し、手順1.でバックアップしたアーカイブファイルをリストアしてください。

7.1.2 UNIX版のアップグレード手順

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■本手順を行う前に

Manager/Enterprise Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

ポイント

クラスタシステム運用されているManagerをアップグレードする場合は、一度クラスタ運用を解除してください。

クラスタ運用の解除の手順は、「9.4 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用でのアンインストール」を参照し、クラスタアンセットアップコマンドの実行まで実施してください。

PRIMECLUSTERで、OracleまたはSymfowareの待機側のメッセージを抑制している場合(トラブルシューティングガイド「PRIMECLUSTERでOracle/Symfowareの待機側のメッセージを抑制する方法」参照)は、作成したスクリプトファイルをあらかじめバックアップし、アップグレードインストール後にリストアしてください。

■手順

1. /var/opt/FJSVssqc/配下のファイルバックアップ

/var/opt/FJSVssqc/配下のファイルをバックアップしておきます。

注意

- Manager/Enterprise Managerのデーモンが停止した状態でバックアップを実施してください。
- ファイルにはPDBが含まれます。データサイズが大きくなるので、バックアップ先の領域サイズに注意してください。

2. Manager/Enterprise Managerのアップグレードインストール

初回インストールと同様に「3.1.1 Manager/Enterprise Manager【EE】のインストール」に従ってManager/Enterprise Managerのインストールを開始します。

なお、アップグレードインストールでは自動で以下のことが行われます。

- デーモンの停止
- その他定義ファイル(/etc/opt/FJSVssqc/配下)の退避
- 旧バージョンパッケージのアンインストール
- 前回の問い合わせ項目での入力情報を引き継いだインストール。
- 退避してあったその他定義ファイルの書き戻し

3. /var/opt/FJSVssqc/配下のファイルの書き戻し

手順1.でバックアップしておいた、/var/opt/FJSVssqc/配下のファイルを、元のパスに書き戻します。ただし、以下のファイルは除きます。

- <バックアップディレクトリ>/var/opt/FJSVssqc/PDB/pdb.dat

4. 上書き対象外の定義ファイルに行われていたユーザー定義の反映

上書きできないファイルが、/etc/opt/FJSVssqc配下、および/opt/FJSVssqc/bin配下に、以下のファイル名でバックアップされています。

- "ファイル名VnnLnn.拡張子" または "ファイル名Vnnn.拡張子"
(VnnLnn,Vnnn部分は、アップグレード前のバージョンレベルです)

上記、バックアップ対象のファイルは以下になります。以下のファイルに修正を加えた場合は、バックアップファイルを基に、再度、編集作業を行ってください。

- DSAconfiguration.txt
- template.dat
- threshold.sh
- udataconf.ini

5. アップグレードインストール後の設定

アップグレードインストールする環境が以下の条件に該当する場合は、再度設定を実施してください。

- Managerの二階層運用の場合

Managerで二階層運用セットアップを再度実施してください。

手順の詳細は「[6.2.2 Managerでの作業](#)」の「1. Managerの二階層運用セットアップ」を参照してください。

- クラスタシステム運用の場合

Manager/Enterprise Managerでクラスタシステム運用のクラスタセットアップおよびリソース登録を再度実施してください。

手順の詳細は「[3.10 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用モデル](#)」を参照してください。

- V13.4以前からアップグレードして、SAP NetWeaverの性能情報を収集する場合

SAP NetWeaverの性能情報を収集している環境で、V13.4.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqcGetSAPalertmon.ini)のPASSWORDに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「接続パラメーター定義ファイル」を参照してください。

- V13.5以前からアップグレードして、Oracle Database Serverの性能情報を収集する場合

Oracle Database Serverの性能情報を収集している環境で、V13.5.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat) - [ORA]セクションのPASSに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「Oracle Database Serverの管理設定」を参照してください。

- 性能データベースの格納先を変更している場合
 - 管理データ(pdb.dat)の格納先を変更している場合
管理データ(pdb.dat)格納先の変更手順を再度実施してください。
手順の詳細は、「[6.6.1.1.1 管理データ](#)」を参照してください。
 - サマリデータおよびリソースデータの格納先を変更している場合
サマリデータおよびリソースデータ格納先の変更手順を再度実施してください。
手順の詳細は、「[6.6.1.1.2 サマリデータおよびリソースデータ](#)」を参照してください。

6. Manager/Enterprise Managerのセットアップ

ポイント

.....

Manager/Enterprise Managerで、Agentの機能を使用してManager/Enterprise Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Manager/Enterprise Managerのセットアップを実施してください。アップグレード前にManager/Enterprise Manager自身の性能情報を収集していた場合も、改めてセットアップが必要です。Manager/Enterprise ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

.....

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、sqcRPolicy、およびsqcSetPolicyを実行してください。

7. Manager/Enterprise Managerのデーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

8. アーカイブファイルのリストア

V13.4以前からアップグレードする場合は、PDBファイルの変換が行われるため、アップグレードインストール前のサマリデータ/モニタデータは参照することができません。ただし、アーカイブファイルとして出力されているデータについては参照することができます。

V13.4以前からアップグレードする場合で、PDBファイルの変換前にアーカイブファイルとして出力されていたデータを参照する場合は、使用手引書「アーカイブファイル」を参照し、手順1.でバックアップしたアーカイブファイルをリストアしてください。

7.2 Agent/Proxy Managerでの作業

Agent/Proxy Managerのアップグレードインストールの手順を、以下に示します。

7.2.1 Windows版のアップグレード手順

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■本手順を行う前に

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービスを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

1. Agent/Proxy Managerのアップグレードインストール

初回インストールと同様に「[3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール](#)」に従ってAgent/Proxy Managerのインストールを開始します。

なお、アップグレードインストールでは自動で以下のことが行われます。

- サービスの停止
- 前回の問い合わせ項目での入力情報を引き継いだ上書きインストール
- 上書き対象外の定義ファイルのバックアップ

2. 上書き対象外の定義ファイルに行われていたユーザー定義の反映

上書きできないファイルが、<可変ファイル格納ディレクトリ>%SystemwalkerSQControl配下、および<インストールディレクトリ>%SystemwalkerSQBin配下に、以下のファイル名でバックアップされています。

- "ファイル名VnnLnn.拡張子" または "ファイル名Vnnn.拡張子"
(VnnLnn,Vnnn部分は、アップグレード前のバージョンレベルです)

上記、バックアップ対象のファイルは以下になります。以下のファイルに修正を加えた場合は、バックアップファイルを基に、再度、編集作業を行ってください。

- DSAconfiguration.txt
- template.dat
- threshold.bat
- udataconf.ini

ポイント

バックアップファイルは、編集の有無に係わらず作成されます。

3. アップグレードインストール後の設定

アップグレードインストールする環境が以下の条件に該当する場合は、再度設定を実施してください。

- Managerの二重化運用の場合

Agent/Proxy Managerで二重化運用セットアップを再度実施してください。

手順の詳細は「[3.8.4 Agentでの作業](#)」の「2. Managerの二重化運用Agentセットアップ」、または、「[3.8.3 Proxy Managerでの作業](#)」の「2. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ」を参照してください。

- インストール後の運用途中にPull/Pushの通信方式を切り替えた場合

Agent/Proxy ManagerでPull/Pushの通信方式の切り替えを再度実施してください。

手順の詳細は「[4.4.3 PushからPullへの切り替え](#)」、または、「[4.4.4 PullからPushへの切り替え](#)」を参照してください。

- V13.4以前からアップグレードして、SAP NetWeaverの性能情報を収集する場合

SAP NetWeaverの性能情報を収集している環境で、V13.4.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqcGetSAPAlertmon.ini)のPASSWORDに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「接続パラメーター定義ファイル」を参照してください。

- V13.5以前からアップグレードして、Oracle Database Serverの性能情報を収集する場合

Oracle Database Serverの性能情報を収集している環境で、V13.5.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat) - [ORA]セクションのPASSに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「Oracle Database Serverの管理設定」を参照してください。

4. Agent/Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy Managerの場合

Proxy Managerで、Agentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。アップグレード前にProxy Manager自身の性能情報を収集していた場合も、改めてセットアップが必要です。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

5. Agent/Proxy Managerのサービスの起動と確認

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービスを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

7.2.2 UNIX版のアップグレード手順

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■本手順を行う前に

Agent/Proxy Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■手順

以下の手順に沿って実施してください。

1. /var/opt/FJSVssqc/配下のファイルをバックアップ

/var/opt/FJSVssqc/配下のファイルをバックアップしておきます。

2. Agent/Proxy Managerのアップグレードインストール

初回インストールと同様に「3.1.2 Agent/Proxy Managerのインストール」に従ってAgent/Proxy Managerのインストールを開始します。

なお、アップグレードインストールでは自動で以下のことが行われます。

- デーモンの停止
- その他定義ファイル(/etc/opt/FJSVssqc/配下)の退避
- 旧バージョンパッケージのアンインストール

- 前回の問い合わせ項目での入力情報を引き継いだインストール
- 退避してあったその他定義ファイルの書き戻し

3. /var/opt/FJSVssqc/配下のファイルの書き戻し

手順1.でバックアップしておいた/var/opt/FJSVssqc/配下のファイルを、元のパスに書き戻します。

4. 上書き対象外の定義ファイルに行われていたユーザー定義の反映

上書きできないファイルが、/etc/opt/FJSVssqc配下、および/opt/FJSVssqc/bin配下に、以下のファイル名でバックアップされています。

- "ファイル名VnnLnn.拡張子" または "ファイル名Vnnn.拡張子"
(VnnLnn,Vnnn部分は、アップグレード前のバージョンレベルです)

上記、バックアップ対象のファイルは以下になります。以下のファイルに修正を加えた場合は、バックアップファイルを基に、再度、編集作業を行ってください。

- DSAconfiguration.txt
- template.dat
- threshold.sh
- udataconf.ini

ポイント

バックアップファイルは、編集の有無に係わらず作成されます。

5. アップグレードインストール後の設定

アップグレードインストールする環境が以下の条件に該当する場合は、再度設定を実施してください。

- Managerの二重化運用の場合

Agent/Proxy Managerで二重化運用セットアップを再度実施してください。

手順の詳細は「[3.8.4 Agentでの作業](#)」の「2. Managerの二重化運用Agentセットアップ」、または、「[3.8.3 Proxy Managerでの作業](#)」の「2. Managerの二重化運用Proxy Managerセットアップ」を参照してください。

- インストール後の運用途中にPull/Pushの通信方式を切り替えた場合

Agent/Proxy ManagerでPull/Pushの通信方式の切り替えを再度実施してください。

手順の詳細は「[4.4.3 PushからPullへの切り替え](#)」、または、「[4.4.4 PullからPushへの切り替え](#)」を参照してください。

- V13.4以前からアップグレードして、SAP NetWeaverの性能情報を収集する場合

SAP NetWeaverの性能情報を収集している環境で、V13.4.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqGetSAPalrtmon.ini)のPASSWORDに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「接続パラメーター定義ファイル」を参照してください。

- V13.5以前からアップグレードして、Oracle Database Serverの性能情報を収集する場合

Oracle Database Serverの性能情報を収集している環境で、V13.5.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat) - [ORA]セクションのPASSに定義しているパスワードを暗号化してください。

手順の詳細は、使用手引書「Oracle Database Serverの管理設定」を参照してください。

6. Agent/Proxy Managerのセットアップ

ポイント

Proxy Managerの場合

Proxy Managerで、Agentの機能を使用してProxy Manager自身の性能情報を収集したい場合は、Proxy Managerのセットアップを実施してください。アップグレード前にProxy Manager自身の性能情報を収集していた場合も、改めてセットアップが必要です。Proxy ManagerにAgentをインストールする必要はありません。

「[A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド](#)」を参照して、収集ポリシーの作成と適用を実施してください。

7. Agent/Proxy Managerのデーモンの起動と確認

「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、デーモンを起動してください。また、常駐プロセスが起動しているか確認してください。

7.3 運用管理クライアントでの作業

運用管理クライアントのアップグレードの手順を、以下に示します。なお、運用管理クライアントは、Windowsマシンでアップグレードインストールを行います。

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■手順

以下の順に沿って実施してください。

1. 運用管理クライアントのアップグレードインストール

初回インストールと同様に「[3.1.3 運用管理クライアントのインストール](#)」に従って運用管理クライアントのインストールを開始します。

2. 通信環境のセットアップ

運用管理クライアントの通信環境として、Microsoft(R) Internet Information Servicesを使用していた場合は次のコマンドを実行してください。

注意

カレントディレクトリを、<インストールディレクトリ>%binへ移動後、管理者権限でコマンドを実行してください。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqccsetc_iis7.bat
```

ポイント

すでに運用管理クライアントのCGIがMicrosoft(R) Internet Information ServicesにCGI拡張として登録されている場合、以下のようなエラーメッセージが出力される場合があります。

```
"* appcmd.exe C:\Program Files\Systemwalker\SQL-C\www\cgi-bin\Rep_mk_history.cgi Failed."  
ERROR ( message: 新しい add オブジェクトに必要な属性が不足しています。一意のキー属性 'path' が 'C:
```


¥Program Files¥SystemwalkerSQC-C¥www¥cgi-bin¥rmperform.cgi' に設定されている種類 'add' の重複コレクション エントリを追加できません。)

3. V13.5.0以前の登録済みレポートの移行

V13.5.0以前の登録済みレポート(V13.3以前の場合、即時レポート、V13.4/V13.5の場合、分析)を移行することができます。移行した場合は、[分析/プランニング]画面の「Myカテゴリー」内に、「移行レポート」カテゴリーとして表示されます。

```
<インストールディレクトリ>¥bin¥sqlMigrationReports.bat -c console_define
```

【実行例】

```
C:¥Program Files¥SystemwalkerSQC-C¥bin>sqlMigrationReports.bat -c DefaultConsole
```

コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「sqlMigrationReports.bat(登録済みレポート移行コマンド)」を参照してください。

注意

V13.5以前に即時レポート、または分析で作成されたレポートは、コンソールの履歴表示で[レポート名]の欄に[登録名]が表示されます。

V13.5以前に定期レポート登録し作成されたレポートは、定期レポート一覧表示の[レポート名]の欄に[登録名]が表示されます。V15.0.0以降にアップグレード後に作成されたレポートも、[レポート名]の欄に[登録名]が表示されます。

[レポート名]の欄にレポート名を表示したい場合は、[定義画面]の[定期レポート登録]画面で、登録済みのレポートを選択し、[上書き保存]してください。

ただし、上書き保存する前に作成されたレポートの[レポート名]の欄は[登録名]のままであり、変更することはできません。

注意

管理コンソールまたはコンソールを表示したWebブラウザ環境に、旧版の表示におけるインターネット一時ファイルが残っていることがあります。

Webブラウザ環境において、Internet Explorerのインターネット一時ファイルを削除してください。

第8章 バージョン混在運用

本製品のバージョン混在運用について説明します。

■製品一覧(旧バージョンレベル)

| V13 |
|--|
| V13.0.0 Windows版/Windows for Itanium版/Linux版/Linux for Itanium版/Solaris版 |
| V13.2.0 Windows版/Windows for Itanium版/Linux版/Linux for Itanium版/Solaris版 |
| V13.3.0 Windows版/Windows for Itanium版/Linux版/Linux for Itanium版/Solaris版 |
| V13.4.0 Windows版/Windows for Itanium版/Linux版/Linux for Itanium版/Solaris版 |
| V13.5.0 Windows版/Linux版/Solaris版 |

| V15 |
|----------------------------------|
| V15.0.0 Windows版/Linux版/Solaris版 |
| V15.0.1 Windows版/Linux版/Solaris版 |
| V15.1.0 Windows版/Linux版/Solaris版 |
| V15.1.1 Windows版/Linux版/Solaris版 |
| V15.2.0 Linux版 |
| V15.2.1 Windows版 |

■バージョン混在運用におけるポイント

- Enterprise Manager、Manager、および運用管理クライアントは、バージョンレベルを合わせてください。
- 監視対象が旧バージョンレベルのAgent/Proxy Managerの場合、本バージョンレベルのManagerで監視可能です(Push通信/Pull通信)。

注意

新しいバージョンレベルのAgent/Proxy Managerで収集された旧バージョンレベルでサポートしていない性能情報は、旧バージョンレベルの運用管理クライアントでは表示できず、以下のメッセージが表示されます。

- サマリ表示およびレポート画面の場合：
指定された条件を満たすデータはありませんでした。
- 詳細表示の場合：
対象の性能情報は表示できません。

第9章 アンインストール

本ソフトウェアのアンインストールの手順を説明します。

9.1 アンインストール(Windows版)

Windows版でのアンインストールの手順を説明します。

注意

本製品をアンインストールする場合、事前に以下のプログラムを停止してください。

- ・ ウイルスチェックプログラム

■実行に必要な権限

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

注意

ユーザー資産のバックアップについて

アンインストール前には、必要に応じてユーザー資産をバックアップしておいてください。バックアップについては、使用手引書「バックアップ/リストア」を参照してください。

■手順

手順は、以下のインストール種別共通の内容です。

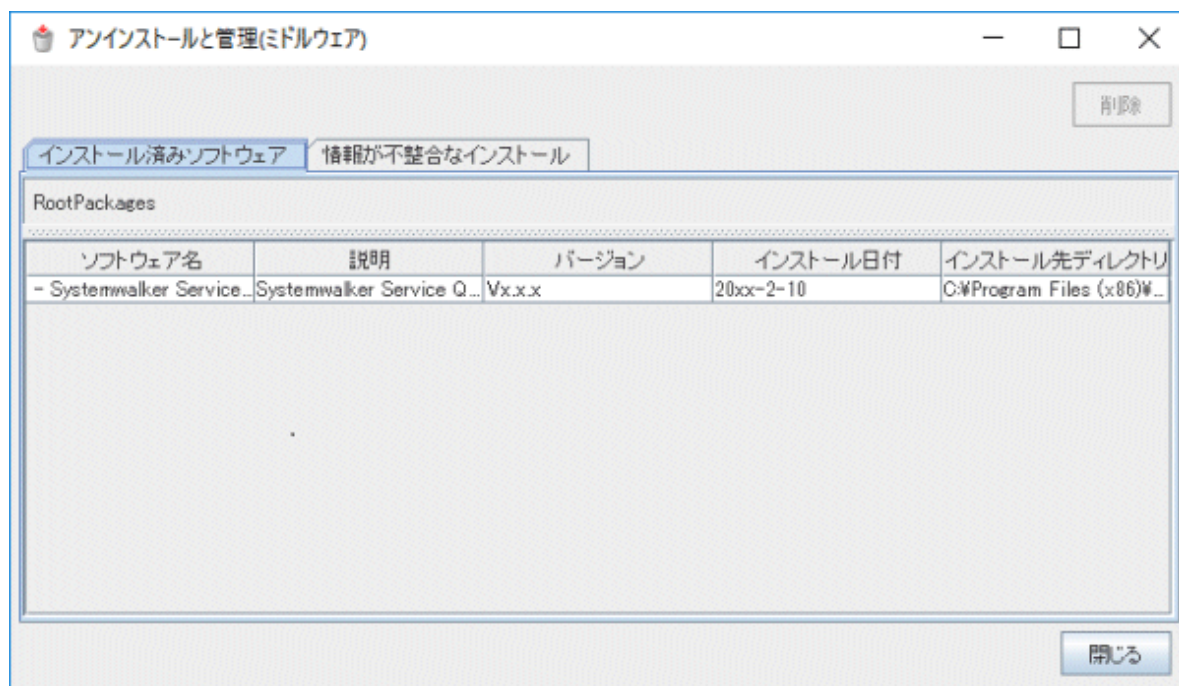
- ・ Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Manager
- ・ Systemwalker Service Quality Coordinator Manager
- ・ Systemwalker Service Quality Coordinator Proxy Manager
- ・ Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for Business
- ・ Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for Server
- ・ Systemwalker Service Quality Coordinator 運用管理クライアント

1. ログイン

Administratorsグループに所属するアカウントでログインします。

2. アンインストーラの起動

[スタート]メニューまたは[アプリ]画面で、[Fujitsu] - [アンインストールと管理(ミドルウェア)]を選択します。



参考

インストールに失敗してアンインストールを行うような場合、Systemwalker Service Quality Coordinatorが[情報が不整合なインストール]タブに表示されることがあります。このような場合には、[情報が不整合なインストール]タブで[Systemwalker Service Quality Coordinator (インストール種別)]を選択し、[削除]ボタンをクリックして削除を行ってください。

3. アンインストールするソフトウェアの選択

上記の画面でアンインストールするソフトウェアを選択し、[削除]ボタンをクリックします。

4. アンインストールの実行

[アンインストール]ボタンをクリックします。



5. 終了

アンインストールが完了したら、[終了]ボタンをクリックします。



6. アンインストール後に以下のディレクトリが削除されずに残る場合があります。その場合は別途削除してください。

- インストールディレクトリ
- 可変ファイル格納ディレクトリ(運用管理クライアント以外の場合)



注意

PDBファイルは、インストール時の設定または「6.6.1.1 PDB格納先の変更」に示す手順によって、格納先が変更されている場合があります。その場合は手動で削除してください。

- ー レポート管理フォルダ(運用管理クライアントで、レポート管理フォルダを分割している場合)



注意

レポート管理フォルダを分割している場合、レポート管理フォルダに割り当てた仮想ディレクトリについても手動で削除を行ってください。



ポイント

再頒布可能パッケージのアンインストールについて

各インストーラは、インストール時に以下の再頒布可能パッケージがインストールされていないシステムに対し、自動インストールを行います。

- ・ Microsoft Visual C++ 2017 Redistributable (x86)
- ・ Microsoft Visual C++ 2017 Redistributable (x64) ※Windows x64マシンにインストールした場合

各環境の削除時には、自動アンインストールは行われません。



注意

Systemwalker Centric Managerのレポート機能が混在した環境におけるSystemwalker Service Quality Coordinatorのアンインストールについて

Systemwalker Centric Managerのレポート機能と、Systemwalker Service Quality Coordinatorの運用管理クライアントが混在しているコンピュータでは、運用管理クライアントとSystemwalker Centric Managerレポート機能でグラフ表示に必要なライブラリの設定を共有して使用します。そのため、運用管理クライアントをアンインストールした場合、Systemwalker Centric Managerレポート機能が使用しているライブラリがシステムから登録解除され、レポートの作成に失敗します。

この場合、レポートを表示するためには、Systemwalker Centric Managerレポート機能に付属したコマンド"regfxdll.bat"を実行し、ライブラリをシステムに登録してください。

上記の現象はSystemwalker Centric Manager V13.0以降のレポート機能で発生する可能性があります。

コマンド"regfxdll.bat"については、以下の手順で実行してください。

1. コマンドプロンプトを開き、カレントディレクトリを以下のディレクトリに変更します。

```
<Systemwalker Centric Manager インストールディレクトリ>%mpwalker%mpreport
```

標準の設定でインストールを実施した場合、インストールディレクトリは以下になります。

```
<C:%Win32APP>
```

■例

```
C:%> cd Win32APP%mpwalker%mpreport
```

2. "regfxdll.bat"を実行します。

■例

```
C:\Win32APP\mpwalker\mpreport> regfxdll.bat
```

注意

運用管理クライアントのアンインストール時に、アンインストールが無応答状態となり、イベントログに以下のメッセージが出力される場合があります。

ソース

MsiInstaller

イベントID

11704

メッセージ

Product: Systemwalker Service Quality Coordinator Operation Management Client --

Error 1704.An installation for OCMM 7 is currently suspended.

You must undo the changes made by that installation to continue.

Do you want to undo those changes?

上記の現象が発生した場合は、以下のように対処してください。

1. タスクマネージャを起動します。
2. 以下のプロセスを強制終了させます。
 - msixec.exe
3. アンインストールが完了したら、[終了]ボタンをクリックします。
4. OSを再起動します。

9.2 アンインストール(UNIX版)

UNIX版でのアンインストールの手順を説明します。

■実行に必要な権限

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

注意

ユーザー資産のバックアップについて

アンインストール時には、インストール後に追加されたファイルも削除されるため、必要に応じてユーザー資産をバックアップしておいてください。バックアップについては、使用手引書「バックアップ/リストア」を参照してください。

■手順

手順は、以下のインストール種別共通の内容です。

- Systemwalker Service Quality Coordinator Enterprise Manager
- Systemwalker Service Quality Coordinator Manager
- Systemwalker Service Quality Coordinator Proxy Manager
- Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for Business
- Systemwalker Service Quality Coordinator Agent for Server

1. ログイン

システム上に、スーパーユーザーでログインします。

2. アンインストーラの起動

以下のコマンドを実行します。

```
# /opt/FJSVcir/cir/bin/cimanager.sh -c
```

3. ソフトウェアの選択

Systemwalker Service Quality Coordinator (インストール種別)を選択します。

```
アンインストールと管理(ミドルウェア)をロードしています...
```

```
インストール済みソフトウェア
```

```
1. Systemwalker Service Quality Coordinator Manager Vx.x.x
```

```
アンインストールするソフトウェアの番号を入力してください。
```

```
[number, q]
```

```
=>1
```

"q"を選択すると、アンインストーラが終了します。

4. アンインストールの実行

"y"を選択し、アンインストールを実行します。

```
Systemwalker Service Quality Coordinator Manager
  説明: Systemwalker Service Quality Coordinator Manager
  バージョン: Vx.x.x
  会社名: Fujitsu Limited.
  インストール先ディレクトリ: /opt2/FJSVssqc
  インストール日付: 20xx-11-01
```

```
アンインストールを開始します。よろしいですか？
```

```
[y, b, q]
```

```
=>y
```

"b"を選択すると、1つ前の画面に戻ります。

"q"を選択すると、アンインストーラが終了します。

5. 終了

アンインストールが完了すると、以下の画面が表示されます。

以下のソフトウェアがアンインストールされました：
Systemwalker Service Quality Coordinator Manager

アンインストールと管理(ミドルウェア)を終了します。

ポイント

Pull方式での通信およびポリシー配付機能を使用し、tthtpdプロセスを自動起動するよう設定していた場合は、設定の解除が必要です。手順については「[B.1 tthtpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

9.3 フェールオーバークラスタリングクラスタシステム運用でのアンインストール

クラスタシステムからManager/Enterprise Managerをアンインストールする手順を説明します。

9.3.1 Enterprise Managerでの作業

■手順

以下の順に沿って実施してください。

- 9.3.1.1 アンインストールの準備
 1. 運用ノードの確認
 2. クラスタシステムで管理されているサービスの停止
 3. リソースの削除
- 9.3.1.2 Enterprise Managerのアンインストール
 1. 待機系サーバでのクラスタアンセットアップコマンド実行
 2. 待機系サーバでのEnterprise Managerのアンインストール
 3. 現用系サーバでのクラスタアンセットアップコマンド実行
 4. 現用系サーバでのEnterprise Managerのアンインストール
- 9.3.1.3 リソースの削除
 1. 共用ディスク内の不要なディレクトリの削除
 2. Enterprise Manager用の共用ディスクの削除
 3. サービスの起動

9.3.1.1 アンインストールの準備

1. 運用ノードの確認

待機系サーバが運用ノードとなっている場合は、現用系サーバを運用ノードとします。

2. クラスタシステムで管理されているサービスの停止

フェールオーバー クラスタ マネージャーから、以下のEnterprise Managerのサービスをオフラインにします。

- － 「Systemwalker SQC DCM」サービス



注意

Systemwalker Centric Managerとの連携を行っている場合は、Systemwalker Centric Managerのサービスも停止してください。

3. リソースの削除

フェールオーバー クラスタ マネージャーから、リソースを削除します。

「[3.9.1.4 リソース登録](#)」で登録したEnterprise Managerのクラスタサービス、アプリケーションリソース/汎用サービスを削除してください。

- － Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
フェールオーバー クラスタ マネージャーで、役割「Systemwalker SQC Group」を削除します。
- － Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
役割の削除は行いません。

9.3.1.2 Enterprise Managerのアンインストール

1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンドを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcunsetcl
```

2. 待機系サーバでのEnterprise Managerのアンインストール

待機系サーバからEnterprise Managerをアンインストールします。

アンインストールの詳細については、「[9.1 アンインストール\(Windows版\)](#)」を参照してください。

3. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンドを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcunsetcl
```

4. 現用系サーバでのEnterprise Managerのアンインストール

現用系サーバからEnterprise Managerをアンインストールします。

アンインストールの詳細については、「[9.1 アンインストール\(Windows版\)](#)」を参照してください。

9.3.1.3 リソースの削除

1. 共用ディスク内の不要なディレクトリの削除

Systemwalker Service Quality Coordinatorのクラスタセットアップコマンドで作成された、共用ディスク内の、以下のディレクトリを削除します。

```
<共用ディスクのドライブ>%SystemwalkerSQC
```

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更している場合は、移動先のディレクトリを削除します。

2. Enterprise Manager用の共用ディスクの削除

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
フェールオーバー クラスタ マネージャーで、クラスタのリソースとして役割「Systemwalker SQC Group」に登録した、共用ディスクを削除します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
Systemwalker Centric Managerの役割「CentricMGR Group」に登録した共用ディスクを削除します。

3. サービスの起動

- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
「9.3.1.1 アンインストールの準備」の「2.クラスタシステムで管理されているサービスの停止」で停止したSystemwalker Centric Managerのサービスを起動してください。

9.3.2 Managerでの作業

■手順

以下の順に沿って実施してください。

- [9.3.2.1 アンインストールの準備](#)
 1. 運用ノードの確認
 2. クラスタシステムで管理されているサービスの停止
 3. リソースの削除
- [9.3.2.2 Managerのアンインストール](#)
 1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行
 2. 待機系サーバでのManagerのアンインストール
 3. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行
 4. 現用系サーバでのManagerのアンインストール
- [9.3.2.3 リソースの削除](#)
 1. 共用ディスク内の不要なディレクトリの削除
 2. Manager用の共用ディスクの削除

3. サービスの起動

9.3.2.1 アンインストールの準備

1. 運用ノードの確認

待機系サーバが運用ノードとなっている場合は、現用系サーバを運用ノードとします。

2. クラスタシステムで管理されているサービスの停止

フェールオーバー クラスタ マネージャーから、以下のManager/Enterprise Managerのサービスをオフラインにします。

- 「Systemwalker SQC DCM」サービス

利用している機能に応じて、以下のサービスもオフラインにしてください。

- Pull方式で通信している場合

「Systemwalker SQC sqcschdle」サービス

- Web利用状況管理機能を使用している場合

「Systemwalker SQC dbrefsv」サービス

「Systemwalker SQC dbregsv」サービス



注意

Systemwalker Centric Managerとの連携を行っている場合は、Systemwalker Centric Managerのサービスも停止してください。

3. リソースの削除

フェールオーバー クラスタ マネージャーから、リソースを削除します。

「[3.9.2.4 リソース登録](#)」で登録したManagerのクラスタサービス、アプリケーションリソース/汎用サービスを削除してください。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合

フェールオーバー クラスタ マネージャーで、役割「Systemwalker SQC Group」を削除します。

- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合

役割の削除は行いません。

9.3.2.2 Managerのアンインストール

1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンドを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcunsetcl
```

2. 待機系サーバでのManagerのアンインストール

待機系サーバからManagerをアンインストールします。

アンインストールの詳細については、「[9.1 アンインストール\(Windows版\)](#)」を参照してください。

3. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンドを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcunsetcl
```

4. 現用系サーバでのManagerのアンインストール

現用系サーバからManagerをアンインストールします。

アンインストールの詳細については、「[9.1 アンインストール\(Windows版\)](#)」を参照してください。

9.3.2.3 リソースの削除

1. 共用ディスク内の不要なディレクトリの削除

Systemwalker Service Quality Coordinatorのクラスタセットアップコマンドで作成された、共用ディスク内の、以下のディレクトリを削除します。

```
1. <共用ディスクのドライブ>%SystemwalkerSQC
```

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更している場合は、移動先のディレクトリを削除します。

2. Manager用の共用ディスクの削除

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
フェールオーバー クラスタ マネージャーで、クラスタのリソースとして役割「Systemwalker SQC Group」に登録した、共用ディスクを削除します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
Systemwalker Centric Managerの役割「CentricMGR Group」に登録した共用ディスクを削除します。

3. サービスの起動

- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
「[9.3.2.1 アンインストールの準備](#)」の「2.クラスタシステムで管理されているサービスの停止」で停止したSystemwalker Centric Managerのサービスを起動してください。

EE

9.4 PRIMECLUSTERクラスタシステム運用でのアンインストール

クラスタシステムからManager/Enterprise Managerをアンインストールする手順を説明します。

- [9.4.1 Enterprise Managerでの作業](#)
- [9.4.2 Managerでの作業](#)

9.4.1 Enterprise Managerでの作業

■手順

以下の順に沿って実施してください。

- 9.4.1.1 アンインストールの準備
 1. クラスタアプリケーションの停止
 2. アプリケーションとリソースの削除
- 9.4.1.2 Enterprise Managerのアンインストール
 1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行
 2. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行
 3. 現用系サーバと待機系サーバでのアンインストール
- 9.4.1.3 リソースの削除
 1. 共用ディスク装置内の不要なディレクトリの削除
 2. クラスタアプリケーションが使用していたEnterprise Manager用の共用ディスク装置の削除
 3. クラスタアプリケーションの起動

9.4.1.1 アンインストールの準備

1. クラスタアプリケーションの停止

PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用し、Systemwalker Service Quality Coordinatorサービスを停止します。停止方法については、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。



Systemwalker Centric Managerとの連携を行っている場合は、Systemwalker Centric Managerのサービスも停止してください。

2. アプリケーションとリソースの削除

「3.10.1.4 リソース登録」でクラスタシステムに登録したEnterprise Managerのアプリケーションとリソースを削除してください。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
Enterprise Manager用のクラスタアプリケーションを削除します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
クラスタアプリケーションの削除は行いません。

9.4.1.2 Enterprise Managerのアンインストール

1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

共用ディスクをオンラインにし、待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンドsqcunsetclを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcunsetcl
```

2. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンドsqcunsetclを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcunsetcl
```

3. 現用系サーバと待機系サーバでのアンインストール

現用系サーバと待機系サーバで、それぞれのEnterprise Manager をアンインストールします。

アンインストールの方法については、「[9.2 アンインストール\(UNIX版\)](#)」を参照してください。

9.4.1.3 リソースの削除

1. 共用ディスク装置の不要なディレクトリの削除

Systemwalker Service Quality Coordinatorのクラスタセットアップコマンドで作成された、共用ディスク装置内の、以下のディレクトリを削除します。

```
<共用ディスクのマウントポイント>/SystemwalkerSQC
```

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更している場合は、移動先のディレクトリを削除します。

2. クラスタアプリケーションが使用していたEnterprise Manager用の共用ディスク装置の削除

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
Systemwalker Service Quality Coordinatorのクラスタアプリケーションから、「[3.10.1.1 環境構築前の準備](#)」で登録した共用ディスク装置を削除します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
Systemwalker Centric Managerのクラスタアプリケーションから、「[3.10.1.1 環境構築前の準備](#)」で登録した共用ディスク装置を削除します。

3. クラスタアプリケーションの起動

- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
「[9.4.1.1 アンインストールの準備](#)」の「1. クラスタアプリケーションの停止」で停止したSystemwalker Centric Managerのクラスタアプリケーションを起動してください。

9.4.2 Managerでの作業

■手順

以下の順に沿って実施してください。

- ・ [9.4.2.1 アンインストールの準備](#)
 1. クラスタアプリケーションの停止
 2. アプリケーションとリソースの削除

- 9.4.2.2 Managerのアンインストール
 1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行
 2. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行
 3. 現用系サーバと待機系サーバでのアンインストール
- 9.4.2.3 リソースの削除
 1. 共有ディスク装置内の不要なディレクトリの削除
 2. クラスタアプリケーションが使用していたManager用の共有ディスク装置の削除
 3. クラスタアプリケーションの起動

9.4.2.1 アンインストールの準備

1. クラスタアプリケーションの停止

PRIMECLUSTERのCluster Admin GUIを使用し、Systemwalker Service Quality Coordinatorサービスを停止します。停止方法については、PRIMECLUSTERのマニュアルを参照してください。



注意

Systemwalker Centric Managerとの連携を行っている場合は、Systemwalker Centric Managerのサービスも停止してください。

2. アプリケーションとリソースの削除

「3.10.2.4 リソース登録」でクラスタシステムに登録したManagerのアプリケーションとリソースを削除してください。

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
Manager用のクラスタアプリケーションを削除します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
クラスタアプリケーションの削除は行いません。

9.4.2.2 Managerのアンインストール

1. 待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

待機系サーバで共有ディスクをマウントし、待機系サーバでクラスタアンセットアップコマンドsqcunsetclを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcunsetcl
```

2. 現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンド実行

現用系サーバでクラスタアンセットアップコマンドsqcunsetclを実行します。コマンドの実行形式は以下です。

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcunsetcl
```


3. 現用系サーバと待機系サーバでのアンインストール

現用系サーバと待機系サーバで、それぞれのManagerをアンインストールします。

アンインストールの方法については、「[9.2 アンインストール\(UNIX版\)](#)」を参照してください。

9.4.2.3 リソースの削除

1. 共用ディスク装置の不要なディレクトリの削除

Systemwalker Service Quality Coordinatorのクラスタセットアップコマンドで作成された、共用ディスク装置内の、以下のディレクトリを削除します。

```
<マウントポイント>/SystemwalkerSQC
```

性能データベース(PDB)およびアーカイブファイルの格納先を変更している場合は、移動先のディレクトリを削除します。

2. クラスタアプリケーションが使用していたManager用の共用ディスク装置の削除

- Systemwalker Service Quality Coordinatorを独立したクラスタシステムで運用していた場合
Systemwalker Service Quality Coordinatorのクラスタアプリケーションから、「[3.10.2.1 環境構築前の準備](#)」で登録した共用ディスク装置を削除します。
- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
Systemwalker Centric Managerのクラスタアプリケーションから、「[3.10.2.1 環境構築前の準備](#)」で登録した共用ディスク装置を削除します。

3. クラスタアプリケーションの起動

- Systemwalker Service Quality CoordinatorをSystemwalker Centric Managerのクラスタシステムに追加していた場合
「[9.4.2.1 アンインストールの準備](#)」の「1.クラスタアプリケーションの停止」で停止したSystemwalker Centric Managerのクラスタアプリケーションを起動してください。

9.5 「アンインストールと管理(ミドルウェア)」のアンインストールについて

「アンインストールと管理(ミドルウェア)」のアンインストール方法や注意事項について説明します。

- 本ツールは、Systemwalker Service Quality Coordinator以外に、他の富士通ミドルウェア製品情報も含めて管理しています。どうしても必要な場合を除いて、本ツールをアンインストールしないでください。

誤ってアンインストールしてしまった場合は、下記手順に従い再度インストールしてください。

【Windows】

1. インストール対象マシンにAdministratorsグループに所属するユーザー名でログオンするか、管理権限を持つアカウントに切り替えます。
2. DVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットします。
3. インストールコマンドを実行します。

```
DVD-ROMドライブ:¥CIR¥cirinst.exe
```

【UNIX】

1. インストール対象マシンにスーパーユーザーでログインするか、管理権限を持つユーザーに切り替えます。
2. DVD-ROM装置に本製品のDVD-ROMをセットし、マウントします。
3. インストールコマンドを実行します。

以下は、ドライブのマウントポイントが/mnt/cdromの場合の例です。

```
# /mnt/cdrom/CIR/cirinst.sh
```

- Systemwalker Service Quality Coordinatorがサポートしていない環境に対して本ツールだけインストールされる場合があります。その際は下記の手順でアンインストールを行ってください。

- 本ツールをアンインストールする場合は、以下の手順で行ってください。

1. 「アンインストールと管理(ミドルウェア)」を起動して他の富士通ミドルウェア製品が残っていないか確認します。起動方法は以下のとおりです。

【Windows】

[スタート]メニューまたは[アプリ]画面で、[Fujitsu] - [アンインストールと管理(ミドルウェア)]を選択します。

【UNIX】

```
# /opt/FJSVcir/cir/bin/cimanager.sh -c
```

-c: コマンドインターフェース

2. インストールされている富士通ミドルウェア製品が何もない場合、下記のアンインストールコマンドを実行します。

【Windows】

```
%SystemDrive%¥FujitsuF4CR¥bin¥cirremove.exe
```

【UNIX】

```
# /opt/FJSVcir/bin/cirremove.sh
```

3. 「本ソフトウェアは富士通製品共通のツールです。本当に削除しますか? [y/n]:」と表示されたら、「y」を入力して継続します。

数秒ほどでアンインストールが完了します。

登録されている製品が残っている場合は、何も表示せず終了します。

第10章 互換に関する情報

本章では、Systemwalker Service Quality Coordinatorをバージョンアップするときの非互換項目について説明します。

非互換の確認方法

本章では、旧バージョンから順番に非互換項目を記載しています。

移行元となるバージョンの節から本章の最後までを読み、使用している機能に関するすべての非互換を順番に確認してください。

例) Systemwalker Service Quality Coordinator V15.0.0から移行する場合

“V15.0.0からの移行”から“その他の非互換”までが確認対象となります。

10.1 V12.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.0.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V12.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換を確認してください。

10.1.1 定義の変更

■環境定義ファイル

環境定義ファイルの互換情報は以下のとおりです。

| | | 作成バージョン | |
|-----------|---------|---------|---------|
| | | V12.0 | V13.0以降 |
| 読み込みバージョン | V12.0 | ○ | ○ |
| | V13.0以降 | △(注) | ○ |

○:互換あり

△:一部互換なし

10.1.2 コマンドに関する変更

V13.0.0より、sqcPDBcout(CSV出力コマンド)について、出力項目「end_time」に値が出力されなくなりました。V12以前に「end_time」として出力されていた情報は、「end_date_time」に含まれています。

10.2 V13.0.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.2.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.0.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.2.1 データの変更

■Symfoware Serverで収集する性能情報

以下に示すSymfoware Serverの収集項目 (rdbpsコマンドで収集する情報)は、本製品のV13.0.0までは累積値が収集されていましたが、V13.2.0以降は収集間隔ごとの差分値が収集されます。

- SUM_RDBPS
- RDBPS_S

- RDBPS_R
- RDBPS_IA

収集項目の詳細については、リファレンスマニュアル「データフォーマット」を参照してください。

10.3 V13.2.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.3.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.2.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.3.1 データの変更

■Browser Agent機能で収集する性能情報

Browser Agent機能で収集する以下の項目は、本製品のV13.3.0以降ではデフォルトで収集しません。

- WEBSLM_URL
- WEBSLM_TCP
- WEBSLM_DNS

収集項目の詳細については、リファレンスマニュアル「ResponseConditionフォルダ配下/エンドユーザーレスポンスレポート」を参照してください。

10.4 V13.3.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.4.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.3.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.4.1 メッセージの変更

■しきい値監視のメッセージ

V13.4.0で、しきい値監視のメッセージ文の中に、ホスト名が追加されています。

メッセージの変更内容は以下のとおりです。

対象イベントID

- 6101 (エラー)
- 6102 (警告)
- 6103 (情報)

変更内容

日本語

| | 変更内容 |
|-----------|---|
| V13.3.0以前 | メッセージ文中の「資源名:%2」に、「リソースID」が表示されます。 |
| V13.4.0以降 | メッセージ文中の「資源名:%2」に、「ホスト名:リソースID」が表示されます。 |

英語

| | 変更内容 |
|-----------|---|
| V13.3.0以前 | メッセージ文中の「Device Name:%2」に、「リソースID」が表示されます。 |
| V13.4.0以降 | メッセージ文中の「Device Name:%2」に、「ホスト名:リソースID」が表示されます。 |

詳細については、リファレンスマニュアル「共通メッセージ」を参照してください。

■メッセージの出力の非互換について

V13.4.0以降では、以下のメッセージ(ユーザが対処を行う必要のないメッセージ)は出力されません。

対象イベントID

0550, 1201, 1203, 1204, 1254, 1300, 1301, 1305, 1306, 1307, 1309, 1311, 1470, 1473, 1552, 1553, 1554, 1555, 1904, 1905, 2003, 2200, 2303, 2504, 2900, 3000, 3060, 3062, 3132, 3605, 5308

(UNIX版のメッセージの場合は、上記の数字の前に「DSA」または「OCM」、数字の後に「E」、「W」、「I」のいずれかが付きます。)

10.4.2 画面名や操作方法などの変更

■画面名・操作方法など

- ・ V13.4.0で、画面名や操作方法などが改善されています。

主な機能の画面名の変更は、以下のとおりです。

| V13.3.0以前の名称 | V13.4.0/13.5.0の名称 |
|--------------|-------------------|
| モニタ | サマリ |
| ドリルダウン | 詳細 |
| 即時レポート | 分析 |

詳細については、使用手引書(コンソール編)を参照してください。

10.5 V13.4.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.5.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.4.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.5.1 定義の変更

■SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル

V13.5.0以降は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqcGetSAPalartmon.ini)のPASSWORDに、暗号化したパスワードを定義します。

V13.4.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、SAP NetWeaver連携の接続パラメーター定義ファイル(sqcGetSAPalartmon.ini)のPASSWORDに定義しているパスワードを暗号化してください。

定義の方法は、使用手引書「接続パラメーター定義ファイル」を参照してください。

10.5.2 アップグレードインストール時のサマリデータの扱いの変更

V13.5.0で、アップグレードインストールを行った場合のサマリデータの扱いが変更されています。

| | |
|--------------------|--|
| V13.4.0以前へのアップグレード | <ul style="list-style-type: none"> • V12からアップグレードする場合は、PDBのコンバート時のオプション指定により、アップグレード前のサマリデータをアップグレード後に参照することができました。 • V13.0.0～V13.3.0からアップグレードする場合は、アップグレード前のサマリデータをアップグレード後に参照することができました。 |
| V13.5.0以降へのアップグレード | アップグレード前のサマリデータはアップグレード後に参照することができません。 |

10.5.3 PDBファイル名の変更

- V13.5.0で、サマリデータ用のPDBファイル(pdb_SUMMARY.dat)は、pdb_SUMMARY_yyyymmdd.dat (yyyymmdd:年月日)に変更されています。

10.5.4 メッセージの変更

■メッセージの出力頻度の変更

- V13.5.0で、以下のメッセージの出力頻度に変更されています。

対象イベントID

— 2700/DSA2700E, 2701/DSA2701E

変更内容

V13.4.0以前

AgentがManagerに接続できない状態またはManagerにデータが転送できない状態が、検知された直後から、規定の間隔で出力されます。

V13.5.0以降

AgentがManagerに接続できない状態またはManagerにデータが転送できない状態が60分続いた場合に出力します。

10.5.5 画面名や操作方法などの変更

■Excel(R)形式のレポート

- V13.5.0で、「時系列表示」レポートおよび「サマリデータ時系列表示」レポートでExcel(R)形式のファイルを作成する場合の出力方法が変更されています。

| | |
|---------|-------------------------------|
| V13.4.0 | 1種類の性能情報のグラフと表は1つのシートに出力されます。 |
| V13.5.0 | 性能情報のグラフと表は別々のシートに出力されます。 |

■画面名・操作方法など

- V13.5.0で、コンソールについて以下の変更を行っています。

| 変更対象 | 項目 | V13.4.0以前 | V13.5.0以降 |
|-------------------------------|--------------|-----------|-------------|
| 詳細ツリーの「StorageResource」フォルダ配下 | フォルダ名称 | Storage | SAN Storage |
| 「MS-SQL Server MEMORY」レポート | 総メモリ量のグラフの種類 | 折れ線グラフ | 積み上げ面グラフ |

- V13.5.0で、コンソールについて以下の改善を行っています。
 - サマリツリーの表示名および表示順が変更されています。

- ー 分析画面および定期レポート登録画面の種別の表示順が変更されています。
詳細については、使用手引書(コンソール編)を参照してください。

10.6 V13.5.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.0.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.5.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.6.1 インストール/アンインストールに関する変更

■Managerとの通信方式

V13.5.0以前では、インストール時にManagerとの通信方式をPushまたはPullから選択していましたが、V15.0.0以降、通常使用する通信方式をPush方式に統一したため、インストール時に選択する必要がなくなりました。

Pull方式を利用したい場合は、インストール後にPull方式に切り替えてください。

インストール後の切り替え手順については、「[第4章 Pull型通信設定](#)」を参照してください。

■アンインストール方法

アンインストールする際に起動させるアンインストーラの呼び出し方法がV13.5.0以前とV15.0.0以降で以下のとおり変更されています。

【Windows版】

- ・ V13.5.0以前
[スタート]メニュー - [コントロールパネル] - [アプリケーションの追加と削除]または[プログラムの追加と削除]
- ・ V15.0.0以降
[スタート]メニューまたは[アプリ]画面で、[Fujitsu] - [アンインストールと管理(ミドルウェア)]を選択します。

【UNIX版】

- ・ V13.5.0以前

```
/opt/FJSVssqc/bin/uninstall.sh
```

- ・ V15.0.0以降

```
/opt/FJSVcir/cir/bin/cimanager.sh -c
```

詳しくは「[第9章 アンインストール](#)」を参照してください。

10.6.2 データの変更

■ディスクスペース情報のファイルシステム内の使用サイズ

V15.0.0で、ディスクスペース情報のファイルシステム内の使用サイズについて算出方法が変更されているため、表示される値がV13.5.0以前と異なります。

算出方法が変更されたフィールドは以下のとおりです。

| Record ID | Field Name | Description |
|--------------|------------|--------------------------|
| UX_DISKSPACE | dusebyts | マウント時のファイルシステム内の使用バイト数 |
| | dusembs | マウント時のファイルシステム内の使用メガバイト数 |

V13.5.0以前と同じ方法で算出したい場合は、「[付録D ディスクスペース情報のファイルシステム内の使用サイズ算出方法の変更\(互換用\)](#)」を参照してください。

10.6.3 定義の変更

■Oracle Database Serverの管理設定

V15.0.0以降は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat)[ORA]セクションのPASSに、暗号化したパスワードを定義します。

V13.5.0以前からアップグレードインストールを行った場合は、Oracle Database Serverの管理設定のための、収集テンプレート(template.dat) - [ORA]セクションのPASSに定義しているパスワードを暗号化してください。

定義の方法は、使用手引書「Oracle Database Serverの管理設定」を参照してください。

10.6.4 メッセージの変更

■メッセージの出力頻度の変更

- ・ V15.0.0で、以下のメッセージの出力頻度に変更されています。

対象イベントID

— 3073/DSA3073W

変更内容

V13.5.0以前

コマンドの実行時間が、指定の時間を超過した場合に出力されます。

V15.0.0以降

コマンドの実行時間が指定の時間を超過した状態が、60回発生した場合に出力されます。

■コマンドタイムアウトのメッセージ

V15.0.0で、コマンドタイムアウトのメッセージ文の中に、タイムアウト回数が追加されています。

メッセージの変更内容は以下のとおりです。

対象イベントID

- ・ 3073/DSA3073W(警告)

変更内容

メッセージ文(日本語)

| | 変更内容 |
|-----------|--|
| V13.5.0以前 | コマンドの実行時間が%1秒を超過しました。処理を停止します。%2 |
| V15.0.0以降 | コマンドの実行時間%1秒が%2回連続して超過しました。処理を停止します。%3 |

メッセージ文(英語)

| | 変更内容 |
|-----------|---|
| V13.5.0以前 | Maximum command process time of %1 seconds exceeded. Command aborted: %2. |
| V15.0.0以降 | Maximum command process time of %1 seconds exceeded %2 times sequentially. Command aborted: %3. |

詳細については、リファレンスマニュアル「共通メッセージ」を参照してください。

10.6.5 画面名や操作方法などの変更

■Excel(R)形式のレポート

- V15.0.0で、「時系列表示」レポートおよび「サマリデータ時系列表示」レポートでExcel(R)形式のファイルを作成する場合の出力方法が変更されています。

| | |
|-----------|-------------------------------|
| V13.5.0 | 性能情報のグラフと表は別々のシートに出力されます。 |
| V15.0.0以降 | 1種類の性能情報のグラフと表は1つのシートに出力されます。 |

- V13.5.0以前は、レポートコンテンツの内容をExcel(R)形式のファイルとして出力する場合、運用管理コンソール上にMicrosoft(R) Excelをインストールする必要がありましたが、V15.0.0以降はインストールの必要はなくなりました。
- V13.5.0以前は、レポートコンテンツの内容をExcel(R)形式のファイルとして出力する場合、拡張子が.xlsでしたが、V15.0.0以降は拡張子が.xlsxまたは.xlsmとなります。

■画面名・操作方法など

- V13.5.0以前のレポートは、総点検・カテゴリ別診断・詳細に分類されていましたが、V15.0.0で、分類方法が運用の目的別(シナリオ)に変更されています。また、一部レポートの名称が変更されています。
 - V13.5.0以前とV15.0.0の、レポート名称および分類/カテゴリの対応については、「[付録Cレポート名称および分類/カテゴリ対応一覧\(V13.5.0以前-V15.0.0\)](#)」を参照してください。
 - V13.5.0以前に登録されていた総点検・カテゴリ別診断・詳細分析は、「旧バージョン登録済みレポート」カテゴリとして表示されます。
 - V13.5.0以前に登録されていた総点検・カテゴリ別診断・詳細定期レポートは、「登録名」に表示されます。
 - V13.5以前に即時レポート、または分析で作成されたレポートは、コンソールの履歴表示で[レポート名]の欄に[登録名]が表示されます。
 - V13.5以前に定期レポート登録し作成されたレポートは、定期レポート一覧表示の[レポート名]の欄に[登録名]が表示されます。V15.0.0以降にアップグレード後に作成されたレポートも、[レポート名]の欄に[登録名]が表示されます。[レポート名]の欄にレポート名を表示したい場合は、[定義画面]の[定期レポート登録]画面で、登録済みのレポートを選択し、[上書き保存]してください。ただし、上書き保存する前に作成されたレポートの[レポート名]の欄は[登録名]のままであり、変更することはできません。
- V15.0.0で、以下のようにモニターレポートのSolarisゾーンの表記の変更を行っています。

| | V13.5.0以前 | V15.0.0以降 |
|-------------|--------------|--------------------------|
| Solaris 10用 | Solaris Zone | Solaris Zone(Solaris 10) |
| Solaris 11用 | — | Solaris Zone |

備考) Solaris 11からzonestatコマンドによるSolarisゾーン上で消費されるシステムリソースの監視が強化され、Solaris 10とSolaris 11のSolarisゾーンでは、監視する方法が変わっています。

それに伴い、Solaris 10用のモニターレポートの名称を「Solaris Zone」から「Solaris Zone(Solaris 10)」に変更し、Solaris 11用のモニターレポートを「Solaris Zone」の表記で追加しています。

- V15.0.0で、画面名や操作方法などが改善されています。

主な機能の画面名の変更は、以下のとおりです。

| V13.4.0/V13.5.0の名称 | V15.0.0以降の名称 |
|--------------------|--------------|
| サマリ | サマリ |
| 詳細 | 詳細 |
| 分析 | 分析/プランニング |

詳細については、使用手引書(コンソール編)を参照してください。

10.7 V15.0.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.0.1で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.0.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.7.1 インストール/アンインストールに関する変更

■アンインストール時のディレクトリの削除(運用管理クライアント)

V15.0.1以降は、運用管理クライアントのアンインストール時に、運用管理クライアントの導入時および運用中にSystemwalker Service Quality Coordinatorが作成したディレクトリは削除されます。



アンインストール時の状況によっては、アンインストール後に以下のディレクトリが削除されずに残る場合があります。その場合は別途削除してください。

- ・ インストールディレクトリ

アンインストールの方法や注意事項については「[9.1 アンインストール\(Windows版\)](#)」を参照してください。

10.7.2 データの変更

■VMware ESXiで収集する性能情報

V15.0.1で、VMware ESXiの物理CPUの平均CPU使用率について算出方法が変更されているため、表示される値がV15.0.0以前と異なります。

算出方法が変更されたフィールドは以下のとおりです。

| Record ID | Field Name | Description |
|-----------|------------|-----------------|
| VMW_PCPU | vmpcpul | 物理CPU の平均CPU使用率 |

10.7.3 画面名や操作方法などの変更

■起動方法

- ・ V15.0.1で、Browser Agentの起動方法が以下のとおり変更されています。
 - V15.0.0以前
[スタート]メニュー - [すべてのプログラム] - [Webページ表示レスポンスの測定開始]
 - V15.0.1以降
[スタート]メニューまたは[アプリ]画面で、[Systemwalker Service Quality Coordinator] - [Webページ表示レスポンスの測定開始]を選択します。
- ・ V15.0.1で、運管クライアントのマニュアルをスタートメニューから参照する方法が以下のとおり変更されています。
 - V15.0.0以前
[スタート]メニュー - [すべてのプログラム] - [Systemwalker Service Quality Coordinator] - [オンラインマニュアル] - オンラインマニュアル
 - V15.0.1以降
[スタート]メニューまたは[アプリ]画面で、[Systemwalker Service Quality Coordinator] - オンラインマニュアルを選択します。

10.8 V15.0.1からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.1.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.0.1から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.8.1 インストール/アンインストールに関する変更

■デフォルトのインストールディレクトリの変更(Windows)

本製品を、Windowsシステムにインストールする場合のデフォルトのディレクトリが、V15.0.1以前とV15.1.0以降で以下のとおり変更されています。

- V15.0.1以前

Enterprise Manager/Manager/Proxy Manager/Agent

C:\Program Files\SystemwalkerSQC

運用管理クライアント

C:\Program Files\SystemwalkerSQC-C

Browser Agent

C:\Program Files\SystemwalkerSQC Browser Agent

- V15.1.0以降

Enterprise Manager/Manager/Proxy Manager/Agent

C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC

運用管理クライアント

C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC-C

Browser Agent

C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC Browser Agent

10.8.2 データの変更

■Oracle Database Serverで収集する性能情報

以下に示すOracle Database Serverの収集項目に、本製品のV15.1.0から収集されるリソースIDが追加されます。

- ORA_FS

収集項目の詳細については、リファレンスマニュアル「Oracleフォルダ配下/Oracle～レポート」を参照してください。

10.8.3 Web利用状況管理機能に関する変更

【Linux版】

V15.1.0より、インストール時に利用状況DB参照エンジン(dbrefコマンド)がインターネットサービスデーモンに登録されなくなったため、手動での登録が必要になりました。登録方法については、Web利用状況管理編「Webサイトの利用状況を分析する」-「利用状況DBエンジン」-「利用状況DB参照エンジン」-「起動操作」を参照してください。

なお、Windows版、Solaris版については仕様の変更はありません。

10.8.4 画面名や操作方法などの変更

■画面名・操作方法など

- ・ V15.1.0で、コンソールについて以下の変更を行っています。

| 変更対象 | 項目 | V15.0.1以前 | V15.1.0以降 |
|--|------------------------|------------------|--|
| 「VMware」カテゴリー - 「VMware(仮想マシン)」レポート | グラフの種類 | 積み上げ面グラフ | 折れ線グラフ |
| | 表示項目 | メモリ使用量 | メモリ使用率 |
| | 分析の対象 | 選択した仮想ホスト上の仮想マシン | システムグループ内の仮想マシン |
| | | | <p>V15.0.1以前のレポートの内容を確認する場合は、以下のレポートで代替してください。</p> <p>「VMware 仮想マシン再配置」カテゴリー - 「VMwareリソース使用状況(仮想マシン積み上げ)」</p> <p>本レポートを、Myカテゴリーおよび定期レポートに登録している場合、登録済みのレポートはV15.1.0以降も継続して使用できます。</p> <p>定期レポートの登録の変更を行う場合は、上記レポートで代替してください。</p> <p>定期レポートの削除を行う場合は、任意のレポートを選択し、[削除]ボタンで削除できます。</p> |
| VMware(仮想マシン積み上げ) (VMware(Virtual)StackMonitor) | 表示項目 | CPU使用率(%) | CPU使用量(MHz) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ VMware(仮想ホスト) (VMware(Physical)Monitor) ・ VMware(仮想マシン積み上げ) (VMware(Virtual)StackMonitor) ・ 「VMware」カテゴリー - 「VMware(仮想ホスト)」レポート ・ 「VMware」カテゴリー - 「VMware(仮想マシン)」レポート | ディスクI/O 回数の計算 方法 | 収集期間内の累積値 | 秒単位の平均値 |

10.9 V15.1.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.1.1で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.1.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.9.1 見積りに関する変更

- V15.1.1で、Linuxに関するリソースデータ、およびログデータ(Troubleshoot)容量の見積りの係数が変更されています。本変更は、V15.1.0以前のSystemwalker Service Quality Coordinatorを使用していて、V15.1.1以降にアップグレードする場合にも影響があります。

「第2章 インストール条件と資源見積り」を参照し、再度見積りを行ってください。

10.10 V15.1.1からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.0で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.1.1から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.10.1 見積りに関する変更

- V15.2.0で、以下の監視対象に関する性能データベース/アーカイブファイル/ログデータ(Troubleshoot)容量の見積りの係数が変更されています。本変更は、V15.1.1以前のSystemwalker Service Quality Coordinatorを使用していて、V15.2.0以降にアップグレードする場合にも影響があります。

「第2章 インストール条件と資源見積り」を参照し、再度見積りを行ってください。

- Windows
- Solaris
- Linux
- VMware ESXi
- Linux仮想マシン機能 (KVM)
- V15.2.0で、Symfoware Analytics Serverの性能情報を管理するための設定方法や収集内容が変更されています。それに伴い、性能データベース/アーカイブファイル容量の見積りの方法も変わります。
「第2章 インストール条件と資源見積り」の、「■サマリデータ見積り」および「■リソースデータ見積り」の「Symfoware Analytics Server」の欄を参照して見積りを行ってください。
- V15.2.0で、インストールレス型Agent管理機能において、被監視サーバがSolaris、Solaris ゾーン、およびOracle VM Server for SPARCの場合に被監視サーバ側に必要なTELNET/SSHの接続セッション数が増えています。本変更は、V15.1.1以前のSystemwalker Service Quality Coordinatorを使用していて、V15.2.0以降にアップグレードする場合にも影響があります。詳細は、以下を参照してください。
 - **Solarisの場合**
使用手引書「サーバ性能管理」- 「前提条件」- 「■資源見積り」
 - **Solaris ゾーンおよびOracle VM Server for SPARCの場合**
使用手引書「仮想資源管理」- 「前提条件」- 「■資源見積り」

10.10.2 定義の変更

■Symfoware Analytics Serverの管理設定

V15.2.0以降は、Symfoware Analytics Serverの性能情報を管理するための設定方法等は、使用手引書「Symfoware Analytics Server」を参照してください。性能データベース/アーカイブファイル容量の見積りの方法については、「第2章 インストール条件と資源見積り」の、「■サマリデータ見積り」および「■リソースデータ見積り」の「Symfoware Analytics Server」の欄を参照してください。

10.10.3 PDBファイル名の変更

- V15.2.0で、PDBファイルは以下のように変更されています。

| V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|--------------------------|-------------------------------|
| pdb_SUMMARY_yyyymmdd.dat | pdb_SUMMARY_yyyymmdd_Dccc.dat |
| pdb_10MIN_yyyymmdd.dat | pdb_10MIN_yyyymmdd_Dccc.dat |
| pdb_1HR_yyyymmdd.dat | pdb_1HR_yyyymmdd_Wccc.dat |
| pdb_1DAY_yyyymmdd.dat | pdb_1DAY_yyyymmdd_Mccc.dat |

ファイル名の詳細は、「[6.6.1.1 PDB格納先の変更](#)」を参照してください。

10.10.4 画面名や操作方法などの変更

■マニュアル提供方法の変更

- V15.2.0で、1つにまとめたPDFマニュアルの製品への添付を取りやめ、1冊ずつのPDFマニュアルの添付に変更されました。
管理コンソールの[マニュアル]をクリックして表示されるマニュアルの一覧において、全マニュアルにまたがる検索を行うことはできません。
全マニュアルにまたがる検索を行う場合は、インストーラ、DVD-ROM媒体、または運用管理クライアントのスタートメニューから、マニュアルの一覧を表示して行ってください。マニュアルの参照方法は、ソフトウェア説明書「適用マニュアル」を参照してください。

■画面名・操作方法など

- V15.2.0で、カテゴリが属するシナリオの変更を行っています。

| シナリオ | V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|------------------------|-----------|-------------|
| VMware チューニング ガイダンス | リソース有効活用 | チューニングガイダンス |

- V15.2.0で、カテゴリ名の変更を行っています。

| シナリオ | V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|-----------|-------------------|--------------------------------|
| 仮想化ソフトウェア | Linux仮想マシン機能(KVM) | KVM |
| | Linux仮想マシン機能(Xen) | Xen / Oracle VM Server for x86 |

- V15.2.0で、レポート名の変更を行っています。

V15.1.1以前で定期レポートを登録していた場合、定期レポートはV15.1.1以前のレポート名で作成されます。V15.2以降で登録済の定期レポートの定義を更新すると、V15.2以降のレポート名に変更されます。

| カテゴリ | V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|---|--------------------|--------------|
| VMware リソースプール | リソースプール(CPU)(需要予測) | リソースプール(CPU) |
| | リソースプール(メモリ)(需要予測) | リソースプール(メモリ) |
| ServerView Resource Orchestrator リソース プール | VMプール(CPU)(需要予測) | VMプール(CPU) |
| | VMプール(メモリ)(需要予測) | VMプール(メモリ) |
| | ストレージプール(需要予測) | ストレージプール |
| | ネットワークプール(需要予測) | ネットワークプール |
| | サーバプール(需要予測) | サーバプール |
| | アドレスプール(需要予測) | アドレスプール |

| カテゴリー | V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|------------------------------------|-----------------------------|-----------------------|
| Oracle VM Server for SPARC リソースプール | リソースプール(CPUスレッド)(全体)(需要予測) | リソースプール(CPUスレッド)(全体) |
| | リソースプール(メモリ)(全体)(需要予測) | リソースプール(メモリ)(全体) |
| | 物理リソース(CPUスレッド)(全体)(需要予測) | 物理リソース(CPUスレッド)(全体) |
| | リソースプール(CPUスレッド)(ノード)(需要予測) | リソースプール(CPUスレッド)(ノード) |
| | リソースプール(メモリ)(ノード)(需要予測) | リソースプール(メモリ)(ノード) |
| | 物理リソース(CPUスレッド)(ノード)(需要予測) | 物理リソース(CPUスレッド)(ノード) |

- V15.2.0で、コンソールについて以下の変更を行っています。

| 変更対象 | 項目 | V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|---|-----------|---|---|
| 「サーバリソース」ノード (ServerMonitor) | ディスクI/O回数 | 収集期間内の累積値 | 秒単位の平均値 収集期間内の累積値は、汎用レポートで参照可能です。 |
| <ul style="list-style-type: none"> • 「VMware(仮想マシン積み上げ)」ノード (VMware(Virtual)Stack Monitor) • 「VMware 仮想マシン再配置」カテゴリー - 「VMwareリソース使用状況(仮想マシン積み上げ)」レポート • 「VMware 仮想マシン再配置」カテゴリー - 「VMware 仮想マシン再配置シミュレーション」レポート | 表示項目 | メモリ使用量 | 有効なメモリ使用量 |
| <ul style="list-style-type: none"> • 「VMware 仮想マシン再配置」カテゴリー - 「VMwareリソース使用状況(仮想ホスト一覧)」レポート • 「VMware 割り当てリソース最適化」カテゴリー - 「VMwareリソース使用状況(仮想マシン一覧)」レポート | 表示フォーマット | メモリ使用率、メモリ使用量について、有効なメモリの情報のみ表示 | メモリ使用率、メモリ使用量について、有効なメモリに合わせ、()内に消費されたメモリの情報を表示 |
| 「VMware チューニングガイド」カテゴリー - 「VMware CPU チューニングガイド」レポート | 表示項目 | 物理CPU | 物理コア(ハイパースレッディングの場合、偶数番号の物理コアのみ表示されます。) |
| 「VMware チューニングガイド」カテゴリー - 「VMware メ | 表示項目 | <ul style="list-style-type: none"> • スワップ発生状況(読み込み/書き込み) | <ul style="list-style-type: none"> • スワップ発生状況(読み込み/書き込み) |

| 変更対象 | 項目 | V15.1.1以前 | V15.2.0以降 |
|--|---------------------------------|---|--|
| メモリ(仮想マシン) チューニングガイド]レポート | | <ul style="list-style-type: none"> スワップ待ち率 スワップ量 メモリ圧縮状況 メモリ伸張状況 バルーン発生量 | <ul style="list-style-type: none"> スワップ量 メモリ圧縮状況 メモリ伸張状況 バルーン発生量 |
| <ul style="list-style-type: none"> 「VMware」カテゴリ - 「VMware(仮想ホスト)」レポート 「VMware」カテゴリ - 「VMware(仮想マシン)」レポート | 表示項目 | メモリ使用率 | 有効なメモリ使用率 |
| 「KVM(仮想マシン積み上げ)ノード (KVM(Virtual)StackMonitor) | ディスクI/O量 | 収集期間内の累積値 | 秒単位の平均値 収集期間内の累積値は、汎用レポートで参照可能です。 |
| 「KVM」カテゴリ (カテゴリ名称もV15.2.0で変更) | レポート | UNIXサーバ | リソース使用状況 「UNIXサーバ」レポートは、UNIXカテゴリで参照できます。 |
| 「KVM」カテゴリ - 「KVM(仮想マシン)」レポート (カテゴリ名称もV15.2.0で変更) | ディスクスループット (項目名称もV15.2.0で変更) | 収集期間内の累積値 | 秒単位の平均値 収集期間内の累積値は、汎用レポートで参照可能です。 |
| | グラフの種類 | 積み上げ面グラフ | 折れ線グラフ 積み上げ面グラフを参照したい場合は、「KVM 仮想マシン再配置」カテゴリの「KVMリソース使用状況(仮想マシン積み上げ)」のCPU使用量のグラフで代替してください。 |
| | メモリ使用量のグラフ | 表示されます。 | 表示されません。 メモリ使用量のグラフを参照したい場合は、「KVM 仮想マシン再配置」カテゴリの「KVMリソース使用状況(仮想マシン積み上げ)」のメモリ使用量のグラフで代替してください。 |
| 「Xen(仮想マシン積み上げ)ノード (Xen(Virtual)StackMonitor) | ディスクI/O回数 | 収集期間内の累積値 | 秒単位の平均値 収集期間内の累積値は、汎用レポートで参照可能です。 |
| 「Xen / Oracle VM Server for x86」カテゴリ - 「Xen(仮想マシン)」レポート (カテゴリ名称もV15.2.0で変更) | | | |

10.10.5 ServerView Resource Orchestratorとの連携についての変更

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.0以降は、ServerView Resource Orchestrator V3.1との連携を行うことはできません。

10.10.6 コマンドに関する変更

V15.2.0より、sqcPDBcout(CSV出力コマンド)の出力結果が以下のように変更されています。

- 出力するフィールドに改行またはカンマが含まれる場合、フィールド全体がダブルクォーテーションで囲まれます。
- 出力するフィールドにダブルクォーテーションが含まれる場合、ダブルクォーテーションはダブルクォーテーションでエスケープされ、さらにフィールド全体がダブルクォーテーションで囲まれます。

注意

- fオプションで指定されたSQL文で、フィールドがダブルクォーテーションで囲まれるように指定されていた場合は、上記加工は行われず指定されたとおりに出力されます。
- コマンドの実行時間が3割程度増加します。

10.11 V15.2.0からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.1で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.0から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.11.1 画面名や操作方法などの変更

■画面名・操作方法など

- V15.2.1で、コンソールについて以下の変更を行っています。

| 変更対象 | 項目 | V15.2.0以前 | V15.2.1以降 |
|-----------------------|-----------------|--|---|
| 「Storage Disk使用率」レポート | 表のDisk情報を示す列の名称 | Storage : RaidGroup | Storage : Disk |
| | 表のDisk情報 | SSC_PLUレコードのリソースID末尾のDisk番号をRaidGroup番号に置き換えたものを表示 | SSC_PLUレコードのリソースIDをそのまま表示(末尾にDisk番号を表示) |
| | 表の「RaidGroup」列 | なし | RaidGroup番号を表示 |
| | グラフのタイトル | Disk使用率(RaidGroup) | Disk使用率 |
| | グラフの表示方法 | Diskが属するRaidGroup単位(表のDisk情報と同じ名称) | Disk単位(表のリソースIDと同じ名称) |

EE

10.11.2 ダッシュボードについての変更

- V15.2.1より、ダッシュボード機能の提供を終了しました。

10.11.3 Systemwalker 共通ユーザー管理/Systemwalker シングル・サインオンについての変更

V15.2.1で、Systemwalker 共通ユーザー管理/Systemwalker シングル・サインオンで使用する通信プロトコルのデフォルトが変更されています。

| | デフォルト |
|-----------|---------|
| V15.2.0以前 | SSL 3.0 |
| V15.2.1以降 | TLS 1.2 |

10.11.4 メッセージの変更

V15.2.1より、以下のメッセージのイベントIDと種別が変更されています。

- ・ 対象イベントID
5752/DSA5752W, 5753/DSA5753W
- ・ 変更内容
以下の表のとおりです。

| V15.2.0以前 | | V15.2.1以降 | |
|-------------------|----|-------------------|-----|
| 5752/ DSA5752W | 警告 | 5752/ DSA5752E | エラー |
| 5753/ DSA5753W | 警告 | 5753/ DSA5753E | エラー |

10.12 V15.2.1からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.1Aで変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.1から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.12.1 インストール/アンインストールに関する変更

■swSilentSetup(サイレントインストール用コマンド)の復帰値の変更

V15.2.1A以降は、swSilentSetup(サイレントインストール用コマンド)の復帰値「3」を「その他のエラー」から除外し、製品を使用する前にコンピュータの再起動が必要な状態としました。

- ・ V15.2.1以前
上記以外：その他のエラー
- ・ V15.2.1A以降
3：製品を使用する前にコンピュータの再起動が必要な状態
上記以外：その他のエラー

コマンドについての詳細は、リファレンスマニュアル「swSilentSetup(サイレントインストール用コマンド)」を参照してください。

10.13 V15.2.1Aからの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.2で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.1Aから移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.13.1 見積りに関する変更

V15.2.2で、性能データベース(PDB)の容量の見積りの計算方法を見直しました。

「[第2章 インストール条件と資源見積り](#)」の、「[■性能データベース/アーカイブファイル容量の見積り手順](#)」を参照して見積りを行ってください。

10.13.2 起動/停止方法に関する変更

V15.2.2で、Red Hat Enterprise Linuxにおける常駐プロセスの起動と停止方法、およびhttpdデーモンの自動起動設定と自動起動解除の方法が変更されています。詳細は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照してください。

10.13.3 データの変更

V15.2.2で、以下のデータの算出方法が変更されています。

収集項目の詳細については、リファレンスマニュアル「[データフォーマット](#)」を参照してください。

■Red Hat Enterprise Linuxで収集するメモリに関する性能情報

以下に示すRed Hat Enterprise Linuxのメモリに関する収集項目は、V15.2.2でsar -rから/proc/meminfoを使用した算出方法に変更されているため、表示される値がV15.2.1A以前と異なります。

- SUM_MEM
 - freemem
- UX_MEMFREE
 - freememp
 - memuse
- LX_MEMFREE
 - lmemuse

■ファイルシステムがZFSの場合の性能情報

ファイルシステムがZFSの場合のディスク容量は、V15.2.2での算出方法が変更されているため、表示される値がV15.2.1A以前と異なります。

- UX_DISKSPACEはストレージプールのデータとなります。
- 以下のフィールドは収集されません(空欄となります)。
 - UX_DISKSPACE
 - dtotfils
 - dfrefils

■Oracle Database Serverで収集する性能情報

以下に示すOracle Database Serverの収集項目は、V15.2.2で使用量として管理領域を考慮した算出方法に変更されているため、表示される値がV15.2.1A以前と異なります。

- ORA_TSS
 - tsused
 - tsfree

10.13.4 メッセージの変更

V15.2.2より、以下のメッセージのイベントIDと種別が変更されています。

- 対象イベントID

5826/DSA5826E, 5827/DSA5827E, 6025/DSA6025E, 7226/DSA7226E, 7227/DSA7227E, 7228/DSA7228E

- 変更内容

以下の表のとおりです。

| V15.2.1A以前 | | V15.2.2以降 | |
|-------------------|-----|-------------------|----|
| 5826/ DSA5826E | エラー | 5826/ DSA5826W | 警告 |
| 5827/ DSA5827E | エラー | 5827/ DSA5827W | 警告 |
| 6025/ DSA6025E | エラー | 6025/ DSA6025W | 警告 |
| 7226/ DSA7226E | エラー | 7226/ DSA7226W | 警告 |
| 7227/ DSA7227E | エラー | 7227/ DSA7227W | 警告 |
| 7228/ DSA7228E | エラー | 7228/ DSA7228W | 警告 |

10.14 V15.2.2からの移行

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.3で変更された機能に関する非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinator V15.2.2から移行する場合は、本節以降に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.14.1 見積りに関する変更

V15.2.3で、以下の動作ハードウェアについて一部見直しを行ないました。

「[第2章 インストール条件と資源見積り](#)」の「動作ハードウェア」における「メモリ空き容量」を参照して見積りを行ってください。

- Manager
 - 【Windows版】
 - 【Solaris版】
- Agent/Proxy Manager
 - 【Solaris版】
- Enterprise Manager
 - 【Windows版】
 - 【Solaris版】

10.14.2 インストール/アンインストールに関する変更

■swReplaceSQC(業務サーババンドルAgent入れ替え用コマンド)

swReplaceSQC(業務サーババンドルAgent入れ替え用コマンド)の提供を終了しました。

本製品のインストール時に、Systemwalker Centric Managerの業務サーバにバンドルされているSystemwalker Service Quality Coordinator Agentがすでにインストールされている旨のメッセージが出力された場合は、「[10.15.1.1 Systemwalker Centric Managerバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている環境に、本製品を](#)

インストールする場合」を参照し、バンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentをアンインストールしてから本製品のインストールを行ってください。

10.14.3 提供を終了した機能

V15.2.3より、以下の機能の提供を終了しました。

- ・ サービス稼働管理
- ・ エコ情報管理
- ・ Web利用状況管理(Solaris版)
- ・ Systemwalker 共通ユーザー管理/Systemwalker シングル・サインオン

10.14.4 データの変更

■VMware vCenter Server Appliance/VMware vCenterから収集する性能情報

以下に示す性能情報は、収集される最新のデータが現在時刻より1時間前のデータとなります。

詳細は、使用手引書「仮想資源管理」の「■VMware vCenter Server Appliance/VMware vCenterから収集する情報について」を参照してください。

- ・ SUM_VMWCLUSTERCPU
- ・ SUM_VMWCLUSTERMEM
- ・ SUM_VMWRPOOLCPU
- ・ SUM_VMWRPOOLMEM
- ・ VMW_CLUSTER
- ・ VMW_CLUSTERCPU
- ・ VMW_CLUSTERMEM
- ・ VMW_RPOOLCPU
- ・ VMW_RPOOLMEM
- ・ VMW_VSTORAGE
- ・ VMW_DATASTORE
- ・ VMW_DATASTORE_VMUSAGE

10.15 その他の非互換

Systemwalker Service Quality Coordinatorの機能以外の変更に伴う非互換を説明します。

Systemwalker Service Quality Coordinatorをバージョンアップする場合は、本節に記載されているすべての非互換項目を確認してください。

10.15.1 Systemwalker Centric Manager 業務サーバにバンドルされていた Systemwalker Service Quality CoordinatorのAgent

Systemwalker Centric Manager 業務サーバにバンドルされていたSystemwalker Service Quality CoordinatorのAgentについて、以下のように変更されています。

Systemwalker Centric Manager V13.4.0以降、かつV13.6.x以前の業務サーバの場合

Systemwalker Centric Managerの業務サーバをインストールすると、Systemwalker Service Quality Coordinator Agentが無効化された状態でインストールされます。

Systemwalker Centric Manager V15.0.xの業務サーバの場合

Systemwalker Centric Managerの業務サーバをインストールすると、Systemwalker Service Quality Coordinator Agentのインストーラが格納されます。インストールはユーザーが行います。

Systemwalker Centric Manager V15.1.0以降の業務サーバの場合

Systemwalker Centric Managerの業務サーバをインストールしても、Systemwalker Service Quality Coordinator Agentはインストールされません。インストーラも格納されません。



注意

Systemwalker Centric Managerバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている環境で、Systemwalker Centric Manager V15.1.0以降の業務サーバにアップグレードする場合

- ・ 無効化されたバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている場合
インストールされている無効化されたバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentは、アンインストールされます。
- ・ 有効化されたバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている場合
インストールされている有効化されたバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentは、継続して利用可能です。

10.15.1.1 Systemwalker Centric Managerバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている環境に、本製品をインストールする場合

本製品のインストール時にバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがインストールされている場合は、無効化/有効化の状態に関係なく、バンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentがすでにインストールされている旨のメッセージが出力されます。

その場合は、以下の手順でSystemwalker Centric Managerバンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentをアンインストールし、本製品をインストールしてください。

1. Systemwalker Centric Manager V13.4.0からV15.0.1の業務サーバにバンドルされていたSystemwalker Service Quality Coordinator Agentについてライセンスセットアップを行っている場合は、以下のファイルのうち、ユーザーが作成、修正したものについてバックアップを行ってください。

【Windows版】

- <Systemwalker Centric Manager 業務サーバのインストールディレクトリ>%SQC%\SystemwalkerSQC%\control
 - DSAconfiguration.txt
 - template.dat
 - udataconf.ini
 - alertconfig.txt
- <Systemwalker Centric Manager 業務サーバのインストールディレクトリ>%SQC%\bin
 - threshold.bat

【UNIX版】

- /etc/opt/FJSSVssqc
 - DSAconfiguration.txt
 - template.dat
 - udataconf.ini
 - alertconfig.txt

— /opt/FJSVssqc/bin

- threshold.sh

2. バンドル版Systemwalker Service Quality Coordinator Agentをアンインストールします。詳細は「[第9章 アンインストール](#)」を参照してください。

【Windows版】

「Systemwalker Service Quality Coordinator Agent」を選択して、アンインストールしてください。

【UNIX版】

「Agent」の番号を選択して、アンインストールしてください。

3. 本製品をインストールします。
詳細は「[第3章 インストールとセットアップ](#)」を参照してください。
4. 必要に応じて、上記バックアップしたファイルを基に、再度編集作業を行ってください。
5. セットアップを実施してください。

付録A セットアップコマンド一覧

ここでは、各セットアップコマンドについて説明します。

詳細については、リファレンスマニュアルを参照してください。

A.1 サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド

サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンドについて説明します。

詳細については、リファレンスマニュアル「`sqcRPolicy`(サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド)」および「`sqcSetPolicy`(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■記述形式

1. サーバ内リソース情報収集ポリシー作成

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcRPolicy.exe
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcRPolicy.sh
```

2. ポリシーの適用

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

ポイント

- サーバ内リソース情報収集ポリシー作成コマンド(`sqcRPolicy`)、またはポリシーリモート操作コマンドの、`sqcCtrlPolicy.exe -e RP`コマンドを実行すると、`MiddlewareConf.xml`が生成されます。管理対象を削除したい場合は、リファレンスマニュアル「リソース構成情報(`MiddlewareConf.xml`)」を参照して、`MiddlewareConf.xml`の内容を変更してください。

- Systemwalker Service Quality Coordinator V13.3.0以降は、ポリシー適用コマンド実行時にサービス/デーモンの事前停止は不要です。サービス/デーモンが動作中で各管理対象製品の性能データが収集中であった場合、それらはポリシー適用の実施中は一時的に停止され、終了後に再収集を開始します。

ただし、-hオプション/-pオプションを使用する場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止した上で実行してください。

■ sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)のオプション

-h <host name>

管理対象のシステム名を変更したい場合には、本オプションで設定したいシステム名を指定します。

また、以下のようなクラスタ運用を行っている場合にも、本オプションでシステム名を指定します。

- Managerで、かつManagerのサーバ内リソース情報を収集する場合
⇒引継ぎノード名を指定します。
- Agentで、かつノード名引継ぎを実施しているシステムの場合
⇒各Agentのノード名を指定します。

本オプションを省略した場合は、インストール時のホスト名、または、前回-hオプションで設定したシステム名が継続して設定されます。

ホスト名を変更しても自動的に反映はされませんので、本オプションで設定してください。

なお、本オプションを使用する場合は、サービス/デーモンの停止が必要です。「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止した上で実行してください。

サービス/デーモンが動作中で各ミドルウェア等の性能データが収集中であった場合、それらはポリシー適用の実施中は一時的に停止され、終了後に再収集を開始します。

注意

すでに本製品の運用環境が存在し、一度Agentが登録してある状況において、当コマンドの再投入またはAgentを再インストールする場合には、-hオプションを使用する場合には、以前に使用していたシステム名を使用してください。

システム名を変更する必要がある場合には、リファレンスマニュアル「sqcPDBerase(データ削除コマンド)」で説明するデータ削除コマンドで、以前のシステム名の情報をPDBより削除してから行ってください。ただしこの場合、以前に取得された性能情報は参照できなくなります。

ポイント

実行環境以外の管理対象のシステム名を変更したい場合

- インストール型Agentのシステム名を変更したい場合
情報を収集しているAgent(Agent機能を使用しているEnterprise Manager/Manager/Proxy Managerも含む)上で、-hオプションに変更したいシステム名を指定してsqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)を実行します。
- インストールレス型Agent
リモート監視定義ファイル(remoteAgent.txt)の「DISPLAYNAME」に変更したいシステム名を指定します。詳細は、使用手引書「リモート監視定義ファイル」を参照してください。

-p <IP address>

クラスタ運用を行っている場合は、引継ぎIPアドレスを指定してください。

本オプションを省略した場合は、前回-pオプションで設定したIPアドレスが継続して設定されます。

IPアドレスを変更しても自動的に反映はされませんので、本オプションで設定してください。

なお、本オプションを使用する場合は、サービス/デーモンの停止が必要です。「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止した上で実行してください。

サービス/デーモンが動作中で各ミドルウェア等の性能データが収集中であった場合、それらはポリシー適用の実施中は一時的に停止され、終了後に再収集を開始します。

注意

インストール後に初めて本コマンドを実行し、かつ本オプションを省略した場合は、自動的に取得したIPアドレスが設定されますが、複数のIPアドレスが存在する場合などは、接続するManager/Enterprise Managerに通信可能なIPアドレスが取得できないことがあります。必ず-pオプションで管理対象のIPアドレスを指定してください。

A.2 レスポンス情報収集ポリシー作成コマンド

レスポンス情報収集ポリシー作成コマンドについて説明します。

詳細については、リファレンスマニュアル「sqcAPolicy(レスポンス情報収集ポリシー作成コマンド)」および「sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

1. レスポンス情報収集ポリシー作成

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcAPolicy.bat
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcAPolicy.sh
```

2. ポリシーの適用

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcSetPolicy.exe [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

ポイント

Systemwalker Service Quality Coordinator V13.3.0以降は、ポリシー適用コマンド実行時にサービス/デーモンの事前停止は不要です。サービス/デーモンが動作中で各管理対象製品の性能データが収集中であった場合、それらはポリシー適用の実施中は一時的に停止され、終了後に再収集を開始します。

ただし、-hオプション/-pオプションを使用する場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止した上で実行してください。

■ sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)のオプション

-h <host name>

管理対象のシステム名を変更したい場合には、本オプションで設定したいシステム名を指定します。

また、以下のようなクラスタ運用を行っている場合にも、本オプションでシステム名を指定します。

- Managerで、かつManagerのサーバ内リソース情報を収集する場合
⇒引継ぎノード名を指定します。
- Agentで、かつノード名引継ぎを実施しているシステムの場合
⇒各Agentのノード名を指定します。

本オプションを省略した場合は、インストール時のホスト名、または、前回-hオプションで設定したシステム名が継続して設定されます。

ホスト名を変更しても自動的に反映はされませんので、本オプションで設定してください。

注意

すでに本製品の運用環境が存在し、一度Agentが登録してある状況において、当コマンドの再投入またはAgentを再インストールする場合には、-hオプションを使用する場合には、以前に使用していたシステム名を使用してください。

システム名を変更する必要がある場合には、リファレンスマニュアル「sqcPDBerase(データ削除コマンド)」で説明するデータ削除コマンドで、以前のシステム名の情報をPDBより削除してから行ってください。ただしこの場合、以前に取得された性能情報は参照できなくなります。

-p <IP address>

クラスタ運用を行っている場合は、引継ぎIPアドレスを指定してください。

本オプションを省略した場合は、前回-pオプションで設定したIPアドレスが継続して設定されます。

IPアドレスを変更しても自動的に反映はされませんので、本オプションで設定してください。

注意

インストール後に初めて本コマンドを実行し、かつ本オプションを省略した場合は、自動的に取得したIPアドレスが設定されますが、複数のIPアドレスが存在する場合などは、接続するManager/Enterprise Managerに通信可能なIPアドレスが取得できないことがあります。必ず-pオプションで管理対象のIPアドレスを指定してください。

EE

A.3 Managerの二階層運用セットアップコマンド

Enterprise Managerでシステム全体の一元管理を行うためには、Managerをインストール後、各ManagerにてManagerの二階層運用セットアップコマンドを実行する必要があります。

以下、Managerの二階層運用セットアップコマンドsqcEmSetupの仕様について説明します。

二階層運用を解除する場合など詳細については、リファレンスマニュアル「sqcEmSetup(Managerの二階層運用セットアップコマンド)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■本手順を行う前に

Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcEmSetup.exe -h <host name> [-s on|off] [-m on|off]
<インストールディレクトリ>%bin%sqcEmSetup.exe -u
<インストールディレクトリ>%bin%sqcEmSetup.exe -d
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcEmSetup.sh -h <host name> [-s on|off] [-m on|off]
/opt/FJSVssqc/bin/sqcEmSetup.sh -u
/opt/FJSVssqc/bin/sqcEmSetup.sh -d
```

■オプション

-h <host name>

Enterprise Managerのホスト名またはIPアドレスを指定します。本オプションは、**-u** および **-d** オプションと同時に指定することはできません。

-s on|off

-h オプションを指定した場合に、サマリデータをManagerに格納するかどうかを指定します。

- **on** : サマリデータをManagerに格納します。
- **off** : サマリデータをManagerに格納しません。

本オプションを指定しない場合は、**off**が設定されたものとみなします。

-s オプションと**-m** オプションの組み合わせについては、**-m** オプションの下のポイントを参照してください。

-m on|off

-h オプションおよび**-s on** オプションを指定した場合に、サマリデータをEnterprise Managerに格納するかどうかを指定します。

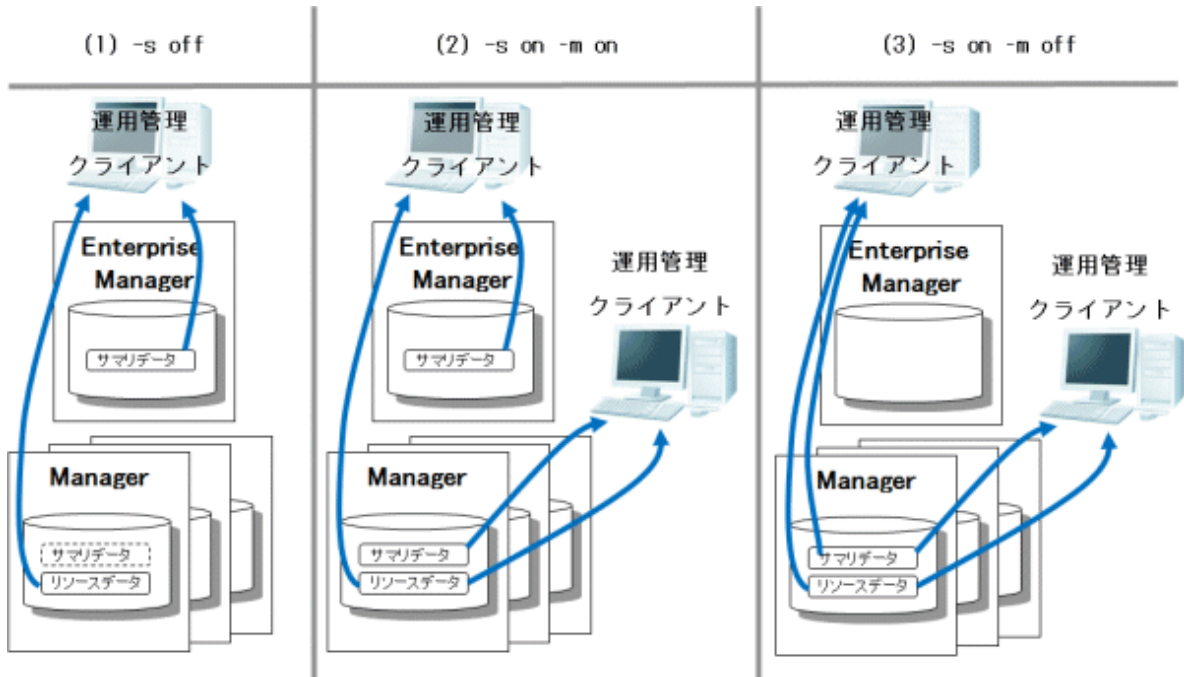
- **on** : サマリデータをEnterprise Managerに格納します。
- **off** : サマリデータをEnterprise Managerには格納しません。
ただし、Enterprise ManagerでAgentの機能を使用して自身の性能情報を収集する場合、**-m off** オプションを指定しても、自身のサマリデータはEnterprise Managerに格納されます。

本オプションを指定しない場合は、**on**が設定されたものとみなします。

-s オプションと**-m** オプションの組み合わせについては、以下のポイントを参照してください。

ポイント

-sおよび-mオプションの組み合わせ



(1) -s off

通常の運用形態です。

- サマリデータをEnterprise Managerに格納します。各Managerには格納しません。
- Enterprise Managerに接続した運用管理クライアントからシステム全体を一元管理します。
- システム全体の状況を把握するためのサマリデータを素早く表示できます。

(2) -s on -m on

部門単位の管理を実施する場合の運用形態です。

- サマリデータをEnterprise Managerおよび各Managerに格納します。
- Enterprise Managerではシステム全体の管理を、Managerでは部門単位の管理を行うことができます。
- システム全体の状況を把握するためのサマリデータを素早く表示できます。

(3) -s on -m off

部門単位の管理を実施する場合の運用形態です。

- サマリデータを各Managerに格納します。Enterprise Managerには格納しません。
- Enterprise Managerではシステム全体の管理を、Managerでは部門単位の管理を行うことができます。
- Enterprise Managerで管理するManagerの台数を増やすことができます。
- Enterprise Managerに接続した運用管理クライアントでサマリデータを表示する場合は、各Managerに格納されているサマリデータを取得して表示します。

-u

Managerの二階層運用の解除を行います。本オプションは、-h および -dオプションと同時に指定することはできません。

-d

現在設定されているEnterprise Managerを表示します。本オプションは、-h および -u オプションと同時に指定することはできません。

■使用例

Managerの二階層運用環境をセットアップする場合は、以下のように実行します。

【Windows版】

```
C:>cd C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>sqcEmSetup.exe -h hostname
Command Succeeded.
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>
```

【UNIX版】

```
# cd /opt/FJSVssqc/bin/
# ./sqcEmSetup.sh -h hostname
Command Succeeded.
#
```

EE

A.4 Managerの二重化運用Managerセットアップコマンド

Managerを二重化する場合は、ManagerおよびAgent/Proxy Managerにて二重化セットアップコマンドを実行する必要があります。

以下、Managerの二重化運用Managerセットアップコマンドの仕様について説明します。

二重化を解除する場合など詳細については、リファレンスマニュアル「sqcHmSetup(Managerの二重化運用Managerセットアップコマンド)」を参照してください。

ポイント

本コマンドは「4.3.2.2台目のManagerでの作業」で記載されているとおり、Pull運用の場合の2台目のManagerでのみ実行してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcHmSetup.exe [-u]
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcHmSetup.exe [-u]
```

■オプション

-u

Managerの二重化運用の解除を行います。

■使用例

Managerを二重化運用する場合には、以下のように実行します。

【Windows版】

```
C:>cd C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>sqcHmSetup.exe
Command Succeeded.
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>
```

【UNIX版】

```
# cd /opt/FJSVssqc/bin/
# ./sqcHmSetup.exe
Command Succeeded.
#
```

EE

A.5 Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド

Managerを二重化する場合は、ManagerおよびAgent/Proxy Managerにて二重化セットアップコマンドを実行する必要があります。

以下、Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンドの仕様について説明します。

Managerの二重化運用を解除する場合など詳細については、リファレンスマニュアル「sqcHaSetup(Managerの二重化運用Agent/Proxy Managerセットアップコマンド)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcHaSetup.exe -h <host name>  
<インストールディレクトリ>%bin%sqcHaSetup.exe -u  
<インストールディレクトリ>%bin%sqcHaSetup.exe -d
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcHaSetup.sh -h <host name>  
/opt/FJSVssqc/bin/sqcHaSetup.sh -u  
/opt/FJSVssqc/bin/sqcHaSetup.sh -d
```

■オプション

-h <host name>

Agentのインストール時に設定しなかった方のManagerのホスト名またはIPアドレスを指定します。本オプションは、他のオプションと同時に指定することはできません。

-u

Managerの二重化運用の解除を行います。本オプションは、他のオプションと同時に指定することはできません。

-d

現在接続先として設定されているManagerを表示します。本オプションは、他のオプションと同時に指定することはできません。



注意

このオプションはPush運用の場合のみ指定できます。

■使用例

2台目のManagerを追加する場合には、以下のように実行します。

【Windows版】

```
C:>%cd C:%Program Files%Fujitsu%SystemwalkerSQC%bin  
C:%Program Files%Fujitsu%SystemwalkerSQC%bin>sqcHaSetup.exe -h hostname  
Command succeeded.  
C:%Program Files%Fujitsu%SystemwalkerSQC%bin>
```

【UNIX版】

```
# cd /opt/FJSVssqc/bin/  
# ./sqcHaSetup.sh -h hostname  
Command succeeded.  
#
```


A.6 クラスタセットアップコマンド

クラスタ環境を構築する場合には、クラスタセットアップコマンドを実行する必要があります。

以下、現用系サーバ、待機系サーバクラスタセットアップコマンドについて説明します。

クラスタセットアップコマンドの詳細については、リファレンスマニュアル「[sqcsetupclp/sqcsetupcls\(クラスタセットアップコマンド\)](#)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■実行環境

本コマンドは、Manager/Enterprise Managerで実行できます。

■本手順を行う前に

Manager/Enterprise Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■記述形式

【Windows版】

(現用系サーバ)

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcsetupclp.exe -m <共用ディスクのドライブ> -h <論理ホスト名>
```

(待機系サーバ)

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcsetupcls.exe -m <共用ディスクのドライブ>
```

【UNIX版】

(現用系サーバ)

```
/opt/FJSSVC/bin/sqcsetupclp -m <マウントポイント> -h <論理ホスト名>
```

(待機系サーバ)

```
/opt/FJSSVC/bin/sqcsetupcls -m <マウントポイント>
```

■オプション

【Windows版】

-m <共用ディスクのドライブ>

クラスタ運用で利用する共用ディスク装置のドライブを指定します

-h <論理ホスト名>

クラスタ運用で利用する論理ホスト名または論理IPアドレスを指定します。



運用中のシステムで本オプションを使用すると、ManagerのIPアドレス/ホスト名が変更されるためAgent側の設定変更も必要になります。導入手引書「Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更」を参照し、変更を実施してください。

【UNIX版】

-m <共用ディスクのマウントポイント>

クラスタ運用で利用する共用ディスク装置のマウントポイントを指定します。

-h <論理ホスト名>

クラスタ運用で利用する論理ホスト名または論理IPアドレスを指定します。



運用中のシステムで本オプションを使用すると、ManagerのIPアドレス/ホスト名が変更されるためAgent側の設定変更も必要になります。導入手引書「Agent/Proxy Managerが認識するManagerのIPアドレス/ホスト名の変更」を参照し、変更を実施してください。

■ 使用例

【Windows版】

(現用系サーバ sqcsetupclp)

```
C:\>cd C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>sqcsetupclp.exe -m F:\ -h hostname
126 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
0 個のファイルをコピーしました
Cluster setup succeeded
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>
```

(待機系サーバ sqcsetupcls)

```
C:\>cd C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>sqcsetupcls.exe -m F:
Cluster setup succeeded
C:\Program Files\Fujitsu\SystemwalkerSQC\bin>
```

【UNIX版】

(現用系サーバ sqcsetupclp)

```
# cd /opt/FJSVssqc/bin/
# ./sqcsetupclp -m /share -h hostname
Cluster setup succeeded
#
```

(待機系サーバ sqcsetupcls)

```
# cd /opt/FJSVssqc/bin/
# ./sqcsetupcls -m /share
Cluster setup succeeded
#
```

EE

A.7 クラスタアンセットアップコマンド

クラスタ環境を解除するためにはクラスタ解除コマンドを実行する必要があります。

以下、クラスタ解除コマンドについて説明します。

クラスタ解除コマンドの詳細については、リファレンスマニュアル「[sqcunsetcl\(クラスタアンセットアップコマンド\)](#)」を参照してください。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■実行環境

本コマンドは、Manager/ Enterprise Managerで実行できます。

■本手順を行う前に

Manager/Enterprise Managerの常駐プロセスが起動している場合は、「[付録B 常駐プロセス、起動と停止](#)」を参照して、サービス/デーモンを停止してください。また、常駐プロセスが停止しているか確認してください。

■記述形式

【Windows版】

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqcunsetcl
```

【UNIX版】

```
/opt/FJSSVssqc/bin/sqcunsetcl
```

■オプション

なし

EE

A.8 Systemwalker Service Quality Coordinatorのインストールコマンド(Server Core環境の場合)

Server Core環境にAgentをインストールする場合は、本製品のDVD-ROMを準備して、以下の手順を実施してください。

■実行に必要な権限/実行環境

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■手順

1. インストール種別やインストール先ディレクトリなど、インストール時に必要な情報を格納したインストール情報ファイルを作成します。

参考

.....
詳細は「[3.2.1 インストール情報ファイルの作成](#)」を参照してください。
.....

2. 以下のいずれかのcimanager.exeファイルが存在するか確認します。

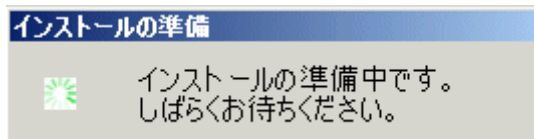
```
%SystemDrive%\FujitsuF4CR\cir\bin\cimanager.exe  
%ProgramFiles(x86)%\Fujitsu\FujitsuF4CR\cir\bin\cimanager.exe
```

3. cimanager.exeファイルが存在しない場合は、以下のコマンドを実行し、インストールの準備を行います。cimanager.exeが存在する場合は、手順4に進みます。

```
DVD-ROMドライブ:%CIR%\cirinst.exe
```

ポイント

.....
コマンドを実行すると以下のメッセージが表示され、完了するとメッセージの表示を閉じます。
.....



.....
コマンドは実行後すぐに復帰するため、コマンドの完了はメッセージの表示が閉じたかどうかで判断してください。
.....

4. 以下のコマンドを実行します。

Agent for Businessの場合

```
cscript DVD-ROMドライブ:%agentforbiz%setup.vbs -s <インストール情報ファイル> -m  
UNLIMITED
```

Agent for Serverの場合

```
cscript DVD-ROMドライブ:%agentforsrv%setup.vbs -s <インストール情報ファイル> -m  
UNLIMITED
```



インストール完了後に以下のファイルが存在する場合、本製品を使用する前にコンピュータを再起動する必要があります。

```
<インストールディレクトリ>%bin%sqc_reboot.txt
```



A.9 Systemwalker Service Quality Coordinatorのアンインストールコマンド(Server Core環境の場合)

Server Core環境からAgentをアンインストールする場合は、本コマンドを使用します。

■実行に必要な権限/実行環境

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

■手順

1. 以下のいずれかのコマンドを実行します。

```
%SystemDrive%¥FujitsuF4CR¥cir¥bin¥cimanager.exe  
%ProgramFiles(x86)%¥Fujitsu¥FujitsuF4CR¥cir¥bin¥cimanager.exe
```

2. アンインストーラが起動するので、「[9.1 アンインストール\(Windows版\)](#)」の手順を参照し、Agentをアンインストールします。

付録B 常駐プロセス、起動と停止

ここでは、常駐プロセスの起動と停止方法について説明します。

プロセスなど詳細については、リファレンスマニュアル「常駐プロセス、起動と停止」を参照してください。

■ Manager

【Windows版】

以下のサービスを起動(開始)/停止します。

- Systemwalker SQC DCM

ポイント

Pull方式での通信をする場合は、以下のサービスも起動(開始)/停止します。

- Systemwalker SQC sqcschdle

ポリシー配付機能を使用する場合は、以下のサービスも起動/停止します。

- Systemwalker SQC thttpd

Systemwalker SQC thttpdサービスを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

注意

[Systemwalker SQC DCM]サービスの再起動を実施する場合、Windowsのサービス画面で「サービスの再起動」を実行しないでください。

「サービスの停止」を実行してから、しばらくして、「サービスの開始」を実行してください。

【Linux版】

以下のコマンドで現在の状態を確認します。

```
systemctl status ssqcdcm
```

上記コマンドの”Active:”欄の表示で確認します。

以下のコマンドで起動/停止します。

起動:

```
systemctl start ssqcdcm
```

停止:

```
systemctl stop ssqcdcm
```

ポイント

Pull方式での通信をする場合は、以下のコマンドも起動/停止します。

起動 :

```
systemctl start ssqsch
```

停止 :

```
systemctl stop ssqsch
```

ポリシー配付機能を使用する場合は、以下のコマンドも起動/停止します。

起動 :

```
systemctl start ssqchttp
```

停止 :

```
systemctl stop ssqchttp
```

Systemwalker SQC thttpdデーモンを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

【Solaris版】

以下のスクリプトで現在の状態を確認します。

```
/etc/rc2.d/S99ssqcdcm
```

以下のスクリプトで起動/停止します。

起動 :

```
/etc/rc2.d/S99ssqcdcm start
```

停止 :

```
/etc/rc0.d/K00ssqcdcm stop
```

完全停止 :

```
/etc/rc0.d/K00ssqcdcm stop_wait
```

ポイント

停止オプション(stop)の場合、プロセスの終了シグナルを送信し、プロセスの終了を待たずにコマンドを完了します。

完全停止オプション(stop_wait)の場合、プロセスの終了シグナルを送信し、起動していたプロセスが終了するのを待ってからコマンドを完了します。

プロセスの再起動を行う場合、完全停止オプション(stop_wait)を利用して停止し、コマンドの完了後に起動オプション(start)で起動してください。

ポイント

Pull方式での通信をする場合は、以下のスクリプトも起動/停止します。

起動：

```
/etc/rc2.d/S99ssqsch start
```

停止：

```
/etc/rc0.d/K00ssqsch stop
```

ポリシー配付機能を使用する場合は、以下のスクリプトも起動/停止します。

起動：

```
/opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp start
```

停止：

```
/opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp stop
```

Systemwalker SQC thttpdデーモンを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

■ Agent/Proxy Manager

【Windows版】

以下のサービスを起動(開始)/停止します。

- Systemwalker SQC DCM

ポイント

Pull方式での通信およびポリシー配付機能を使用する場合は、以下のサービスも起動/停止します。

- Systemwalker SQC thttpd

Systemwalker SQC thttpdサービスを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

注意

[Systemwalker SQC DCM]サービスの再起動を実施する場合、Windowsのサービス画面で「サービスの再起動」を実行しないでください。

「サービスの停止」を実行してから、しばらくして、「サービスの開始」を実行してください。

【Linux版】

以下のコマンドで現在の状態を確認します。


```
systemctl status ssqcdcm
```

上記コマンドの”Active:”欄の表示で確認します。

以下のコマンドで起動/停止します。

起動 :

```
systemctl start ssqcdcm
```

停止 :

```
systemctl stop ssqcdcm
```

ポイント

Pull方式での通信およびポリシー配付機能を使用する場合は、以下のコマンドも起動/停止します。

起動 :

```
systemctl start ssqchttp
```

停止 :

```
systemctl stop ssqchttp
```

Systemwalker SQC thttpdデーモンを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

【Solaris版】

以下のスクリプトで現在の状態を確認します。

```
/etc/rc2.d/S99ssqcdcm
```

以下のスクリプトで起動/停止します。

起動 :

```
/etc/rc2.d/S99ssqcdcm start
```

停止 :

```
/etc/rc0.d/K00ssqcdcm stop
```

完全停止 :

```
/etc/rc0.d/K00ssqcdcm stop_wait
```

ポイント

停止オプション(stop)の場合、プロセスの終了シグナルを送信し、プロセスの終了を待たずにコマンドを完了します。

完全停止オプション(stop_wait)の場合、プロセスの終了シグナルを送信し、起動していたプロセスが終了するのを待ってからコマンドを完了します。

プロセスの再起動を行う場合、完全停止オプション(stop_wait)を利用して停止し、コマンドの完了後に起動オプション(start)で起動してください。

ポイント

Pull方式での通信およびポリシー配付機能を使用する場合は、以下のスクリプトも起動/停止します。

起動：

```
/opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp start
```

停止：

```
/opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp stop
```

Systemwalker SQC thttpdデーモンを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

■ Enterprise Manager

【Windows版】

以下のサービスを起動(開始)/停止します。

- ・ Systemwalker SQC DCM

ポイント

ポリシー配付機能を使用する場合は、以下のサービスも起動/停止します。

Systemwalker SQC thttpd

Systemwalker SQC thttpdサービスを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

注意

[Systemwalker SQC DCM]サービスの再起動を実施する場合、Windowsのサービス画面で「サービスの再起動」を実行しないでください。

「サービスの停止」を実行してから、しばらくして、「サービスの開始」を実行してください。

【Linux版】

以下のコマンドで現在の状態を確認します。

```
systemctl status ssqcdcm
```

上記コマンドの”Active:”欄の表示で確認します。

以下のコマンドで起動/停止します。

起動:

```
systemctl start ssqcdm
```

停止:

```
systemctl stop ssqcdm
```

ポイント

ポリシー配付機能を使用する場合は、以下のコマンドも起動/停止します。

起動:

```
systemctl start ssqchttp
```

停止:

```
systemctl stop ssqchttp
```

Systemwalker SQC thttpdデーモンを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

【Solaris版】

以下のスクリプトで現在の状態を確認します。

```
/etc/rc2.d/S99ssqcdm
```

以下のスクリプトで起動/停止します。

起動:

```
/etc/rc2.d/S99ssqcdm start
```

停止:

```
/etc/rc0.d/K00ssqcdm stop
```

完全停止:

```
/etc/rc0.d/K00ssqcdm stop_wait
```

ポイント

停止オプション(stop)の場合、プロセスの終了シグナルを送信し、プロセスの終了を待たずにコマンドを完了します。

完全停止オプション(stop_wait)の場合、プロセスの終了シグナルを送信し、起動していたプロセスが終了するのを待ってからコマンドを完了します。

プロセスの再起動を行う場合、完全停止オプション(stop_wait)を利用して停止し、コマンドの完了後に起動オプション(start)で起動してください。

ポイント

ポリシー配付機能を使用する場合は、以下のスクリプトも起動/停止します。

起動：

```
/opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp start
```

停止：

```
/opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp stop
```

Systemwalker SQC thttpdデーモンを自動起動させる方法は、「[B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定](#)」を参照してください。

B.1 thttpdサービス/デーモンの自動起動設定

Systemwalker SQC thttpdサービス/thttpdプロセスは、Pull方式での通信およびポリシー配付機能を使用する場合に起動させるサービス/デーモンです。

■実行に必要な権限

【Windows版】

Administratorsグループに所属するユーザー権限が必要です。

【UNIX版】

システム管理者(スーパーユーザー)権限が必要です。

■自動起動設定手順

【Windows版】

1. [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス]を選択します。
2. 「Systemwalker SQC thttpd」を選択し、[プロパティ]を起動します。
3. [全般]タブの、「スタートアップの種類」を「自動」に変更します。

【Linux版】

以下のコマンドを実行してデーモンの自動起動設定を行います。

```
# systemctl enable ssqchttp
```

【Solaris版】

以下のコマンドを実行して起動スクリプトを設定します。

```
# cd /etc/rc2.d
# ln -s /opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp S99ssqchttp
```

以下のコマンドを実行して停止スクリプトを設定します。

```
# cd /etc/rc0.d
# ln -s /opt/FJSVssqc/bin/ssqchttp K00ssqchttp
```

■自動起動解除手順

【Windows版】

1. [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス]を選択します。
2. 「Systemwalker SQC thttpd」を選択し、[プロパティ]を起動します。
3. [全般]タブの、「スタートアップの種類」を「手動」に変更します。

【Linux版】

以下のコマンドを実行してデーモンの自動起動解除を行います。

```
# systemctl disable ssqchttp
```

【Solaris版】

以下のコマンドを実行して起動・停止スクリプトを削除します。

```
# rm -f /etc/rc2.d/S99ssqchttp
# rm -f /etc/rc0.d/K00ssqchttp
```

付録C レポート名称および分類/カテゴリ対応一覧 (V13.5.0以前-V15.0.0)

V13.5.0以前とV15.0.0の、レポート名称および分類/カテゴリの対応は以下のとおりです。

| V13.5.0以前 | | V15.0.0 | | 備考 |
|-----------|----------------------|--------------------------|--|----|
| 分類 | レポート名称 | レポート名称 | カテゴリ | |
| 総点 検 | Windowsサーバ | 同左 | Windows Hyper-V | |
| | UNIXサーバ | 同左 | UNIX Linux仮想マシン機能 (KVM) Linux仮想マシン機能(Xen) Solaris Zone | |
| | ディスクスペース | 同左 | OS共通 | |
| | VMware(Physical) | VMware(仮想ホスト) | VMware | |
| | HyperV(Physical) | Hyper-V(仮想ホスト) | Hyper-V | |
| | Solaris Zone | Solaris Zone(Solaris 10) | Solaris Zone(Solaris 10) | |
| | HTTPサービス | 同左 | サービス稼働情報 | |
| | SMTPサービス | 同左 | サービス稼働情報 | |
| | DNSサービス | 同左 | サービス稼働情報 | |
| | PORTサービス | 同左 | サービス稼働情報 | |
| | エンドユーザーレスポンス | エンドユーザーレスポンス | エンドユーザーレスポンス | |
| | Webブラウザクシオン | 同左 | Webブラウザクシオン | |
| | Interstage(EJB) | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage(TD) | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage(CORBA) | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage(IJServer) | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | ISI Sequence | 同左 | Interstage Service Integrator | |
| | ISI Queue | 同左 | Interstage Service Integrator | |
| | Primesoft キュー | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft アプリケーション | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft パケット | 同左 | Primesoft Server | |
| | Operation Manager | 同左 | Systemwalker Operation Manager | |
| | MS-.NET | 同左 | Microsoft .NET | |
| | SAP | 同左 | SAP NetWeaver | |

| V13.5.0以前 | | V15.0.0 | | 備考 |
|---------------------|----------------------------------|---------------------------------|--------------------------|-------------------------------------|
| 分類 | レポート名称 | レポート名称 | カテゴリー | |
| | Symfoware | 同左 | Symfoware Server | |
| | Oracle | 同左 | Oracle Database | |
| | MS-SQL | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | リソース使用状況分布 (Windows) | — | P2V(Physical to Virtual) | リソース使用 状況別サーバ 台数分布(概 要)に統合 |
| | リソース使用状況分布 (UNIX) | — | P2V(Physical to Virtual) | リソース使用 状況別サーバ 台数分布(概 要)に統合 |
| | リソース使用状況一覧 (Windows) | — | P2V(Physical to Virtual) | リソース使用 状況 一覧(詳 細)に統合 |
| | リソース使用状況一覧 (UNIX) | — | P2V(Physical to Virtual) | リソース使用 状況 一覧(詳 細)に統合 |
| カテ ゴリ 別診 断 | Windows CPU | 同左 | Windows | |
| | Windows 物理ディスク | 同左 | Windows | |
| | Windows ディスク量 | 同左 | Windows | |
| | Windows メモリ | 同左 | Windows | |
| | Windows プロセス | 同左 | Windows | |
| | Windows CPU(等高線) | 同左 | Windows | |
| | Windows 物理ディスク(等 高線) | 同左 | Windows | |
| | Windows メモリ(等高線) | 同左 | Windows | |
| | UNIX CPU | 同左 | UNIX | |
| | UNIX 物理ディスク | 同左 | UNIX | |
| | UNIX ディスク量 | 同左 | UNIX | |
| | UNIX メモリ | 同左 | UNIX | |
| | UNIX プロセス | 同左 | UNIX | |
| | UNIX CPU(等高線) | 同左 | UNIX | |
| | UNIX 物理ディスク(等高 線) | 同左 | UNIX | |
| | UNIX メモリ(等高線) | 同左 | UNIX | |
| | VMware(Virtual) | VMware(仮想マシン) | VMware | |
| | HyperV(Virtual) | Hyper-V(仮想マシン) | Hyper-V | |
| | Xen(Virtual) | Xen(仮想マシン) | Linux仮想マシン機能(Xen) | |
| | Solaris Zone CPU | Solaris Zone(Solaris 10) CPU | Solaris Zone(Solaris 10) | |
| Solaris Zone メモリ | Solaris Zone(Solaris 10) メ モリ | Solaris Zone(Solaris 10) | | |

| V13.5.0以前 | | V15.0.0 | | 備考 |
|-----------|------------------------------|-----------------------------------|---|----|
| 分類 | レポート名称 | レポート名称 | カテゴリー | |
| | Solaris Zone CPU(等高線) | Solaris Zone(Solaris 10) CPU(等高線) | Solaris Zone(Solaris 10) | |
| | Solaris Zone メモリ(等高線) | Solaris Zone(Solaris 10) メモリ(等高線) | Solaris Zone(Solaris 10) | |
| | Webトランザクションリクエスト | 同左 | Webトランザクション | |
| | Webトランザクション サーバーヒット | 同左 | Webトランザクション | |
| | Webトランザクションクライアントヒット | 同左 | Webトランザクション | |
| | Webトランザクションリモートヒット | 同左 | Webトランザクション | |
| | Webトランザクショントラフィック | 同左 | Webトランザクション | |
| | Webトランザクション エラー | 同左 | Webトランザクション | |
| | TcpNetwork | 同左 | TcpNetwork | |
| | Centric Manager トラフィック | 同左 | Systemwalker Centric Manager(ネットワーク) | |
| | Centric Manager パケット | 同左 | Systemwalker Centric Manager(ネットワーク) | |
| | Network Manager ネットワークトラフィック | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager CPU負荷 | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager コリジョン | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager CRCエラー | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager ドロップパケット | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager 送受信パケット | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager 破棄パケット | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager エラーパケット | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager IP稼働 | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Network Manager RTT | 同左 | Systemwalker Network Manager | |
| | Storage CM CPU使用率 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |
| | Storage CM(ROE) CPU使用率 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |

| V13.5.0以前 | | V15.0.0 | | 備考 |
|-----------|---------------------------------------|---------|---|----|
| 分類 | レポート名称 | レポート名称 | カテゴリー | |
| | Storage Disk使用率 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |
| | Storage スループット | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |
| | Storage IOPS | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |
| | Storage レスポンスタイム | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |
| | Storage キャッシュヒット率 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(SAN Storage) | |
| | NAS CPU使用率 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | NAS NFS OPS | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | NAS CIFS OPS | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | NAS HTTP OPS | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | NAS ネットワークトラフィック | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | NAS DISK R/Wデータ量 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | NAS テープ R/Wデータ量 | 同左 | ETERNUS SF Storage Cruiser(NAS) | |
| | Workload | 同左 | Workload | |
| | Interstage EJBアプリケーション | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage CORBAアプリケーション | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage トランザクションアプリケーション | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage IJServer JVM | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage IJServer JTA | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage IJServer JDBC | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage IJServer SERVLET CONTAINER | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage IJServer SERVLET WEBMODULE | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | Interstage IJServer EVENT SERVICE | 同左 | Interstage Application Server(ワークユニット) | |
| | ISI Sequence | 同左 | Interstage Service Integrator | |

| V13.5.0以前 | | V15.0.0 | | 備考 |
|-----------|--------------------------|---------|--------------------------------|----|
| 分類 | レポート名称 | レポート名称 | カテゴリー | |
| | ISI Queue | 同左 | Interstage Service Integrator | |
| | Primesoft メモリテーブル | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft キュー | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft テーブル | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft ミラーワークエリア | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft 送受信パケット | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft パケット再送発生回数 | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft 受信パケット滞留数 | 同左 | Primesoft Server | |
| | Primesoft 受信パケット滞留時間 | 同左 | Primesoft Server | |
| | Operation Manager サブシステム | 同左 | Systemwalker Operation Manager | |
| | Operation Manager キュー | 同左 | Systemwalker Operation Manager | |
| | Operation Manager プロジェクト | 同左 | Systemwalker Operation Manager | |
| | MS-.NET ASP.NET | 同左 | Microsoft .NET | |
| | MS-.NET Applications | 同左 | Microsoft .NET | |
| | MS-.NET Remote procedure | 同左 | Microsoft .NET | |
| | SAP Enqueue(Request) | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Enqueue(QueLength) | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Dialog | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Spool | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Background | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Update | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Roll Paging | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Memory | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | SAP Buffers | 同左 | SAP NetWeaver | |
| | Symfoware 共用バッファ | 同左 | Symfoware Server | |
| | Symfoware ログ領域 | 同左 | Symfoware Server | |
| | Symfoware ディスクI/O | 同左 | Symfoware Server | |
| | Symfoware データベーススペース使用量 | 同左 | Symfoware Server | |
| | Oracle SGA | 同左 | Oracle Database | |
| | Oracle PGA | 同左 | Oracle Database | |
| | Oracle ディスクI/O | 同左 | Oracle Database | |
| | Oracle リソース競合 | 同左 | Oracle Database | |

| V13.5.0以前 | | V15.0.0 | | 備考 |
|-----------|---------------------------------|------------------------|--------------------------|-----------------|
| 分類 | レポート名称 | レポート名称 | カテゴリー | |
| | Oracle テーブルスペース使用量 | 同左 | Oracle Database | |
| | MS-SQL ACCESS METHOD | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server BUFFER | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server CMGR | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server DATABASES | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server GENERALSTATISTICS | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server LOCKS | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server MEMORY | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | MS-SQL Server STATISTICS | 同左 | Microsoft SQL Server | |
| | リソース積み上げ (Windows) | — | P2V(Physical to Virtual) | P2V シミュレーションに統合 |
| | リソース積み上げ (UNIX) | — | P2V(Physical to Virtual) | P2V シミュレーションに統合 |
| | レスポンス推定(リクエスト変動) | レスポンスシミュレーション(リクエスト増加) | レスポンスシミュレーション | |
| | レスポンス推定(サーバ数変動) | レスポンスシミュレーション(サーバ追加) | レスポンスシミュレーション | |
| 詳細 | 時系列表示 | 同左 | 汎用レポート | |
| | サマリデータ時系列表示 | 同左 | 汎用レポート | |
| | 回帰分析表示 | 将来予測表示 | 汎用レポート | |
| | 相関表示 | 同左 | 汎用レポート | |
| | 等高線表示 | 同左 | 汎用レポート | |
| | 過去現在時系列表示 | 過去比較表示 | 汎用レポート | |
| | 推移比較表示 | 日別推移比較表示 | 汎用レポート | |
| | 複合表示 | 同左 | 汎用レポート | |

付録D ディスクスペース情報のファイルシステム内の使用サイズ算出方法の変更(互換用)

Solaris版およびLinux版で、ディスクスペース情報のレコード(UX_DISKSPACE)について、ファイルシステム内の使用サイズの表示(dusebytsおよびdusembs)をV13.5.0以前と同じ値で表示したい場合は、以下の手順を実施してください。

D.1 定義方法

■環境

Agentで実施してください。

■定義ファイル

編集するファイルの格納場所は以下のとおりです。

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/setup/df.txt
```

■編集前のファイルのバックアップ

定義をV15.0.0以降のデフォルトの状態に戻す場合に備えて、編集前のファイルを任意の場所にバックアップしてください。

■編集箇所

★印の箇所を編集します。

```
[DSA_DF]
execute_style=sample
sample_interval=1
path=%BASE_DIRECTORY/bin/dsa_cmd
bad_file_dir=%TRACE_DIRECTORY
bad_file_name=%c%i%n.bad
bad_file_cycles=14
bad_file_cycle_length=1
bad_file_cycle_units=days

# tis parameters
tis_record_definition=%CONTROL_DIRECTORY/ssqc2.trd
tis_record_definition=%CONTROL_DIRECTORY/dc_dsa_cmd.trd
tis_record_definition=%CONTROL_DIRECTORY/df.trd
tis_script=%CONTROL_DIRECTORY/routing.ttd
tis_script=%CONTROL_DIRECTORY/df.ttd
tis_arg=ROUTE, RECORDPROCESS, SQC3RAW

# dsa_cmd specific parameters
command=cmd_dfx -t -d -f %CONTROL_DIRECTORY/cmd_df.txt ★
#command=cmd_df -t | tr ',' ';' ★
execute_at=end
execute_timeout=90
max_errors=0
timeout_msg_pack=5
```

■修正内容

★印の行について、コメント行を示す「#」の位置を入れ替えます。

【修正前】

```
:  
# dsa_cmd specific parameters  
command=cmd_dfx -t -d -f %CONTROL_DIRECTORY/cmd_df.txt ★この行が有効になっています。  
#command=cmd_df -t | tr ' ' ;' ★コメントアウトされています。  
:
```

【修正後】

```
:  
# dsa_cmd specific parameters  
#command=cmd_dfx -t -d -f %CONTROL_DIRECTORY/cmd_df.txt ★「#」を付けてコメントアウトします。  
command=cmd_df -t | tr ' ' ;' ★「#」を削除してこの行を有効にします。  
:
```

■編集後のファイルのバックアップ

不測の事態に備えて、編集後のファイルを任意の場所にバックアップしてください。

D.2 セットアップ

前述の定義ファイルを編集した後、以下の手順でセットアップを行ってください。

1. Agentの停止

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、デーモンを停止してください。

2. ポリシーの適用

sqcSetPolicyを実行します。

【UNIX版】

```
/opt/FJSVssqc/bin/sqcSetPolicy.sh [-h <host name>] [-p <IP address>]
```

sqcSetPolicyの詳細については、リファレンスマニュアル「sqcSetPolicy(ポリシー適用コマンド)」を参照してください。

3. Agentの起動

「付録B 常駐プロセス、起動と停止」を参照して、デーモンを起動してください。

付録E デスクトップ ヒープの拡張方法

デスクトップヒープ(Desktop heap)の拡張方法について説明します。

注意

レジストリの編集を誤ると、Windowsが起動しなくなるなどの影響が発生する場合があります。レジストリの編集には注意してください。

デスクトップヒープの変更は、システム全体に影響するため、変更後、システムの動作に問題がないか確認してください。

1. レジストリエディタを起動します。
2. HKEY_LOCAL_MACHINE のサブツリーから以下のキーを表示します。

```
¥System¥CurrentControlSet¥Control¥Session Manager¥SubSystems
```

3. Windowsの値の中の、SharedSectionパラメーターを修正します。

カンマで区切られた3番目の数値(下記例の赤字部分)を、256KBずつ、20480までの範囲で拡張します。

カンマで区切られた数値は、システムにより3つの場合と4つの場合があります。どちらの場合も3番目の数値を拡張してください。

【修正前】

```
%SystemRoot%¥system32¥csrss.exe ObjectDirectory=¥Windows  
SharedSection=1024,20480,768 Windows=On  
SubSystemType=Windows ServerDll=basesrv,1  
ServerDll=winsrv:UserServerDllInitialization,3  
ServerDll=sxssrv,4 ProfileControl=Off MaxRequestThreads=16
```

【修正後】

```
%SystemRoot%¥system32¥csrss.exe ObjectDirectory=¥Windows  
SharedSection=1024,20480,1536 Windows=On  
SubSystemType=Windows ServerDll=basesrv,1  
ServerDll=winsrv:UserServerDllInitialization,3  
ServerDll=sxssrv,4 ProfileControl=Off MaxRequestThreads=16
```

4. システムを再起動します。